

ふじみ野市埋蔵文化財調査報告 第18集

埼玉県ふじみ野市

市内遺跡群 17

KAMIFUKUOKA Shellmound
上福岡貝塚第2地点

2016年3月

ふじみ野市教育委員会

市内遺跡群
17

二〇一六

埼玉県ふじみ野市教育委員会

ふじみ野市埋蔵文化財調査報告 第18集

埼玉県ふじみ野市

市内遺跡群 17

KAMIFUKUOKA Shellmound
上福岡貝塚第2地点

2016年3月

ふじみ野市教育委員会



上福岡貝塚第2地点空撮（北西から南東方向）



上福岡貝塚第2地点空撮



7号住居跡貝ブロック出土状況



7号住居跡全景



8号住居跡貝ブロック・遺物出土状況



8号住居跡全景



9号住居跡貝ブロック出土状況



9号住居跡遺物出土状況



9号住居跡出土遺物



9号住居跡出土遺物 (第46図7)



9号住居跡出土遺物 (第47図12)



9号住居跡出土遺物 (第47図14)



9号住居跡出土遺物 (第47図15)



7号住居跡出土貝類



8号住居跡出土貝類



9号住居跡出土貝類



出土微小貝

- 1: イボキサゴ幼貝、2: キセルガイ、3~5: クチキレモドキ、6: マイマイ科、
7: オカチョジガイ、8: アラムシロ幼貝、9: イボキサゴ幼貝

はじめに

ふじみ野市は平成17年10月に旧上福岡市と旧大井町が合併し、平成27年に10周年を迎えました。

ふじみ野市は、都心から30km圏内という立地条件にあるため、昭和30年代ごろから急激な開発の波が押し寄せ、企業の工場や研究所の進出、住宅の建設ラッシュ、大規模都市基盤整備事業が計画・実施されました。さらに、ふじみ野市となってからは、人口の増加も伴って周辺の自然・社会の環境は大きく変化しています。

新たな歴史を歩みはじめたふじみ野市内には、権現山古墳群や福岡河岸記念館、復元大井戸跡や旧大井村役場庁舎など、多くの文化財が存在し、2万数千年前の旧石器時代から現代までの永い歴史をみることができます。

本報告書は、国・県からの補助金と、民間開発に伴い事業者の方から費用負担を受けて実施した、上福岡貝塚第2地点発掘調査の成果を記録した報告書です。

上福岡貝塚は、昭和12年に山内清男、関野克両先生による発掘調査とその後の研究成果により、考古学史上において著名な遺跡の一つです。上福岡貝塚をはじめ、永い歴史の中で繰り返し住まいの地として利用されるということは、いつの時代でも、ふじみ野の地が住み良い土地であることの証明ともいえます。

こうして発見された新たな歴史の一部を、「夢のある心豊かな学びのまちづくり」のため、貴重な文化財を将来にわたって保存・継承し、地域の皆様や子供たちが、生涯にわたって地域の歴史や文化を学び続けられるよう目指してまいります。貴重な文化財と共に、本書が将来にわたって活用されれば幸いです。

おわりに、日本無線株式会社をはじめ、開発関係者の皆様には多大なご負担とご協力を賜りました。地域の文化財保護・保存についてのご理解をいただいたことに対し深甚なる敬意と感謝を申し上げます。また、調査から本書刊行に至るまで、文化庁、埼玉県教育委員会生涯学習文化財保護課、市関係各課、調査関係者の多くの皆様から、ご指導やご協力をいただきました。誌上をもって厚くお礼を申し上げます。

ふじみ野市教育委員会
教 育 長 朝 倉 孝

例 言

1. 本書は、埼玉県ふじみ野市福岡二丁目1500番73、74、8の一部に所在する、上福岡貝塚第2地点発掘調査の報告書である。
2. 本発掘調査に先立ち行った2013(平成25)年度の試掘調査については、総経費12,045,366円に対し国庫補助金(6,000,000円)と、県費(2,000,000円)の補助金の交付を受け、2013(平成25)年4月4日から2014(平成26)年3月31日まで実施したものの一部である。上福岡貝塚第2地点の本調査は、関係者からの委託を受け、ふじみ野市教育委員会が主体となって行った。関係者(発掘調査)は日本無線株式会社で、履行期間は2013(平成25)年11月1日～2016(平成28)年3月31日である。発掘調査及び整理作業、報告書刊行に伴う費用は、日本無線株式会社からの委託費により行った。

3. 調査組織

調査主体者	ふじみ野市教育委員会		
担 当 課	生涯学習課上福岡歴史民俗資料館文化財保護係(平成25・26年度)		
	社会教育課文化財保護係(平成27年度)	文化財保護課長	橋本鶴人 (2011.4.1～2013.3.31)
教 育 長	矢島秀一 (2010.3.19～2014.3.18)		高崎直成 (2013.4.1～)
	朝倉 孝 (2014.4.1～)	調査担当者	高崎直成 (2013.4.1～)
教育長職務代理者	高山 稔 (2010.3.19～2014.3.31)		鍋島直久 (2005.4.1～)
部 長	西郷雅美 (2014.4.1～2015.3.31)		岡崎裕子 (2015.4.1～)
	中野則之 (2015.4.1～)	庶務担当	岡 健二 (2014.4.1～2015.3.31)
課 長	桜井信枝 (2012.4.1～2013.3.31)		榑澤健司 (2014.4.1～2015.3.31)
	小林 清 (2015.4.1～)		木村祐可子 (2015.4.1～)
生涯学習課主任兼上福岡歴史民俗資料館長		発掘調査員補	越村 篤 (2014.4.1～2015.9.30)
	坪田幹男 (2013.4.1～2015.3.31)		鎌田 翔 (2015.11.2～)
社会教育課副課長	佐藤龍司 (2015.4.1～)	臨時的任用職員	高橋京子 (2005.4.1～)

4. 本書の編集及び作成は、株式会社東京航業研究所に委託した。主な作業分担は次のとおりである。遺構については清水理史(株式会社中野技術)が行い、鍋島直久が修正を行った。遺物は宅間清公(株式会社東京航業研究所)が担当し、その他については文末に記した。発掘調査から整理作業、報告書刊行までの業務委託は次のとおりである。発掘調査支援業務については株式会社中野技術に委託した。基準点測量業務、現地T S測量業務、地上写真測量業務、航空測量業務、遺構図化業務、火工廠建物緊急調査報告書図版データ作成業務、火工廠建物緊急調査報告書編集業務、整理作業及び報告書編集と報告書作成業務については株式会社東京航業研究所に委託した。9号住居跡出土の動物遺体(貝類)の一部分析について明治大学より申し入れがあり、分析を依頼した。

日本無線株式会社敷地内に存在する火工廠建物緊急調査は、ふじみ野市文化財保護審議会委員の鈴木清氏に依頼し、文化財調査員の福永昭子氏と民俗建築研究所の協力を得た。また、火工廠建物緊急調査現地事前調査においては、文化財保護審議会委員の角田史雄、松尾鉄城、高木文夫、鈴木清、佐藤健一各氏による現地調査を実施した。発掘調査から報告書作成全般にわたり、坪田、高崎、越村、佐藤各氏の協力を得た。





5. 各遺跡の調査から報告書刊行にいたるまで下記の諸氏・機関より御指導・ご協力を賜った。(敬称略)

阿部芳郎、天ヶ嶋岳、新井和之、上田寛、越前公理、大久保聡、大久保淳、大柴英雄、大屋道則、岡田賢治、加藤秀之、神木繁喜、若島勝秀、久津間文隆、國見敬、隈本健介、黒住直二、駒井隆、酒井智晴、佐藤健一、佐藤一也、佐藤啓子、佐藤良博、塩野敏和、鈴木清、高木文夫、高野博光、田中信、塚本師也、角田史雄、中村愛、長井光彦、原口雅樹、早坂廣人、比嘉洋子、平野寛之、藤波啓容、藤澤之、松尾鉄城、木村孝行、榑井章宏、和田晋治、埼玉県教育委員会市町村支援部生涯学習文化財課、上福岡歴史民俗資料館、大井郷土資料館
6. 発掘調査ならびに整理作業参加者は下記の皆様である。記して厚く感謝の意を表した。

(発掘調査参加者) (敬称略) 明石千とせ、新井和枝、飯塚直津子、飯塚泰子、家原浩孝、堂坂久子、伊藤功、井上靖江、井上麻美子、岩城英子、臼井孝、岡良子、岡本信勝、衣原雅夫、加藤敦子、鎌田理、黒岩祐二、川中ひろみ、小池恵美子、小池絵千花、坂本民子、佐竹里佳、澤田洋、重田恵子、杉本佳久、鈴木勝弘、岡田成美、高貝しづ子、辻村万史、富山りえ、中川圭子、野岡由紀子、宮上吉樹、橋本明美、比嘉洋子、平田小百合、深谷美奈子、福田美枝子、藤丸亮介、松本アキヨ、齋住代子、増澤勝英、松平静、宮川幸佳、望月正一、山内康代、山口隼樹、矢作梓、米田昇三、若林紀美代

(整理作業参加者) (敬称略) 明石千とせ、佐竹里佳、菊地久美子、島田真紀子、中嶋千世子、野村業央、平野由美子

凡 例

1. 本書の遺構・遺物挿入の指示は以下のとおりである。
 - (1) 縮尺は原則として、遺構配置図 1:600、遺構平面図・遺物出土状況図 1:60、1:30、炉などの詳細図 1:30、土器実測図 1:3、1:4、土器拓影図 1:3、1:4、石器実測図 1:4、2:3である。
 - (2) 遺構断面図の水糸高は海拔高を示す。明記していないのは同図版中の前遺構の海拔高と同じ。
 - (3) 遺構図における screen-tone の指示、遺物出土状況のドットの指示は、複乱  地山(ローム)  焼土  貝ブロック  土器 ● 石器 ★ 黒曜石・チャート ▲ 礫 ○ 炭化物 ■ 金属製品△
 - (4) 土器断面図は、■が炭維含有、●が雲母粒を含有する縄文土器を表わしている。
2. 住居跡名は、遺跡内の通し番号である。
3. 本報告にかかる出土品及び記録図面・写真等は一括してふじみ野市教育委員会に保管してある。

埼玉県ふじみ野市
市内遺跡群 17 目次

巻頭図版	
はじめに	i
例言	ii
凡例	ii
目次	iii
挿図目次	iv
表目次	v
写真図版目次	vi
第1章 ふじみ野市の遺跡	1
I ふじみ野市の立地と環境	1
II 市内の遺跡	2
第2章 発掘調査の概要	5
I 遺跡の立地と環境	5
II 調査の概要	7
第3章 発掘調査の成果	11
I 縄文時代の遺構と遺物	11
II 貝層の調査	73
III 産出した動物遺体群	78
IV その他の遺構と遺物	85
第4章 まとめ	94
I 上福岡貝塚第2地点の調査成果について	94
II 上福岡貝塚の問題点と課題	95
附編 旧川越製造所(旧火工廠)建物緊急調査報告書	97
写真図版	161
抄録	218

挿図目次

第1図	ふじみ野市の位置と周辺地形	1	第42図	9号住居跡(2)(1/60)	58
第2図	ふじみ野市遺跡分布図(1/30,000)	3	第43図	9号住居跡遺物出土状況図・炉(1/60・1/30)	59
第3図	遺構配置図(1/2,500)	6	第44図	9号住居跡貝ブロック①(1/60・1/30)	60
第4図	試掘調査範囲模式図(1/3,000)	7	第45図	9号住居跡貝ブロック②(1/30)	61
第5図	グリッド設定図	8	第46図	9号住居跡出土遺物1(1/4)	66
第6図	第2地点遺構配置図(1/600)	10	第47図	9号住居跡出土遺物2(1/4)	67
第7図	3号住居跡(1/60)	12	第48図	9号住居跡出土遺物3(1/4)	68
第8図	3号住居跡炉(1/30)	13	第49図	9号住居跡出土遺物4(1/4)	69
第9図	3号住居跡出土遺物(1/4)	13	第50図	9号住居跡出土遺物5(1/4)	70
第10図	4号住居跡(1/60)	15	第51図	9号住居跡出土遺物6(1/4)	71
第11図	4号住居跡炉・遺物出土状況図(1/30・1/60)	16	第52図	9号住居跡出土遺物7(1/4・2/3)	72
第12図	4号住居跡出土遺物(1/4)	18	第53図	土坑1・2(1/60)	85
第13図	5号住居跡(1/60)	20	第54図	溝1(1/200・1/60)	86
第14図	5号住居跡遺物出土状況図・炉(1/60・1/30)	21	第55図	試掘調査図(1/120)	89
第15図	5号住居跡出土遺物(1/4)	23	第56図	トレンチ出土遺物(1)(1/6)	90
第16図	6号住居跡(1/60)	25	第57図	トレンチ出土遺物(2)(1/6)	91
第17図	6号住居跡遺物出土状況図(1/60)	26	第58図	トレンチ出土遺物(3)(1/6)	92
第18図	6号住居跡炉(1/30)	27	第59図	トレンチ出土遺物(4)・分配室木材 (1/1・1/3・1/30)	92
第19図	6号住居跡出土遺物(1/4)	29	第60図	表土出土遺物(1/3)	92
第20図	7号住居跡(1)(1/60)	31	第61図	出土埋設管・消火栓2(1/10)	93
第21図	7号住居跡(2)(1/60)	32			
第22図	7号住居跡(3)(1/60)	33			
第23図	7号住居跡遺物出土状況図・炉(1/60・1/30)	34			
第24図	7号住居跡貝ブロック①(1/60・1/30)	35			
第25図	7号住居跡貝ブロック②(1/30)	36			
第26図	7号住居跡貝ブロック③(1/30)	37			
第27図	7号住居跡貝ブロック④(1/30)	38			
第28図	7号住居跡貝ブロック⑤(1/30)	39			
第29図	7号住居跡貝ブロック⑥(1/30)	40			
第30図	7号住居跡貝ブロック⑦(1/30)	41			
第31図	7号住居跡貝ブロック⑧(1/30)	42			
第32図	7号住居跡貝ブロック⑨(1/30)	43			
第33図	7号住居跡貝ブロック⑩(1/30)	44			
第34図	7号住居跡貝ブロック⑪(1/30)	45			
第35図	7号住居跡出土遺物(1/4・2/3)	47			
第36図	8号住居跡(1/60)	49			
第37図	8号住居跡遺物出土状況図・炉(1/60・1/30)	50			
第38図	8号住居跡貝ブロック①(1/60・1/30)	51			
第39図	8号住居跡貝ブロック②(1/30)	52			
第40図	8号住居跡出土遺物(1/4)	54			
第41図	9号住居跡(1)(1/60)	57			

表目次

第1表	ふじみ野市遺跡一覧表	2
第2表	上福岡貝塚調査一覧表	5
第3表	3号住居跡ピット一覧表	11
第4表	3号住居跡出土遺物観察表	11
第5表	4号住居跡ピット一覧表	14
第6表	4号住居跡出土遺物観察表	17
第7表	5号住居跡出土遺物観察表	22
第8表	5号住居跡ピット一覧表	23
第9表	6号住居跡ピット一覧表	24
第10表	6号住居跡出土遺物観察表	28
第11表	7号住居跡ピット一覧表	45
第12表	7号住居跡出土遺物観察表	46
第13表	8号住居跡ピット一覧表	48
第14表	8号住居跡出土遺物観察表	53
第15表	9号住居跡ピット一覧表	56
第16表	9号住居跡出土遺物観察表	62
第17表	7号住居跡貝ブロック層位模式表①	75
第18表	7号住居跡貝ブロック層位模式表②	76
第19表	8号住居跡貝ブロック層位模式表	77
第20表	9号住居跡貝ブロック層位模式表	78
第21表	上福岡貝塚第2地点貝種別出土集計表	79
第22表	7号住居跡混貝率集計表	81
第23表	8号住居跡混貝率集計表	83
第24表	9号住居跡混貝率集計表	83
第25表	7号住居跡二枚貝集計表	84
第26表	7号住居跡の段長に関する記述統計量	84
第27表	8号住居跡の段長に関する記述統計量	84
第28表	9号住居跡の段長に関する記述統計量	84
第29表	トレンチ出土遺物観察表	87
第30表	表土出土遺物観察表	87
第31表	出土埋設管観察表	88
第32表	上福岡貝塚第2地点火工廠跡遺構一覧表	88

写真図版目次

写真図版	31	9号住居跡⑤	191
写真図版	32	9号住居跡⑥	192
写真図版	33	調査風景・見学会	193
写真図版	34	土坑・溝	194
写真図版	35	火工廠①	195
写真図版	36	火工廠②	196
写真図版	37	火工廠③	197
写真図版	38	3号住居跡出土遺物	198
写真図版	39	4号住居跡出土遺物①	199
写真図版	40	4号住居跡出土遺物②	200
写真図版	41	5号住居跡出土遺物	201
写真図版	42	6号住居跡出土遺物	202
写真図版	43	7号住居跡出土遺物①	203
写真図版	44	7号住居跡出土遺物②	204
写真図版	45	8号住居跡出土遺物①	205
写真図版	46	8号住居跡出土遺物②	206
写真図版	47	9号住居跡出土遺物①	207
写真図版	48	9号住居跡出土遺物②	208
写真図版	49	9号住居跡出土遺物③	209
写真図版	50	9号住居跡出土遺物④	210
写真図版	51	9号住居跡出土遺物⑤	211
写真図版	52	9号住居跡出土遺物⑥	212
写真図版	53	9号住居跡出土遺物⑦	213
写真図版	54	9号住居跡出土遺物⑧	214
写真図版	55	9号住居跡出土遺物⑨	215
写真図版	56	トレンチ出土遺物①	216
写真図版	57	トレンチ出土遺物②	217
写真図版	1	調査区	161
写真図版	2	3号住居跡①	162
写真図版	3	3号住居跡②	163
写真図版	4	3号住居跡③	164
写真図版	5	4号住居跡①	165
写真図版	6	4号住居跡②	166
写真図版	7	4号住居跡③	167
写真図版	8	5号住居跡①	168
写真図版	9	5号住居跡②	169
写真図版	10	5号住居跡③	170
写真図版	11	6号住居跡①	171
写真図版	12	6号住居跡②	172
写真図版	13	6号住居跡③	173
写真図版	14	7号住居跡①	174
写真図版	15	7号住居跡②	175
写真図版	16	7号住居跡③	176
写真図版	17	7号住居跡④	177
写真図版	18	7号住居跡⑤	178
写真図版	19	7号住居跡⑥	179
写真図版	20	7号住居跡⑦	180
写真図版	21	7号住居跡⑧	181
写真図版	22	7号住居跡⑨	182
写真図版	23	8号住居跡①	183
写真図版	24	8号住居跡②	184
写真図版	25	8号住居跡③	185
写真図版	26	8号住居跡④	186
写真図版	27	9号住居跡①	187
写真図版	28	9号住居跡②	188
写真図版	29	9号住居跡③	189
写真図版	30	9号住居跡④	190
巻頭図版 1	上福岡貝塚第2地点空撮		
巻頭図版 2	7号住居跡貝ブロック出土状況、 7号住居跡全景		
巻頭図版 3	8号住居跡貝ブロック・遺物出土状況、 8号住居跡全景		
巻頭図版 4	9号住居跡貝ブロック出土状況、 9号住居跡遺物出土状況		
巻頭図版 5	9号住居跡出土遺物		
巻頭図版 6	7号住居跡出土貝類、8号住居跡出土貝類、 9号住居跡出土貝類、出土微小貝		

第1章 ふじみ野市の遺跡

I ふじみ野市の立地と環境

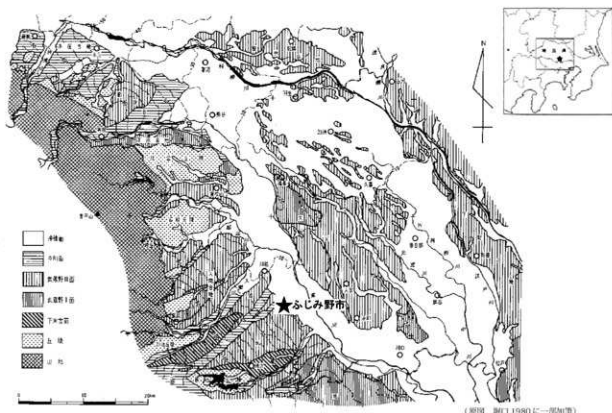
ふじみ野市は埼玉県南西部に位置し、市内には国道254号バイパス、東武東上線、川越街道（国道254号線）、関越自動車道といった、交通の幹線が北西から南東方向に平行して存在する。市内の開発はこうした幹線沿いや、東武東上線福岡駅周辺、ふじみ野駅周辺を中心に進んでいるが、郊外には畑地や田園風景も多くみられる。

ふじみ野市を地形的にみると、武蔵野台地縁辺部と荒川低地の沖積地に大きく分かれる。

武蔵野台地は古多摩川が形成した扇状地で、扇頂部で標高180m、扇端部は標高15～20mで比高差10m前後の急斜面となって荒川低地と接している。台地には柳瀬川、黒目川、石神井川等の中河川が荒川低地へ向かって流れ、深い谷と沖積地を形成し、河川に沿って多くの遺跡が分布している。他にも多数の小河川が流れ、台地縁辺を鋸歯状に開析することが多いが、中には急崖もなく、緩斜面のまま低地に接していくことがある。この緩斜面はもともと低位の段丘面で、低位台地と呼ばれる。旧大井町地域を南北方向の断面図で見ると、北と南に高台が続き、その中間に低位台地

（大井台）がある。この大井台の中を3本の河川が東流し、河川の流域に遺跡が集中している。中でも砂川堀は狭山丘陵に流れを発する中河川で、本来大井台はこの砂川の段丘面と捉えることができる。また、福岡江川や富士見市との境を流れるさかい川、浄禅寺川などの小河川は市内に湧水源をもつ。湧水源は浅い窪地から発しており、こうした窪地の形成は従来から伏流水が再湧出したことによるものと、宙水からの流出によるものとの二通りが考えられている。

荒川低地は、荒川により形成された沖積地で、ふじみ野市の北東部から東部にかけて広がる。荒川の支流であった新河岸川は川越市周辺に水源を發しその流れはふじみ野市、富士見市、志木市、朝霞市を経て東京都にまたがる。武蔵野台地縁辺部を縫うように流れ、不老川、九十川、福岡江川、砂川堀、柳瀬川、黒目川、越戸川、白子川などの支川と合流し、現在は東京都北区で隅田川に合流する。低地部は平坦に見えるが、荒川や新河岸川の河川改修等で取り残された沼や、氾濫でできた旧河道（埋没河川）、自然堤防、後背湿地などの地形が存在する。



第1図 ふじみ野市の位置と周辺地形

II 市内の遺跡

ふじみ野市の遺跡分布をみると、台地上の中小河川沿いと荒川低地部を望む縁辺部、低地部分に分かれる。

市内の主な遺跡を時代順に河川ごとに概観する。

【旧石器時代・縄文時代】市の北側を流れる川越江川では、右岸高台に鶴ヶ岡外遺跡、鶴ヶ岡遺跡、八幡神社遺跡（川越市）が位置し、縄文時代中期の集落である西遺跡へ続く。鶴ヶ岡外遺跡、鶴ヶ岡遺跡では旧石器時代の石器群と礫群等が出土し、八幡神社遺跡では縄文時代中期の住居跡などが検出されている。

藤岡江川・川越江川が新河岸川に合流する部分、荒川低地に張り出した舌状台地上に、川崎貝塚として著名な川崎遺跡が立地する。本遺跡ではローム層中からではないが旧石器時代の石器が出土し、縄文時代早期から後期の住居跡などを検出する。新河岸川は川崎遺跡を回り込み、低地部で台地東縁を沿うように流れる。台地東端は急峻を成し、崖線には縄文時代中期のハケ遺跡、学史上著名な前期集落の上福岡貝塚が形成され権現山遺跡へと続く。台地の南端、市立福岡中学校周辺はかつて「熊野山」と呼ばれ、湧出した水が丘上から流れ落ち滝となっていたため「滝地区」の名

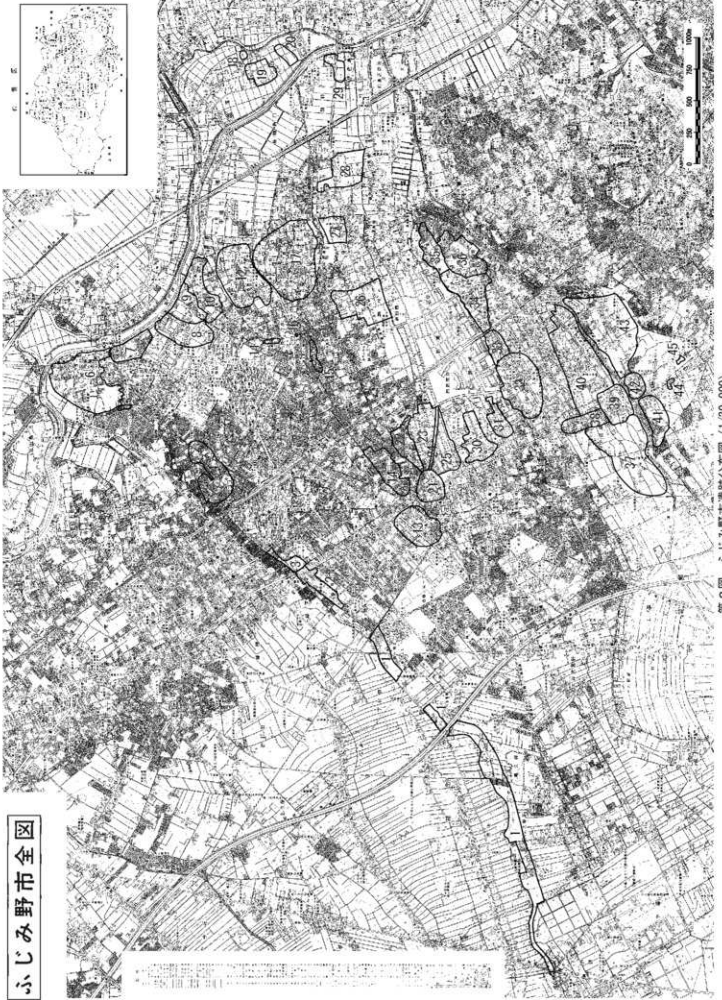
称が付いたとされる。清水は長宮米川神社の裏手（北側）を北に流れていたが現在は道路となっており、新河岸川との合流部でその面影を残すのみである。滝遺跡、長宮遺跡はこの小河川に対峙して立地し、滝遺跡では前期の遺構と遺物を、長宮遺跡では前期関山期の集落跡が確認されている。

川越江川の1km南には福岡江川が流れ、新河岸川へ注ぐ。福岡江川の湧水地周辺に縄文時代中期前半の集落である亀居遺跡が存在し、対岸にも中期前半の江川南遺跡がある。この2遺跡と鶴ヶ岡遺跡では、旧石器時代立川ローム層第IV層の礫群と石器群を検出している。さらに市立亀久保小学校周辺では福岡江川に注ぐ埋没谷がみられ、東久保遺跡、亀久保堀跡遺跡、東久保西遺跡、東中学校西遺跡で旧石器時代から縄文時代中期の遺構と遺物が確認されている。川越江川最下流の新河岸川との合流部域には、前期集落の鷺森遺跡が存在する。

福岡江川の900m南には、富士見市との境にさかい川が流れ、3km下流で砂川堀と合流する。流域には縄文時代中期の拠点集落である西ノ原遺跡の他、10遺跡が存在する。旧石器時代の遺跡は西ノ原遺跡、中沢

第1表 ふじみ野市遺跡一覧表

No.	遺跡名	主な時代	遺跡番号	No.	遺跡名	主な時代	遺跡番号
1	鶴ヶ岡外遺跡	旧石器、縄文早期の集落跡	30-036	25	東久保西遺跡	旧石器、縄文早期・中期、近世の集落跡	30-042
2	鶴ヶ岡遺跡	旧石器、縄文早期・中期の集落跡	30-047	26	駒林遺跡	近世の堀跡・中世の墳墓	25-013
3	西遺跡	縄文中期の集落跡	25-001	27	福岡新田遺跡	奈良・平安の集落跡、縄文時代の散布地、中・近世寺院	25-015
4	北野遺跡	縄文中期、奈良・平安の集落	25-002	28	鷺森遺跡	縄文前期の集落跡	25-017
5	川崎横穴墓群	古墳後期の横穴墓	25-004	29	伊佐島遺跡	古墳前期、平安の集落跡	25-021
6	川崎遺跡	旧石器、縄文前期・中期、古墳前期・中期、奈良・平安の集落跡	25-003	30	東中学校西遺跡	縄文早期・中期、近世の集落跡	30-008
7	ハケ遺跡	縄文中期の集落跡、奈良・平安の集落跡、6世紀古墳群	25-005	31	東久保南遺跡	旧石器、縄文早期・中期、近世の集落跡	30-032
8	上福岡貝塚	縄文前期、古墳前期、奈良・平安の集落跡	25-006	32	西ノ原遺跡	旧石器、縄文早期・中期・後期、奈良・平安～近世の集落跡	30-001
9	権現山遺跡群（古墳群）	古墳前期の集落跡、古墳群、縄文中期、奈良・平安の集落	25-007	33	中沢前遺跡	旧石器、縄文早期・中期、近世の集落跡	30-044
10	滝遺跡	縄文時代、古墳前期・中期、奈良・平安、近世の集落跡	25-008	34	神明後遺跡	旧石器、縄文早期～後期、奈良・平安～近世の集落跡	30-041
11	西ノ原遺跡	縄文の散布地	25-025	35	苗間東久保遺跡	旧石器、縄文早期～後期	30-020
12	長宮遺跡	縄文前期、中・近世の集落跡	25-009	36	淨淨寺跡遺跡	旧石器、縄文早期・中期、中・近世の集落跡、近世寺院跡	30-022
13	亀居遺跡	旧石器、縄文前期・中期の集落跡	30-030	37	小田久保遺跡	旧石器、縄文早期～中期、中・近世の集落跡	30-040
14	鶴ヶ岡舞遺跡	旧石器、縄文中期、奈良・平安の集落跡	30-046	38	大井宿遺跡	近世～近代の宿場跡	30-010
15	富士見台横穴墓群	古墳後期の横穴墓	25-011	39	大井氏部跡遺跡・大井戸遺跡	旧石器、縄文前期・中期、中・近世の集落跡	30-037
16	福遺跡	古墳後期の横穴墓	25-023	40	木村遺跡	旧石器、縄文早期～後期、中・近世の集落跡	30-034
17	松山遺跡	奈良・平安、中・近世の集落跡	25-010	41	西台遺跡	旧石器、縄文中期、奈良・平安、近世の集落跡	30-039
18	天神瀬遺跡	古墳中期の散布地	25-018	42	大井戸上遺跡	旧石器、縄文前期・中期、近世の集落跡	30-014
19	城山遺跡	中・近世の館跡	25-019	43	東台遺跡	旧石器、縄文早期～後期、奈良・平安～近世の集落跡、製鉄遺跡	30-024
20	川袋遺跡	奈良・平安の散布地	25-020	44	大井宿木戸跡	近世～近代の宿場跡	30-048
21	江川南遺跡	旧石器、縄文中期、中・近世の集落跡	30-007	45	石塔堀	中世の散布地	30-027
22	江川東遺跡	奈良・平安、近世の集落跡	30-045				
23	東久保遺跡	旧石器、縄文中期、近世の集落跡	30-009				
24	亀久保堀跡遺跡	中世の堀跡	30-006				



第2図 ふじみ市遺跡分布図 (1/30,000)

前遺跡、中沢遺跡・外記塚遺跡（富士見市）で立川ロームⅢ層～Ⅹ層の遺物が確認されている。縄文時代中期～後期の集落は時代を追うごとに、上流から下流域へ集落の拠点を移していく傾向がみられる。

さかい川の800m南に、都市下水道と化した砂川堀が流れる。砂川流域は大きく3ヶ所の地域で遺跡分布がみられる。砂川最上流域の狭山丘陵裾部、伏流水となりはじめる中流域、一旦地中に姿を消したあと再び湧水してくる下流域である。下流域のふじみ野市地域では、砂川右岸が段丘となり5～6mの急崖を形成する。この高台上には縄文時代中期の拠点集落である東台遺跡があり、旧石器時代の遺跡も西台遺跡から東台遺跡まで連続と続く。一方砂川左岸の低位台地では、市内で最古の時期であるA T降灰前（立川ローム第Ⅶ層）の石器を本村遺跡の微高地上から検出する。縄文時代中期には上流の小田久保遺跡で小規模な集落がみられ、本村遺跡では炉穴、落とし穴が散在する。

【弥生・古墳時代】 荒川低地を流れる新河岸川の自然堤防上に、弥生時代後期の環濠集落である伊佐島遺跡が立地する。新河岸川右岸、舌状台地崖線上の東端に立地する権現山遺跡は、縄文時代から中世までの複合遺跡で、縄文時代の住居跡も存在するが、主体は遺跡北東部と北西端に築造された古墳群と、古墳時代前期から奈良・平安時代にかけての集落跡である。北東部に築造された古墳時代前期の古墳群（埼玉県指定史跡権現山古墳群）は、方墳11基の他に古墳時代初期の前方後方墳（2号墳）1基である。また権現山古墳群北西端の台地縁辺部には、古墳時代中期の古墳群（通称権現山北古墳群）3基がある。ハケ遺跡第16地点の調査（2014）で、古墳の周溝から、6世紀後半頃とみられる複数の人物埴輪と、円筒埴輪が新たに発見された。狭小地のため、古墳の形態や主体部については不明である。また第19地点の調査（2015）では6世紀代中頃から後半の円墳3基が新たに発見され、群集墳であることが判明した。

他に古墳時代の集落は川崎遺跡と上福岡貝塚、滝遺跡で確認されている。

【飛鳥・奈良・平安時代】 7世紀には、前述の舌状台地の西側、川崎遺跡の南西隣に川崎横穴墓群、さらに南約1.5kmの台地南側の崖線に、富士見台横穴墓群が存在する。集落は川崎遺跡、滝遺跡、松山遺跡、長宮遺跡など一段低い段丘面に展開し、川崎遺跡は10世紀前半まで、滝遺跡、松山遺跡は9世紀後半ごろまで

続く。

8世紀代には前述の他、ハケ遺跡、上福岡貝塚、権現山遺跡、神明後遺跡、東久保南遺跡などで住居跡を検出する。8世紀中葉から9世紀前半まで、砂川堀右岸の台地縁辺部に東台遺跡の大規模な製鉄遺跡が現われ、周辺の遺跡でも木炭窯などが確認されている。さらに9世紀以降10世紀までは伊佐島遺跡、東台遺跡、西ノ原遺跡などで住居跡を検出している。またハケ遺跡からは跨帯金具が、川崎遺跡からは瓦塔片と布目瓦などが出土しており注目される。

【中世】 駒林遺跡では14世紀代に造立された板碑の下に、蔵骨器が埋納された葺石墳墓を検出した。また本遺跡を囲む堀跡の溝覆土層中から、茶見跡などが確認されている。長宮遺跡、松山遺跡、本村遺跡などでは13～16世紀代の遺物を伴う遺構を検出する。特に本村遺跡では遺構を多数検出し、15世紀以降中世集落が発展したと思われる。

16世紀後半から17世紀前半では川崎遺跡、長宮遺跡、松山遺跡、神明後遺跡、浄淨寺跡遺跡などで屋敷地とみられる遺構を検出し、「新田」といった地名と共に開発の歴史を偲ばせる。特に城山遺跡は荒川低地の自然堤防上に立地し、周囲を方形に堀跡で囲む中世から近世の居館跡と思われる。

また、松山遺跡、駒林遺跡、亀久保堀跡遺跡、神明後遺跡では時期不詳の長大な堀跡が検出されている。

【近世】 近世以降の遺跡は、多数の遺跡で遺物などが確認されている。主な近世遺跡の分布は中世村落から続く集落跡や、街道沿いの宿場や新河岸川の河岸跡、寺院跡などにみられる。中でも、川越街道沿い大井宿の範囲にある大井氏館跡遺跡、大井戸上遺跡や大井宿遺跡、亀久保村地蔵院の江川南遺跡、旧苗間村の寺院跡である浄淨寺跡遺跡、長宮氷川神社周辺の長宮遺跡、新河岸舟運で栄えた福岡河岸の福田屋などでまとまった遺構と遺物が確認されている。また鷲森遺跡で、近・現代の盛り土の中から陶磁器が多数出土しているが、埋め立ての為に他から持ち込まれた可能性がある。

近世以降では、昭和初期の旧日本陸軍の軍需工場である東京第一陸軍造兵廠川越製作所（通称造兵廠「火工廠」）の跡地で、防燥土塁・防空壕・水溜・消火栓・排水枘などの遺構や遺物が、近年の調査で確認されている。（鍋島）

第2章 発掘調査の概要

I 遺跡の立地と環境

上福岡貝塚は、ふじみ野市域（旧上福岡市）の北部、武蔵野台地北東部端の標高16.0～18.0mに位置する。

遺跡眼下の武蔵野台地裾部の荒川低地には、北から東に新河岸川が流れる。現在、上福岡貝塚をのせる武蔵野段丘面と荒川低地の現比高差は約9～10m、新河岸川の水面からでは約12mの急崖を成す。

本遺跡を地形の区分でみると武蔵野2面に相当する。隣接する権現山古墳群において、新河岸川に面した崖の地質観察では、約50cmの表土層下に385cmの関東ローム層が認められ、ローム層中には厚さ約45cmの黒色帯や、ローム下層でオレンジ色の軽石粒（T.P.に対比と考えられる）が確認され、市内の武蔵野2面の層序とほぼ同様の様相を呈することから、上福岡貝塚でも相位ないものとみられる。台地南側の滝遺跡や長官遺跡の位置する一段低い段丘面では、武蔵野3面から立川面が広がる。

かつて、上福岡貝塚や権現山遺跡群の南側には新河岸川に流れ込む小河川（清水）が東流していた。現在でも地区の地名に残る「滝」は、この小河川が台地上から流れ落ちていたためとされる。縄文時代の上福岡貝塚周辺には、この滝地区を流れていた清水と新河岸の流れがあったものと考えられる。これまでの調査ではローム層中から旧石器時代の遺構や遺物は見つから

ていないが、近隣市町などでは湧水や埋没谷周辺部から同時期の遺跡が相次いで発見されており、本遺跡でも今後発見される可能性がある。

また、遺跡の北側には南北約220m、東西約150m、深さ約1mの楕円形の巨大な窪地が昭和12年の調査時から確認されているが、自然地形なのか人為的なものか不明である。現在は造成され工場等が建ち古い地形をみることは出来ない。

周辺の遺跡は、北側約400mに縄文時代前期集落の川崎遺跡と同50mに中期から後期集落のハケ遺跡、東側には前期古墳の権現山古墳を含む権現山遺跡（古墳群）が隣接する。ハケ遺跡では前期諸磯c期の住居跡1軒が確認されるのみで、権現山遺跡からは前期の住居跡は確認されていない。

川崎遺跡では縄文時代前期の住居跡が21軒（2001年現在）確認され、関山期から黒浜期の住居跡は11～12軒を数え、内3軒の住居跡（1975、1979、1990年調査）では貝層を伴っている。同時期の遺跡として、土器や動物遺体を含めた出土遺物の比較と、時期ごとに集落の立地と配置が異なる上福岡貝塚との集落構造や変遷等の関連が注目される。（鍋島）

第2表 上福岡貝塚調査一覧表

地点	所在地	調査期間 ()は試掘調査	面積 (㎡)	調査原因	確認された遺構と遺物	所収報告書
A～X、a～z	福岡3-1187、1500、他	1937.5.23～7.19	-	火工廠建設	関山式住居3、黒浜式住居5	福岡市内石器時代遺跡発掘調査報告書
① 1983-6 試掘	福岡3	1983.6	-	工場増築	なし	なし
② 1983-12 立会	福岡2	1983.12	-	工場増築	なし	なし
③ 1985- 試掘	福岡2	1985.2	426	市道築造	5c古墳3基、遺物なし、調査区は一部権現山遺跡群含む	埋蔵文化財の調査(Ⅷ)
④ 88- 試掘	福岡3-1187-4	1988.6.7～14	3,200	工場増築	古墳跡1、奈良平安住居4	埋蔵文化財の調査(11)
⑤ 91- 試掘	福岡2-1-4	1991.5.7～8	568	事務所建設	なし	埋蔵文化財の調査(14)
⑥ 92- 試掘	福岡2-1500-8	1992.5.2	737	工場増築	なし	埋蔵文化財の調査(15)
⑦ 93- 試掘	福岡2-1500-8の一部	1993.7.20～27	799.3	事務所建設	なし	埋蔵文化財の調査(16)
第1地点	福岡2-1500-23・63	2007.5.21～6.12 (2007.4.26～5.17)	124	変電所増築	縄文前期黒浜式住居2、集石土坑1、環溝1、水溜、消火栓	市内遺跡群4
第2地点	福岡2-1500-73・74・8の一部	2013.11.5～ 2014.3.10 (2013.6.20～9.30)	1,830 (3,485)	建物解体・ 抜根・造成	縄文前期黒浜式住居10、土坑3、環溝1、火工廠跡	市内遺跡群17・18



第3図 遺構配置図 (1/2,500)

*所収報告書等

- ・山内清男 1937『福岡市内石器時代遺跡発掘調査報告』、関野克「住居址略報告」ガリ版刷り（昭和40年埼玉県福岡町郷土史料に収録）1967『山内清男・先史考古学論文集』第2冊 先史考古学会（但し、関野克「住居址略報告」の分は除く）
- ・山内清男 1942『片口付縄紋土器に就て』『古美術』第12巻第6号（137号）1967『山内清男・先史考古学論文集』第2冊 先史考古学会
- ・関野 克 1938『埼玉県福岡町縄紋前期住居址と竪穴住居の系統に就いて』『人類学雑誌』第53巻第8号
- ・黒坂貞二、細田 勝、土肥 孝、宮崎朝雄 他 1992『上福岡貝塚資料—山内清男考古資料3—』奈良国立文化財研究所史料第33冊 奈良国立文化財研究所（註1）
- ・川名広文、笹森健一 他 1995『考古文献資料（1）上福岡貝塚』市史調査報告書第5集 上福岡市教育委員会
- ・鍋島直久、笹森健一、阿部常樹、一木裕理 他 2009『市内遺跡群4』ふじみ野市教育委員会

II 調査の概要

(1) 発掘調査に至る経過

上福岡貝塚第2地点の試掘調査及び本調査は、日本無線株式会社埼玉工場の建物解体及び樹木等の抜根に伴うもので、工場の一角が上福岡貝塚に含まれる事から、日本無線株式会社より事前の問い合わせがあり、平成24(2012)年12月7日、ふじみ野市教育委員会と緊急の打ち合わせが行われた。工場敷地の一部は前述のとおり埋蔵文化財包蔵地(上福岡貝塚)に含まれており、また敷地内の各所には旧日本陸軍造兵廠東京工廠福岡工場(以下火工廠)の建物跡や防壁などの遺構が複数存在する。そのため、埋蔵文化財に関する試掘調査および本調査と、火工廠の建物および遺構に関する二点について協議を開始した。内容は試掘調査の範囲と時期、「埋蔵文化財事前協議書」(以下事前協議書)の提出について。火工廠関連では、平成25年1月以降、工事に支障のない範囲での調査となった。以下はその後の主な打ち合わせについてである。

第2回打ち合わせは12月13日、埋蔵文化財調査の日程と、土壌汚染対策法に関する事務手続きの確認。火工廠関連の調査について協議を行った。

第3回打ち合わせは平成25年3月25日、埋蔵文化財調査に関し、埼玉県西部環境管理事務所と土壌汚染

対策法に関する協議を行った。

第4回打ち合わせは平成25年4月17日、庁内関係各課と日本無線株式会社、大成建設株式会社と解体工事等について協議を行った。

第5回打ち合わせは平成25年5月22日、試掘調査の日程等の協議と現地確認を行った。

第6回打ち合わせは平成25年6月12日、試掘調査と火工廠関連の調査について、「埋蔵文化財試掘調査について確認事項(案)」を協議した。

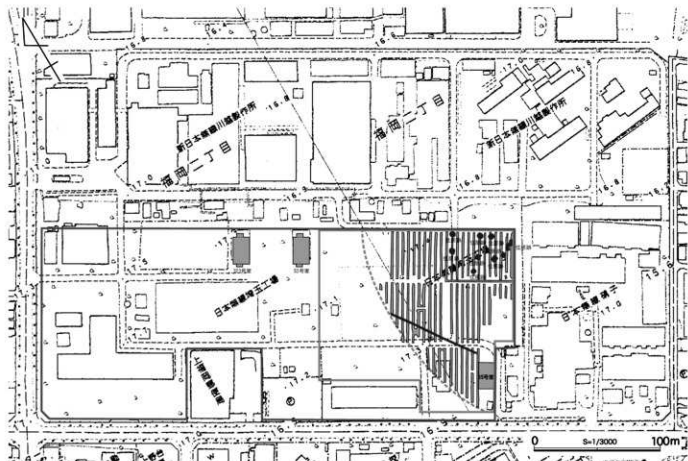
第7回打ち合わせは平成25年7月26日、試掘調査の状況報告と本調査範囲について協議した。

第8回打ち合わせは平成25年9月17日、第9回打ち合わせは平成25年10月9日に、本調査範囲と日程等について協議を行った。

第10回打ち合わせは平成25年10月16日、本調査委託契約に関する内容等の確認、契約締結の最終調整を行った。

第11回打ち合わせは平成25年12月4日、本調査時の保安安全確認と遺跡見学会等について協議した。

上福岡貝塚第2地点の文化財保護法第93条1項「埋蔵文化財発掘の届出」と「埋蔵文化財事前協議書」は、平成24(2012)年12月26日付(ふ教生第197号、ふ教生第119号)付けでふじみ野市教育委員会に提出



第4図 試掘調査範囲模式図 (1/3,000)

された。また、文化財保護法第99条「発掘調査の通知」は平成25(2013)年12月9日付(ふ上歴第633号)で埼玉県教育委員会に提出した。

発掘調査区が土壤汚染のおそれがあることから、土壤汚染対策法第4条第1項「一定の規模以上の土地の形質の変更届出書」、埼玉県生活環境安全条例第80条第1項「特定有害物質取扱事業所設置状況等調査報告書」を、平成25(2013)年5月21日付け(ふ上歴第158号)で埼玉県西部環境管理事務所に提出した。

試掘調査は平成25(2013)年6月20日～10月8日まで、幅約1.5mのトレンチ61本を設定し、重機による表土除去後、人力による調査を行った。

試掘調査の結果、縄文時代の住居跡10軒(貝層を伴うもの5軒)、古代以降とみられる溝1本、火工廠の遺構多数等を確認した。地表面から遺構確認面までの深さは約50～100cmで、火工廠の遺構や樹木の抜根により遺跡への影響が避けられない部分について発掘調査を行った。南側の道路築造部分は盛土等で遺跡への影響が及ばない事から保存措置とした。

原因者と協議を重ねた結果、平成25年11月1日、ふじみ野市教育委員会と日本無線株式会社の間で委託契約を締結した。履行期間は平成25年11月1日から平成28年3月31日である。本調査に係る費用は日本無線株式会社が全額負担した。

(2) 発掘調査の経過と方法

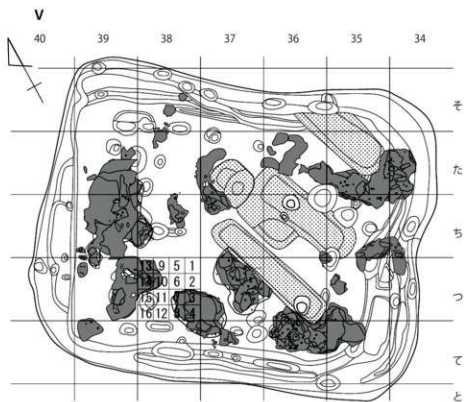
① 発掘調査の経過

上福岡貝塚第2地点の発掘調査は、ふじみ野市教育委員会が主体で行ったが、試掘調査、発掘調査の急増により、調査担当者が発掘調査現場に常駐出来ない事態が予想された。緊急かつ短期間での調査員確保が難しかったため、調査員の業務委託と、写真撮影、遺構実測等の業務委託を行った。

本調査は、遺構の確認された2ヶ所の区画で、平成25(2013)年11月5日から平成26(2014)年3月11日まで行った。また同年3月28日まで貝類の整理作業及び図面、写真等の整理作業を実施した。

2ヶ所の調査区のうち、古代以降とみられる溝の調査区をB区とし、11月5日から22日まで調査を行った。また縄文時代の住居跡を中心とする調査区をA区とし、11月6日から翌年3月10日まで調査を行った。

A区には調査区北東部の土地境界杭と平行となる任意のグリッドを設定した。大グリッドは10×10m方眼の大区画を設定し東から西へⅠ、Ⅱ、Ⅲ～、北から南へA、B、C～の番号を付しAⅠ区、BⅠ区～とした。さらに、その中は1×1m方眼の小区画を設定し、東から西へ0、1、2～、北から南へあ、い、う～の番号を付しAⅠ区(あ0区、い0区～)とした。また、貝塚の調査にあたっては、大グリッドAⅠ区(あ0区～)の各区画内に、25×25cmの1～16区の小グリッド



第5図 グリッド設定図

下に細分した。

遺構平面図の作成は、基本的に写真測量としたが、必要に応じグリッドによる遺り方測量や平板測量を行った。

整理作業は平成26(2014)年5月26日から平成27(2015)年3月25日まで、株式会社東京航業研究所に業務委託して実施した。

②貝塚の調査

7～9号住居跡の貝塚の調査は、大グリッドを設定し、貝塚の1/10(全体図は1/20)平面図を作成した。

動物遺存体の取り上げは、各貝ブロックを半載またはトレンチを設定し、堆積状況を把握した上で、1～16の小グリッド毎、各面(層)毎に取り上げを行った。狭小な貝塚等は、面(層)毎に一括で取り上げた。

7号住居跡の貝塚については、火工廠等の道路下に位置していたため、遺構及び遺物、動物遺存体が強度の圧力を受けており貝類の損傷が激しく取り上げも難航した。

8号住居跡の貝塚は小規模なものが多いが、比較的攪乱の影響は少ない。

9号住居跡は、遺構の約25%が攪乱を受けていた。

③火工廠建物跡等の調査

埋蔵文化財の調査以外に、火工廠建物跡等の調査をふじみ野市教育委員会が主体で行った。火工廠に関する建物跡等について、日本無線株式会社と前述の打ち合わせの中で協議を行い、調査についてご配慮とご協力を賜った。

火工廠に関係する埋蔵(地下)遺構と遺物のうち、試掘調査において確認、検出、出土したものの一部を除き、整理作業期間と本紙面の都合等により改めて報告を行う。試掘調査と平行して行った火工廠建物跡等の調査成果について、一部を本書に掲載した。

火工廠建物跡等に関する調査は、ふじみ野市教育委員会生涯学習課、上福岡歴史民俗資料館、文化財保護審議会委員(角田史雄、松尾鉄城、鈴木清、高木文夫、笹森健一)により、「日本無線構内文化財調査実施要項」に基づいて実施した。

調査の内容は、①埋蔵文化財調査、②旧火工廠調査(建物調査、文献資料調査、資料収集)で、②について実施した調査のうち、建物調査の成果について本書で報告する。

平成24(2012)年12月7日に、生涯学習課、上福岡歴史民俗資料館、文化財保護審議会委員による事前調査を実施した。

事前調査で確認された火工廠に関する遺構(建物等)は、電気室(37号家)、火薬倉庫(73・75号家)、爆薬埋実室(323号家)、分配室(261・262号家)、雷管撰分室(117号家)、の7棟と、23号家防壁1ヶ所であった。このうち、建物調査を実施した37号家、75号家、117号家、261号家、323号家について本書に掲載する。

文献資料調査(聞き取り調査、写真撮影等を含む)、資料収集調査は文化財保護係と歴史民俗資料館で協力して行った。

建物調査は鈴木清文化財保護審議会委員を中心に福永昭子氏が行い、民俗建築研究所の協力を得た。日本無線構内(現地)での調査期間は、平成25(2013)年2月5日から4月11日まで、室内(民俗建築研究所)での図面整理、写真データ整理、実測記録整理(清書)等の作業を平成26(2014)年2月6日から6月6日まで実施した。

③整理作業の経過と方法

整理作業及び報告書の刊行は、株式会社東京航業研究所に委託して行った。整理作業の方法、報告書内容等について、ふじみ野市教育委員会と協議し、図面及び写真整理一部原稿執筆等については発掘調査担当者が行った。

住居跡内出土の動物遺体群、主に貝類については、自然乾燥後、水洗選別法(5mm、2.5mm、1.2mm目の篩)と浮遊選別法を実施して資料の抽出後、分類・同定作業を行った。その詳細な方法は、ふじみ野市『市内遺跡群4』で詳述された整理方法に準拠している。

また、土器の分類についても『市内遺跡群4』に記載されている分類基準に基づいて実施した。その基準をここに再掲する。

・第1類 口縁部文様帯を有するもの、あるいは胴部に一定の施文帯を有するもの。

第1種 口縁部文様帯に4単位の鋸歯状文(菱形文)を有するもの。有尾式土器。

第2種 口縁部に多単位の鋸歯状文(菱形文)や渦巻文を有するもの。

第3種 口縁部に平行沈線文を重層するもの。

第4種 口唇部に幅狭い文様帯を有するもの。

第5種 格子目文を有するもの。a 格子目文だけのもの、b 格子目文と縄文を施文するものに大別する。

第6種 コンパス文と平行沈線文を有するもの。

第7種 縦方向の沈線を有するもの。

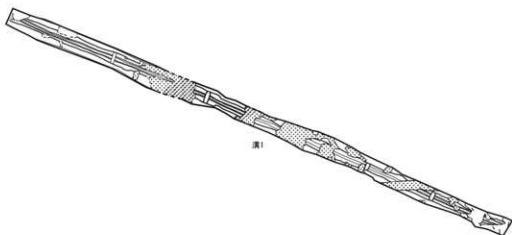
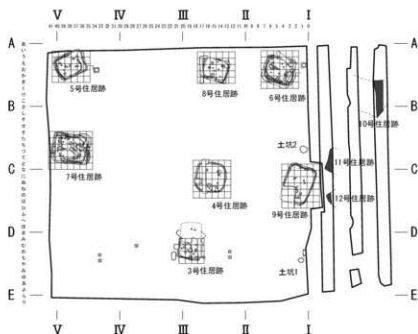
第8種 胴部に施文帯を有するもの。施文される

文様には幾つかの種類がある。

- 第9種 沈線による所謂「肋骨文」を有するもの。
- ・第2類 縄文が施文された土器群を一括する。
 - 第1種 無節斜縄文の土器。
 - 第2種 単節縄文の土器。
 - 第3種 異条斜縄文の土器。
 - 第4種 附加条縄文の土器。a 順方向、b 逆方向、c 順・逆両方向附加に大別する。
 - 第5種 反燃りの縄文が施文された土器。
 - ・第3類 絡条体が施文された土器群を一括する。
 - ・第4類 貝殻背圧痕文と貝殻腹縁文の土器を一括する。

第1種 a 貝殻背圧痕だけの土器。b 貝殻背圧痕と縄文を施文する土器。c 貝殻背圧痕と沈線を施文する土器。

- 第2種 貝殻腹縁文の土器。
 - ・第5類 無文の土器群を一括する。
 - ・第6類 底部を一括する。
 - ・第7類 北白川下層式土器を一括する。本調査区からは出土していない。
 - ・第8類 甲信系（釈迦堂23式）土器を一括する。
 - ・その他の時期のもの 早期条痕文、関山、諸磯c。
- (鍋島・宅間)



第6図 第2地点遺構配置図 (1/600)

第3章 発掘調査の成果

I 縄文時代の遺構と遺物

本発掘調査では縄文時代前期中葉黒浜期の7軒の住居跡の調査を中心に行った。

(1) 3号住居跡

① 3号住居跡

【位置】調査区の南側に位置する。主軸は推定でS-40°-Wである。

【形状・規模】住居跡の北側と東側に攪乱を受けているため全体の形状・規模は不明である。平面形態は推定で隅丸台形か長方形とみられる。検出部分は全体の半分程度と考えられる。

残存部の規模は、長軸（南北）(5.1)m×短軸（東西）(3.76)mを測る。深さは遺構確認面から床面まで10cm～15cmを測る。本住居跡から、貝層は検出されなかった。

【炉】中央部やや西寄りに位置する。炉の北側は攪乱を受けている。平面形態は楕円形を呈し、底部は赤褐色に焼けている。規模は、南北の残存部は(54)cm、東西は69cm、深さは、床面から10cmを測る。

【周溝】住居跡北側と東側は攪乱されており、周溝は未確認だが、南側と西側の壁際に1本の周溝が巡る。小さなピット状の単位（P6ほか）を持って掘り込まれている。上幅20～28cm、下幅10～15cm、深さ15～30cmを測る。

【ピット】住居跡に伴うとみられるものはP1～P11である。主柱穴はP5、P7、P8、P9とみられる。

【遺物出土状況】遺構確認面から床面までが浅く、また、その大半で攪乱を受けていることもあり、遺物残存状況は悪く、出土数も少ない。

② 3号住居跡出土土器

【出土土器】大半を攪乱されているため遺物は少ない。図示した遺物はいずれも覆土中より出土している。口縁部破片は3点図示したが、1・2が地文縄文、3が貝殻背圧痕を地文とし、モチーフは描かれない。4は屈曲部に一条の爪形文を施す。黒浜式を主体としている。

第1類第3種土器 4は頸部爪形文を横走させる。

第2類第1種土器 1は条の太いR1を横位に施文している。5はRLを横位、縦位に施文し羽状を構成している。

第2類第2種土器 2は口縁部に沿ってRLを横位に施文する。6、7はRLで施文。8はLR・RLで羽状に施文している。

第2類第4種土器 9～11はいずれも軸調は不明であるが、附加条を施文する。9、10はc。

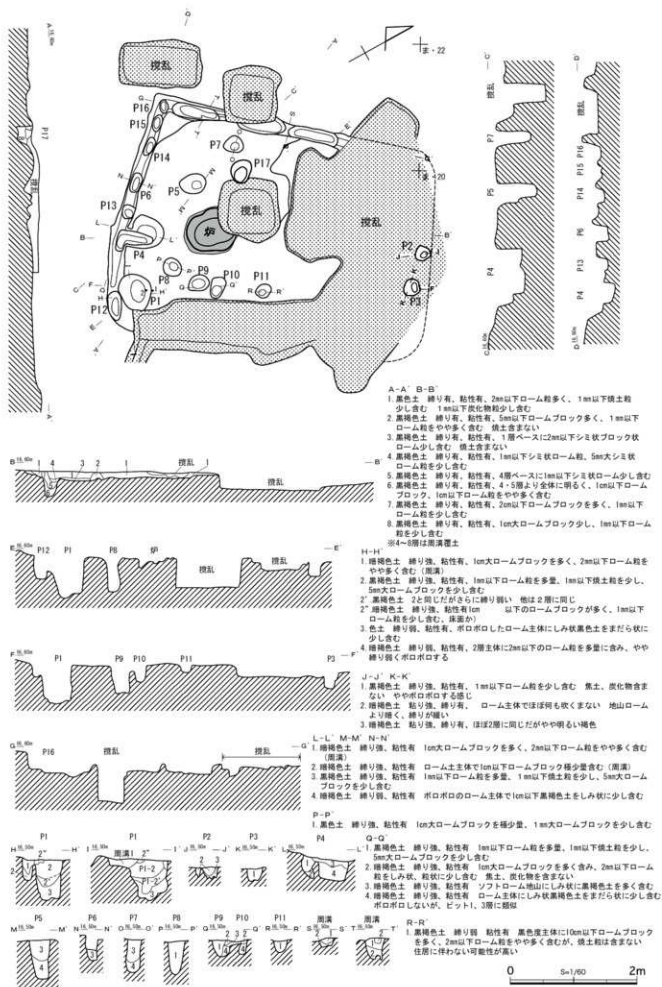
第4類第1種土器 3は4類1種aである。貝殻背圧痕を口縁部間際まで斜位に施している。

第3表 3号住居跡ピット一覧表

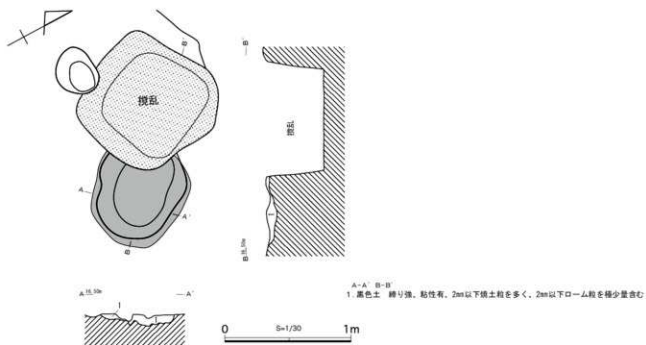
No.	平面形状	縦断面径	底径	深さ	備考
1	不整形円形	0.60×0.50	0.34×0.22	0.09	
2	不整形円形	0.24×0.21	0.12×0.07	0.16	
3	不整形円形	0.26×0.21	0.10×0.08	0.21	
4	上字形	0.55×0.32	0.47×0.22	0.43	
5	楕円形	0.42×0.26	0.14×0.07	0.62	主柱穴
6	長円形	0.26×0.19	0.19×0.08	0.19	
7	不整形円形	0.30×0.25	0.11×0.09	0.56	主柱穴
8	円形	0.31×0.25	0.15×0.05	0.65	主柱穴
9	不整形円形	0.29×0.22	0.20×0.11	0.43	主柱穴
10	不整形円形	0.34×0.21	0.14×0.11	0.22	
11	不整形円形	0.23×0.20	0.11×0.05	0.11	
12	長円形	0.46×0.22	0.26×0.11	0.13	
13	円形	0.23×0.16	0.09×0.07	0.11	
14	楕円形	0.28×0.11	0.16×0.08	0.08	
15	楕円形	0.23×0.12	0.11×0.06	0.08	
16	楕円形	0.21×0.10	0.12×0.05	0.04	
17	不整形円形	0.37×0.28	0.24×0.14	0.18	

第4表 3号住居跡出土遺物観察表

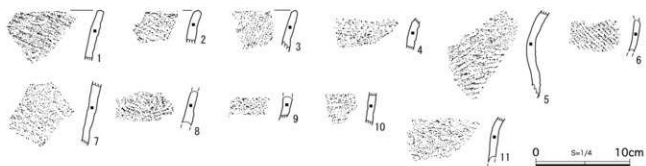
図号 番号	分類	出土 状況	口径・胴径、 長さ×幅×厚さ	底径・高さ	遺存部位	胎形	地文	文様要素	編織	時期	注記
1	2類1種	覆土			口縁部	深鉢	皿	条の太いR1を横位施文。	無染	黒浜式	3住覆乱相
2	2類2種	覆土			口縁部	深鉢	皿	口縁部に沿ってRLを横位施文。	普通	黒浜式	3住覆乱相
3	4類1種a	覆土			口縁部	深鉢	貝殻背圧痕	貝殻背圧痕を口縁部間際まで斜位に施す。	無染	黒浜式	3住覆乱相
4	1類3種	覆土			頸部	深鉢	附加条	頸部に爪形文を横走させる。頸部は軸調不明にRを附加する。	多染	黒浜式	3住覆乱相
5	2類1種	覆土			胴部	深鉢	皿	RLを横位、縦位に施し羽状構成にする。	普通	黒浜式	3住覆乱相
6	2類2種	覆土			胴部	深鉢	皿		無染	黒浜式	3住覆乱相
7	2類2種	覆土			胴部	深鉢	皿	横位施文。	普通	黒浜式	3住覆乱相
8	2類2種	覆土			胴部	深鉢	LR・RL	屈曲羽状縄文。	普通	黒浜式	3住覆乱相
9	2類4種c	覆土			胴部	深鉢	附加条	軸調不明、R1 2条、L 2条附加か。	普通	黒浜式	3住覆乱相
10	2類4種c	覆土			胴部	深鉢	附加条	軸調不明、LR 2条、R1を附加か。	普通	黒浜式	3住覆乱相
11	2類4種	覆土			胴部	深鉢	附加条	軸調不明、R1を二本同時附加する。	多染	黒浜式	3住覆乱相



第7図 3号住居跡 (1/60)



第8図 3号住居跡炉 (1/30)



第9図 3号住居跡出土遺物 (1/4)

(2) 4号住居跡

① 4号住居跡

【位置】調査区の中央東寄りに位置する。主軸はS-35°-Wである。

【形状・規模】住居跡の西寄りを南北に縦断する攪乱があるものの、全体形状は明瞭である。平面形態は隅丸方形である。規模は、長軸(東西)5.00m×短軸(南北)4.85mを測る。深さは遺構確認面から床面まで20cmを測る。本住居跡から、貝層は検出されなかった。

【炉】中央部やや南寄りに位置する。平面形態は不整な円形を呈し、床面は赤褐色に焼けている。規模は、南北69cm、東西69cm、深さは、床面から10cmを測る。

【周溝】壁際を1本の周溝が巡る。数基の小ピットを周溝内に備える。上幅16～40cm、下幅8～14cm、深さ22～40cmを測る。

【ピット】住居跡に伴うものとみられるものはP1～P7である。主柱穴はP1～P7と考えられる。周溝はほぼ1周するが、ピットが整然と配列されている状態から柱位置の付け替えが考えられる。

【遺物出土状況】床面から覆土層にかけて住居跡中央部に出土する。

② 4号住居跡出土土器

【出土土器】住居跡中央付近の床面近くで纏まって出土している。破片であるため不確かであるが、幅広の口縁部文様帯をもつものが認められる。黒浜式を主体に出土している。

第1類第1種土器 17は竹管状工具で菱形に施文する黒浜式である。

第1類第2種土器 2、18は地文に沈線文を、3はLR、19はR1を施している黒浜式。3は鋸歯文を2段に、18、19は菱形文を構成している。

第1類第3種 4、5、20、21はいずれも口縁部若しくは口縁部付近に平行沈線を横位に施文している。4、20は竹管状工具、21は櫛歯状工具によるもの。

第1類第5種土器 22は1類5種a。5本1単位の櫛歯状工具で格子目状に施文している。

第1類第8種土器 23～27は胴部片で施文帯を有する。23、24は竹管状工具で波状文を施文し、25～27は平行沈線を横位に施文している。

第2類第1種土器 6、7は口縁部、28～32は胴部。6はLr、7、28～30はR1、31、32はLr・R1の羽状。

第2類第2種土器 1、13、14は口縁部、16はS字状結節を伴うRLを、37～42は胴部でRLを、8～

12は口縁部、33～36は胴部でLRをそれぞれ施文している。いずれも黒浜式。

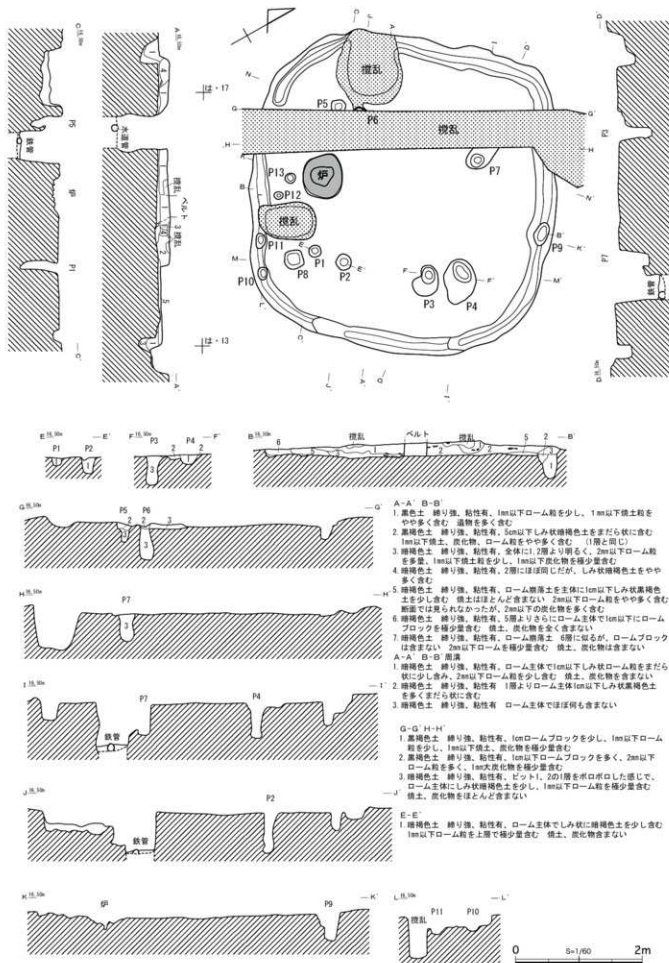
第5類土器 15は無文。口縁部はヨコナデされる。

第6類土器 6類は底部片を一括している。43はRLを、44はR1をそれぞれ横位に施文している。

第8類土器 8類は甲信系土器を一括している。45は胴部を転用して土器円盤としている。地文はLr。雲雲母を多量に含む。釈迦堂Z3式。

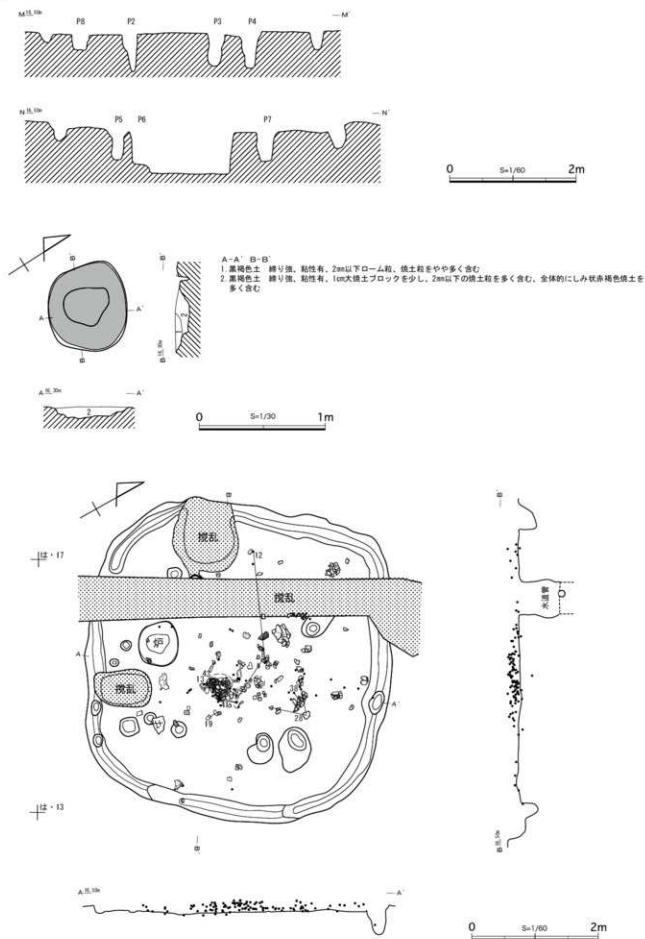
第5表 4号住居跡ピット一覧表

No.	平面形態	縦断面径	底径	深さ	備考
1	円形	0.16 × 0.15	0.06 × 0.05	0.10	主柱穴
2	円形	0.24 × 0.21	0.13 × 0.11	0.58	主柱穴
3	不整形	0.49 × 0.40	0.11 × 0.08	0.52	主柱穴
4	不整形	0.71 × 0.51	0.24 × 0.08	0.14	主柱穴
5	円形?	0.23 × (0.16)	0.16 × (0.09)	0.50	主柱穴
6	円形?	0.16 × (0.4)	0.13 × (0.2)	0.55	主柱穴
7	長円形?	0.40 × 0.35	0.22 × 0.10	0.46	主柱穴
8	不整形円形	0.30 × 0.27	0.21 × 0.18	0.27	
9	楕円形	0.38 × 0.22	0.23 × 0.11	0.59	
10	不整形円形	0.18 × 0.11	0.10 × 0.07	0.94	
11	楕円形	0.22 × 0.13	0.18 × 0.09	0.03	
12	円形	0.11 × 0.08	0.05 × 0.04	0.03	
13	円形	0.16 × 0.14	0.07 × 0.05	0.02	



- A-A' B-B'
1. 黒色土 締り強、粘性有、1cm以下ローム粒を少し、1cm以下埋土粒をやや多く含む 遺物を多く含む
 2. 黒褐色土 締り強、粘性有、5cm以下しみ状埋褐色土をまだらに含む 1cm以下埋土、炭化物、ローム粒をやや多く含む (1層と同じ)
 3. 埋褐色土 締り強、粘性有、全体に2層より明るく、2cm以下ローム粒を少量、1cm以下埋土粒を少し、1cm以下炭化物を極少量含む
 4. 埋褐色土 締り強、粘性有、2層にほぼ同じだが、しみ状埋褐色土をやや多く含む
 5. 埋褐色土 締り強、粘性有、ローム粒混土を主体に1cm以下しみ状埋褐色土を少し含む 埋土はほとんど含まない 2cm以下ローム粒をやや多く含む 断面では異ならなかったが、2cm以下の炭化物を多く含む
 6. 埋褐色土 締り強、粘性有、5層よりさらにローム主体で1cm以下にロームブロックを極少量含む 埋土、炭化物を全く含まない
 7. 埋褐色土 締り強、粘性有、ローム混埋土 6層に似るが、ロームブロックは含まない 2cm以下ロームを極少量含む 埋土、炭化物は含まない
- A-A' B-B' 周溝
1. 埋褐色土 締り強、粘性有、ローム主体で1cm以下しみ状ローム粒をまだらに少し含む、2cm以下ローム粒を少し含む 埋土、炭化物を含まない
 2. 埋褐色土 締り強、粘性有、1層よりローム主体1cm以下しみ状埋褐色土を多くまだらに含む
 3. 埋褐色土 締り強、粘性有、ローム主体でほぼ何も含まない
- G-G' H-H'
1. 埋褐色土 締り強、粘性有、1cmロームブロックを少し、1cm以下ローム粒を少し、1cm以下埋土、炭化物を極少量含む
 2. 埋褐色土 締り強、粘性有、1cm以下ロームブロックを多く、2cm以下ローム粒を多く、1cm炭化物を極少量含む
 3. 埋褐色土 締り強、粘性有、ビット、2の層をボロボロした感じで、ローム主体にしみ状埋褐色土を少し、1cm以下ローム粒を極少量含む 埋土、炭化物をほとんど含まない
- E-E'
1. 埋褐色土 締り強、粘性有、ローム主体でしみ状埋褐色土を少し含む 1cm以下ローム粒を上層で極少量含む 埋土、炭化物を含まない

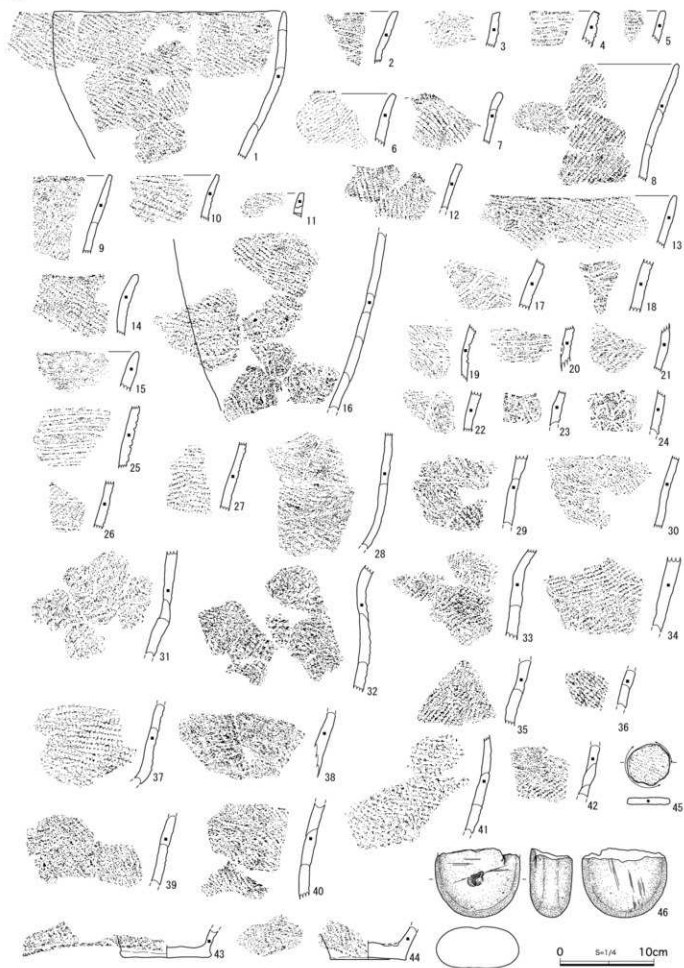
第10図 4号住居跡 (1/60)



第11図 4号住居跡炉・遺物出土状況図 (1/30・1/60)

第6表 4号住居跡出土土物観察表

図録番号	分類	出土状況	口径・胴径、長さ×幅×厚さ	底径・高さ	遺存部位	器形	地文	文様要素	編年	時期	日記
1	2類2種	埋土	(28.6) × (37.2)	→ (15.7)	口縁部	深鉢	黒	丸模位施文。	多量	黒布式	4住Ⅲ112
2	1類2種	埋土	→ (34.0)	→ (28.9)	口縁部	深鉢	沈線	竹管状工具で変形文を施文する。	普通	黒布式	4住D区Ⅲ
3	1類2種	埋土			口縁部	深鉢	LR	LRを地文に竹管状工具で彫刻文を2段以上。	少量	黒布式	4住Ⅲ96
4	1類3種	埋土			口縁部	深鉢	沈線	口縁部に沿って竹管状工具で平行線を施文。口唇部を平らぐ。	普通	黒布式	4住Ⅲ92
5	1類3種	埋土			口縁部	深鉢	沈線	口唇部を平行沈線を模倣させる。	普通	黒布式	4住C区Ⅲ
6	2類1種	埋土			口縁部	深鉢	Lr	Lr模位施文。	少量	黒布式	4住Ⅲ乱Ⅲ
7	2類1種	埋土			口縁部	深鉢	紅	小波状口縁。	多量	黒布式	4住Ⅲ91
8	2類2種	埋土			口縁部	深鉢	LR		普通	黒布式	4住Ⅲ68・79・ベルト
9	2類2種	埋土			口縁部	深鉢	LR	LR模位施文。	普通	黒布式	4住Ⅲ69
10	2類2種	埋土			口縁部	深鉢	LR	LR模位施文。	普通	黒布式	4住Ⅲ61
11	2類2種	埋土			口縁部	深鉢	LR	穿孔あり。LR模位施文。	普通	黒布式	4住Ⅲ21
12	2類2種	埋土			口縁部	深鉢	LR	波状部2突起状になる。LR模位施文。一部丸模位施文が。	普通	黒布式	4住Ⅲ66・90
13	2類2種	埋土			口縁部	深鉢	黒	丸模位施文。	少量	黒布式	4住Ⅲ17・58
14	2類2種	埋土			口縁部	深鉢	黒	小波状口縁。	少量	黒布式	4住Ⅲ6
15	5類	埋土			口縁部	深鉢	-	無文。口縁部コナダされる。	多量	黒布式	4住Ⅲ37
16	2類2種	埋土			胴部	深鉢	黒	S字状結節を伴う。	普通	黒布式	4住Ⅲ58
17	1類1種	埋土			胴部	深鉢	沈線	竹管状工具で変形文を施文する。	普通	黒布式	4住Ⅲ110
18	1類2種	埋土			胴部	深鉢	沈線	竹管状工具で変形文を施文する。	多量	黒布式	4住A区Ⅲ
19	1類2種	埋土			胴部	深鉢	紅	口縁部に竹管状工具で変形文を構成すると思われる。胴部は丸。	普通	黒布式	4住Ⅲ7・8
20	1類3種	埋土			口縁部付着	深鉢	沈線	無文。地に竹管状工具で平行沈線を模倣施文。	多量	黒布式	4住Ⅲ49
21	1類3種	埋土			口縁部付着	深鉢	LR	LRを地に彫刻状工具で沈線を模倣施文。	普通	黒布式	4住Ⅲ乱Ⅲ
22	1類5種a	埋土			胴部	深鉢	沈線	5本一単位の彫刻状工具で格子状文を施文。	微量	黒布式	4住Ⅲ76
23	1類8種	埋土			胴部	深鉢	沈線	竹管状工具で波状文を描く。	普通	黒布式	4住Bベルト
24	1類8種	埋土			胴部	深鉢	沈線	竹管状工具で波状文を描く。	普通	黒布式	4住Bベルト
25	1類8種	埋土			胴部	深鉢	沈線	平行沈線を模倣施文。	少量	黒布式	4住B
26	1類8種	埋土			胴部	深鉢	LR	LRを地文に竹管状工具で間隔を空けて平行沈線を模倣施文。	普通	黒布式	4住Aベルト
27	1類8種	埋土			胴部	深鉢	黒	黒を地文に竹管状工具で間隔を空けて平行沈線を模倣施文。	普通	黒布式	4住Ⅲ72
28	2類1種	埋土			胴部	深鉢	紅	紅模位施文。	多量	黒布式	4住Ⅲ64・43・30
29	2類1種	埋土			胴部	深鉢	紅	紅模位施文。	普通	黒布式	4住Ⅲ36
30	2類1種	埋土			胴部	深鉢	紅	紅模位施文。	普通	黒布式	4住Ⅲ107
31	2類1種	埋土			胴部	深鉢	Lr・R1	羽状構成。59と同一個体。	普通	黒布式	4住Ⅲ36
32	2類1種	埋土			胴部	深鉢	Lr・R1	羽状構成。49と同一個体。	普通	黒布式	4住Ⅲ36
33	2類2種	埋土			胴部	深鉢	LR	LR模位施文。	普通	黒布式	4住Ⅲ73
34	2類2種	埋土			胴部	深鉢	LR	LR模位施文。	少量	黒布式	4住Ⅲ74
35	2類2種	埋土			胴部	深鉢	LR	LR模位施文。	多量	黒布式	4住Ⅲ65
36	2類2種	埋土			胴部	深鉢	LR	0段多量。	普通	黒布式	4住D区Ⅲ
37	2類2種	埋土			胴部	深鉢	黒		多量	黒布式	4住Ⅲ87
38	2類2種	埋土			胴部	深鉢	紅小	波状口縁。	多量	黒布式	4住Ⅲ47・45
39	2類2種	埋土			胴部	深鉢	黒	丸模位施文。	普通	黒布式	4住Ⅲ58
40	2類2種	埋土			胴部	深鉢	黒	造加成形技法。	多量	黒布式	4住Ⅲ61
41	2類2種	埋土			胴部	深鉢	黒	丸模位施文。	多量	黒布式	4住Ⅲ11・94・97
42	2類2種	埋土			胴部	深鉢	黒	造加成形技法。	普通	黒布式	4住Ⅲ109
43	6類	埋土		9.6 × (3.2)	底部	深鉢	黒	丸模位施文。	多量	黒布式	4住Ⅲ15・16・18
44	6類	埋土		7.8 × (3.3)	底部	深鉢	黒	丸模位施文。	普通	黒布式	4住Ⅲ58
45	8類	埋土			胴部(転用)	土器行燈	Lr	余量多量。	無	転用遺物	4住Ⅲ88
46	石器	埋土	(0.2) × 8.7 × 4.5			磨石	-	花崗岩。凹石としても使用。縁刃磨打痕がある。重量438.99g。	-	-	4住Ⅲ(11)



第12図 4号住居跡出土遺物 (1/4)

(3) 5号住居跡

① 5号住居跡

【位置】調査区の北隅に位置する。主軸はN-60°-Wである。

【形状・規模】平面形態は隅丸長方形である。規模は、長軸(東西)5.0m×短軸(南北)3.9mを測る。深さは、遺構確認面から床面まで40cmを測る。この住居跡は検出された遺構内の施設より拡張していることが考えられる。拡張前の規模は、長軸(東西)3.85m×短軸(南北)3.2mを測る。拡張後の規模は、長軸(東西)5.06m×短軸(南北)3.98mを測る。本住居跡から、貝層は検出されなかった。

【炉】中央部西寄りに位置する。平面形態は不整な円形を呈し、床面は赤褐色に焼けている。規模は、南北66cm、東西77cm、深さは床面から6cmを測る。

【周溝】壁際に1本の周溝が巡り、北東隅(P6)と東辺中央(P18、19、20、21)にピットを有する。上幅18～35cm、下幅5～10cm、深さ20～22cmを測る。また、壁際周溝の内側に西辺から北辺中央、西辺中央～南辺にかけて1本、ほぼ一周する周溝がある。内側の周溝もピットを有する(P7、9)。上幅8～20cm、下幅4～10cm、深さ5～17cmを測る。

【ピット】住居跡に伴うと見られるものはP1～P21である。主柱穴はP1～P4が考えられる。一方で、周溝が2条に巡らされている状態やP13(主柱穴)～P15(主柱穴)の配列状態から、複数回、住居を拡張していると考えられる。また、P8(拡張前)、P18～P21(拡張後)は住居の入口施設を構築していたと考えられる。

【遺物出土状況】床上から覆土層にかけて出土している。

② 5号住居跡出土土器

【出土土器】いずれも覆土の中段から上位で遺物が出土した。平面的に見ると壁際からの出土が少ないが、集中して分布する様子を見出すことはできない。このことから、住居廃絶後、若干時間において廃棄された遺物が主体をなすものと思われる。そのため、図示した遺物も破片が主体である。そのうち1・2は口縁部から胴部下位までが残るもので、地文縄文の土器である。その他の口縁部を見ると平縁が主体であり、緩やかな波状口縁をなすもの、波頂部が丸みをもつ大波状のもの、三角形の突起を有するものが若干認められる。口縁部は地文のみのものが多く、格子目文などのモチーフを持つものもあるが、幅狭な文様帯である。黒浜式を主体に出土している。

第1類第2種土器 3～5、21は口縁部。3は爪形文で鋸歯文を描く。4は波状口縁だが、口縁に沿った平行沈線を描いている。5は竹管状工具で曲線的なモチーフを描いている。21は爪形文で鋸歯文を描いている。23は胴部に、櫛歯状工具で波状文と沈線を横位に施文している。黒浜式である。

第1類第3種土器 6～8は口縁部でいずれも竹管状工具にて施文している。6は沈線を横位に施文、8はRR施文後、口縁部に沿って竹管状工具で平行沈線を2段横走に施文している。小突起を持つ7はLr施文後、竹管状工具で横走に施文している。

第1類第5種土器 9、24はaで竹管状工具で格子目文を施文している。10、25は地文にLrを施文し、竹管状工具で格子目文を描いている。

第1類第8種土器 26、27は胴部。Lr施文後、竹管状工具で平行線を横走に施文している。黒浜式。

第2類第1種土器 1は口縁部にギザミを有する。11～13は口縁部に沿ってLrを横位に施文している。14はR1を横位に施文後、口縁部直下を横ナデしており、28はLr・R1無節羽状縄文を施文している。

第2類第2種土器 15はLRを施文後、口縁部直下を非常に幅狭くナデる。16～18は口縁部に沿ってLRを横位に施文している。16には、口縁直下に両側からの穿孔が窺える。18は口縁部直下を横ナデしている。19、29～31、42はRLを横位に施文している。19は口縁部直下を横ナデしている。32はLR・RLの単節羽状縄文を施文している。15～19は口縁部、29～32は胴部、42は底部で、黒浜式。

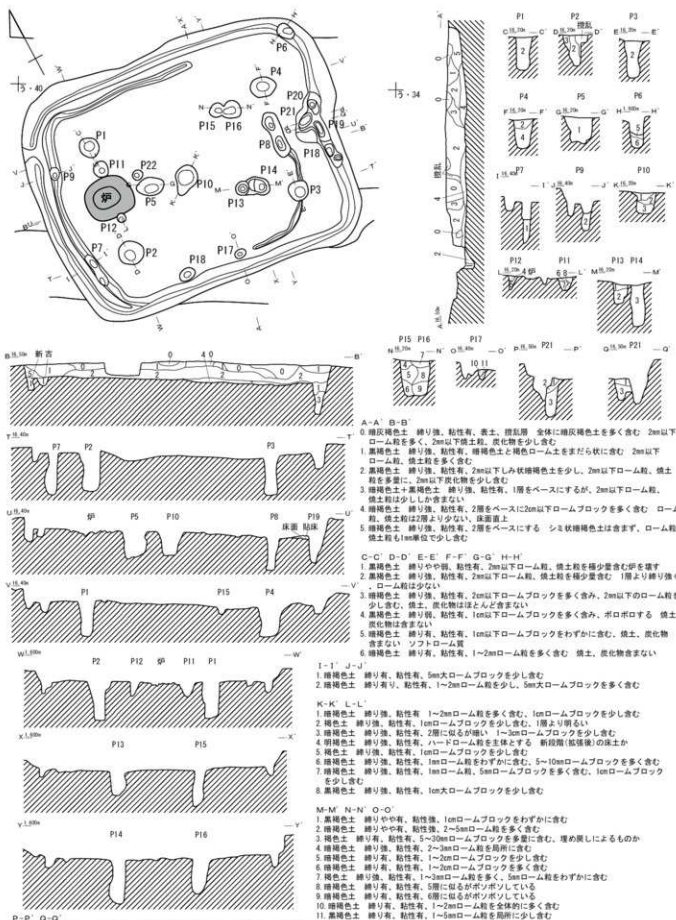
第2類第4種土器 22、33、34、35、40は附加条縄文の土器。22、33は軸縄は不明だが、Lを附加している。34はLr+2Lの2種を施文しており、35はLr+2Lの2種を縦位に施文している。40はR1+2Lの2種を施文している。いずれも黒浜式である。

第2類第5種土器 2は緩い波状口縁を呈しており、RRを横位に施文している。20は口縁部に沿って横位にRRを施文している。36は胴部片でRRを斜位に施文している。いずれも黒浜式である。

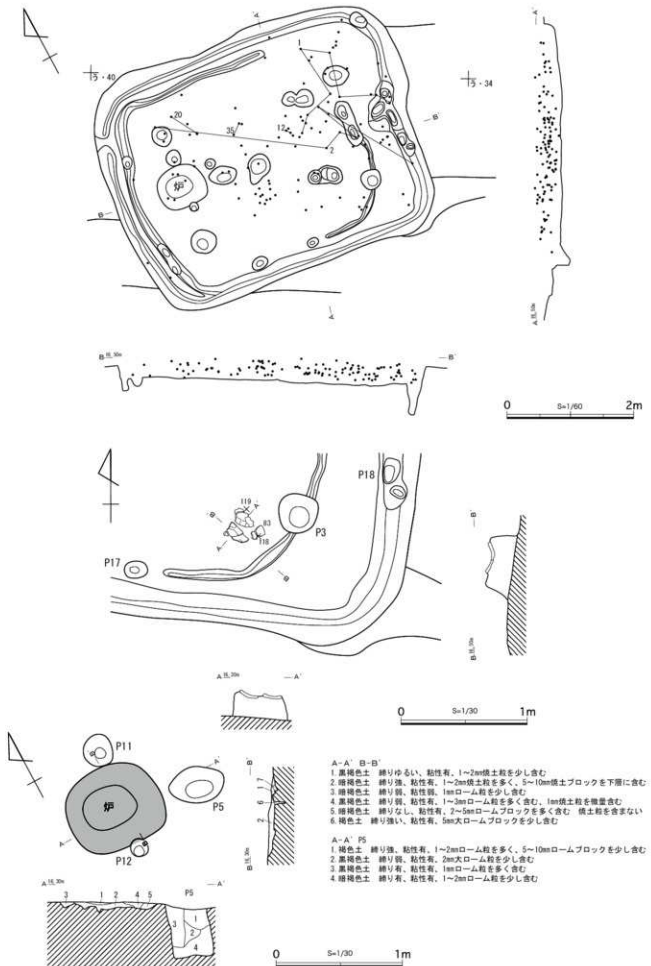
第3類土器 37は摺糸Rで施文している。黒浜式。

第4類第1種土器 38、39、43は4類1種aである。38は胴部で貝殻背圧痕を斜位に施文している。39は胴部で貝殻背圧痕を横位に施文している。43は底部であるが、貝殻背圧痕が横位に施文している。黒浜式。

第8類土器 41は胴部片でRLを横位に施文している。金雲母を含む。釈迦堂Z3式である。



第13図 5号住居跡 (1/60)



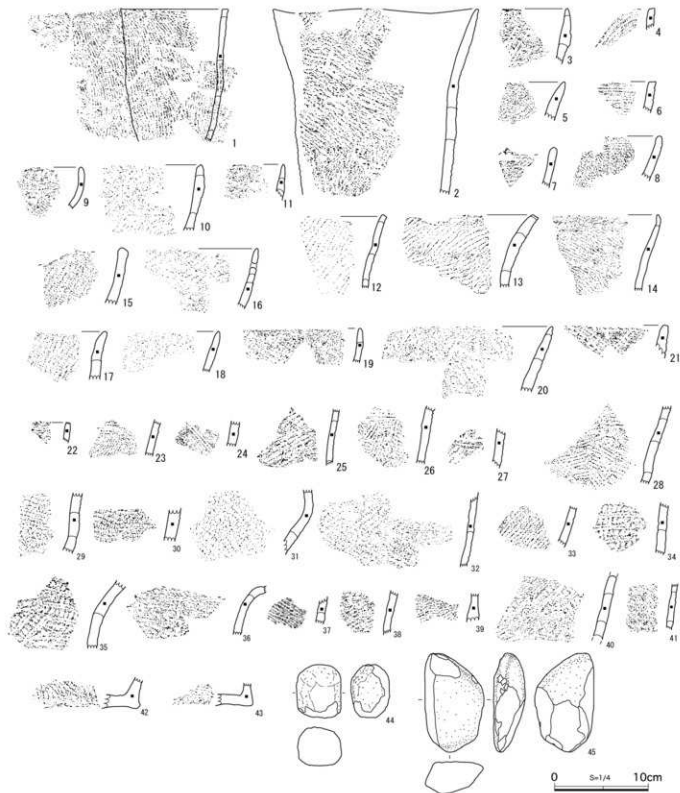
第14図 5号住居跡遺物出土状況図・炉 (1/60・1/30)

第7表 5号住居跡出土土物観察表

図号 番号	掲載 番号	分類	出土 状況	口径・胴径、 長さ×幅×厚さ	直径・高さ	発見部位	胎形	地文	文様要素	編織	時期	注記
	1	2類1種	埋土	(11.30) × (10.4)	→ (14.1)	口縁部へ 胴部	深鉢	Lr	口唇部キズミ。Lrを施文。	少量	黒褐色	5住№6・0・ 37・B-6 ト、5住№ 30・115・A 区、5住 №2・36・ 47・02、5 住№22・A 区2
	2	2類5種	埋土	(22.0) × (17.2)	→ (19.7)	口縁部へ 胴部	深鉢	黒	縦い波状口縁。黒を模範施文。	少量	黒褐色	5住№14・ 34・103・ 104、5住 №33・103 ・104・106
	3	1類2類	埋土			口縁部	深鉢	沈線	爪形文を施文を描く。	普通	黒褐色	5住№48
	4	1類2種	埋土			口縁部	深鉢	沈線	波状口縁。波状口縁に沿って平行沈線。	普通	黒褐色	5住 B-6ト1
	5	1類2種	埋土			口縁部	深鉢	Lr	竹管状工具で曲線的なキチーブを描く。	少量	黒褐色	5住№13
	6	1類3種	埋土			口縁部	深鉢	沈線	竹管状工具で沈線を模範施文。	普通	黒褐色	5住A区2
	7	1類3種	埋土			口縁部	深鉢	Lr	小突起を持つ。Lr施文後、竹管状工具で平行沈線を模範施文。	少量	黒褐色	5住 A-6ト1
	8	1類3種	埋土			口縁部	深鉢	黒	黒施文後、口縁部に沿って竹管状工具で平行線を2段模範施文。	多量	黒褐色	5住P5
	9	1類5種a	埋土			口縁部	鉢	沈線	竹管状工具で浅く乱雑な格子目文を描くものと思われる。	少量	黒褐色	5住 B-6ト1
	10	1類5種	埋土			口縁部	鉢	Lr	追加成形技法。竹管状工具で格子目文を描く。	普通	黒褐色	5住№48
	11	2類1種	埋土			口縁部	深鉢	Lr	口縁部に沿ってLrを模範施文。	少量	黒褐色	5住B区4
	12	2類1種	埋土			口縁部	深鉢	Lr	口縁部に沿ってLrを模範施文。	普通	黒褐色	5住№24・ 26
	13	2類1種	埋土			口縁部	深鉢	Lr	口縁部に沿ってLrを模範施文。	普通	黒褐色	5住№7
	14	2類1種	埋土			口縁部	深鉢	黒	黒模範施文後、口縁部直下を横ナゲ。	少量	黒褐色	5住№21・ 30
	15	2類2種	埋土			口縁部	深鉢	黒	波状口縁。黒を施文後、口縁部直下を非常に幅狭くナゲる。	少量	黒褐色	5住№83
	16	2類2種	埋土			口縁部	深鉢	黒	口縁部に沿って黒を模範施文。口縁部直下を非常に幅狭くナゲる。	普通	黒褐色	5住№83
	17	2類2種	埋土			口縁部	深鉢	黒	口縁部に沿って黒を模範施文。	少量	黒褐色	5住№34
	18	2類2種	埋土			口縁部	深鉢	黒	口縁部に沿って黒模範施文後、口縁部直下を横ナゲ。	普通	黒褐色	5住B区2
	19	2類2種	埋土			口縁部	深鉢	黒	黒模範施文後、口縁部直下を横ナゲ。	普通	黒褐色	5住№83
	20	2類5種	埋土			口縁部	深鉢	黒	口縁部に沿って黒を模範施文。	普通	黒褐色	5住№52・ 55
	21	1類2種	埋土			口縁部	深鉢	沈線	爪形文により網目文を描く。	普通	黒褐色	5住埋土B
	22	2類4種	埋土			口縁部	深鉢	附加条	口唇部キズミ。輪郭不明にLを附加する。	微量	黒褐色	5住A区4
	23	1類2種	埋土			胴部	深鉢	沈線	網目状工具で波状文と沈線を模範に施文。	微量	黒褐色	5住A区4
	24	1類5種a	埋土			胴部	深鉢	沈線	竹管状工具で格子目文を描くと思われる。	少量	黒褐色	5住 B-6ト1
	25	1類5種b	埋土			胴部	深鉢	Lr	Lr模範施文後、竹管状工具で格子目文を描く。	少量	黒褐色	5住№107
	26	1類5種	埋土			胴部	深鉢	Lr	Lr施文後、竹管状工具で平行線を2段以上模範施文。	少量	黒褐色	5住№46
	27	1類5種	埋土			胴部	深鉢	Lr	Lr模範施文後、竹管状工具で平行線を模範施文。	普通	黒褐色	5住A区1
	28	2類1種	埋土			胴部	深鉢	Lr・R1	無胎別文。	普通	黒褐色	5住№98
	29	2類2種	埋土			胴部	深鉢	黒	黒を模範施文	少量	黒褐色	5住№19
	30	2類2種	埋土			胴部	深鉢	黒	黒模範施文。	普通	黒褐色	5住№32
	31	2類2種	埋土			胴部	深鉢	黒	黒模範施文。	多量	黒褐色	5住№93
	32	2類2種	埋土			胴部	深鉢	Lr・R1	卵形別文調文。	多量	黒褐色	5住№83
	33	2類4種	埋土			胴部	深鉢	附加条	輪郭不明にLを附加する。	少量	黒褐色	5住№29
	34	2類4種b	埋土			胴部	深鉢	附加条	附加条2種。Lr・R1。	多量	黒褐色	5住№97
	35	2類4種b	埋土			胴部	深鉢	附加条	附加条2種。Lr・R1を模範施文。	普通	黒褐色	5住№93
	36	2類5種	埋土			胴部	深鉢	黒	黒斜位施文。	普通	黒褐色	5住№07・ 60
	37	3類	埋土			胴部	深鉢	黒赤	黒赤丸。	微量	黒褐色	5住 A-6ト1
	38	4類1種a	埋土			胴部	深鉢	貝殻有圧痕	貝殻有圧痕を斜位に施す。	少量	黒褐色	5住№75
	39	4類1種a	埋土			胴部	深鉢	貝殻有圧痕	貝殻有圧痕模範施文。	少量	黒褐色	5住№93
	40	2類4種a	埋土			胴部	深鉢	附加条	附加条1種。R1・R1。	普通	黒褐色	5住№79
	41	8類	埋土			胴部	深鉢	黒	黒を模範施文。金雲母を含む。	無	乾澁黄23	5住A区1
	42	2類2種	埋土			胴部	深鉢	黒	黒を模範施文。	普通	黒褐色	5住B区2
	43	4類1種a	埋土			底部	深鉢	貝殻有圧痕	貝殻有圧痕模範施文。	普通	黒褐色	5住 B-6ト1
	44	石器	埋土	5.7 × 4.7 × 4.1		磨石		花崗岩。被熱により表面が強い。重量150.20g。		-	-	5住 A-6ト1
	45	石器	埋土	10.4 × 6.3 × 1.3		磨石?		砂岩。磨痕が見られる。重量259.90g。		-	-	5住 A-6ト1

第8表 5号住居跡ピット一覧表

No.	平面形態	縦断面径	底径	深さ	備考	No.	平面形態	縦断面径	底径	深さ	備考
1	円形	0.32 × 0.26	0.14 × 0.13	0.53	主柱穴	12	円形	0.12 × 0.11	0.03 × 0.03	0.23	
2	円形	0.39 × 0.35	0.17 × 0.15	0.47	主柱穴	13	円形	0.19 × 0.18	0.07 × 0.06	0.36	主柱穴
3	円形	0.31 × 0.29	0.14 × 0.14	0.73	主柱穴	14	不整形円形	0.40 × 0.29	0.10 × 0.08	0.68	主柱穴
4	円形	0.41 × 0.29	0.20 × 0.12	0.56	主柱穴	15	不整形円形	0.19 × (0.16)	0.07 × 0.05	0.58	主柱穴
5	楕円形	0.44 × 0.28	0.23 × 0.12	0.45		16	不整形円形	(0.28) × 0.25	0.19 × 0.12	0.56	
6	不整形円形	0.28 × 0.19	0.13 × 0.09	0.50		17	楕円形	0.15 × 0.12	0.04 × 0.03	0.18	
7	長円形	0.52 × 0.13	0.13 × 0.08	0.67		18	不整形円形	0.28 × 0.15	0.12 × 0.07	0.10	入口施設
8	長円形	0.77 × 0.24	0.13 × 0.07	0.46	入口施設	19	長円形	0.26 × 0.10	0.13 × 0.04	0.41	入口施設
9	円形	0.17 × 0.13	0.09 × 0.06	0.04		20	楕円形	0.25 × 0.13	0.06 × 0.05	0.03	入口施設
10	不整形円形	0.50 × 0.36	0.24 × 0.22	0.33		21	楕円形	0.25 × 0.13	0.16 × 0.07	0.04	入口施設
11	円形	0.25 × 0.20	0.08 × 0.07	0.25		22	円形	0.13 × 0.12	0.07 × 0.07	0.04	



第15図 5号住居跡出土遺物(1/4)

(4) 6号住居跡

① 6号住居跡

【位置】調査区の南隅に位置する。主軸はN-45° ~ 49° -Wである。

【形状・規模】住居跡の東壁一部と南壁一部に乱れを受けてはいるが、全体の形状・規模は明瞭である。平面形態は隅丸長方形である。規模は、長軸（南北）5.3m × 短軸（東西）4.9mを測る。深さは、遺構確認面から床面まで20cmを測る。本住居跡から、貝層は検出されなかった。

【炉】炉は2基確認された。1基（炉1）は中央やや北寄り位置する。東にP1、南西にP5、P6が近接し、南端をP4に壊されている。平面形態は不整な楕円形を呈する。規模は、南北75cm、東西55cm、深さは床面から10cmを測る。もう1基（炉2）は中央の西寄りに位置する。西辺で3周する周溝のうち、最も内周の周溝と接している。新旧関係については不明である。

【周溝】東壁際に1条周溝があり、北隅で二又に分かれる。二又のうち、壁際の周溝は北壁際に巡らず、内側の周溝に呼応する形で北辺に周溝が1条巡る。周溝は西辺で3重に巡り、南辺にて1条に収束する。周溝および主柱穴の様子から複数回（1～3回）の拡張が行われたと考えられる。東壁際の周溝で上幅は30～35cm、下幅は10～20cm、深さは25～35cmを測る。北辺、南辺の周溝で、上幅15～25cm、下幅5～12cm、深さ10～12cmを測る。西辺は最外周溝で上幅18～20cm、下幅5～10cm、深さ20～25cmを測る。西辺最内周では上幅10～15cm、下幅5～10cm、深さ7～10cmを測る。

【ピット】住居跡に伴うと見られるものはP1～P23である。主柱穴は、P1、P2、P19、P20で一組、P1・2・15・19、P1・2・3・19、P1・2・9・16等の組み合わせが考えられる。

【遺物出土状況】床上から覆土層にかけて出土している。

② 6号住居跡出土土器

【出土土器】遺物は覆土中および床面上から出土している。平面的に見ると西側隅付近と南側にややまとまりが認められる。黒浜式が主体である。

第1類第1種土器 1は口縁部。波状口縁で地文に3本の施文工具により大振り施文している。

第1類第2種土器 2～5は口縁部、14は口縁部

付近の部位である。2、3、5、14は竹管状工具で鋸歯文を描いている。4は波状口縁に沿って3条の押引文を施しており、以下同一工具で鋸歯文あるいは格子目文を描いている。

第1類第3種土器 6は小突起を有し、竹管状工具による横位平行沈線文を密に重層させている。

第1類第4種土器 7は小突起を有する口縁部。地文はR1。口縁部に沿って、竹管状工具でC字形の爪形文を2段施している。8は軸繩は不明だが、2Rと2Lを附加したもので羽状に施文している。その後、口縁部に沿ってコンパス文を施している。

第1類第7種土器 15、16は胴部片で縦位の短沈線文を施文している。

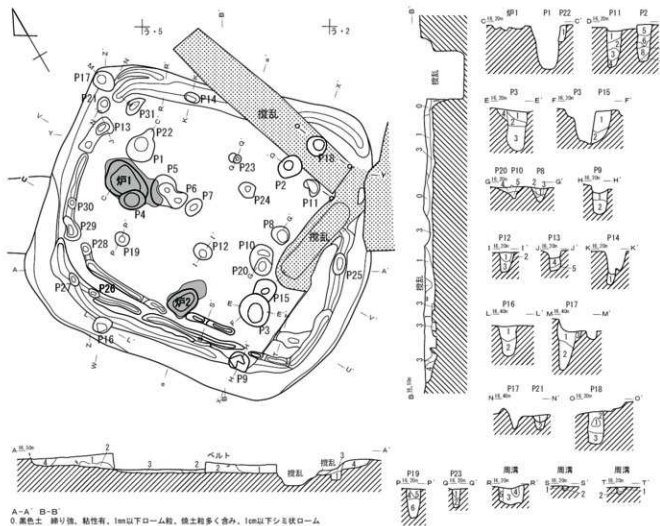
第1類第8種土器 17は竹管状工具により波状文を施文している。18は竹管状工具で鋸歯文、波状文等を描いている。19は地文にLを附加している附加条で頸部にはコンパス文を施文している。

第1類第9種土器 20は沈線により肋骨文を施文。

第2類第1種土器 9、10は口縁部。9はLr横位施文後、口縁直下に竹管状工具で平行沈線を施文している。10は二個1単位の小突起を有しており、R1横位施文後、一部に爪形文を付している。13は無節R1を横位施文する。21～23は胴部。Lrで横位に施文し

第9表 6号住居跡ピット一覧表

No.	平面形態	縦断面径	底径	深さ	備考
1	円形	0.503 × 0.41	0.20 × 0.20	0.70	主柱穴
2	楕円形	0.39 × 0.29	0.17 × 0.14	0.56	主柱穴
3	円形	0.55 × 0.48	0.29 × 0.23	0.67	主柱穴
4	楕円形	0.40 × 0.31	0.23 × 0.23	0.42	
5	楕円形	0.49 × (0.32)	0.08 × 0.08	0.65	
6	楕円形	0.30 × (0.15)	0.08 × 0.06	0.68	
7	楕円形	0.32 × 0.19	0.14 × 0.06	0.45	
8	円形	0.29 × 0.23	0.19 × 0.16	0.56	
9	円形	0.30 × 0.31	0.21 × 0.20	0.47	
10	楕円形?	0.423 × 0.35	0.19 × 0.07	0.30	
11	不整形円形	0.28 × 0.25	0.22 × 0.10	0.65	
12	円形	0.26 × 0.24	0.10 × 0.09	0.33	
13	長円形	0.67 × 0.31	0.13 × 0.07	0.33	
14	楕円形	0.22 × 0.15	0.14 × 0.05	0.53	
15	円形?	0.323 × 0.21	0.14 × 0.08	0.53	主柱穴
16	不整形円形	0.29 × 0.22	0.13 × 0.07	0.50	主柱穴
17	楕円形	0.36 × 0.26	0.14 × 0.12	0.81	
18	円形	0.32 × 0.28	0.16 × 0.15	0.52	
19	円形	0.19 × 0.20	0.09 × 0.09	0.46	主柱穴
20	円形	0.26 × 0.24	0.15 × 0.13	0.68	主柱穴
21	楕円形	0.24 × 0.14	0.11 × 0.08	0.24	
22	円形?	0.11 × 0.08	0.03 × 0.02	0.28	
23	楕円形	0.20 × 0.10	0.04 × 0.03	0.31	
24	不整形円形	0.28 × 0.22	0.08 × 0.08	0.04	
25	楕円形	0.34 × 0.20	0.21 × 0.09	0.06	
26	楕円形	0.19 × 0.11	0.05 × 0.03	0.04	
27	楕円形	0.20 × 0.14	0.08 × 0.03	0.05	
28	楕円形	0.22 × 0.10	0.06 × 0.03	0.04	
29	不整形楕円形	0.38 × 0.25	0.15 × 0.05	0.08	
30	円形	0.14 × 0.13	0.09 × 0.04	0.11	
31	不整形円形	0.33 × 0.18	0.17 × 0.06	0.06	



A-A' B-B'

0 黒色土 締り強、粘性有、1m以下ローム粒、塊土粒多く含む、1m以下シニ状ロームや多く含む

- 1 黒褐色土 締り強、粘性有、1m以下ローム粒多量、1m以下塊土粒や多く、1m以下炭化物少し含む、黒褐色土とシニ状褐色土を混状に含む
- 2 黒褐色土 締り強、粘性有、1層より明らかなローム主体で1m以下ローム粒を多く、1m以下炭化物、炭化物少し含む、シニ状に褐色土を多く含む
- 3 暗褐色土 締り強、粘性有、暗褐色土主体にシニ状黒褐色土や多く含む、1m以下ローム粒少し含む、塊土、炭化物ほとんど含まない
- 4 暗褐色土 締り強、粘性有、3層と暗い、2m以下シニ状黒褐色土、1m以下ローム粒少し含む、塊土、炭化物ほとんど含まない

D-D' P11

- 1 褐色土 締り強、粘性有、1~2mロームブロック少し含む
- 2 褐色土 締り有、粘性有、2~5mロームブロック多く含む
- 3 黒褐色土 締り有、粘性有、1~2mローム粒少し含む
- 4 黒褐色土 締り有、粘性有、3層より暗く、ローム粒わずかに含む
- 5 黒褐色土 締り有、粘性有、2m以下ローム多量、1~3m塊土粒をわずかに含む
- 6 暗褐色土 締り有、粘性有、2~3mローム粒多く、1mロームブロックわずかに含む
- 7 暗褐色土 2層に似る、1~3mロームブロック多く含む
- 8 黒褐色土 締り有、粘性有、3~5mローム粒多く、1~2mロームブロック少し含む
- 9 黒褐色土 締り有、粘性有、1~2mローム粒少し含む

E-E' P3

- 1 黒褐色土 締り有、粘性有、1~3mローム粒少し含む
- 2 暗褐色土 締り有、粘性有、5mローム粒わずかに含む
- 3 黒褐色土 締り有、粘性有、5mローム粒わずかに含む、2層より暗い
- 4 褐色土 締りやや有、粘性有、1~2mローム粒多く含む、2mロームブロックわずかに含む

F-F' P15

- 1 暗褐色土 締りやや有、粘性有、2mロームブロックわずかに含む、他に砂子を含まない
- 2 暗褐色土 締りやや有、粘性有、1層に似るが暗い

C-C' P8 P10

- 1 暗褐色土 締り強、粘性有、1mロームブロック含む、2~5mローム粒少し含む
- 2 暗褐色土 締り有、粘性有、1~2mローム粒わずかに含む
- 3 黒褐色土 2層に似るが暗い
- 4 暗褐色土 締り強、粘性有、2mローム粒を混状に含む
- 5 黒褐色土 締り有、粘性有、1~2mローム粒わずかに含む

H-H' P9

- 1 暗褐色土 締り有、粘性有、5mロームブロックわずかに含む
- 2 暗褐色土 締り有、粘性有、1mロームブロック含む、2~5mローム粒少し含む、1層より暗い

I-I' P12

- 1 暗褐色土 締り有、粘性有、1mローム粒多く、塊土粒わずかに含む
- 2 褐色土 締り有、粘性有、3mロームブロック主体
- 3 黒褐色土 締り有、粘性有、3m塊土少し含む

J-J' P13

- 1 黒褐色土 締り有、粘性有、1~2mローム粒少し含む
- 2 黒褐色土 締り有、粘性有、1mロームブロックわずかに含む

K-K' P14

- 1 暗褐色土 締り強、粘性有、2~5mロームブロック多く含む

L-L' P16

- 1 暗褐色土 締りやや有、粘性有、3~5mロームブロック少し含む
- 2 暗褐色土 締りやや有、粘性有、1~2mローム粒少し含む、1層より暗い

M-M' P17

- 1 暗褐色土 締り有、粘性有、1~2mローム粒含む、1m塊土粒わずかに含む
- 2 暗褐色土 締りやや有、粘性有、2mローム粒わずかに含む
- 3 褐色土 締り強、粘性有、1~3mロームブロック少し含む

N-N' P21

- 1 暗褐色土 締り有、粘性有、1~2mローム粒含む
- 2 暗褐色土 締りやや有、粘性有、2mローム粒わずかに含む

O-O' P18

- 1 暗褐色土 締りやや有、粘性有、2mローム粒少し含む、5mロームブロック含む
- 2 暗褐色土 締り強、粘性有、1~2mローム粒を多く、2mロームブロックわずかに含む、上層に黒色粒多く含む
- 3 暗褐色土 締りやや有、粘性有、2~5mローム粒少し含む

P-P' P19

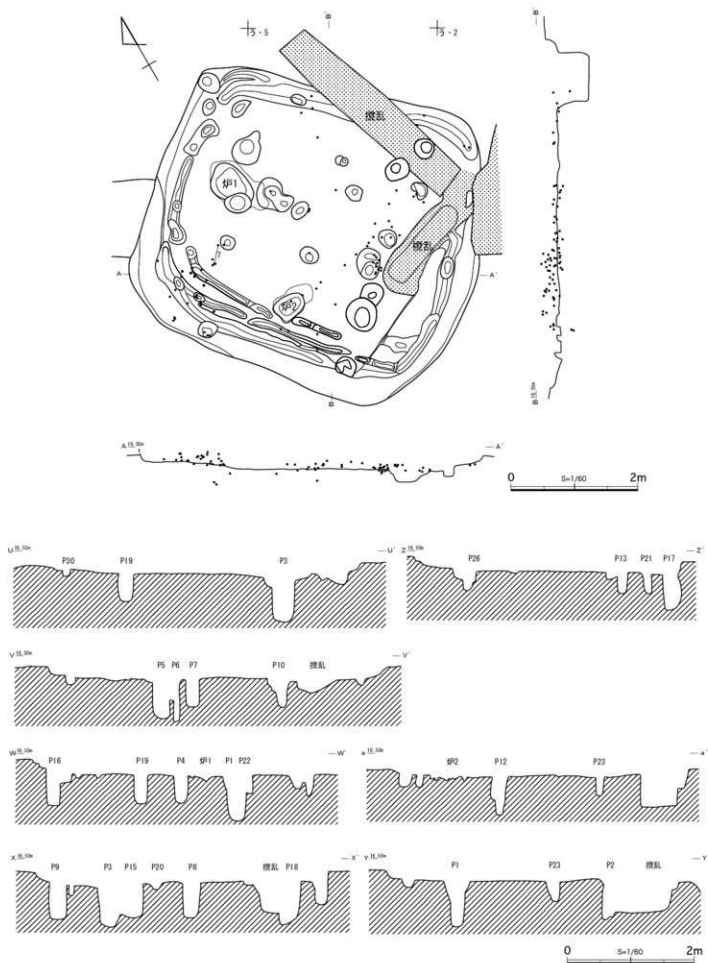
- 1 暗褐色土 締りやや有、粘性有、2~5mローム粒多く含む
- 2 暗褐色土 締り強、粘性有、1~2mローム粒含む
- 3 暗褐色土 締り有、粘性有、2mローム粒多く含む、1層より暗い

R-R' S-S' T-T'

- 1 黒褐色土 締り強、粘性有、1m以下ローム粒少し含む、塊土、炭化物ほとんど含まない
- 2 黒色土 締り強、粘性有、1m以下ローム粒多く、1m以下ロームブロック少し含む、塊土、炭化物ほとんど含まない
- 3 暗褐色土 締り有、粘性有、1mローム粒多く含む、3~5mローム粒上層に少し含む
- 4 褐色土 締り強、粘性有、1~3mロームブロック主体、3層中間層に混入
- 5 暗褐色土 締り有、粘性有、1~2mロームブロック多く含む

0 5=1/60 2m

第16図 6号住居跡 (1/60)



第17図 6号住居跡遺物出土状況図(1/60)

ている。24も胴部で、LrとR1で無節の羽状を施文している。いずれも黒浜式。

第2類第2種土器 25～27、31～34はいずれも単節縄文。25、26はLRを横位に施文している。27は0段3条と思われるRLで、S字状結節を伴う。31、32はRLを横位に施文している。33は胴部をR1で横位に施文。口縁部文様帯は無文地に竹管状工具で鋸歯文を描いている。34はLR・RLにて羽状縄文を横位に施文している。

第2類第4種土器 35～37は軸縄不明で2Rを附加している。38は軸縄不明で2Rと2Lによる羽状を構成していると思われる。39は軸縄不明だがRを附加している。44は軸縄不明に2Rを附加する。胴部片

から土器円盤に転用している。

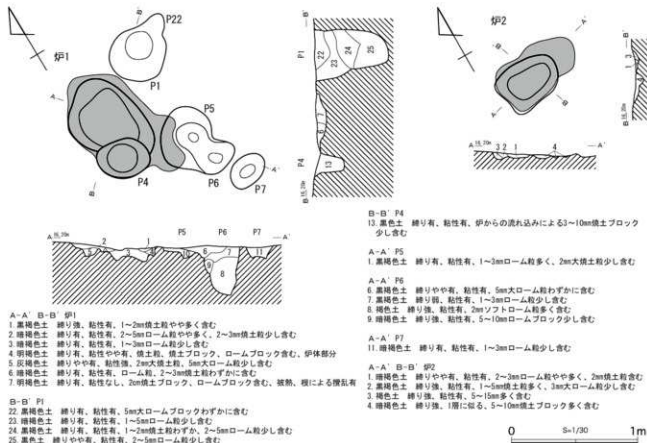
第2類第5種土器 11はLLを横位に施文後、口縁部に沿って幅の狭いコンパス文を施文している。

第4類第1種土器 40は4類1種a。貝殻骨圧痕を斜位に施している。

第4類第2種土器 12はハマグリ?の腹縁により短沈線を施文している。

第6類土器 42、43は底部。43は地文にLr。

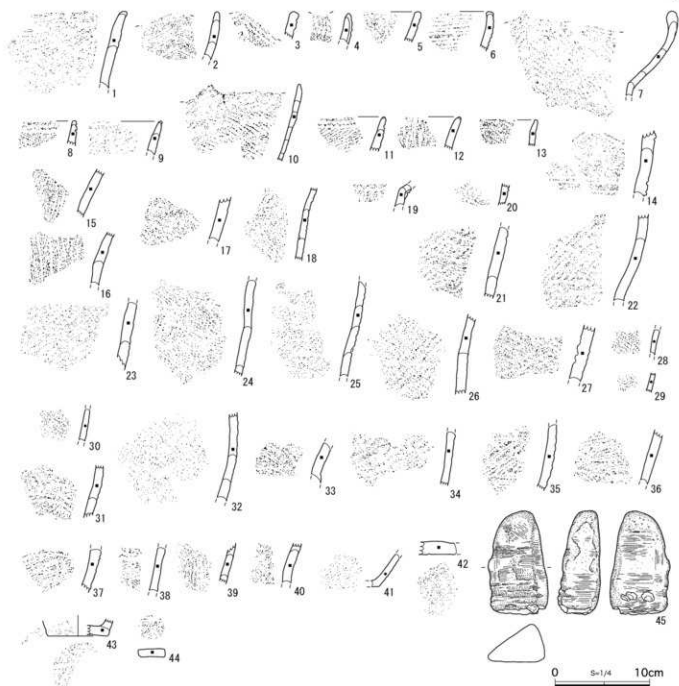
第8類土器 28～30は胴部片でRLを横位に施文している。金雲母を含む。41は底部でLrを横位に施文している。いずれも釈迦堂Z3式である。



第18図 6号住居跡炉(1/30)

第10表 6号住居跡出土土物観察表

図録番号	種類	分類	出土状況	口徑・胴径、長さ×幅×厚さ	底径・高さ	遺存部位	器形	地文	文様要素	編織	時期	注記
	1	1類1種	埋土			口縁部	深鉢	沈線	波状口縁。3本同時施文具により大振り施文。	多量	黒灰土	6住№21
	2	1類2種	埋土			口縁部	深鉢	沈線	小波流部起点に竹管状工具で刺線文を施す。	多量	黒灰土	6住C区1
	3	1類2種	埋土			口縁部	深鉢	沈線	波状口縁。刺線文を施すものと思われる。	多量	黒灰土	6住B区1, 2
	4	1類2種	埋土			口縁部	深鉢	沈線	波状口縁に沿って3本の刺線文を施す。以下同一工具で刺線文あるいは格子目文を施すものと思われる。	少量	黒灰土	6住C・D区1-1
	5	1類2種	埋土			口縁部	深鉢	沈線	竹管状工具で刺線文を施すと思われる。	少量	黒灰土	6住№33
	6	1類3種	埋土			口縁部	深鉢	沈線	小突起を有する。竹管状工具による横位平行沈線を密に重層させる。	少量	黒灰土	6住№36
	7	1類4種	埋土			口縁部	深鉢	紅	小突起を有する。口縁部に沿って、竹管状工具によるC字形の爪形文を2段施す。	普通	黒灰土	6住№20・62
	8	1類4種	埋土			口縁部	深鉢	附加条	軸線不明に条とLを附加したもので羽状に施文後、口縁部に沿ってコンパス文を施文。	普通	黒灰土	6住B区2
	9	2類1種	埋土			口縁部	深鉢	Lr	Lrを横位施文後、口縁部下に竹管状工具で平行沈線を施文。	多量	黒灰土	6住№62
	10	2類1種	埋土			口縁部	深鉢	紅	二葉一單位の小突起を伴う。R1を横位施文後、一部に爪形文を付す。	普通	黒灰土	6住№44
	11	2類5種	埋土			口縁部	深鉢	紅	Lrを横位施文後、口縁部に沿って幅の狭いコンパス文を施文。	少量	黒灰土	6住№72
	12	4類2種	埋土			口縁部	深鉢	貝殻模様	ハマダツラの模様により短沈線を施す。	少量	黒灰土	6住№3
	13	2類1種	埋土			口縁部	深鉢	R1	無筋。R1を横位施文。	少量	黒灰土	6住A区1
	14	1類2種	埋土			口縁部付差	深鉢	沈線	竹管状工具により刺線文を施す。	普通	黒灰土	6住B区1・B区2・腰点地
	15	1類7種	埋土			胴部	深鉢	沈線	縦位の短沈線を施文。	多量	黒灰土	6住B・C区1
	16	1類7種	埋土			胴部	深鉢	沈線	縦位の短沈線を施文。	多量	黒灰土	6住№16
	17	1類8種	埋土			胴部	深鉢	沈線	竹管状工具による波状文。	普通	黒灰土	6住№23
	18	1類8種	埋土			胴部	深鉢	沈線	竹管状工具で刺線文・波状文等を施す。	多量	黒灰土	6住C・D区1
	19	1類8種	埋土			胴部	深鉢	附加条	軸線不明にLを附加する。胴部にコンパス文を施文。	普通	黒灰土	6住B区2
	20	1類9種	埋土			胴部	深鉢	沈線	肋付文を施す。	少量	黒灰土	6住A区1
19.98	21	2類1種	埋土			胴部	深鉢	Lr	Lrを横位施文。	多量	黒灰土	6住№59
	22	2類1種	埋土			胴部	深鉢	Lr	Lrを横位施文。色が太い。	多量	黒灰土	6住№1
	23	2類1種	埋土			胴部	深鉢	Lr	Lrを横位施文。色が太い。	多量	黒灰土	6住№8
	24	2類1種	埋土			胴部	深鉢	Lr・R1	無筋羽状。	普通	黒灰土	6住№49
	25	2類2種	埋土			胴部	深鉢	LR	LR(0段3条小)を横位施文。	普通	黒灰土	6住№57
	26	2類2種	埋土			胴部	深鉢	LR	LRを横位施文。	普通	黒灰土	6住№48
	27	2類2種	埋土			胴部	深鉢	紅	紅。(0段3条と思われる)を横位施文。S字状結節を伴う。	多量	黒灰土	6住№2
	28	8類	埋土			胴部	深鉢	紅	紅。横位施文。金雲母を含む。	無	軟砂層	6住№26
	29	8類	埋土			胴部	深鉢	紅	紅。横位施文。金雲母を含む。	無	軟砂層	6住B区2
	30	8類	埋土			胴部	深鉢	紅	紅。横位施文。金雲母を含む。	無	軟砂層	6住B区2
	31	2類2種	埋土			胴部	深鉢	紅	紅。横位施文。	多量	黒灰土	6住№14
	32	2類2種	埋土			胴部	深鉢	紅	紅。横位施文。	多量	黒灰土	6住№20
	33	2類2種	埋土			胴部	深鉢	紅	口縁部文様帯は無文地に竹管状工具で刺線文を施す。胴部は紅。を横位施文。	多量	黒灰土	6住№68
	34	2類2種	埋土			胴部	深鉢	LR・R1	単筋羽状横位横位施文。	普通	黒灰土	6住腰点地
	35	2類4種	埋土			胴部	深鉢	附加条	軸線不明に2Rを附加する。	普通	黒灰土	6住B区1
	36	2類4種	埋土			胴部	深鉢	附加条	軸線不明に2Rを附加する。	普通	黒灰土	6住№42
	37	2類4種	埋土			胴部	深鉢	附加条	軸線不明に2Rを附加する。	少量	黒灰土	6住№73
	38	2類4種	埋土			胴部	深鉢	附加条	軸線不明に2RとLによる羽状横位か?	少量	黒灰土	6住腰点地
	39	2類4種	埋土			胴部	深鉢	附加条	軸線不明にRを附加する。	多量	黒灰土	6住C・D区1
	40	4類1種a	埋土			胴部	深鉢	貝殻青瓦根	貝殻青瓦根を斜位に施す。	少量	黒灰土	6住腰点地
	41	8類	埋土			底部	深鉢	Lr	Lrを横位施文。金雲母を含む。	無	軟砂層	6住№35
	42	8類	埋土			底部	深鉢	-	-	普通	黒灰土	6住№44
	43	8類	埋土		6.2×(1.8)	底部	深鉢	Lr	-	普通	黒灰土	6住B区2
	44	2類4種	埋土			胴部(転用)	土器内筒	附加条	軸線不明に2Rを附加する。	少量	黒灰土	6住C・D区1
	45	石器	埋土	直径8×幅3×高さ4.5		磨石	-	-	スタンプ型石器状を呈し、破断面を使用している。重量309.40g。	-	-	6住腰点地



第19図 6号住居跡出土遺物 (1/4)

(4) 7号住居跡

① 7号住居跡

【位置】調査区の北側に位置する。主軸はN-54°-Wである。

【形状・規模】住居跡の中央から東寄りにかけて攪乱を受けてはいるが、全体の形状・規模は明瞭である。平面形態は隅丸長方形である。規模は長軸(東西)6.3m×短軸(南北)4.95mを測る。深さは、遺構確認面から床面まで20cmを測る。

【炉】炉は中央西寄りに位置する。平面形態は不整な楕円形を呈する。床面は赤褐色に焼けている。規模は、南北90cm、東西55cm、深さは床面から5cmを測る。

【周溝】周溝は残存部分で全周する。北壁と南壁で2条、東壁では3条、西壁は1条である。北壁、西壁での最外周溝で上幅35～65cm、下幅10～35cm、深さ20～40cmを測る。南壁、東壁での最内周溝で上幅20～30cm、下幅8～18cm、深さ5～12cmを測る。

【ピット】住居跡に伴うとみられるものはP1～P38である。P13～P14、P16～P27、P29～P36、P38～P41の小ピットが南壁周溝に沿って検出されている。これらのうち、主柱穴の役割を果たしたのは、P1、P6、P7、P12と思われる。また、P2・P5・P11・P12も主柱穴の可能性がある。周溝やピットの検出状況から3回程度の建替え、拡張が考えられる。

【遺物出土状況】床上から覆土層にかけて出土している。

② 7号住居跡出土土器

【出土土器】遺物は床面上および貝層中から出土している。黒浜式が主体である。

第1類第1種土器 3は波状口縁を有する。波頂部から縦長の貼付文を付す。竹管状工具で菱形文を描いている。黒浜式である。

第1類第2種土器 4は口縁部にキザミを有する。竹管状工具で曲線文を描く。5は押し文で菱形文を施文。6は竹管状工具で押しキザミ菱形文を施文している。15はLRを横位施文後、竹管状工具で鋸歯文を施文。16は櫛歯状工具で平行線文と波状文を描く。

第1類第4種土器 7、8はR1施文後、口縁部に沿って2条の押し文を施文。9はLrとR1で羽状を構成。

第1類第5種土器 17、18は1類5種b。17はLR施文後、棒状工具で格子目文を施文。18はRL横位施文後、格子目文を施す。

第1類第8種土器 19はR1横位施文後、竹管状工

具で平行線文を横走施文。

第2類第1種土器 1は口縁部～底部まで残存している。R1で横位に施文している。10、11は波状口縁を有し、Lrで横位に施文している。11はS字状結節を伴う。12はLrとR1で羽状を構成している。20はLrを横位に施文。21はR1を横位に施文。22、23はLrとR1で無節の羽状を構成している。39は胴部～底部にかけて残存している。R1を横位に施文している。

第2類第2種土器 2はRLを横位に施文。24～26はLR、27～32はRLを横位に施文している。25については縦横に施文している。

第2類第4種土器 33～36は2類4種c。33はLR+1・r縦位に施文。34はLR+R・Rを横位に施文。35はRLとRL+1・rを横位に施文。36はLR+1・rを縦位に施文している。

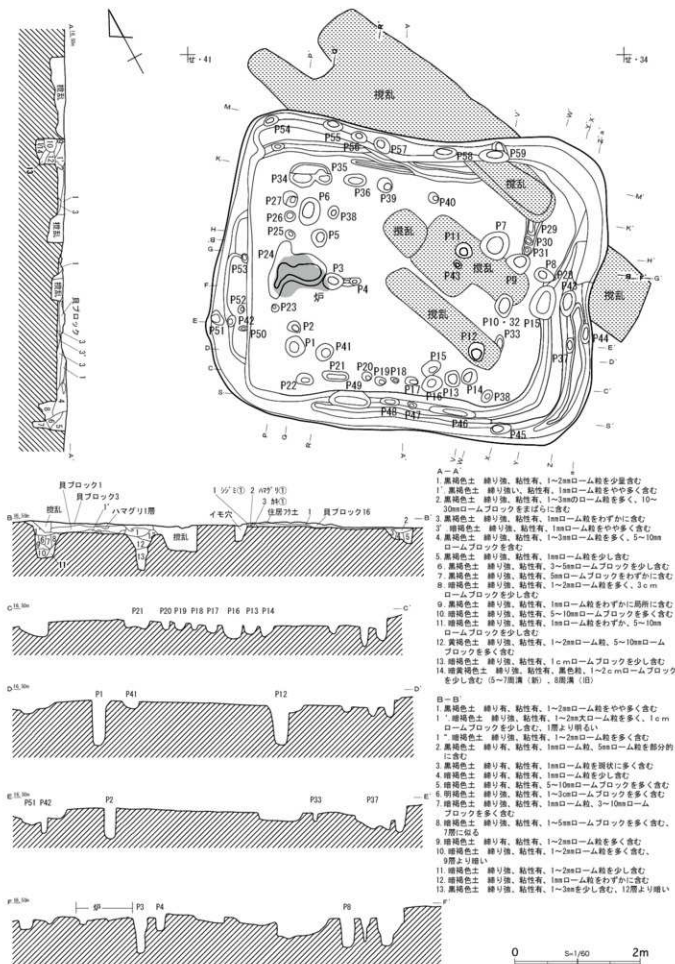
第4類第1種土器 14は4類1種a。貝殻条痕。

第4類第2種土器 37はR1横位施文後、貝殻腹縁文を施している。

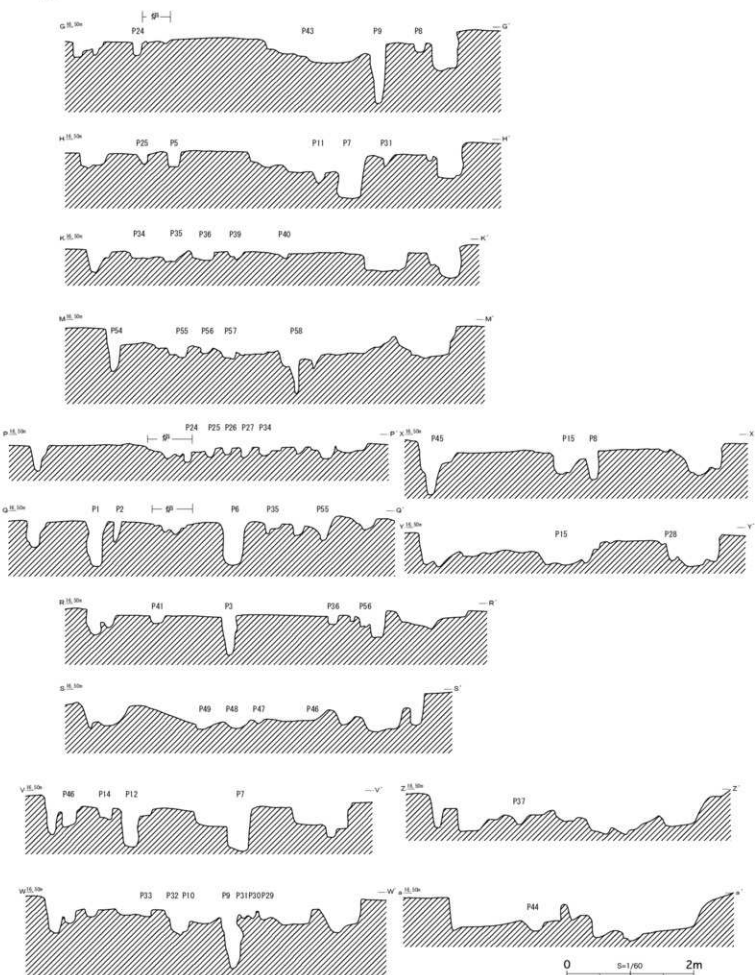
第5類土器 38は胴部。焼成後に穿孔。

第6類土器 40、41は底部。ともにR1施文。

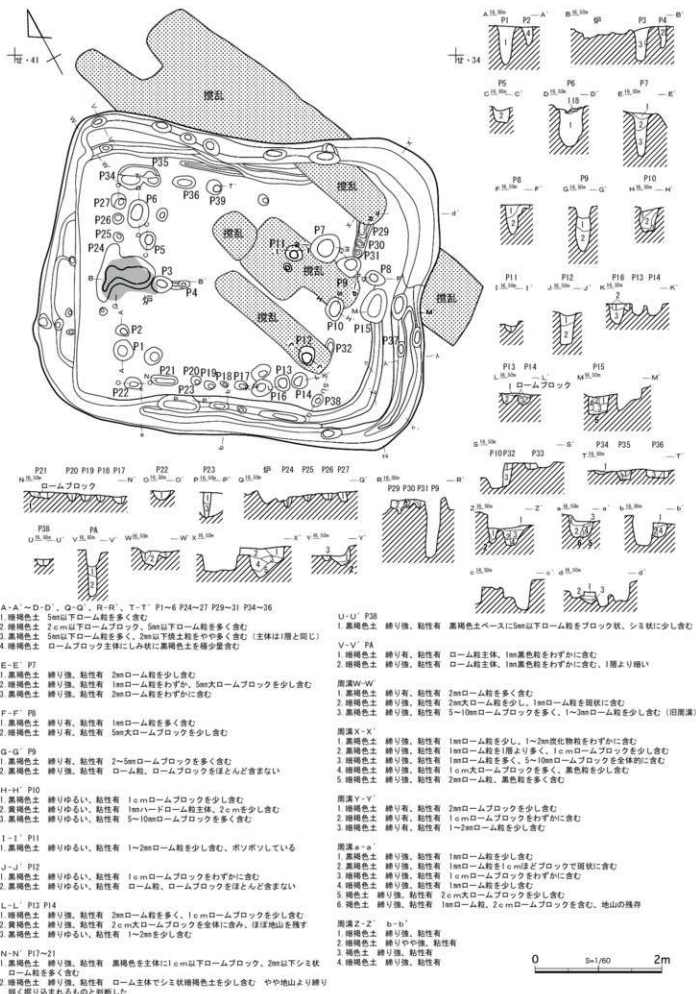
第8類土器 42は胴部片を土器円盤に転用。地文はR1で周辺部を打ち欠いている。釈迦堂Z3式。



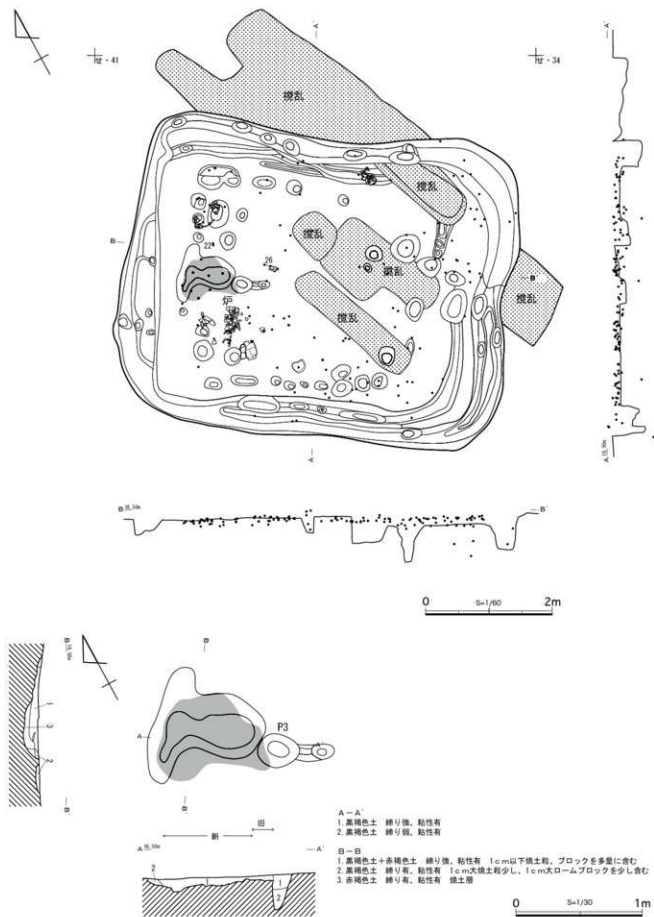
第20図 7号住居跡(1)(1/60)



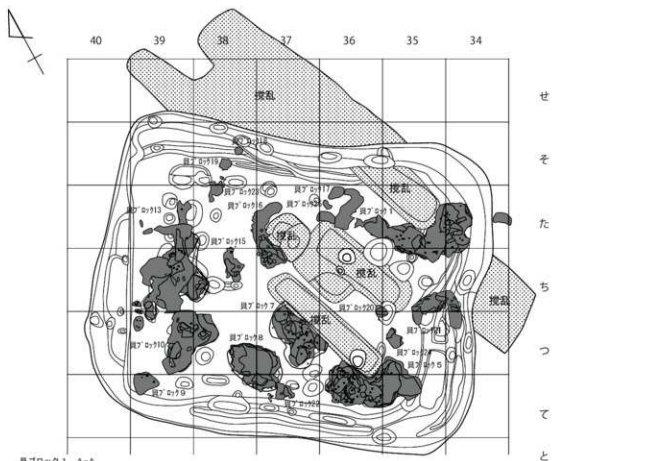
第21圖 7号住居跡(2)(1/60)



第22図 7号住居跡(3)(1/60)



第23図 7号住居跡遺物出土状況図・炉 (1/60・1/30)



貝ブロック1 A-A'

1. 黒褐色土 締り強、粘性有、ローム粒(φ1mm)を多く、ロームブロック(φ5~10mm)を少量含む
2. 暗褐色土 締り強、粘性有、ローム粒(φ1~2mm)を部分的に多く、ロームブロック(φ3mm) (1cm)を周縁に含む
3. 暗褐色土 締り強、粘性有、ローム粒(φ2~3mm)を少し、ロームブロック(1cm前後)をわずかに含む
4. 明褐色土 締り有、粘性有、ローム粒(φ1~2mm)を多く含む、ピットか
5. 明褐色土 締り強、粘性強、ロームブロック(φ5mm)を多く含む、崖溝の埋土か
6. 暗褐色土 締り強、粘性強、ローム粒(φ1~2mm)、ロームブロック(φ5mm)を少し含む

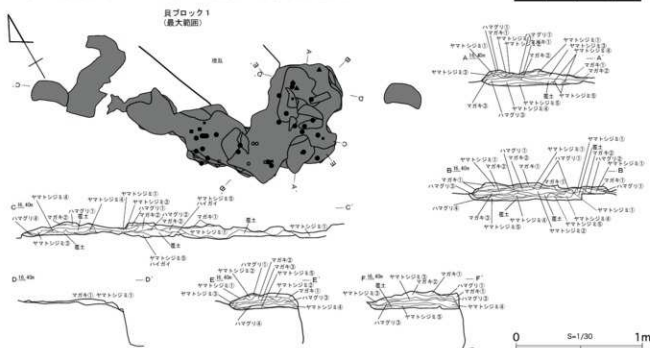
貝ブロック19-23 A-A'

1. 白色貝層 締り強、貝ブロック19・23層とマガキ層貝層で、間に少し土を含む
2. 暗褐色土 住居層土、5cm以下のローム粒を多く含む、2cm以下の焼土を少し含む

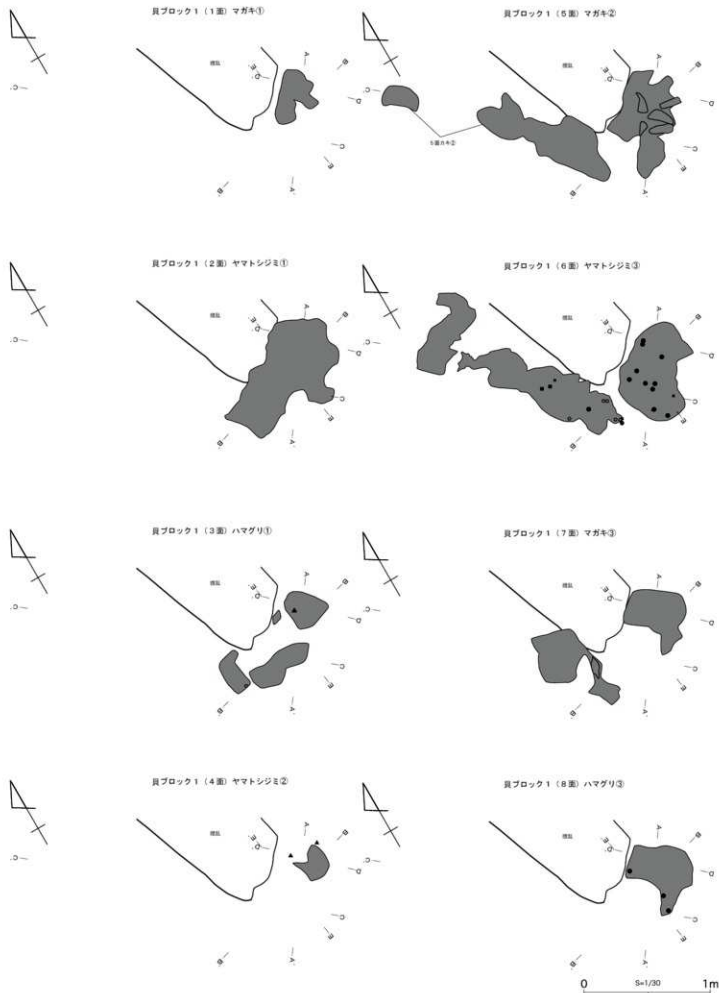
貝ブロック20 A-A'

1. 黒褐色土 締り有、粘性有、湿土貝層(貝>土)、ヤマトシジミ層①、攪乱の可能性有
2. 暗褐色土 締り有、粘性有、ロームブロック(φ5mm)を少し含む、貝層片含む、攪乱の可能性有
3. 黒色土 締り有、粘性有、ロームブロック(φ2~5mm)を含む、マガキ層①、攪乱の可能性有

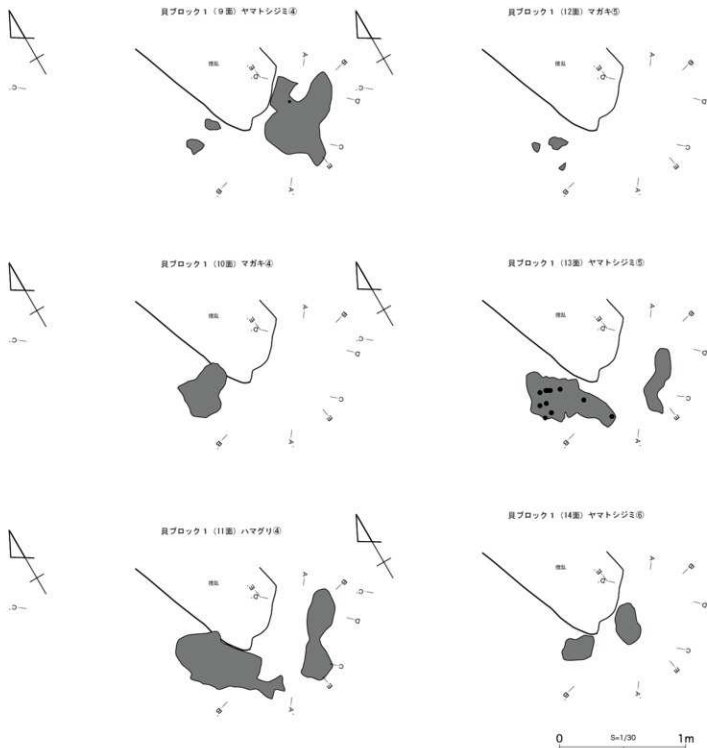
0 5=1/60 2m



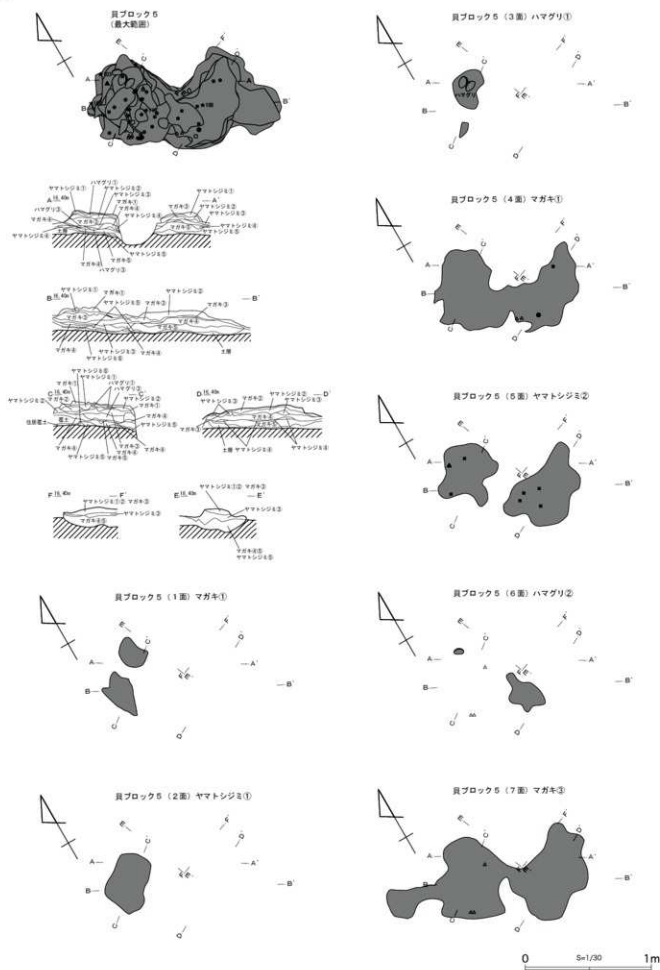
第24図 7号住居跡貝ブロック① (1/60・1/30)



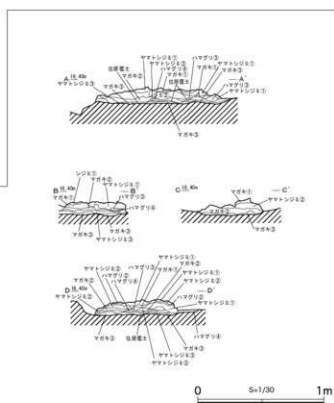
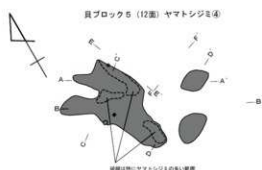
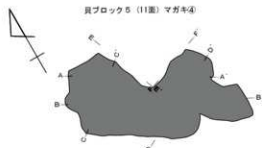
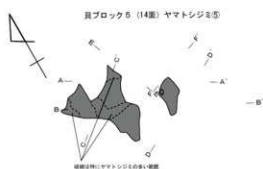
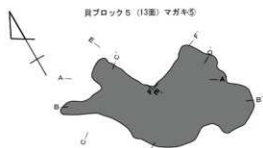
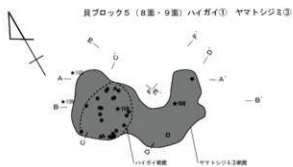
第25図 7号住居跡貝ブロック② (1/30)



第 26 図 7号住居跡貝ブロック③ (1/30)



第27図 7号住居跡貝ブロック④ (1/30)

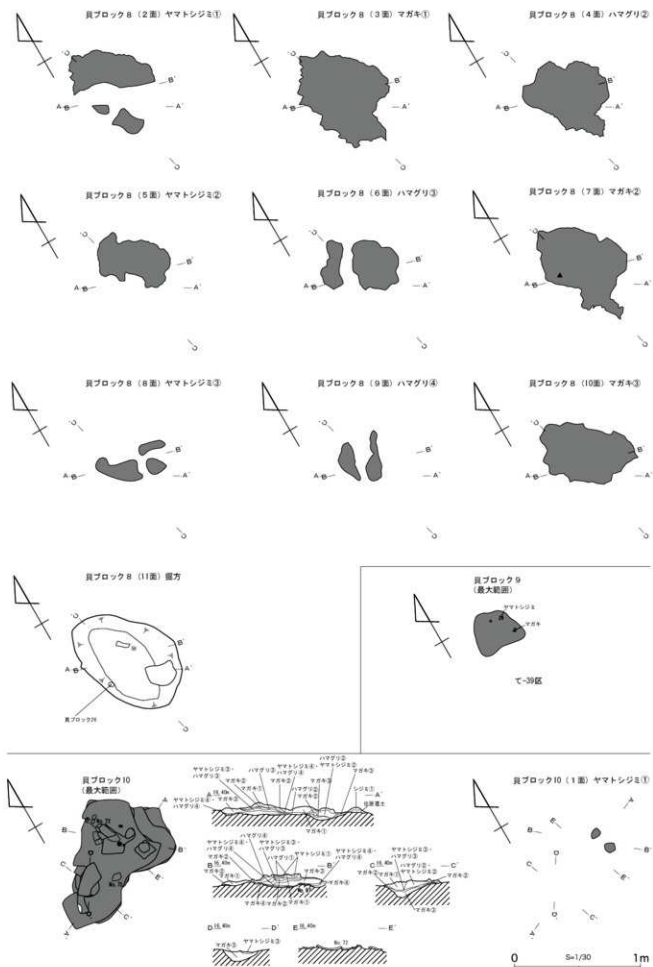


0 S=1/30 1m

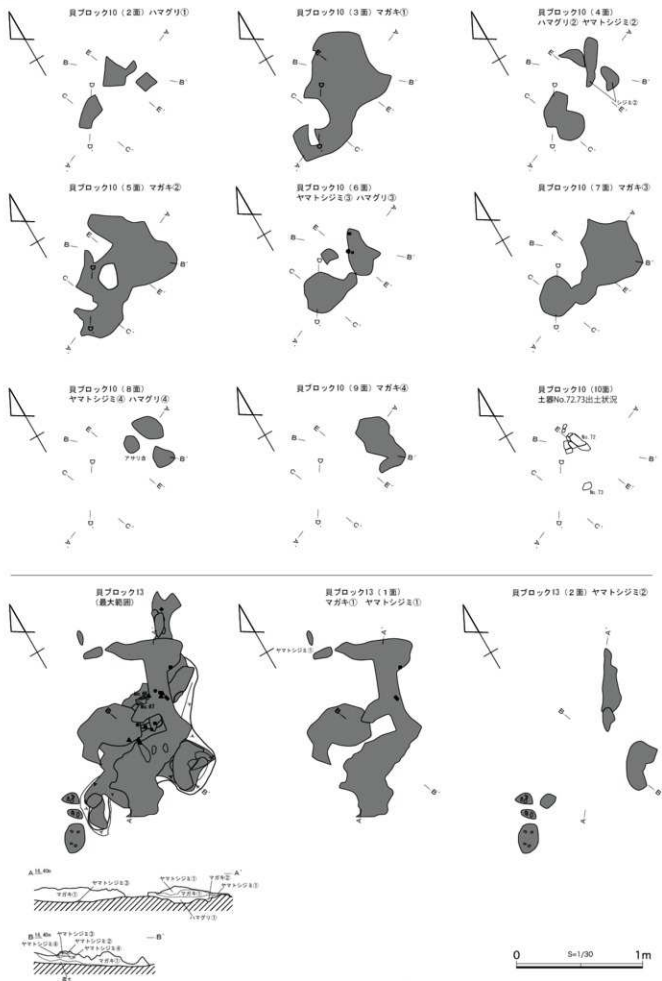
第28図 7号住居跡貝ブロック⑤ (1/30)



第29図 7号住居跡貝ブロック⑥ (1/30)

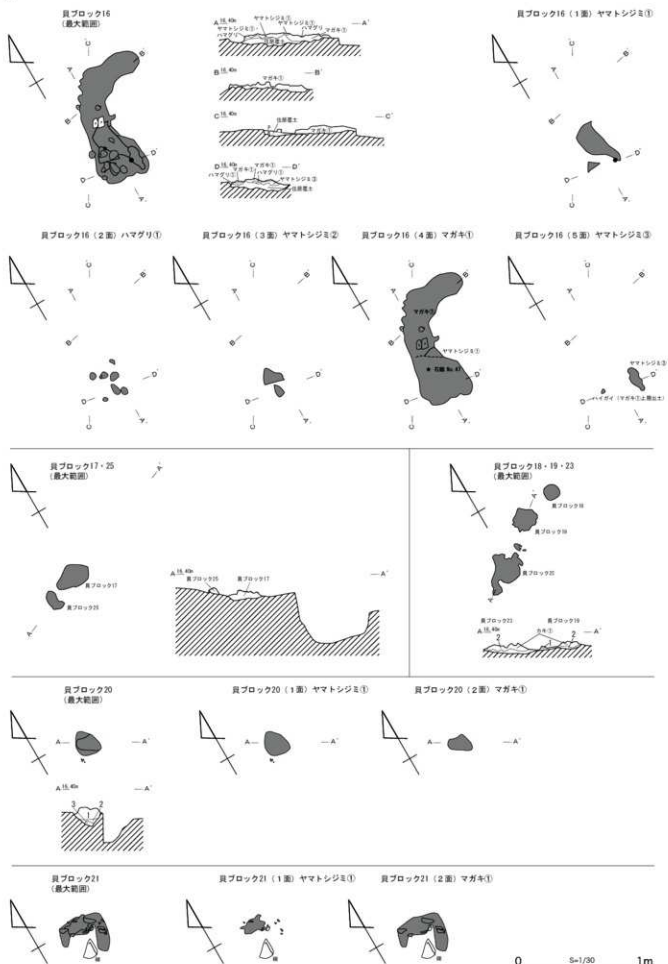


第 30 図 7号住居跡貝ブロック⑦ (1/30)

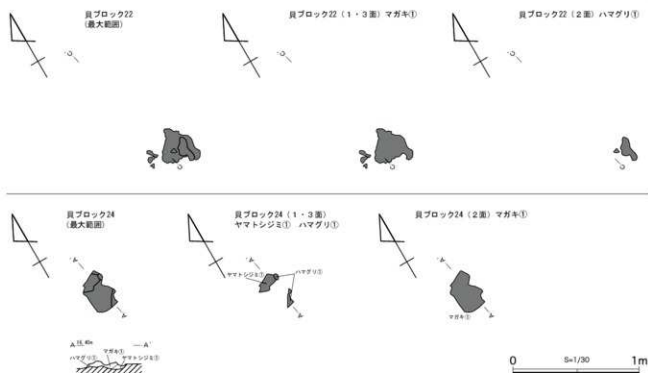




第32図 7号住居跡貝ブロック⑨ (1/30)



第33図 7号住居跡貝ブロック⑩ (1/30)



第34図 7号住居跡貝ブロック①(1/30)

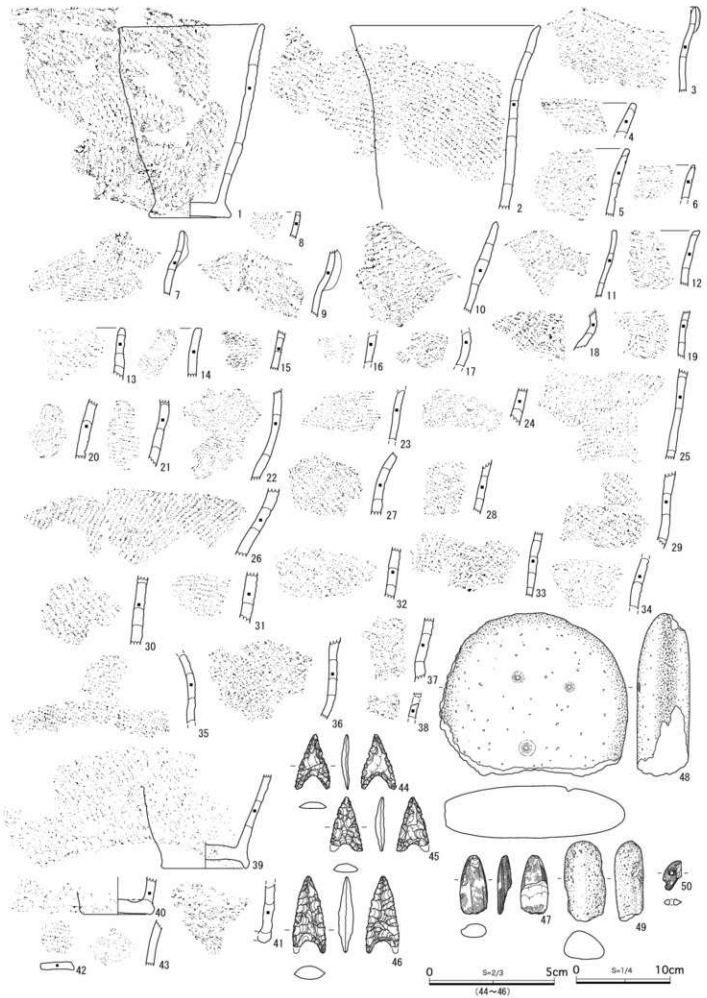
第11表 7号住居跡ビット一覧表

No.	平面形態	縦断面径	直径	深さ	備考
1	円形	0.30 × 0.28	0.14 × 0.13	0.60	主柱穴
2	不整形円形	0.20 × 0.11	0.12 × 0.08	0.30	主柱穴?
3	不整形円形	0.34 × 0.23	0.17 × 0.15	0.55	
4	楕円形	0.16 × 0.07	0.04 × 0.04	0.34	
5	円形	0.26 × 0.23	0.16 × 0.13	0.25	主柱穴?
6	楕円形	0.44 × 0.31	0.23 × 0.17	0.67	主柱穴
7	円形	0.44 × 0.43	0.29 × 0.27	0.70	主柱穴
8	楕円形	0.32 × 0.26	0.14 × 0.10	0.48	
9	不整形円形	0.38 × 0.34	0.20 × 0.18	0.73	
10	楕円形	0.35 × 0.25	0.30 × 0.28	0.38	短上同一
11	円形	0.25 × 0.22	0.13 × 0.12	0.13	主柱穴?
12	円形	0.25 × 0.23	0.16 × 0.15	0.53	主柱穴
13	円形	0.26 × 0.19	0.14 × 0.10	0.19	
14	円形	0.26 × 0.23	0.16 × 0.10	0.19	
15	不整形円形	0.31 × 0.19	0.14 × 0.07	0.20	
16	不整形円形	0.32 × 0.26	0.13 × 0.05	0.31	
17	楕円形	0.19 × 0.07	0.07 × 0.05	0.13	
18	楕円形	0.10 × 0.06	0.05 × 0.03	0.12	
19	楕円形	0.14 × 0.13	0.06 × 0.04	0.12	
20	円形	0.12 × 0.10	0.06 × 0.04	0.14	
21	長円形	0.40 × 0.14	0.26 × 0.05	0.11	
22	楕円形	0.28 × 0.14	0.11 × 0.07	0.14	
23	円形	0.08 × 0.07	0.05 × 0.04	0.39	
24	不整形楕円形	0.92 × (0.29)	0.40 × (0.12)	0.18	
25	円形	0.14 × 0.12	0.04 × 0.04	0.11	
26	円形	0.17 × 0.16	0.07 × 0.06	0.12	
27	円形	0.25 × 0.19	0.10 × 0.07	0.14	
28	円形?	(0.93) × 0.02	(0.02) × 0.02	0.93	
29	楕円形	(0.20) × 0.08	0.11 × 0.06	0.20	
30	円形	0.08 × 0.07	0.05 × 0.05	0.13	

No.	平面形態	縦断面径	直径	深さ	備考
31	円形	0.14 × 0.12	0.07 × 0.06	0.13	
32	楕円形	0.35 × 0.25	0.30 × 0.28	0.38	10上同一
33	楕円形?	(0.19) × 0.13	(0.13) × 0.07	0.10	
34	円形	(0.36) × 0.35	0.26 × 0.12	0.05	
35	円形	0.24 × 0.20	0.13 × 0.08	0.16	
36	楕円形	0.35 × 0.20	0.23 × 0.10	0.13	
37	楕円形	0.25 × 0.14	0.13 × 0.07	0.08	
38	円形	0.19 × 0.17	0.08 × 0.04	0.10	
39	円形	0.23 × 0.23	0.08 × 0.07	0.09	
40	円形	0.13 × 0.12	0.05 × 0.05	0.04	
41	円形	0.27 × 0.24	0.13 × 0.11	0.08	
42	円形	0.28 × 0.23	0.13 × 0.12	0.06	
43	楕円形	0.41 × 0.23	0.27 × 0.13	0.10	
44	楕円形	0.32 × 0.13	0.17 × 0.07	0.06	
45	楕円形	0.32 × 0.14	0.16 × 0.07	0.04	
46	長円形	0.76 × 0.16	0.40 × 0.05	0.06	
47	楕円形	0.16 × 0.08	0.04 × 0.06	0.04	
48	楕円形	0.30 × 0.08	0.14 × 0.05	0.07	
49	長円形	0.67 × 0.28	0.52 × 0.11	0.12	
50	楕円形	0.10 × 0.04	0.06 × 0.02	0.04	
51	不整形円形	0.23 × 0.16	0.13 × 0.10	0.05	
52	楕円形	0.13 × 0.10	0.08 × 0.06	0.04	
53	楕円形	0.13 × 0.11	0.05 × 0.04	0.04	
54	楕円形	0.24 × 0.14	0.09 × 0.07	0.07	
55	楕円形	0.31 × 0.16	0.14 × 0.07	0.07	
56	楕円形	0.23 × 0.15	0.11 × 0.06	0.06	
57	楕円形	0.26 × 0.17	0.11 × 0.11	0.05	
58	長円形	0.35 × 0.16	0.20 × 0.10	0.06	
59	長円形	0.47 × 0.21	0.27 × 0.16	0.06	

第12表 7号住居跡出土土物観察表

図録番号	掲載番号	分類	出土状況	口径・胴径、長さ×幅×厚さ	底径・高さ	遺存部位	器形	地文	文様要素	編法	時期	注記
3558	1	2型1種	埋土	(15.2) × (14.8)	8.3 × 20.7	口縁部～底部	深鉢	肌	肌 横位施文。	多量	黒布式	7住ⅡB・23・72
	2	2型2種	埋土	(20.0) × (15.4)	→ × 19.5	口縁部	深鉢	肌	肌 横位施文。	普通	黒布式	7住Ⅱc 102
	3	1型1種	埋土			口縁部	深鉢	肌	波状口縁。波溝部から縦長の帯付文を付す。竹管状工具により大層の垂形文を掘くと思われる。	普通	黒布式	7住Ⅱc 106
	4	1型2種	埋土			口縁部	深鉢	沈線	口唇部キズ。竹管状工具で垂線文を掘く。	普通	黒布式	7住Ⅱc 106-2
	5	1型2種	埋土			口縁部	深鉢	沈線	押引文により垂形文を施文。	少量	黒布式	7住Ⅱc 30
	6	1型2種	埋土			口縁部	深鉢	沈線	竹管状工具を押し引き垂形文を施文。	少量	黒布式	7住Ⅱc 19
	7	1型4種	埋土			口縁部	深鉢	肌	波状口縁に沿って2条の押引文を施文。波溝部から縦長の帯付文を付す。	普通	黒布式	7住Ⅱc 51・53
	8	1型4種	埋土			口縁部	深鉢	肌	肌 施文後、口縁部に沿って、2条の押引文を施文。	普通	黒布式	7住Ⅱc 54
	9	1型4種	埋土			口縁部	深鉢	Le・R1	波状口縁に沿って2条の押引文を施文。	普通	黒布式	7住Ⅱc 66
	10	2型1種	埋土			口縁部	深鉢	Le	大層の波状口縁。Le横位施文。	多量	黒布式	7住Ⅱc 76
	11	2型1種	埋土			口縁部	深鉢	Le	波状口縁。8字状縁部紋を伴うLeを横位施文。	普通	黒布式	7住Ⅱc 97
	12	2型1種	埋土			口縁部	深鉢	Le・R1	無彫羽状構成。	普通	黒布式	7住Ⅱc K 3
	13	2型2種	埋土			口縁部	深鉢	肌	口縁部に沿って肌を横位施文。	多量	黒布式	7住Ⅱc 13
	14	4型1種a	埋土			口縁部	深鉢	貝殻	貝殻施文。	微量	黒布式	7住Ⅱc 125
	15	1型2種	埋土			口縁部付蓋	深鉢	LR	LRを横位施文後、竹管状工具で垂線文を掘く。	普通	黒布式	7住Ⅱc R-1
	16	1型2種	埋土			胴部	深鉢	沈線	細歯状工具で平行線文と波状文を施文。	少量	黒布式	7住Ⅱc K 2
	17	1型5種b	埋土			胴部	深鉢	Le	Le 施文後、棒状工具で格子目文を掘く。	多量	黒布式	7住Ⅱc 105
	18	1型5種b	埋土			胴部	深鉢	肌	肌 横位施文後、格子目文を施文。	普通	黒布式	7住Ⅱc 94・B K 5
	19	1型8種	埋土			胴部	深鉢	R1	R1 横位施文後、竹管状工具で平行沈線を横走施文。	普通	黒布式	7住Ⅱc 68
	20	2型1種	埋土			胴部	深鉢	Le	Le 横位施文。	多量	黒布式	7住Ⅱc 101
	21	2型1種	埋土			胴部	深鉢	R1	R1 横位施文。	多量	黒布式	7住Ⅱc 36
	22	2型1種	埋土			胴部	深鉢	Le・R1	無彫羽状構成。	少量	黒布式	7住Ⅱc 66・67
	23	2型1種	埋土			胴部	深鉢	Le・R1	無彫羽状構成。	多量	黒布式	7住Ⅱc 60
	24	2型2種	埋土			胴部	深鉢	LR	LR 横位施文。	普通	黒布式	7住Ⅱc 25
	25	2型2種	埋土			胴部	深鉢	LR	LRを縦横位施文。	少量	黒布式	7住Ⅱc 24
	26	2型2種	埋土			胴部	深鉢	LR	LR 横位施文。	普通	黒布式	7住Ⅱc 27・40
	27	2型2種	埋土			胴部	深鉢	肌	肌 横位施文。	普通	黒布式	7住Ⅱc 17
	28	2型2種	埋土			胴部	深鉢	肌	肌 横位施文。	多量	黒布式	7住Ⅱc K 5・B K 9
	29	2型2種	埋土			胴部	深鉢	肌	肌 横位施文。	多量	黒布式	7住Ⅱc 15
	30	2型2種	埋土			胴部	深鉢	肌	肌 横位施文。	普通	黒布式	7住Ⅱc 102
	31	2型2種	埋土			胴部	深鉢	肌	肌 横位施文。	普通	黒布式	7住Ⅱc 106-2
	32	2型2種	埋土			胴部	深鉢	肌	肌 横位施文。内面黒色。	普通	黒布式	7住Ⅱc 36
	33	2型4種c	埋土			胴部	深鉢	附加条	附加条3種。LR+R・f 縦位施文。	普通	黒布式	7住Ⅱc No. 82 埋土Ⅱ
	34	2型4種c	埋土			胴部	深鉢	附加条	附加条3種。LR+R・R 縦位施文。	普通	黒布式	7住Ⅱc 109
	35	2型4種c	埋土			胴部	深鉢	附加条	肌上肌+・f を横位施文。	普通	黒布式	7住Ⅱc 32
	36	2型4種c	埋土			胴部	深鉢	附加条	附加条3種。LR+・f 縦位施文。	普通	黒布式	7住Ⅱc 32
	37	4型2種	埋土			胴部	深鉢	R1	R1 横位施文後、貝殻施文を施す。	多量	黒布式	7住Ⅱc Ⅱ1 A・C・D
	38	5型	埋土			胴部	深鉢	-	地成後、穿孔。	少量	黒布式	7住Ⅱc K 7
	39	2型1種	埋土			胴部～底部	深鉢	R1	R1 を横位施文。上げ底。	多量	黒布式	7住Ⅱc 118
	40	6型	埋土			底部	深鉢	R1	R1 を横位施文。	多量	黒布式	7住Ⅱc 4
	41	6型	埋土			底部	深鉢	R1	R1 横位施文。	普通	黒布式	7住Ⅱc 区履 Ⅱ13
	42	8型	埋土			胴部 (転用)	土器 円筒	肌	周切部打ち欠きのみ。金雲母含む。	無	刺 透 器 Ⅱ3	7住Ⅱc K 4
	43	煎煮器	埋土			胴部	円筒	沈線	細歯状工具(6本一単位)で細かい波状文を3段以上施文。	無	煎煮器	7住Ⅱc 82
	44	石器	埋土	2.2 × 1.4 × 0.3			石錘		凹皿式石錘。チャート製。重量0.64g。	-	-	7住Ⅱc 47
	45	石器	埋土	2.2 × 1.3 × 0.3			石錘		凹皿式石錘。黒部欠損。チャート製。重量0.91g。	-	-	7住Ⅱc 61
	46	石器	埋土	3.0 × 1.3 × 0.6			石錘		凹皿式石錘。チャート製。重量1.96g。	-	-	7住Ⅱc 49
	47	石器	埋土	8.2 × 2.9 × 1.4			磨製石片		先端部欠損。重量32.04g。	-	-	7住Ⅱc K 3
	48	石器	埋土	(17.9 × 値0) × 1.5			刮石		片面に複数の凹部が見られる。焼熱により割落。花崗岩。重量301.46g。	-	-	7住Ⅱc 86
	49	石器	埋土	8.2 × 4.3 × 2.8			石製品		棒石製の磨石か。重量21.97g。	-	-	7住Ⅱc 122
	50	石器	埋土	3.1 × (1.7) × 0.6			刮状刃部		半分以上欠損する。2箇所穿孔される。滑石製。重量4.66g。	-	-	7住Ⅱc 103



第35図 7号住居跡出土遺物 (1/4・2/3)

(5) 8号住居跡

【位置】調査区の東側に位置する。主軸はN-39°-Wである。

【形状・規模】住居跡北壁、東壁及び南壁隅で擾乱を受けているが、全体の形状・規模は確認できる。平面形態は隅丸長方形である。規模は、長軸（南北）4.2m×短軸（東西）3.55mを測る。深さは遺構確認面から床面まで25cmを測る。

【炉】炉は2基確認された。1基は中央西寄りに位置する（炉2）。平面形態は不整な楕円形を呈する。床面は赤褐色に焼けている。規模は、南北60cm×東西40cm、深さは8cmを測る。もう1基は中央北寄りに位置する（炉1）。平面形態は不整な円形を呈する。床面は赤褐色に焼けている。規模は南北45cm、東西38cm、深さは6cmを測る。

【周溝】東壁は擾乱を受けていて判別しないが、一周に巡っている。周溝内は多くの小ピットを有する（P6～P17）。上幅23～40cm、下幅8～25cm、深さ30～32cmを測る。

【ピット】住居跡に伴うものはP1～P18である。このうち、P1、P2、P4、P5が主柱穴と思われる。北西隅の主柱穴は確認出来なかった。周溝や主柱穴からは住居跡の建替え、拡張などは窺えないが、炉が2基向きを変えて検出されている。

【遺物出土状況】床から覆土層にかけて出土している。

② 8号住居跡出土土器

【出土土器】遺物は、炉跡周辺の床面上および覆土中から出土している。黒浜式が主体である。

第1類第1種土器 2は波状口縁。竹管状工具で菱形文を描く。11は胴部。竹管状工具で鋸歯文を描いている。

第1類第2種土器 12はLr施文後、竹管状工具で鋸歯文を描いている。

第1類第3種土器 1は口縁部から胴部で残存。口縁部に沿って竹管状工具で沈線を重層に施文後、斜位に沈線を施す。胴部はLrで横位に施文している。

第1類第6種土器 13は竹管状工具でコンパス文と平行沈線を描いている。

第1類第8種土器 14はLr施文後、竹管状工具で鋸歯文を描く。

第2類第1種土器 3、4は口縁部。3はR1を口縁に沿って施文。4はLr・R1で羽状縄文を施文。15～19はLrを横位に施文、20～25はR1を横位に施文、26、27はLr・R1で施文している。

第2類第2種土器 5、6は口縁部。LRを横位に施文している。28、29はLRを横位に施文している。30、32はRLを横位に施文、31はRLを縦位に施文している。33はLR・R1による単節と無節による羽状を施している。

第2類第4種土器 34、35、39は2類4種c。34はRL+1・rの附加条縄文。35は軸縄不明に2Rを附加している。

第2類第5種土器 36はLLを横位に施文。37は直前段3条のRRを縦横に施文し羽状を構成している。

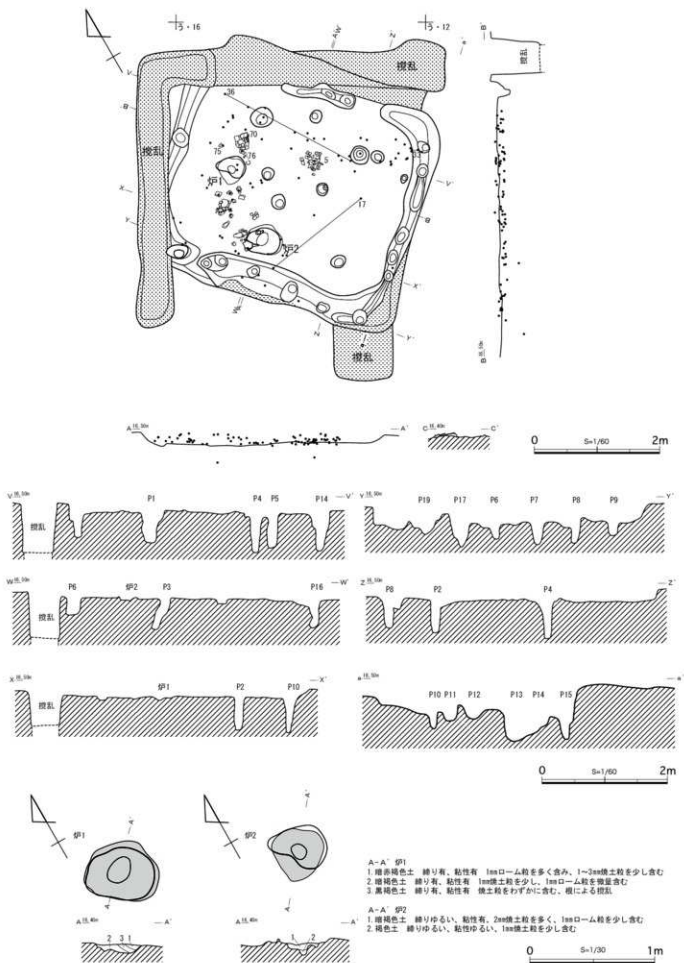
第3類土器 7、8、38は燃糸R。

第5類土器 9、10は口縁部。無文土器。

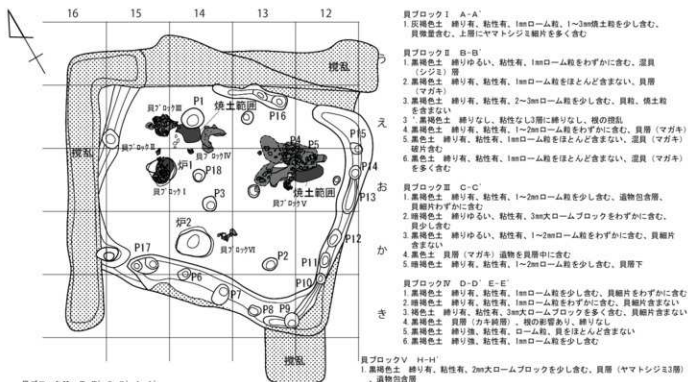
第6類土器 40～44は底部。

第13表 8号住居跡ピット一覧表

No.	平面形態	確認両径	底径	深さ	備考
1	円形	0.36×0.35	0.19×0.18	0.55	主柱穴
2	楕円形	0.29×0.16	0.15×0.10	0.35	主柱穴
3	不整形円形	0.29×0.18	0.13×0.12	0.33	
4	円形	0.25×0.25	0.09×0.08	0.44	主柱穴
5	円形	0.16×0.15	0.10×0.09	0.41	主柱穴
6	不整形円形	0.18×0.16	0.07×0.07	0.42	
7	楕円形	0.35×0.23	0.14×0.13	0.51	
8	不整形円形	0.17×0.14	0.10×0.07	0.47	
9	円形	0.29×0.20	0.11×0.08	0.32	
10	円形	0.11×0.10	0.06×0.06	0.37	
11	楕円形	0.26×0.17	0.15×0.07	0.36	
12	楕円形	0.29×0.17	0.14×0.08	0.54	
13	長円形	(0.59)×0.19	(0.45)×0.07	0.58	
14	円形	0.17×0.16	0.10×0.09	0.48	
15	不整形円形	0.23×0.16	0.09×0.09	0.71	
16	不整形長円形	(0.62)×0.14	(0.34)×0.06	0.53	
17	不整形円形	0.46×0.26	0.10×0.08	0.55	
18	円形	0.16×0.15	0.10×0.10	0.24	
19	楕円形	0.35×0.23	0.11×0.08	0.12	
20	円形	0.27×0.26	0.16×0.14	0.16	
21	円形	0.16×0.14	0.05×0.03	0.10	
22	円形	0.18×0.16	0.08×0.06	0.06	
23	楕円形	0.26×0.11	0.09×0.04	0.04	
24	円形	0.17×0.16	0.10×0.09	0.08	



第37図 B号住居跡遺物出土状況図・炉 (1/60・1/30)



貝ブロックV F-F' G-G' I-I'

1. 黒褐色土 締り有、粘性有、1-2mmローム粒を少し含む、遺貝(ヤマトシジミ)少
2. 黒褐色土 締り有、粘性有、ローム粒をほとんど含まない、貝を含まない
3. 黒褐色土 締り強、粘性有、2層に広がる、遺物包含層、貝を含まない
4. 黒褐色土 締り有、粘性有、2-5mmロームブロックを少し含む
5. 暗褐色土 貝層(ヤマトシジミ層)、締りあり
- 5' 貝層(ヤマトシジミ2層)、間にハマグリ、マガキ層を含む
- 5'' 貝層(ヤマトシジミ3層)、マガキ含む、土(貝、5' と5''の間に薄いハマグリ2層あり)
- 5''' 貝層(ハマグリ2層)
6. 暗褐色土 締り弱、粘性有、1mmローム粒、1mm焼土粒を少し含む、遺物包含層、貝を含まない
7. 暗褐色土 締り強、粘性有、2mmロームブロック、2mm大焼土粒を少し含む、6層より明るい、貝を含まない
8. 黒褐色土 締り有、粘性有、1mmローム粒を部分的、2mmロームブロックをわずかに含む

貝ブロックI A-A'

1. 灰褐色土 締り有、粘性有、1mmローム粒、1-3mm焼土粒を少し含む、貝層を含む、上面にヤマトシジミ破片を多く含む

貝ブロックII B-B'

1. 黒褐色土 締りゆるい、粘性有、1mmローム粒をわずかに含む、遺貝(シジミ)層
2. 黒褐色土 締り有、粘性有、1mmローム粒をほとんど含まない、貝層(マガキ)
3. 黒褐色土 締り有、粘性有、2-3mmローム粒を少し含む、貝粒、焼土粒を含まない
- 3' 黒褐色土 締りなし、粘性なし層に締りなし、横の擾乱
4. 黒褐色土 締り有、粘性有、1-2mmローム粒をわずかに含む、貝層(マガキ)
5. 黒色土 締り有、粘性有、1mmローム粒をほとんど含まない、遺貝(マガキ)破片含む
6. 黒色土 締り有、粘性有、1mmローム粒をほとんど含まない、遺貝(マガキ)を多く含む

貝ブロックIII C-C'

1. 黒褐色土 締り有、粘性有、1-2mmローム粒を少し含む、遺物包含層、貝細片わずかに含む
2. 暗褐色土 締りゆるい、粘性有、3mm大ロームブロックをわずかに含む、貝少し含む
3. 黒褐色土 締りゆるい、粘性有、1-2mmローム粒をわずかに含む、貝細片含まない
4. 黒色土 貝層(マガキ)遺物を貝層中に含む
5. 暗褐色土 締り有、粘性有、1-2mmローム粒を少し含む、貝層下

貝ブロックIV D-D' E-E'

1. 黒褐色土 締り有、粘性有、1mmローム粒を少し含む、貝細片をわずかに含む
2. 暗褐色土 締り有、粘性有、1mmローム粒をわずかに含む、貝細片含まない
3. 暗褐色土 締り有、粘性有、3mm大ロームブロックを多く含む、貝層(ヤマトシジミ3層)を少し含む
4. 黒褐色土 貝層(カキ層)、横の擾乱あり、締りなし
5. 黒褐色土 締り強、粘性有、ローム粒、貝をほとんど含まない、貝細片含む
6. 黒褐色土 締り強、粘性有、1mmローム粒を少し含む

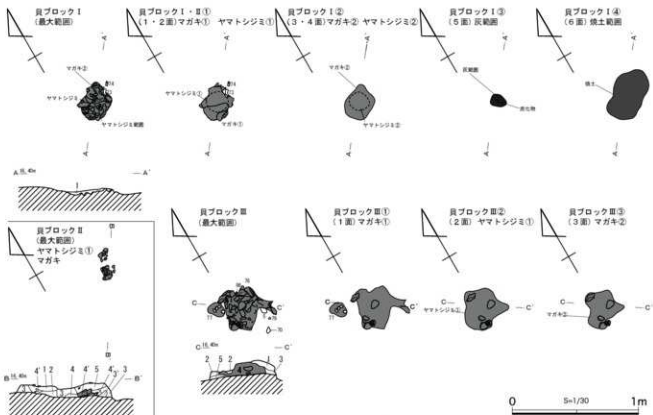
貝ブロックV H-H'

1. 黒褐色土 締り有、粘性有、2mm大ロームブロックを少し含む、貝層(ヤマトシジミ3層)、遺物包含層
2. 黒褐色土 締り有、粘性有、10mmロームブロックをわずかに含む、貝を含まない
3. 黒褐色土 締り有、粘性有、2-5mmロームブロックを多く含む、貝層(ヤマトシジミ3層)を少し含む
4. 黒褐色土 締り有、粘性有、1-2mmローム粒を少し含む、貝を含まない

貝ブロックVI J-J' K-K'

1. 黒褐色土 締り有、粘性有、2mmロームブロックを少し含む、貝(マガキ)層
2. 黒褐色土 締り有、粘性有、1mmローム粒を少し含む、貝細片を微量に含む
3. 暗褐色土 締り有、粘性有、1-2mmローム粒を多く含む
4. 暗褐色土 締り弱、粘性有、1mmローム粒、2mm大ロームブロックを多く含む
5. 暗褐色土 締り弱、粘性有、1mm大ローム粒、5mm焼土ブロックを少し含む
6. 黒褐色土 締り有、粘性弱、遺貝層(マガキ層)、下部に二枚貝を含む、1mmローム粒をわずかに含む
7. 黒褐色土 締り有、粘性有、1mmローム粒を少し含む、遺貝(カキ)、6層に似る
8. 黒褐色土 締り有、粘性有、遺貝(マガキ・ヤマトシジミ)層、ローム粒を少し含む

0 S=1/80 2m

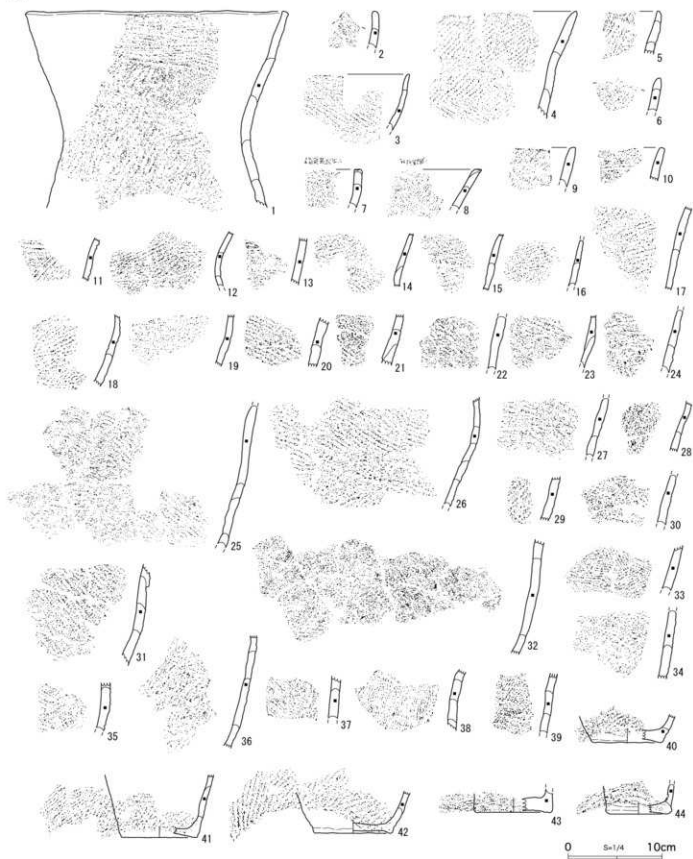


0 S=1/30 1m

第38図 8号住居跡貝ブロック①(1/60・1/30)

第14表 8号住居跡出土土物観察表

図号 番号	掲載 番号	分類	出土 状況	口径・胴径、 長さ×幅×厚さ	底径・高さ	遺存部位	器形	地文	文様要素	編法	時期	注記
	1	1類3種	埋土	(28.0) × (20.0)	— × (21.0)	口縁部	深鉢	Lr	口縁部に沿って竹管状工具で沈澱を重層状、斜位の沈澱を施す。 胴部はLr模位施文。	多量	黒点式	8住№36
	2	1類1種	埋土			口縁部	深鉢	沈澱	波状口縁、竹管状工具で大振りの変形文を施すとも思われる。	普通	黒点式	8住 貝組№79
	3	2類1種	埋土			口縁部	深鉢	R1	口縁部に沿ってR1を模位施文。	普通	黒点式	8住№59
	4	2類1種	埋土			口縁部	深鉢	Lr・R1	無形羽状縄文。	多量	黒点式	8住№23・ 37
	5	2類2種	埋土			口縁部	深鉢	Lr	口縁部に沿ってLrを模位施文。	無	黒点式	8住A区1
	6	2類2種	埋土			口縁部	深鉢	Lr	波状口縁、Lrを模位施文。	普通	黒点式	8住C区1
	7	3類	埋土			口縁部	深鉢	標赤	口唇部キザミ。標赤見。	普通	黒点式	8住A区1
	8	3類	埋土			口縁部	深鉢	標赤	標赤見。	普通	黒点式	8住A区1
	9	5類	埋土			口縁部	深鉢	—		普通	黒点式	8住№22
	10	5類	埋土			口縁部	深鉢	—		普通	黒点式	8住B区1
	11	1類1種	埋土			胴部	深鉢	沈澱	竹管状工具により層状文を施す。	普通	黒点式	8住№89
	12	1類2種	埋土			胴部	深鉢	Lr	Lr施文後、竹管状工具で層状文を施す。	多量	黒点式	8住№5
	13	1類6種	埋土			胴部	深鉢	沈澱	竹管状工具でコンパス文と横走平行沈澱を施す。	普通	黒点式	8住№76
	14	1類8種	埋土			胴部	深鉢	Lr	Lr施文後、竹管状工具で層状文を施す。	普通	黒点式	8住№5
	15	2類1種	埋土			胴部	深鉢	Lr・?	Lr・?を模位施文。	多量	黒点式	8住№54
	16	2類1種	埋土			胴部	深鉢	Lr	Lr模位施文。	普通	黒点式	8住№43
	17	2類1種	埋土			胴部	深鉢	Lr	Lr模位施文。	普通	黒点式	8住№23・ 28
	18	2類1種	埋土			胴部	深鉢	Lr	Lr模位施文。	多量	黒点式	8住№5
	19	2類1種	埋土			胴部	深鉢	Lr	Lr模位施文。	普通	黒点式	8住№5
	20	2類1種	埋土			胴部	深鉢	R1	R1模位施文。	多量	黒点式	8住№29
	21	2類1種	埋土			胴部	深鉢	R1	R1模位施文。	多量	黒点式	8住№79
40	22	2類1種	埋土			胴部	深鉢	R1	R1模位施文。	多量	黒点式	8住 貝組№79
	23	2類1種	埋土			胴部	深鉢	R1	R1模位施文。	多量	黒点式	8住№54
	24	2類1種	埋土			胴部	深鉢	R1	R1模位施文。	普通	黒点式	8住№46
	25	2類1種	埋土			胴部	深鉢	R1	R1模位施文。	多量	黒点式	8住№70
	26	2類1種	埋土			胴部	深鉢	Lr・R1	追加成形技法。無形羽状縄文。	多量	黒点式	8住№54
	27	2類1種	埋土			胴部	深鉢	Lr・R1	追加成形技法。無形羽状縄文。	多量	黒点式	8住№55
	28	2類2種	埋土			胴部	深鉢	Lr	Lr模位施文。	普通	黒点式	8住B区2
	29	2類2種	埋土			胴部	深鉢	Lr	Lr模位施文。	少量	黒点式	8住B区2
	30	2類2種	埋土			胴部	深鉢	R1	R1模位施文。	普通	黒点式	8住№35
	31	2類2種	埋土			胴部	深鉢	R1	追加成形技法。R1模位施文。	普通	黒点式	8住№42
	32	2類2種	埋土			胴部	深鉢	R1・?	R1・?を模位施文。摩滅が激しい。	多量	黒点式	8住№79
	33	2類	埋土			胴部	深鉢	Lr・R1	単筋と無筋による羽状構成。	少量	黒点式	8住№15・ 16
	34	2類4種c	埋土			胴部	深鉢	附加条	附加条3種。R1 + 1・r	多量	黒点式	8住 貝組№90
	35	2類4種c	埋土			胴部	深鉢	附加条	軸調不明に2Rを附加する。	普通	黒点式	8住№62
	36	2類5種	埋土			胴部	深鉢	L1	追加成形技法。L1模位施文。	普通	黒点式	8住№67・ 83
	37	2類5種	埋土			胴部	深鉢	標	底面段3条のRを模位に施し、羽状構成をなす。	普通	黒点式	8住№11
	38	3類	埋土			胴部	深鉢	標赤	標赤見。	多量	黒点式	8住№4
	39	2類4種c	埋土			胴部	深鉢	附加条	附加条3種。Lr + 1・r	少量	黒点式	8住№25
	40	6類	埋土		(7.0) × (2.8)	底部	深鉢	Lr	Lr模位施文。	多量	黒点式	8住№78
	41	6類	埋土		(9.0) × (9.6)	底部	深鉢	Lr	Lr模位施文。	普通	黒点式	8住№5
	42	6類	埋土		8.0 × (9.4)	底部	深鉢	Lr	Lr模位施文。上げ底。	多量	黒点式	8住№65
	43	6類	埋土		(9.0) × (2.6)	底部	深鉢			普通	黒点式	8住№27
	44	6類	埋土		6.0 × (3.0)	底部	深鉢			多量	黒点式	8住№40



第40図 8号住居跡出土遺物 (1/4)

(5) 9号住居跡

① 9号住居跡

【位置】調査区の南側に位置する。主軸はN-51°-W、N-57°-Wである。

【形状・規模】住居跡の西南隅を大きく掘削されており、全容は明瞭ではない。平面形態は隅丸長方形である。規模は、長軸（東西）6.2 m×短軸（南北）4.6 mを測る。深さは、遺構確認面から床面まで45cmを測る。

【炉】住居跡中央やや西寄りに位置する。炉の大半は壊されており、全容は不明である。規模は南北60cm以上、東西20cm以上、深さは4cmを測る。炉の中央部は赤褐色に焼けている。

【周溝】残存部分で1周巡る。周溝内に小ピットをもつ。上幅15～36cm、下幅5～18cm、深さ18～20cmを測る。

【ピット】住居跡に伴うものはP1～P20。大半は周溝内に位置する。主柱穴はP1～P5、P9。入口施設と思われるものにP11・P12・P15・P16がある。周溝をみると1条しか巡っておらず、拡張の痕跡は見当たらないが、ピットの配列からは柱の付け替えが想定できる（P2・P4・P5とP1・P3・P9）。南西隅の主柱穴は、擾乱のため検出できなかった。

【遺物出土状況】住居廃絶後、若干の時間をおき、自然堆積により浅い播鉢状に窪んだ状態から土器の捨て場として利用されたと考えられる。ほぼ床面近い深さから確認面まで連続と土器が出土している。

② 9号住居跡出土土器

【出土遺物】今回の調査地点の中でもっとも遺物が出土した住居跡である。床面上から覆土中にかけて出土している。口縁部は平縁と4単位の波頂部が丸みを持つ大ぶりの波状口縁、波頂部が尖るものが認められる。また、波頂部から縦位に伸びる隆帯がつくものも認められる。14は頸部に断面M字型の隆帯が巡る。口縁部文様帯は幅広のものが認められる。無文地に大ぶりの波状文や菱形文を描くものと、縄文地にモチーフを描くものの両者が認められる。描かれるモチーフも半截竹管によるものと櫛歯状工具によるもの、爪形文でモチーフを描くものなど多彩である。黒浜式が主体である。

第1類第1種土器 16、17、20～22、24は波状口縁。16、21は波頂部から縦長の貼付文を付す。竹管状工具で菱形文を施す。17は4単位の菱形文。19、20は

鋸歯文。22～24は竹管状工具で菱形文を施す。72はR1施文後、沈線にて菱形文。77は爪形文で鋸歯文、78は竹管状工具で菱形文、79は0段多条のLRとRLで羽状縄文を描き、竹管状工具で菱形文を施す。

第1類第2種土器 2は波状口縁。平行沈線間に菱形文を施文。25～34は口縁部。25～27、30は爪形文。28、29は竹管状工具で菱形文を施す。31はLR地文で竹管状工具で鋸歯文。32、33はR1地文で太沈線で菱形文を描く。34はLR横位施文後、竹管状工具で縦位、斜位に平行線を施す。80～87は胴部。80は爪形文。81は爪形文で渦巻文を描く。82は横位爪形文間に櫛歯状工具で鋸歯文を描く。83は竹管状工具で菱形文、84は爪形文で菱形文を描く。85はR1施文後、太沈線で菱形文。86はR1横位施文後、爪形文を横走させる。87は爪形文で鋸歯文を描く。

第1類第3種土器 3、37、88～90はLRとRLの単節羽状縄文を施文後、竹管状工具で平行線を重層させている。35は横位に沈線を密に施す。

第1類第5種土器 4、91は棒状工具、38は沈線で格子目文を描いている。1類5種a。

第1類第8種土器 92は爪形文で平行沈線間に鋸歯文を描く。93は横位に、94は縄文施文後斜位に平行線を施文している。95～97はLR横位施文後平行線を横位に施文。98はLR後竹管状工具で横位に沈線を施文。99はLR・RLの単節羽状縄文施文後、櫛歯状工具（6本1単位）で横位に沈線を施文している。100はRL横位に施文後、竹管状工具で平行沈線を施文。101はRR施文後、竹管状工具で斜位に平行線を描く。102は附加条2種。LR+施文後、爪形文を施す。202は土器円盤に転用した胴部片。竹管状工具で緩い波状文を描いている。

第2類第1種土器 5、39～42、103～111はLRを横位に施文している。41は緩い波状口縁を持つ。6～11、43～52、73、112～121、178はR1を横位に施文している。6、9、43、47は波状口縁を持つ。50は一对の穿孔がある。46はR1を横位、斜位に施文、穿孔もある。53、74、122～128はLRとR1の無節羽状縄文を施している。74はミニチュア土器の胴部片。

第2類第2種土器 1、76、146～148はLRとRLの単節羽状縄文を施している。14はLR・RLが地文、4単位の波状口縁頂部から縦長の貼付文を付す。12、13、54～57、129～139はLRを横位に施文している。13、54～56は波状口縁。58はRLとR1で横位に施文。

75はR1で横位に施文。140～145はRLで横位に施文している。

第2類第4種土器 149はa。150～156はb。59～62、157～159はc。59はLR+L・R、60～62はRl+・rの附加条3種。151～154はLR+rを横位に施文。156はLR+2R。157はRl+2R。158はRl+・rを横位に施文している。159は軸縄不明。160、161は軸縄は不明だが、2Lと2Rを附加し、羽状を構成している。

第2類第5種土器 63は口縁部に沿ってLLを横位に施文。162はRRを横位に施文している。

第3類土器 163は3類。組紐により絡条体が施文されている。

第4類第1種土器 15、64～66は口縁部で、164～171、174は胴部でa。15、170は疎らに、65、66、164～167、169、171、174は密に貝殻胼圧痕を斜位に施す。64と168も斜位に施している。

第4類第2種土器 172はR1と貝殻腹縁文を施文している。173はハイガイによる貝殻腹縁文を施文。

第5類土器 67、68は無文土器。203は土器円盤に転用した胴部片。

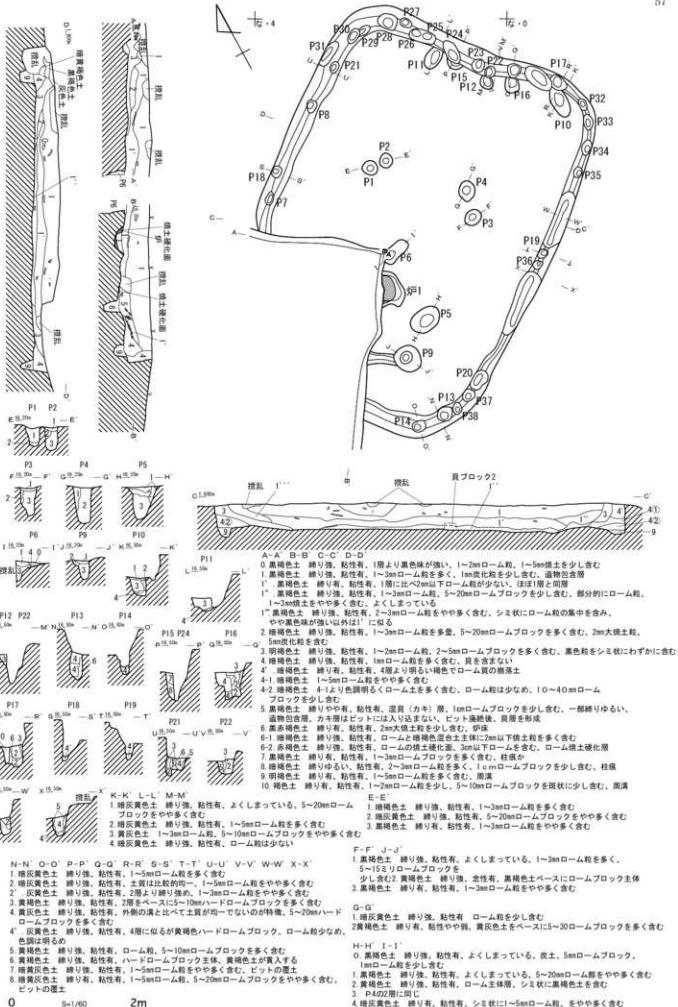
第6類土器 179は縦位の沈線、185はR1を横位に施文。いずれもミニチュア土器。180はLrを横位に施文。181、182はLR、183はLL、184はRR、186はRLを横位に施文している。187はLR・RLも単節羽状縄文。188、194は附加条。188はRL+2Lを横位に施文。194は軸縄不明に1とrを附加している附加条3種。189は尖底と思われる。

第8類土器 69、176はLrを横位に施文。175はLR、177はRLをそれぞれ横位に施文。金雲母を含む。釈迦堂Z3式。

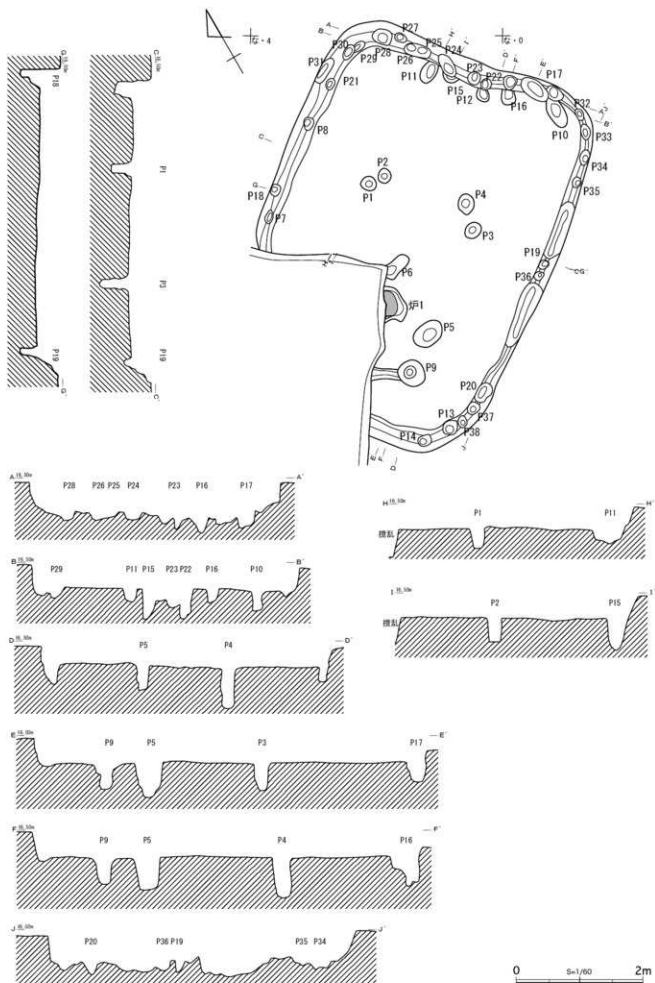
その他の土器 36、190～193は諸磯c式。36は口縁部にキザミ。竹管状工具で平行線を横走させた後、斜位の沈線を施す。190～193はいずれも隆起文を有し、隆帯上に細かな押しきがなされている。なお、195は早期の条痕文の胴部である。分類上はその他とした。

第15表 9号住居跡ピット一覧表

No.	平面形態	確認直径	底径	深さ	備考
1	円形	0.24 × 0.23	0.19 × 0.09	0.33	土柱穴
2	円形	0.17 × 0.16	0.08 × 0.08	0.38	土柱穴
3	円形	0.25 × 0.21	0.12 × 0.10	0.45	土柱穴
4	楕円形	0.30 × 0.22	0.12 × 0.08	0.58	土柱穴
5	楕円形	0.18 × 0.33	0.24 × 0.16	0.53	土柱穴
6	楕円形	0.41 × 0.22	0.15 × 0.19	0.32	
7	楕円形	0.19 × 0.11	0.10 × 0.07	0.08	
8	不整形円形	0.15 × 0.13	0.09 × 0.07	0.06	
9	円形	0.42 × 0.41	0.08 × 0.07	0.30	土柱穴
10	楕円形	0.49 × 0.22	0.22 × 0.11	0.30	
11	楕円形	0.34 × 0.23	0.20 × 0.12	0.20	入口施設
12	楕円形	0.22 × 0.38	0.16 × 0.14	0.17	入口施設
13	円形	0.22 × 0.20	0.12 × 0.12	0.45	
14	楕円形	0.22 × 0.36	0.12 × 0.11	0.31	
15	円形?	0.26 × (0.99)	0.11 × (0.04)	0.46	入口施設
16	不整形円形	0.44 × 0.19	0.11 × 0.10	0.45	入口施設
17	楕円形	0.50 × 0.25	0.30 × 0.10	0.34	
18	円形	0.17 × 0.13	0.07 × 0.06	0.34	
19	円形	0.14 × 0.12	0.05 × 0.05	0.26	
20	不整形円形	0.33 × 0.21	0.20 × 0.07	0.14	
21	楕円形	0.18 × 0.13	0.13 × 0.08	0.33	
22	円形	0.15 × 0.15	0.13 × 0.11	0.46	
23	円形	0.17 × 0.16	0.10 × 0.10	0.08	
24	楕円形	0.36 × 0.21	0.19 × 0.14	0.47	
25	円形?	0.163 × 0.13	0.11 × 0.05	0.06	
26	円形?	0.143 × 0.14	0.13 × 0.12	0.08	
27	楕円形	0.17 × 0.12	0.15 × 0.10	0.05	
28	円形	0.28 × 0.20	0.14 × 0.12	0.11	
29	楕円形	0.183 × 0.12	0.10 × 0.05	0.19	
30	楕円形	0.20 × 0.14	0.14 × 0.06	0.06	
31	長円形	0.43 × 0.15	0.28 × 0.05	0.08	
32	楕円形	0.16 × 0.11	0.05 × 0.04	0.04	
33	楕円形	0.24 × 0.13	0.11 × 0.04	0.05	
34	楕円形	0.25 × 0.14	0.10 × 0.06	0.06	
35	円形	0.15 × 0.13	0.07 × 0.05	0.10	
36	不整形円形	0.10 × 0.08	0.04 × 0.02	0.03	
37	円形	0.16 × 0.14	0.07 × 0.06	0.04	
38	円形	0.16 × 0.10	0.04 × 0.04	0.05	



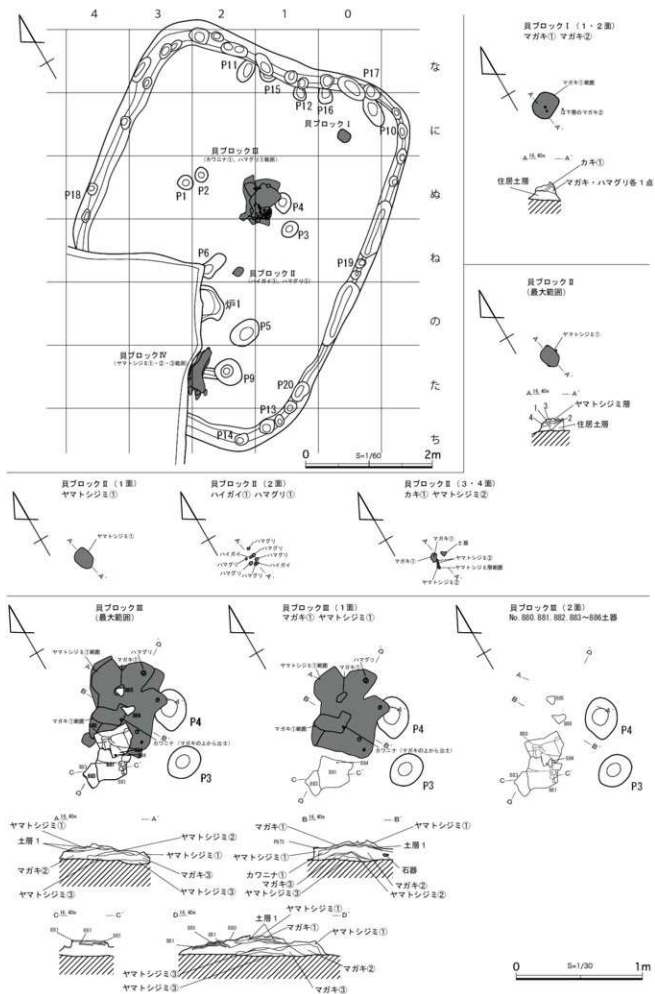
第 41 図 9号住居跡(1)(1/60)



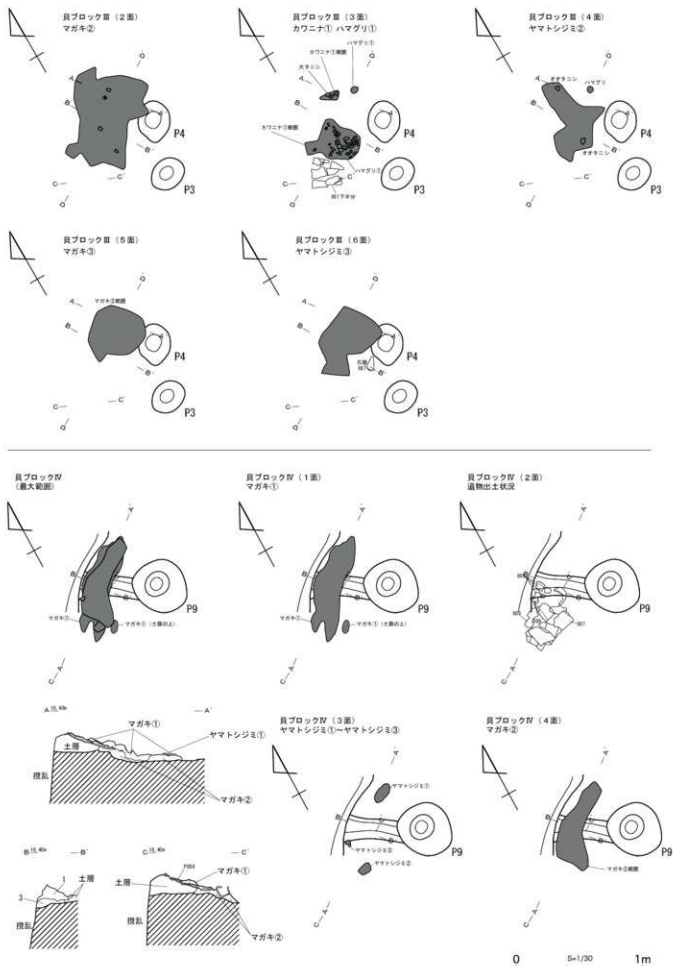
第42図 9号住居跡(2)(1/60)



第 43 図 9号住居跡遺物出土状況図・炉 (1/60・1/30)



第44図 9号住居跡貝ブロック① (1/60・1/30)



第45図 9号住居跡貝ブロック② (1/30)

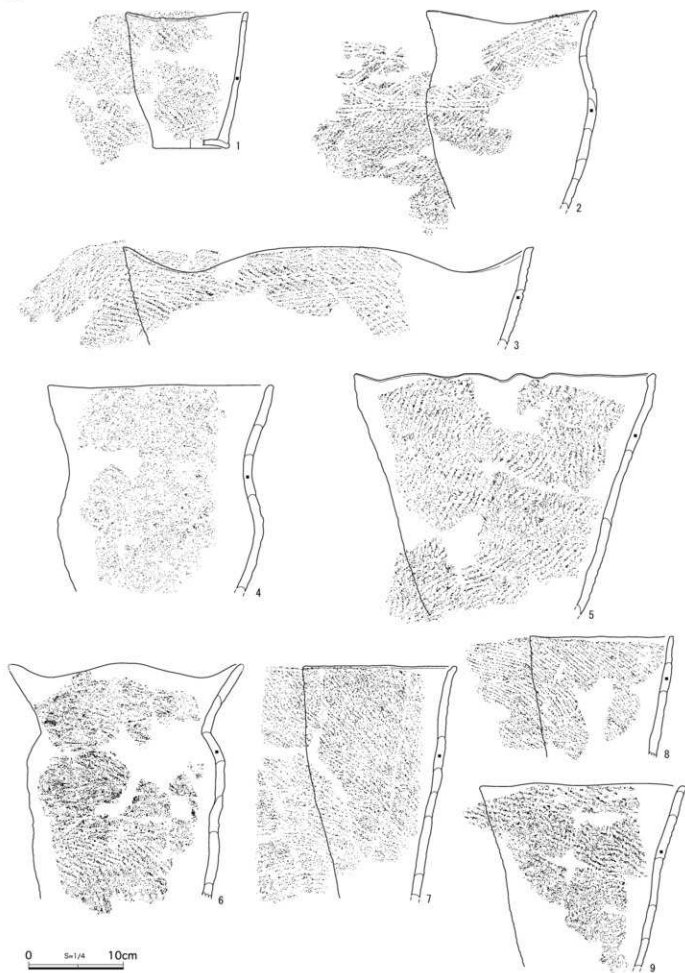
第16表 9号住居跡出土土物観察表

図号 表号	表 番号	分類	出土 状況	口径・胴径、 長さ×幅×厚さ	直径・高さ	遺存部位	器形	地文	支線要素	編年	時期	注記	
46編	1	2類2種	埋土	(13.0) × (11.8)	(8.1) × 14.4	口縁部	深鉢	IR・RI	単部別状縄文。	普通	黒土式	9住№267	
	2	1類2種	埋土	(17.6) × (18.0)	→ (20.6)	口縁部	深鉢	IR	4単位の波状口縁。平行沈線間に菱形文を施す。胴部以下はIR模範施文。	普通	黒土式	9住№54・ 505・523・ 863・C1C	
	3	1類3種	埋土	(42.6) →	→ (10.4)	口縁部	深鉢	IR・RI	4単位の波状口縁と考えられる。単部別状縄文を地文に竹管状工具による平行線を重層させる。	多量	黒土式	9住№514 +601	
	4	1類5種a	埋土	(24.0) × (21.8)	→ (21.8)	口縁部	深鉢	沈線	棒状工具で格子目文を描く。	多量	黒土式	9住№615 → b→cト	
	5	2類1種	埋土	(31.4) × (22.8)	→ (25.5)	口縁部	深鉢	Lr	Lr模範施文。	普通	黒土式	9住№252	
	6	2類1種	埋土	(24.4) × (20.9)	→ (24.8)	口縁部	深鉢	RI	波状口縁。RI模範施文。	多量	黒土式	9住№263	
	7	2類1種	埋土	16.3 × 14.6	→ (24.5)	口縁部	深鉢	RI	RIを模範施文。	普通	黒土式	9住№811	
	8	2類1種	埋土	(14.8) × (14.0)	→ (8.2)	口縁部	深鉢	RI	RI模範施文。	普通	黒土式	9住№504	
	9	2類1種	埋土	(22.0) × (16.4)	→ (19.1)	口縁部	深鉢	RI	縦い波状口縁。RI模範施文。	普通	黒土式	9住№212 +617	
47編	10	2類1種	埋土	(28.2) × (41.2)	→ (31.5)	口縁部	深鉢	RI	RI模範施文。	普通	黒土式	9住№53	
	11	2類1種	埋土	24.2 × (18.2)	→ (15.1)	口縁部	深鉢	RI	RI模範施文。	多量	黒土式	9住№844 ・868・514 ・516・518	
	12	2類2種	埋土	(38.6) →	→ (13.7)	口縁部	深鉢	IR	4単位の波状口縁。IR模範施文。	普通	黒土式	9住№880	
	13	2類2種	埋土	(41.2) × (34.8)	→ (25.3)	口縁部	深鉢	IR	IR模範施文。	多量	黒土式	9住№ 502・471	
	14	2類2種	埋土	(23.6) × (19.4)	→ (22.2)	口縁部	深鉢	IR・RI	4単位の波状口縁波頂部に縦長の筋付文をもつ。胴部は凸凹が顕る。	少量	黒土式	9住№11・ 22・318・ 438	
	15	4類1種a	埋土	(21.4) × (19.0)	→ (27.2)	口縁部	深鉢	貝殻付圧痕	縦い波状口縁。貝殻付圧痕を斜位に施す。	多量	黒土式	9住№392・ 865・横直	
	16	1類1種	埋土			口縁部	深鉢	沈線	波状口縁。波頂部から縦長の筋付文を付す。竹管状工具により大廻りの菱形文を描くものと思われる。	多量	黒土式	9住№303	
	17	1類1種	埋土			口縁部	深鉢	沈線	波状口縁。4単位の菱形文を描くものと思われる。	多量	黒土式	9住№254	
	18	1類	埋土			口縁部	深鉢	沈線	斜位の沈線を施す。口縁部を部分的に折り返す。	普通	黒土式	9住 86→cト2	
	19	1類1種	埋土			口縁部	深鉢	沈線	竹管状工具で大廻りの縦線文を描くものと思われる。	多量	黒土式	9住№340	
	20	1類1種	埋土			口縁部	深鉢	沈線	4単位の波状口縁。大廻りの縦線文を描く。	多量	黒土式	9住№260	
	21	1類1種	埋土			口縁部	深鉢	沈線	波状口縁。波頂部から斜突のある縦長の筋付文を付す。竹管状工具で菱形文を描く。	普通	黒土式	9住№33	
	22	1類1種	埋土			口縁部	深鉢	沈線	波状口縁。竹管状工具により菱形文を描くものと思われる。	普通	黒土式	9住№636	
	23	1類1種	埋土			口縁部	深鉢	IR・RI	単部別状縄文を地文に竹管状工具で菱形文を描くものと思われる。	多量	黒土式	9住№601	
	48編	24	1類1種	埋土			口縁部	深鉢	IR	縦い波状口縁。IR地に竹管状工具で菱形文を描くと思われる。	多量	黒土式	9住№669
25		1類2種	埋土			口縁部	深鉢	沈線	爪形文を施す。	普通	黒土式	9住№298	
26		1類2種	埋土			口縁部	深鉢	沈線	爪形文を重層させる。	普通	黒土式	9住A1C10	
27		1類2種	埋土			口縁部	深鉢	沈線	爪形文を重層させる。	多量	黒土式	9住№132	
28		1類2種	埋土			口縁部	深鉢	沈線	縦い波状口縁。竹管状工具で菱形文を描く。	多量	黒土式	9住№421 +426	
29		1類2種	埋土			口縁部	深鉢	沈線	竹管状工具により菱形文を描く。	普通	黒土式	9住№520	
30		1類2種	埋土			口縁部	深鉢	IR	IR施文後、爪形文を重層させる。	普通	黒土式	9住№598	
31		1類2種	埋土			口縁部	深鉢	IR	IRを地文に竹管状工具で縦線文を描く。	普通	黒土式	9住№823	
32		1類2種	埋土			口縁部	深鉢	RI	RIを地文に太沈線で菱形文を描く。	普通	黒土式	9住№618	
33		1類2種	埋土			口縁部	深鉢	RI	RIを地文に太沈線で菱形文を描く。	普通	黒土式	9住№118	
34		1類2種	埋土			口縁部	深鉢	Lr	Lr模範施文後、竹管状工具で横位・斜位の平行線を施す。	普通	黒土式	9住 C→cト3	
35		1類3種	埋土			口縁部	深鉢	沈線	横位沈線を密に施す。	普通	黒土式	9住№469	
36		その他	埋土			口縁部	深鉢	RI	口縁部平直。竹管状工具で平行線を横走させた後、斜位の沈線を施す。	無	陶器c	9住№457	
37		1類3種	埋土			口縁部	深鉢	IR・RI	単部別状縄文を地文に竹管状工具による平行沈線を重層させる。	多量	黒土式	9住№505 +513	
49編		38	1類5種a	埋土			口縁部	深鉢	沈線	沈線により格子目文を描く。	普通	黒土式	9住№239
		39	2類1種	埋土			口縁部	深鉢	Lr	口縁部沿ってLr模範施文。	普通	黒土式	9住№506
		40	2類1種	埋土			口縁部	深鉢	Lr	口縁部沿ってLr模範施文。	普通	黒土式	9住№305 +805
	41	2類1種	埋土			口縁部	深鉢	Lr	縦い波状口縁。Lr模範施文。	多量	黒土式	9住№618	
	42	2類1種	埋土			口縁部	深鉢	Lr	Lr模範施文。	普通	黒土式	9住№747	
	43	2類1種	埋土			口縁部	深鉢	RI	縦い波状口縁。口縁部に沿ってRI模範施文。	普通	黒土式	9住№517	
	44	2類1種	埋土			口縁部	深鉢	RI	RI模範施文。	多量	黒土式	9住№251	
	45	2類1種	埋土			口縁部	深鉢	RI	口縁部に沿ってRI模範施文。	多量	黒土式	9住№453 +608・609	
	46	2類1種	埋土			口縁部	深鉢	RI	RI模範・斜位施文。穿孔あり。	多量	黒土式	9住№620	
	47	2類1種	埋土			口縁部	深鉢	RI	波状口縁。RI模範施文。	普通	黒土式	9住№504	
	48	2類1種	埋土			口縁部	深鉢	RI	RI模範施文。	多量	黒土式	9住№423	
	49	2類1種	埋土			口縁部	深鉢	RI	口縁部に沿ってRI模範施文。	多量	黒土式	9住№517	
	50	2類1種	埋土			口縁部	深鉢	RI	口縁部に沿ってRIを模範施文。一対の穿孔がなされる。	普通	黒土式	9住№663	
	51	2類1種	埋土			口縁部	深鉢	RI	口縁部に沿ってRI模範施文。	普通	黒土式	9住№889	
	52	2類1種	埋土			口縁部	深鉢	RI	口縁部に沿ってRIを模範施文。	普通	黒土式	9住№889	
	53	2類1種	埋土			口縁部	深鉢	Lr・RI	単部別状縄文。	普通	黒土式	9住№759	
	54	2類2種	埋土			口縁部	深鉢	IR	波状口縁。波頂部から縦長の筋付文を付す。IR模範施文。	普通	黒土式	9住№11・ 110・112	

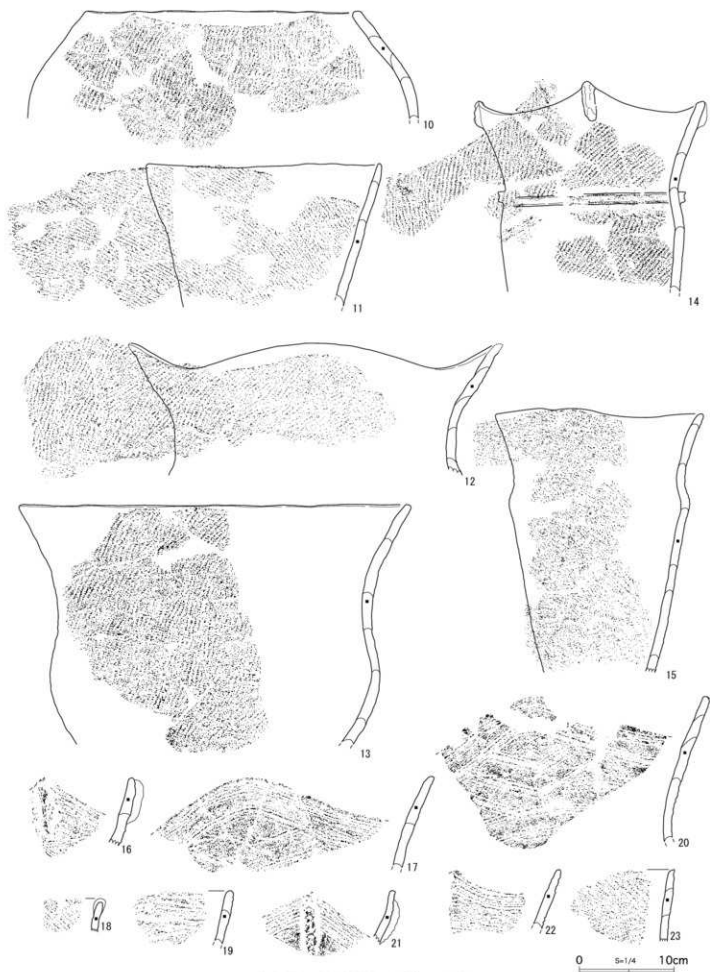
図録 番号	掲載 番号	分類	出土 状況	口径・胴径・ 長さ×幅×厚さ	底径・高さ	遺存部位	器形	地文	文様要素	編年	時期	注記	
48組	55	2類2種	埋土				口縁部	深緑	IR	波状口縁, IR横位編文。	多量	黒土式	9住№264 ・387
	56	2類2種	埋土				口縁部	深緑	IR	波状口縁, IRを横位編文。	普通	黒土式	9住№285
	57	2類2種	埋土				口縁部	深緑	IR	口縁部においてIRを横位編文。	普通	黒土式	9住Ⅲ-4-1
	58	2類2種	埋土				口縁部	深緑	Ⅲ・R1	Ⅲ・R1横位編文。	少量	黒土式	9住№717
	59	2類4種c	埋土				口縁部	深緑	附加条	波状口縁, 附加条3種, IR・Rカ	多量	黒土式	9住№266
	60	2類4種c	埋土				口縁部	深緑	附加条	波状口縁, 附加条3種, Ⅲ・Rを横位編文。	普通	黒土式	9住Ⅲ区7・ №310
	61	2類4種c	埋土				口縁部	深緑	附加条	附加条3種, Ⅲ・Rを附加。	普通	黒土式	9住№266
	62	2類4種c	埋土				口縁部	深緑	附加条3種	附加条3種, Ⅲ・Rを附加。	普通	黒土式	9住№436
	63	2類5種	埋土				口縁部	深緑	Ⅲ	口縁部においてⅢ横位編文。	普通	黒土式	9住C区7
	64	4類1種a	埋土				口縁部	深緑	貝殻有圧痕	貝殻有圧痕を斜位に施す。	普通	黒土式	9住№660
65	4類1種a	埋土				口縁部	深緑	貝殻有圧痕	貝殻有圧痕を密に斜位に施す。	多量	黒土式	9住Ⅲ区9・ 120	
66	4類1種a	埋土				口縁部	深緑	貝殻有圧痕	貝殻有圧痕を密に斜位に施す。	多量	黒土式	9住№112	
67	5類	埋土				口縁部	深緑	無文		多量	黒土式	9住№267	
68	5類	埋土				口縁部	深緑	無文		多量	黒土式	9住№14	
69	6類	埋土				口縁部	深緑	IR	口縁部においてIR横位編文, 金雲目を含む。	無	軟造黄23	9住№4	
70	1類2種	埋土				口縁部	深緑		底面部から短冊角も出す, 口縁部には爪形文でモチーフを描く, 口唇部はワンダムに刻みを入す。	多量	黒土式	9住№12	
71	1類2種	埋土				口縁部	深緑		口縁部において爪形文を2条横置き, 以下に縦線文を描く, 口唇部はワンダムに刻みを入す。	多量	黒土式	9住№12	
72	1類1種	埋土		(28.8)	(19.3)	胴部	深緑	Ⅲ	R1施文後, 太い沈線により菱形文を描く。	普通	黒土式	9住№9・ 18・251	
73	2類1種	埋土		(17.2)	(13.7)	胴部	深緑	R1	R1横位編文。	普通	黒土式	9住№508	
74	2類1種	埋土				胴部	深緑	IR・R1	無彫羽状縄文。	普通	黒土式	9住D区5	
75	2類2種	埋土		(22.0)	(17.1)	胴部	深緑	R1	R1横位編文。	普通	黒土式	9住№264	
76	2類2種	埋土		(13.8)	(12.6)	胴部	深緑	IR・R1	無彫羽状縄文。	普通	黒土式	9住№274 ・277・278 ・519・786	
77	1類1種	埋土				胴部	深緑	沈線	爪形文で大股りの縦線文を描く。	普通	黒土式	9住№699	
78	1類1種	埋土				胴部	深緑	沈線	竹管状工具で大股りの菱形文を描くものと思われる。	多量	黒土式	9住№734	
79	1類1種	埋土				胴部	深緑	IR・R1	O段多条羽状縄文地文に竹管状工具で菱形文を描く。	多量	黒土式	9住№601	
80	1類2種	埋土				胴部	深緑	沈線	爪形文を編文。	多量	黒土式	9住№641	
81	1類2種	埋土				胴部	深緑	沈線	爪形文で渦巻文を描く。	普通	黒土式	9住D区11	
82	1類2種	埋土				胴部	深緑	沈線	横位爪形文間に縞帯状工具で縦線文を描く。	普通	黒土式	9住№380	
83	1類2種	埋土				胴部	深緑	沈線	竹管状工具により菱形文を描く。	普通	黒土式	9住№311	
84	1類2種	埋土				胴部	深緑	IR	爪形文で菱形文を描く。胴部はIR横位編文。	普通	黒土式	9住№76	
85	1類2種	埋土				胴部	深緑	R1	R1施文後, 太沈線で菱形文を描く。	普通	黒土式	9住Ⅲ18	
86	1類2種	埋土				胴部	深緑	R1	R1横位編文後, 爪形文を横をさせる。	普通	黒土式	9住№564	
87	1類2種	埋土				胴部	深緑	IR	爪形文で縦線文を描く。胴部はIR横位編文。	普通	黒土式	9住№35	
88	1類3種	埋土				胴部	深緑	IR・R1	無彫羽状縄文を地文に竹管状工具による平行線を重層させる。	多量	黒土式		
89	1類3種	埋土				胴部	深緑	IR・R1	無彫羽状縄文を地文に竹管状工具による平行線を重層させる。	多量	黒土式		
90	1類3種	埋土				胴部	深緑	IR・R1	無彫羽状縄文を地文に竹管状工具による平行線を重層させる。	多量	黒土式		
91	1類5種a	埋土				胴部	深緑	沈線	棒状工具で格子目文を描く。	多量	黒土式	9住№602 ・4区11	
92	1類8種	埋土				胴部	深緑	沈線	爪形文で平行沈線間に縦線文を描く。	普通	黒土式	9住№617	
93	1類8種	埋土				胴部	深緑	沈線	竹管状工具により, 横位平行線を編文。	多量	黒土式	9住№137	
94	1類8種	埋土				胴部	深緑	IR?	IR?横位編文後, 竹管状工具で斜位の平行線を密に施す。	多量	黒土式	9住№703	
95	1類8種	埋土				胴部	深緑	IR	IR施文後, 竹管状工具で平行線を横走編文。	多量	黒土式	9住Ⅲ529 ・C-6・C	
96	1類8種	埋土				胴部	深緑	IR	IR横位編文後, 竹管状工具で横位平行線を編文。	多量	黒土式	9住Ⅲ337	
97	1類8種	埋土				胴部	深緑	IR	IR横位編文後, 爪形文で横位沈線を描く。	普通	黒土式	9住Ⅲ294	
98	1類8種	埋土				胴部	深緑	IR	竹管状工具により横位沈線を描く。	普通	黒土式	9住Ⅲ16	
99	1類8種	埋土				胴部	深緑	IR・R1	無彫羽状縄文施文後, 縞帯状工具(六本一単位)で横位沈線を描く。	普通	黒土式	9住C区5	
100	1類8種	埋土				胴部	深緑	Ⅲ	Ⅲ横位編文後, 竹管状工具で平行沈線を描く。	普通	軟造黄23	9住№407	
101	1類8種	埋土				胴部	深緑	Ⅲ	Ⅲ施文後, 竹管状工具で斜位の平行線を描く。	普通	黒土式	9住№423 ・4区5・B区7	
102	1類8種	埋土				胴部	深緑	附加条	附加条2種, IR?施文後, 爪形文を編文。	普通	黒土式	9住№488 ・887・617	
103	2類1種	埋土				胴部	深緑	IR	IR横位編文。	多量	黒土式	9住№619	
104	2類1種	埋土				胴部	深緑	IR	IR横位編文。	多量	黒土式	9住Ⅲ14	
105	2類1種	埋土				胴部	深緑	IR	IR横位編文。	多量	黒土式	9住№402	
106	2類1種	埋土				胴部	深緑	IR	IR横位編文。	普通	黒土式	9住ⅢⅢ18	
107	2類1種	埋土		(20.0)	(14.2)	胴部	深緑	IR	IR横位編文。	少量	黒土式	9住№847 ・878	
108	2類1種	埋土				胴部	深緑	IR	IR横位編文。	多量	黒土式	9住№253	
109	2類1種	埋土				胴部	深緑	IR	IR横位編文。	多量	黒土式	9住№617 ・619	
110	2類1種	埋土				胴部	深緑	IR	IR横位編文。	普通	黒土式	9住Ⅲ290	
111	2類1種	埋土				胴部	深緑	IR	IR横位編文。	普通	黒土式	9住Ⅲ1	
112	2類1種	埋土				胴部	深緑	R1	R1横位編文。	普通	黒土式	9住Ⅲ507	
113	2類1種	埋土				胴部	深緑	R1	R1を横位編文。	普通	黒土式	9住Ⅲ283 ・B区7	
114	2類1種	埋土				胴部	深緑	R1	R1横位編文。	多量	黒土式	9住Ⅲ251	
115	2類1種	埋土				胴部	深緑	R1	R1横位編文。	普通	黒土式	9住Ⅲ507 ・670	
116	2類1種	埋土				胴部	深緑	R1	R1横位編文。	多量	黒土式	9住Ⅲ503	

図号 番号	掲載 番号	分類	出土 状況	口縁・胴径、 長さ×幅×厚さ	底径・高さ	埋存部位	器形	施文	文様要素	編年	時期	注記	
50順	117	2類1種	埋土			胴部	深鉢	R1	追加成形法、R1 横位施文。	普通	黒土式	9住№251	
	118	2類1種	埋土			胴部	深鉢	R1	R1 横位施文。	普通	黒土式	9住№262	
	119	2類1種	埋土			胴部	深鉢	R1	追加成形法、R1 横位施文。	多量	黒土式	9住№617	
	120	2類1種	埋土			胴部	深鉢	R1	R1 横位施文。器面華威が濃い。	普通	黒土式	9住№607	
	121	2類1種	埋土			胴部	深鉢	R1	R1 横位施文。	多量	黒土式	9住№504	
	122	2類1種	埋土			胴部	深鉢	Lr + R1	追加成形法、無彫羽状施文。	多量	黒土式	9住№251 + 563	
	123	2類1種	埋土			胴部	深鉢	Lr + R1	無彫羽状施文。	多量	黒土式	9住№236	
	124	2類1種	埋土			胴部	深鉢	Lr + R1	無彫羽状施文。	多量	黒土式	9住№237	
	125	2類1種	埋土			胴部	深鉢	Lr + R1	無彫羽状施文。金雲母を含む。	無	軟土室23	9住№695	
	136	2類1種	埋土			胴部	深鉢	Lr + R1	無彫羽状施文。	少量	黒土式	9住C区2・ C区4・No. 428・564	
	127	2類1種	埋土			胴部	深鉢	Lr + R1	無彫羽状施文。	多量	黒土式	9住№350	
	128	2類1種	埋土			胴部	深鉢	Lr + R1	無彫羽状施文。	普通	黒土式	9住№342	
	51順	129	2類2種	埋土			胴部	深鉢	1R	追加成形法、1R 横位施文。	多量	黒土式	9住№303 + 886
		130	2類2種	埋土			胴部	深鉢	1R	1R 横位施文。	多量	黒土式	9住№364
131		2類2種	埋土			胴部	深鉢	1R	1R 横位施文。	多量	黒土式	9住№326	
132		2類2種	埋土			胴部	深鉢	1R	1R 横位施文。	普通	黒土式	9住№649	
133		2類2種	埋土			胴部	深鉢	1R	1R 横位施文。	多量	黒土式	9住№502	
134		2類2種	埋土			胴部	深鉢	1R	1R 横位施文。	多量	黒土式	9住№501	
135		2類2種	埋土			胴部	深鉢	1R	1R 横位施文。	多量	黒土式	9住№562	
136		2類2種	埋土			胴部	深鉢	1R	1R 横位施文。	多量	黒土式	9住№618	
137		2類2種	埋土			胴部	深鉢	1R	1R 横位施文。	多量	黒土式	9住№510	
138		2類2種	埋土			胴部	深鉢	1R	追加成形法、1R 横位施文。	多量	黒土式	9住№502	
139		2類2種	埋土			胴部	深鉢	1R	1R 横位施文。	多量	黒土式	9住№35	
140		2類2種	埋土			胴部	深鉢	R1	R1 横位施文。	普通	黒土式	9住№618	
141		2類2種	埋土			胴部	深鉢	R1	R1 横位施文。	普通	黒土式	9住試1	
142		2類2種	埋土			胴部	深鉢	R1	R1 横位施文。	普通	黒土式	9住№119	
143	2類2種	埋土			胴部	深鉢	R1	R1 横位施文。	普通	黒土式	9住№520		
144	2類2種	埋土	→(40.8)	→(16.6)	胴部	深鉢	R1	器の細かいR1を横位施文。	普通	黒土式	9住№96・ D区3		
145	2類2種	埋土			胴部	深鉢	R1	R1 横位施文。	普通	黒土式	9住D区2・ No.834		
146	2類2種	埋土			胴部	深鉢	1R + R1	無彫羽状施文。金雲母を含む。	無	軟土室23	9住№672		
147	2類2種	埋土			胴部	深鉢	1R + R1	無彫羽状施文。	多量	黒土式	9住№165		
148	2類2種	埋土			胴部	深鉢	1R + R1	無彫羽状施文。	普通	黒土式	9住№267		
149	2類4種a	埋土			胴部	深鉢	附加条	1R+2Rを縦横に施文。	普通	黒土式	9住№821		
150	2類4種b	埋土			胴部	深鉢	1R	1R 横位施文。	多量	黒土式	9住№398 + 471		
151	2類4種b	埋土			胴部	深鉢	附加条	附加条2種、1R+横位施文。	多量	黒土式	9住№617		
152	2類4種b	埋土			胴部	深鉢	附加条	1R+を横位施文。	多量	黒土式	9住№528		
153	2類4種b	埋土			胴部	深鉢	附加条	1R+を横位施文。	多量	黒土式	9住№617		
154	2類4種b	埋土			胴部	深鉢	附加条	1R+を横位施文。	普通	黒土式	9住№98・ 417		
52順	155	2類4種b	埋土			胴部	深鉢	附加条	附加条1種、1R+と1R+で羽状施文を構成する。	普通	黒土式	9住№828	
	156	2類4種b	埋土			胴部	深鉢	附加条	附加条2種、1R+2R	普通	黒土式	9住№651	
	157	2類4種c	埋土			胴部	深鉢	附加条	附加条2種、R1+2R	普通	黒土式	9住№36	
	158	2類4種c	埋土			胴部	深鉢	附加条	見+を横位施文。	多量	黒土式	9住№738	
	159	2類4種c	埋土			胴部	深鉢	附加条	軸線不明に1と+を附加。	普通	黒土式	9住№166	
	160	2類4種	埋土			胴部	深鉢	附加条	軸線不明に2,附加したもの。2Rを附加したもので羽状施文を構成する。	普通	黒土式	9住№700 + 801・829	
	161	2類4種	埋土			胴部	深鉢	附加条	軸線不明に3と2Rを附加した原形で羽状施文をなす。	普通	黒土式	9住№27・ 118	
	162	2類5種	埋土			胴部	深鉢	線	線 横位施文。	多量	黒土式	9住№161	
	163	3類	埋土			胴部	深鉢	縦線	縦線?	普通	黒土式	9住№640	
	164	4類1種a	埋土			胴部	深鉢	員發背圧痕	員發背圧痕を密に斜位に施す。	多量	黒土式	9住難18	
165	4類1種a	埋土			胴部	深鉢	員發背圧痕	員發背圧痕を密に斜位に施す。	少量	黒土式	9住№118		
166	4類1種a	埋土			胴部	深鉢	員發背圧痕	員發背圧痕を密に斜位に施す。	多量	黒土式	9住№813		
167	4類1種a	埋土			胴部	深鉢	員發背圧痕	員發背圧痕を密に斜位に施す。	普通	黒土式	9住№389		
168	4類1種a	埋土			胴部	深鉢	員發背圧痕	員發背圧痕を密に斜位に施す。	普通	黒土式	9住№110		
169	4類1種a	埋土			胴部	深鉢	員發背圧痕	員發背圧痕を密に斜位に施す。	普通	黒土式	9住№191		
170	4類1種a	埋土			胴部	深鉢	員發背圧痕	員發背圧痕を密に斜位に施す。一部鼓部部の圧痕が見られる。	多量	黒土式	9住D区5		
171	4類1種a	埋土			胴部	深鉢	員發背圧痕	員發背圧痕を密に斜位に施す。	多量	黒土式	9住№463		
172	4類2種	埋土			胴部	深鉢	R1	R1と員發背線文を施文。	多量	黒土式	9住№633 + 613・42・ B区1・A区2		
173	4類2種	埋土			胴部	深鉢	員發背線	パイロイによる員發背線文を施文。	普通	黒土式	9住№389 + A区9		
174	4類2種a	埋土			胴部	深鉢	員發背圧痕	員發背圧痕を密に斜位に施す。	多量	黒土式	9住№655		
175	8類	埋土			胴部	深鉢	1R	1R 横位施文。金雲母を含む。	無	軟土室23	9住№290		
176	8類	埋土			胴部	深鉢	Lr	Lr 横位施文。金雲母を含む。	無	軟土室23	9住№677		
177	8類	埋土			胴部	深鉢	R1	R1 横位施文。金雲母を含む。	無	軟土室23	9住№713		
178	2類1種	埋土	→(26.4)	9.8・(38.8)	胴部～ 底部	深鉢	R1	R1 横位施文。	普通	黒土式	9住№889		
179	6類	埋土			底部	ミニ チュニア	沈殿	層位の沈殿を施文。	普通	黒土式	9住A区12		

図録番号	掲載番号	分類	出土状況	口径・胴径、長さ×幅×厚さ	直径・高さ	遺存部位	器形	地文	文様要素	編年	時期	注記
図録	180	6類	埋土		8.0×(1.5)	底部	深鉢	1r	1r 横位施文。	多量	黒土式	9住№.21
	181	6類	埋土		8.0×(1.5)	底部	深鉢	1R	1R 横位施文。	普通	黒土式	9住№.524
	182	6類	埋土		9.1×(1.0)	底部	深鉢	1R	1R 横位施文。上げ底。	多量	黒土式	9住№.509
	183	6類	埋土			底部	深鉢	1L	1L 横位施文。	普通	黒土式	9住№.193 ・194・195 ・196
	184	6類	埋土			底部	深鉢	無	追加成形技法。縦横位施文。	普通	黒土式	9住№.103 ・232・442 ・C-66-ト2
	185	6類	埋土		(11.0)×(2.5)	底部	ミニチュア	K1	K1 横位施文。	普通	黒土式	9住№.27
	186	6類	埋土		9.0×(1.2)	底部	深鉢	無	縦横位施文。	多量	黒土式	9住№.322
	187	6類	埋土		9.2×(1.0)	底部	深鉢	1R・K1	両形同位施文	多量	黒土式	9住№.603
	188	6類	埋土		(14.0)×(4.0)	底部	深鉢	附加条	縦・横位施文。	多量	黒土式	9住試1
	189	6類	埋土			底部	深鉢	無	実底か？	無		9住A区7
	190	その他	埋土			胴部	深鉢	陸形文	陸形上に細かな押引がなされる。	無	諸磯c	9住 B-6-ル-ト
	191	その他	埋土			胴部	深鉢	陸形文	陸形上に細かな押引がなされる。	無	諸磯c	9住№.9
	192	その他	埋土			胴部	深鉢	陸形文	陸形上に細かな押引がなされる。	無	諸磯c	9住№.414
	193	その他	埋土			胴部	深鉢	陸形文	陸形上に細かな押引がなされる。	無	諸磯c	9住C区5
	194	6類	埋土		9.6×(1.5)	底部	深鉢	附加条	附加条3種。軸調不明に1とrを附加。	普通	黒土式	9住№.2
	195	その他	埋土			胴部	深鉢	条痕	条痕を施す。	少量	条痕文	9住C区4
	196	2類1種	埋土			胴部	深鉢	1r・K1	追加成形技法。無形同位施文。	多量	黒土式	9住№.704
	197	8類	埋土			胴部	深鉢	K1	無形同位施文。焼成後穿孔あり。金雲目含む。	無	朝汐安23	9住D区11
	198	8類	埋土			胴部	深鉢	K1	無形同位施文。金雲目含む。	無	朝汐安23	9住№.125
	199	8類	埋土			胴部	深鉢	1r	無形1r 横位施文。金雲目含む。	無	朝汐安23	9住A区2
	200	その他	埋土			胴部	深鉢	1R	ルーブ文。1R 横位施文。	少量	間山式	9住A区2
	201	その他	埋土			口縁部	ミニチュア	1R	手捏ね。	普通	黒土式	
	202	1類8種	埋土			胴部 (転用)	土器 土器 土器 (転用)	沈線	竹管状工具により硬い波状文を施す。周辺部を磨っている。	普通	黒土式	9住B区7
	203	5類	埋土			胴部	土器	無文	無文。	普通	黒土式	9住 C-6-ル-ト3
	204		埋土	2.9×2.1×0.4		石器			同基式石鏡。チャート製。重量2.10g。	-	-	9住№.257



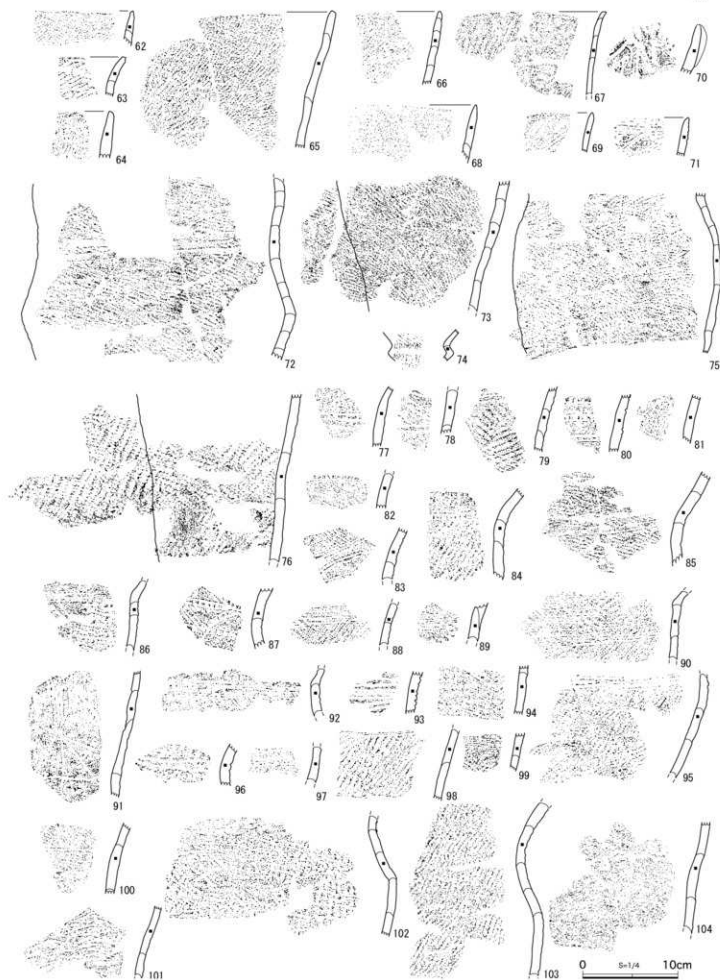
第46図 9号住居跡出土物1 (1/4)



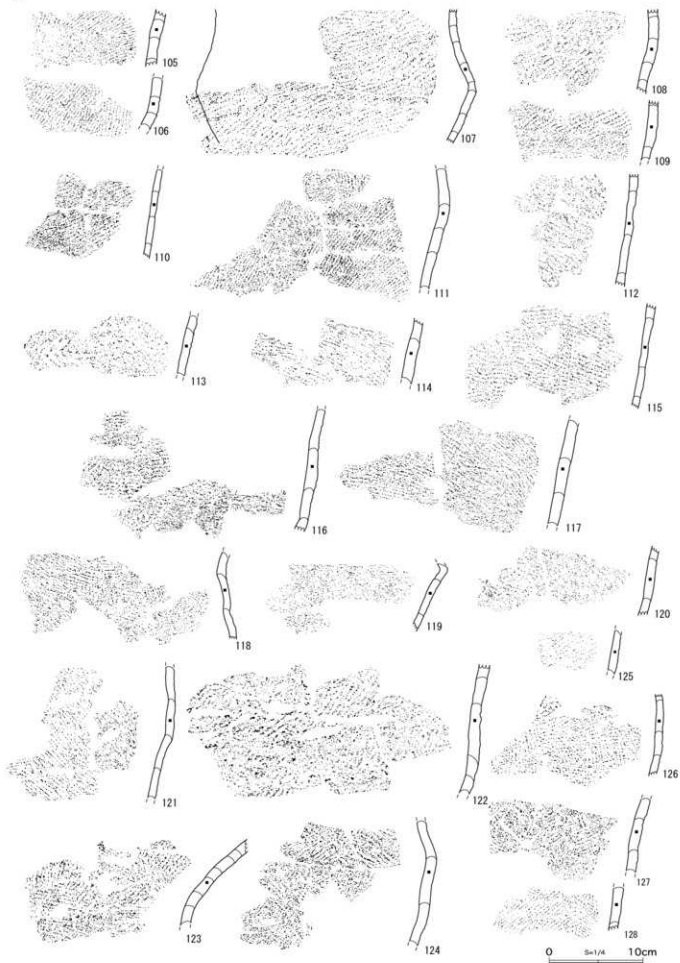
第47図 9号住居跡出土遺物2 (1/4)



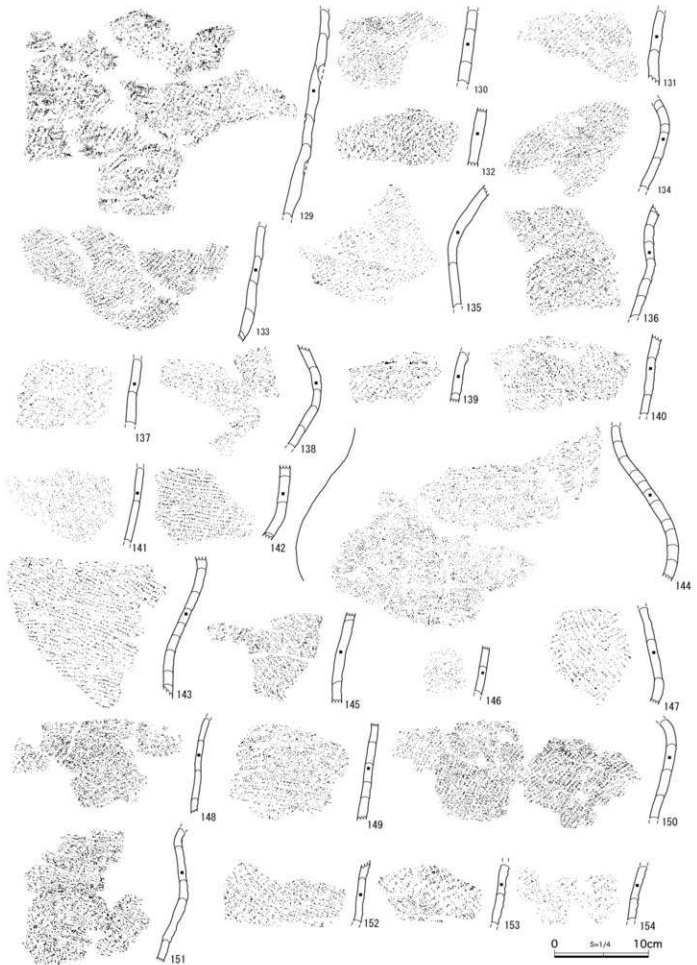
第48図 9号住居跡出土遺物3 (1/4)



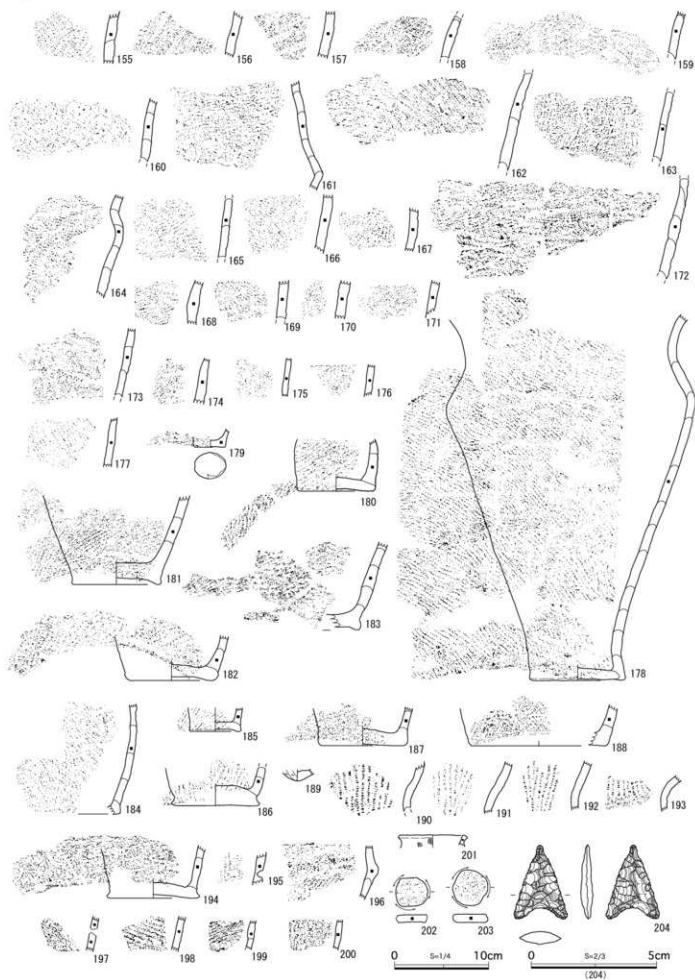
第49図 9号住居跡出土遺物4 (1/4)



第50図 9号住居跡出土物5 (1/4)



第51図 9号住居跡出土遺物6 (1/4)



第52図 9号住居跡出土遺物7 (1/4・2/3)

II 貝層の調査

今回の試掘調査と発掘調査で、貝塚を伴う住居跡は5軒確認され、そのうち3軒(7～9号住居跡)の貝塚を伴う住居跡の調査を行った。2軒(10・11号住居跡)については保存措置とした。

(1) 7号住居跡貝層

今回の調査で最大規模の貝層が遺存していた住居跡である。ただし、他の住居跡と同様に激しく攪乱を受けている部分が多々認められ、出土した貝類もその多くが細片である。総量は88080.72gで、貝種は25種確認された。最も多いのがマガキで55849.97g、次いでヤマトシジミ22376.83g、ハマグリ8330.89gで全体の98%を占める。第4位はアサリ448.73g、第5位ハイガイ433.63gである。

それぞれの貝ブロックで第1位の出土量を誇る貝種は貝ブロック1・7・18・20ではヤマトシジミであるが、そのほかにはマガキが第1位を占める。また、マガキは貝ブロック18を除きすべてのブロックで認められる。ヤマトシジミは貝ブロック19・23を除き認められる。ハマグリも出土量こそ前二者に及ばないが、貝ブロック6・19・21・23・25を除き認められる。また、貝ブロック10・22ではマガキに次いで第2位の出土量である。

第4・5位のアサリ・ハイガイは特定の貝ブロックの特定貝層中にややまとまって認められる傾向にある。特にハイガイは、調査時点でも貝ブロック1でヤマトシジミ②層・ハイガイ②層、ヤマトシジミ③層・ハイガイ②層、ハマグリ①層・ハイガイ①層、ハマグリ①層・ハイガイ②層、貝ブロック5でヤマトシジミ③層・ハイガイ①層、貝ブロック7でマガキ①(ハイガイ含)層、マガキ②(ハイガイ含)層として認識できた。アサリは調査時点では認識できなかったが貝ブロック1のヤマトシジミ①層、ヤマトシジミ③層、貝ブロック13のヤマトシジミ①層でややまとまって出土している。

その他の貝種では、オキシジミが出土総量の96%が貝ブロック1から出土している。極微量出土したマツカサガイ・カワアイ・ヘナタリ・ミルクイがほぼ一か所の貝ブロック中に認められる。

発掘調査時には28ヶ所(貝ブロック1～30)に分けていたが、整理作業時に、18ヶ所の貝層(以下、貝ブロック〔BL〕1～25)に統廃合を行った。各貝BLの概略は以下のとおりである。層位の概略は第17表貝ブロック層位模式表、組成については第21表

上福岡貝塚第2地点貝種別出土集計表のとおりである。

7号住居跡の貝塚は、火工廠の道路が遺構の上部に存在していたため、強度の圧力が貝塚(貝類等の動物遺存体)に影響していた。貝類は取り上げ時に粉々になるものが多く、道路築造による影響で貝塚上部は攪乱または元位置を留めていないものが多い。また、火工廠以前の耕作等の攪乱も受けていた。

① 貝BL1(貝BL1・2・3を統合)

住居跡の北東隅に位置し、小グリッド「34～36区」に広がり、火工廠以前の攪乱を受ける。貝BL17・25と隣接し、本来は同一の可能性が考えられる。

貝BLの規模は、長軸212cm×短軸95cm、厚さ14cmである。小グリッド「た34区」が最も厚く堆積し、「た36区」が薄い。確認面から最下層まで14面(層)に分類した。

基本的に、上層から下層にマガキ層、ハマグリ層、(ハイガイ含む)、ヤマトシジミ層が互層に堆積する。5面マガキ②層と6面ヤマトシジミ③層が広範囲に広がる。13・14面のヤマトシジミから貝類の廃棄が行われる。

② 貝BL5(貝BL4・5・6を統合)

住居跡の南隅に位置し、小グリッド「つ35・36区」、「て35～37区」に広がり、火工廠以前の攪乱を受ける。

貝BLの規模は長軸150cm×短軸90cm、厚さ19cmである。

確認面から最下層まで15面(層)に分類した。

基本的に、上層から下層にマガキ層、ハマグリ層、(ハイガイ含む)、ヤマトシジミ層が互層に堆積する。4・7・11・13面マガキ層と、5・8・9・12面(層)ヤマトシジミ層、10面(層)ハマグリ③層が広範囲に広がる。14・15面ヤマトシジミ層から貝類の廃棄が行われる。

③ 貝BL7(貝BL27を統合)

住居跡の中央部のやや南寄りに位置し、小グリッド「ち37区」、「つ36・37区」に広がり、火工廠以前の攪乱を受ける。

貝BLの規模は、長軸100cm×短軸51cm、厚さ14cmである。

確認面から最下層まで10面(層)に分類した。

基本的に、上層から下層にヤマトシジミ層、ハマグリ層、マガキ層が互層に堆積する。2面～4面、5面～7面、8面～9面で、各々一つのサイクルを呈する

とみられる。1・5面ヤマトシジミ層、7面マガキ②層が広範囲に広がる。10面のマガキ③層から貝類の廃棄が行われる。

④ 貝BL8 (貝BL26を統合)

住居跡の中央部南寄りに位置し、小グリッド「つ37・38区」、「て37・38区」に広がる。貝BL22と隣接し、本来は同一の可能性が考えられる。

貝類の動物依存体は、7号住居跡の覆土層にある楕円形状の土坑から出土した。土坑の規模は上端95cm×62cm、下端75cm×37cm、深さ8.4cmである。

貝BLの規模は、長軸116cm×短軸65cm、厚さ12cmである。確認面から最下層まで10面(層)に分類した。

基本的に、上層から下層にヤマトシジミ層、ハマグリ層、マガキ層が互層に堆積する。「て39区1・5区」は1面～5面、「て37区9・10・13・14区」は1面～10面まで存在する。1面～7面までと、10面マガキ③層は広範囲に広がる。10面のマガキ③層から貝類の廃棄が行われる。

⑤ 貝BL9

住居跡の西端に位置し、小グリッド「つ39区」、「て39区」に広がる。

貝BLの規模は、長軸38cm×短軸32cm、厚さ1.8cmである。ヤマトシジミとマガキを含む1層のみで、貝BL10からの流れ込みによる攪乱層の可能性が高い。

⑥ 貝BL10 (貝BL10・11・12を統合)

住居跡の西端に位置し、小グリッド「つ38・39区」、「て39区」に広がる。貝BL13と隣接し、本来は同一の可能性が考えられる。また貝BL9は本来貝BL10が攪乱され移動したものと考えられる。

貝BLの規模は、長軸115cm×短軸79cm、厚さ13cmである。確認面から最下層まで9面(層)に分類し、その下から出土した土器(注記No.72・73)を10面とした。

基本的に、上層から下層にヤマトシジミ層・ハマグリ層、マガキ層が互層に堆積する。1面～3面、4・5面、6・7面、8・9面で、各々一つのサイクルを呈すとみられる。3・5・7面マガキ層、4・6面ヤマトシジミ層・ハマグリ層が広範囲に広がる。最下層10面から土器(第31図注記No.72・73)が出土し、9面のマガキ④層から貝類の廃棄が行われる。

⑦ 貝BL13 (貝BL13・14・28～30を統合)

住居跡の北部に位置し、小グリッド「た38・39区」、

「ち38・39区」、「つ39区」に広がる。貝BL10・15・23と隣接し、貝BL10とは同一の可能性が考えられる。

また、全体的に1面のヤマトシジミ①層は攪乱の影響を受けている可能性がある。

貝BLの規模は、長軸210cm×短軸85cm、厚さ13cmである。確認面から最下層まで10面(層)に分類し、その下に溝状の窪みがあり11面(掘方)とした。

基本的に、上層から下層にヤマトシジミ層、マガキ層が互層に堆積し、一部にハマグリ層、カワナ層がみられる。1面～3面、4～6面、7～9面、10面で、各々一つのサイクルを呈すとみられる。1面ヤマトシジミ①層、3面マガキ①層が広範囲に広がる。1面(層)にみられるマガキ①層は、攪乱により3面マガキ①層が混入したものと考えられる。10面のマガキ④層・ヤマトシジミ⑤層から貝類の廃棄が行われる。

⑧ 貝BL15

住居跡の中央部やや北寄り、小グリッド「ち38区」に位置し、貝BL13・16と隣接する。

貝BLの規模は、長軸63cm×短軸33cm、厚さ9cmである。確認面から最下層まで3面(層)に分類した。上層から下層にヤマトシジミ①層、マガキ①層、ハマグリ①層が堆積する。マガキ層は広範囲に広がり、最下層のハマグリは数点出土する。

⑨ 貝BL16

住居跡の中央部に位置し、小グリッド「た37・38区」、小グリッド「ち37区」に広がり、火工廠以前の攪乱を受ける。貝BL15と隣接する。

貝BLの規模は、長軸106cm×短軸40cm、厚さ10cmである。確認面から最下層まで6面(層)に分類した。上層から下層にヤマトシジミ層、マガキ層が互層で堆積する。ハマグリ①層が2面(層)で部分的に出土し、4層(面)マガキ①層は広範囲に広がる。最下層のマガキ②層から廃棄が行われるが、極少量であるため平面図に範囲を記録することが出来なかった。ヤマトシジミ③層の一部の可能性も考えられる。

⑩ 貝BL17

住居跡の北東部、小グリッド「そ36区」・「た36区」に位置し、貝BL1・25と隣接する。本来は貝BL1・25と同一の可能性が考えられる。

貝BLの規模は、長軸29cm×短軸19cm、厚さ9cmである。1面(層)のマガキ層を主体にヤマトシジミを含む。

⑪ 貝BL18

住居跡の北端、小グリッド「そ38区」に位置し、貝BL18と隣接する。攪乱の可能性が考えられる。

貝BLの規模は、長軸13cm×短軸12cmである。1面(層)のみでマガキとヤマトシジミを含む。

⑫ 貝BL19

住居跡の北端、小グリッド「そ38区」に位置し、貝BL19と隣接する。攪乱の可能性が考えられる。

貝BLの規模は、長軸20cm×短軸17cmである。1面(層)のみでマガキとヤマトシジミを含む。

⑬ 貝BL20

住居跡の中央部、小グリッド「ち35・36区、つ35・36区」に位置し攪乱の可能性が考えられる。

貝BLの規模は、長軸22cm×短軸17cm、厚さ15cmである。1面(層)ヤマトシジミ層、2面(層)マガキ層の2層である。

⑭ 貝BL21

住居跡の中央部、小グリッド「ち34・35区、つ34・35区」に位置する。

貝BLの規模は、長軸41cm×短軸31cm、厚さ7cmである。1面(層)ヤマトシジミ層、2面(層)マガキ層の2層である。

⑮ 貝BL22

住居跡中央部の南西寄り、小グリッド「て37区」

に位置し、貝BL8と隣接する。本来は貝BL8と同一の可能性も考えられる。

貝BLの規模は、長軸40cm×短軸26cm、厚さ6cmである。確認面から最下層まで3面(層)に分類した。上層から下層にマガキ①層、ハマグリ①層、マガキ①層が堆積する。マガキ①層の中にハマグリが含まれるものと考えられる。

⑯ 貝BL23

住居跡の北端、小グリッド「た38区」に位置する。

貝BLの規模は、長軸38cm×短軸26cm、厚さ8cmである。マガキ層1面の純貝層である。

⑰ 貝BL24

住居跡中央部の南寄り、小グリッド「つ35区」に位置し攪乱の可能性が考えられる。また貝BL5の一部の可能性もある。

貝BLの規模は、長軸32cm×短軸21cm、厚さ7cmである。1面(層)ヤマトシジミ①層、2面(層)マガキ①層、3面(層)ハマグリ①層の3層である。マガキ①層の分布が広く、ヤマトシジミとハマグリは、その両端の南北に分かれる。

⑱ 貝BL25

住居跡の北東部、小グリッド「た36区」に位置し、貝BL1・25と隣接する。本来は貝BL1・17と同一

第17表 7号住居跡貝ブロック層位模式表①

貝BL1 (た34区)	貝BL1 (た35区)	貝BL1 (た36区)
1面 マガキ①		1面 マガキ①
2面 ヤマトシジミ①		2面 ヤマトシジミ①
3面 ハマグリ①	3面 ハマグリ①	
4面 ヤマトシジミ②		
5面 マガキ②	5面 マガキ②	
6面 ヤマトシジミ③	6面 ヤマトシジミ③	
7面 マガキ③		
	土層	土層
8面 ハマグリ③	8面 ハマグリ③	
9面 ヤマトシジミ④	9面 ヤマトシジミ④	9面 ヤマトシジミ④
	10面 マガキ④	
	11面 ハマグリ④	
	12面 マガキ⑤	
13面 ヤマトシジミ⑤	13面 ヤマトシジミ⑤	
14面 ヤマトシジミ⑥	14面 ヤマトシジミ⑥	

貝BL5 (つ35区・36区・て37区・38区・39区)	
1面 マガキ①	
2面 ヤマトシジミ①	
3面 ハマグリ①	
4面 マガキ②	
5面 ヤマトシジミ②	
6面 ハマグリ②	
7面 マガキ③	
8面 ハイガイ①	
9面 ヤマトシジミ③	
10面 ハマグリ③	
11面 マガキ④	
12面 ヤマトシジミ④	
13面 マガキ⑤	
14面 ヤマトシジミ⑤	
	土層
15面 ヤマトシジミ⑥	

貝BL7 (ち37区・つ36区・つ37区)
1面 ハマグリ①
2面 ヤマトシジミ①
3面 ハマグリ②
4面 マガキ①
5面 ヤマトシジミ②
6面 ハマグリ③
7面 マガキ②
8面 ヤマトシジミ③
9面 ハマグリ④
10面 マガキ③

貝BL8 (て38区1・5)	貝BL8 (て37区9・10・13・14)
1面 ハマグリ①	1面 ハマグリ①
2面 ヤマトシジミ①	2面 ヤマトシジミ①
3面 マガキ①	3面 マガキ①
4面 ハマグリ②	4面 ハマグリ②
5面 ヤマトシジミ②	5面 ヤマトシジミ②
	6面 ハマグリ③
	7面 マガキ②
	8面 ヤマトシジミ③
	9面 ハマグリ④
	10面 マガキ③

貝BL10 (つ38区・つ39区・て39区)	
1面 ヤマトシジミ①	
2面 ハマグリ①	
3面 マガキ①	
4面 ハマグリ②、ヤマトシジミ②	
5面 マガキ②	
6面 ヤマトシジミ③、ハマグリ③	
7面 マガキ③	
8面 ヤマトシジミ④	
9面 ハマグリ④	
10面 マガキ④	
	土器No.97

第18表 7号住居跡貝ブロック層位模式表②

貝BL13 (た38・39区2)	貝BL13 (た38区16・ち38区13)	貝BL13 (ち39区6～8)	貝BL13 (ち38区15・16)
1面 マガキ①, ヤマトシジミ① 土層	1面 マガキ①, ヤマトシジミ① 土層	1面 マガキ①, ヤマトシジミ①	1面 マガキ①, ヤマトシジミ①
2面 ヤマトシジミ② 土層	2面 ヤマトシジミ②	2面 ヤマトシジミ②	2面 ヤマトシジミ②
3面 マガキ①	3面 マガキ①	3面 マガキ①	3面 マガキ①
	4面 ヤマトシジミ③		4面 ヤマトシジミ③
5面 ハマグリ①	5面 ハマグリ①		
6面 マガキ②	6面 マガキ②		6面 マガキ②
			7面 ヤマトシジミ④
			8面 マガキ③
			カワウナ①
			9面 ヤマトシジミ⑤
			10面 マガキ④

貝BL15 (ち38区)
1面 ヤマトシジミ①
2面 マガキ①
3面 ハマグリ①

貝BL16 (ち38区)
1面 ヤマトシジミ①
2面 ハマグリ①
3面 ヤマトシジミ②
4面 マガキ①
5面 ヤマトシジミ③
6面 マガキ②

貝BL16 (た38区14～16・ち37区13, 14)
1面 ヤマトシジミ①
2面 ハマグリ①
4面 マガキ①

貝BL17
1面 マガキ, ヤマトシジミ

貝BL18 (ち38区)
1面 マガキ, ヤマトシジミ

貝BL19
1面 マガキ, ヤマトシジミ

貝BL20
1面 ヤマトシジミ
2面 マガキ

貝BL21
1面 ヤマトシジミ
2面 マガキ

貝BL22
1面 マガキ①
2面 ハマグリ①
3面 マガキ①

貝BL23
1面 マガキ

貝BL24 (つ35区10, 14)
1面 ヤマトシジミ①
2面 マガキ①
3面 ハマグリ①

貝BL25
1面 マガキ, ヤマトシジミ

一の可能性が考えられる。

貝BLの規模は、長軸16cm×短軸10cm、厚さ4cmである。1面(層)のマガキ層を主体にヤマトシジミを含む。

(2) 8号住居跡貝層

6ヶ所の貝層(以下、貝ブロック{BL}I～VI)を検出した。本住居跡の貝ブロックは樹木の根等による影響を僅かに受けるが、火工廠等の人為的な影響は少なく、全体的に保存状態は良好である。

小規模な貝ブロックが、いずれも床面上から形成されている。他の住居跡と同様に出土した貝は細片が多い。貝の出土総量は9901.05gで貝種は20種が確認された。最も多いのがヤマトシジミで6542.09g、次いでマガキ2276.25g、ハマグリ842.83gで全体の98%を占める。第4位アサリ100.11g、第5位シオブキ42.97gである。

それぞれの貝ブロックで第1位の出土量を誇る貝種は貝ブロックVを除きマガキである。貝ブロックVはヤマトシジミである。ただし、本住居跡では上述のように8ヶ所の貝ブロックが検出されているが、出土総量の68.6%以上が貝ブロックVに属するため、総量ではヤマトシジミが第1位の出土量を誇る。

第4位のアサリは貝ブロックIVでマガキに次ぐ出土量であり、やや特定貝ブロックに偏って出土している。シオブキは貝ブロックIIIで出土総量の87.8%以上が纏まって出土している。極微量出土したタニシ・イシガイ・ミルクイ・ツメタガイも一ヶ所の貝ブロック中に認められる。

① 貝BLI

8住居跡の直上、小グリッド「お14・15区」に位置する。

貝BLの規模は、長軸30cm×短軸22cm、厚さ10cmである。

上層から下層に1面(層)ヤマトシジミ①層、2面(層)マガキ①層、3面(層)ヤマトシジミ②層、4面(層)マガキ②層が確認された。床面付近は炉の影響とみられる灰層と焼土層が検出された。

② 貝BLII

住居跡の北西部で貝BLIとIIIの間、小グリッド「つ35区」に位置する。攪乱の可能性はある。本来は貝BLIの一部だった可能性が高い。貝BLの規模は、長軸25cm×短軸8cm、厚さ8cmである。上層から下層に1面(層)ヤマトシジミ層、2面(層)マガキ層が確認された。1面のヤマトシジミ層は、貝BLIのヤマトシジミ①層に、2面のマガキ層は4面のマガキ

第19表 8号住居跡貝ブロック層位模式表

貝層 I		貝層 IV	
1面	ヤマトシジミ①	1面	ヤマトシジミ①
2面	マガキ①	2面	マガキ①
3面	ヤマトシジミ②	3面	ヤマトシジミ②
4面	マガキ②	貝層 V	
5面	炭範囲	1面	ヤマトシジミ①
6面	焼土範囲	2面	ヤマトシジミ②
貝層 II		マガキ①	
1面	ヤマトシジミ	ハマグリ①	
2面	マガキ	ハマグリ②	
貝層 III		ハマグリ③	
1面	マガキ①	ヤマトシジミ③	
2面	ヤマトシジミ①	貝層 VI	
3面	マガキ②	1面 マガキ	
		ヤマトシジミ	

②層に対応する可能性有。

③ 貝BL III

住居跡の北端、小グリッド「え14・15区」に位置する。貝BLの規模は、長軸55cm×短軸35cm、厚さ10cmである。

上層から下層に1面(層)マガキ①層、2面(層)ヤマトシジミ①層、3面(層)マガキ②層が確認された。マガキ①層の下部にオオタニシ数点が出土、ヤマトシジミ①層にはハマグリやオキシジミを含む。

④ 貝BL IV

住居跡の北部、小グリッド「え14区、お14区」に位置し、2ヶ所に分かれる。

貝BLの規模は、長軸45cm×短軸35cmと長軸10cm×短軸9cm、厚さ8cmである。

上層から下層に1面(層)ヤマトシジミ①層、2面(層)マガキ①層、3面(層)ヤマトシジミ②層が確認された。マガキ①層は土層をほとんど含まずマガキの塊に近い。

⑤ 貝BL V

住居跡の東部、小グリッド「え12・13区、お12・13区」に位置する。

貝BLの規模は、長軸98cm×短軸48cm、厚さ10cmである。

上層から下層に1面(層)ヤマトシジミ①層、2面(層)ヤマトシジミ②層・マガキ①層・ハマグリ①層、3面(層)ハマグリ②③、4面(層)ヤマトシジミ③層が確認された。ヤマトシジミを主体に、マガキ・ハマグリ・オオタニシ・ハイガイを出土する。

⑥ 貝BL VI

住居跡の南部、小グリッド「か13・14区」に位置する。

貝BLの規模は、長軸25cm×短軸16cm、厚さ8cmである。1面(層)マガキ層を主体にヤマトシジミを

僅かに含む。

(3) 9号住居跡

4ヶ所の貝層(以下、貝ブロック〔BL〕I~IV)を検出した。本住居跡の貝ブロックは樹木の根等による影響を僅かに受けるが、火工廠等の人為的な影響は少なく、全体的に保存状態は良好である。

小規模な貝ブロックが4ヶ所検出された。貝ブロックIII・IVがやや大きく住居床面上から形成されている。貝ブロックI・IIはより小規模で住居覆土中層中に検出された。他の住居跡と同様に出土した貝は細片が多い。貝の出土総量は7593.07gで、貝種は17種が確認された。最も多いものがマガキで6295.13g、次いでヤマトシジミ1009.61g、チリメンカワニナ183.64gで、全体の98%以上を占める。

他の2軒の住居跡と違いハマグリよりチリメンカワニナが多く出土している。チリメンカワニナは貝ブロックIIIにのみ認められる。特にカワニナ①層として独立した層として取り上げたように、まとめて廃棄した状況が認められる。

貝ブロックが4ヶ所のみであるため、他の住居貝層と比べ、チリメンカワニナの比率が高くなったものと思われる。その一方で、ハマグリは全体の1%未満であるため、もともと他の住居貝層に比べ、出土比率が低いものと思われる。

① 貝BL I

9住居跡の東端、小グリッド「に0区」に位置する。

貝BLの規模は、長軸22cm×短軸17cm、厚さ8cmである。

上層から下層に1面(層)マガキ①層、土層を挟んで、2面(層)マガキ②層が確認された。マガキ②層にハマグリを僅かに含む。住居跡の床面から7cmほど土層が堆積した後には貝層が形成される。

② 貝BL II

住居跡中央部で貝BL IIIとIVの間、小グリッド「ね1区」に位置する。

貝BLの規模は、長軸22cm×短軸17cm、厚さ9cmである。

上層から下層に1面(層)ヤマトシジミ①層、2面(層)ハマグリ①層・ハイガイ①層、3面(層)ヤマトシジミ②層、4面(層)マガキ①層が確認された。ヤマトシジミ①層は面で広がるが、他の層は僅かに出土する。

③ 貝BL III

住居跡中央部で貝BL IとIIの間、小グリッド「ぬ

1・2区、ね1・2区」に位置する。

貝BLの規模は、長軸68cm×短軸62cm、厚さ16cmである。

上層から下層に1面(層)マガキ①層・ヤマトシジミ①層、土層を挟んで2面(層)マガキ②層、3面(層)カワナ①層と巻貝・ハイガイ層、4面(層)ヤマトシジミ②層、5面(層)マガキ③層、6面(層)ヤマトシジミ③層が確認された。2面と5面のマガキ②・③層の中に、4面のヤマトシジミ②が挟まれる様相である。また、注記No.880・881・873の土器は貝層形成後に廃棄されたものである。3面(層)カワナ①層と巻貝・ハイガイ層とした貝類は、マガキ②層とヤマトシジミ③層の間と、マガキ③とヤマトシジミ④層の間からも出土する。

④ 貝BLIV

住居跡の南部に位置し、小グリッド「の2区、は2区」に広がり西側は攪乱を受ける。住居跡廃棄後に堆積した土層の傾斜に沿って、土器と動物遺存体が出土する。こうした貝塚の形成時期は、同住居跡内の貝BLI～3も同様と考えられる。ただし、土器の集中的な廃棄状況は、住居廃絶後に窪み状を呈し、そこに貝塚の廃棄と形成がされ、さらに土器の集中廃棄が行われたものと考えられる。

貝BLの規模は、長軸86cm×短軸22cm、厚さ20cmである。

上層から下層に1面(層)マガキ①層、2面(層)遺物層(土器)、3面(層)ヤマトシジミ①～③層、4面(層)マガキ②層が確認された。縄文土器(注記No.889)を挟んで上下層よりマガキ①・②層が出土した。またヤマトシジミ②層は土器(注記No.889)の中より出土した。マガキ①層・②層は広い範囲に広がるが、ヤマトシジミは量的にも面的にも少ない。

第20表 9号住居跡貝ブロック層位模式表

貝BL I		貝BL II	
1面	マガキ①	1面	ヤマトシジミ①
	土層	2面	ハマグリ①
2面	マガキ②		ハイガイ①
		3面	ヤマトシジミ②
		4面	マガキ①

貝BL III		貝BL IV	
1面	マガキ①	1面	マガキ①
	ヤマトシジミ①	2面	遺物(土器)
	土層	3面	ヤマトシジミ①～③
2面	マガキ②	4面	マガキ②
3面	カワナ①		
	ハイガイ		
4面	ヤマトシジミ②		
5面	マガキ③		
6面	ヤマトシジミ③		

Ⅲ 産出した動物遺体群

(1) はじめに

今回の調査では7軒の黒浜期の住居跡が検出されたが、そのうち7・8・9号住居跡で貝層が認められた。各住居ごとの貝層の所見についてはすでに述べているので、ここでは、3軒の貝層の異同について見ていきたい。

現地調査では、検出された貝ブロックごとに取り上げを行った。平面的な位置に関しては1m四方の大グリッドをさらに16分割(25×25cm)し取り上げ単位とした。さらに水平位置を考慮し各層ごとに取り上げた。取り上げの際には、貝だけでなく、土層を含め取り上げた。通しナンバーを振り台帳を作成した。取り上げ単位に軽重はあるが7号住居跡で666袋、8号住居跡で150袋、9号住居跡で58袋の合計874袋に及んだ。

整理事業における貝層の調査は、ふじみの市教育委員会2009『市内遺跡群4』第2章上福岡貝塚第1地点の本調査のp.173の①-2 資料の抽出方法に準じて行った。

(2) 住居跡検出の貝種について

7号住居跡が88080.72g、8号住居跡が9901.05g、9号住居跡が7593.07gの合計105574.84gが出土した。出土した貝種は28種で出土総量が多い種から記すとマガキ・ヤマトシジミ・ハマグリ・アサリ・ハイガイ・オオノガイ・チリメンカワナ・シオフキ・サルボウ・オキシジミ・オオタニシ・カガミガイ・アカニシ・ミルクイ・マツカサガイ・ウミニナ・カワナ・タニシ・カクタニシ・イボウミニナ・アラムシロ・イタボガキ・ツメタガイ・イシガイ・ヘナタリ・キサゴ・マテガイ・カワアイである。前述のように遺存状態は悪く、多くの貝が細片となっている。

貝の出土総量では7号住居跡が最も多く全体の83%以上を占め他の2軒の住居跡を圧倒している。しかし、各住居跡を通しての主体となる貝種は共通している。7・9号住居跡ではマガキ・ヤマトシジミ・ハマグリ順であるが、8号住居跡では、マガキとヤマトシジミが入り替わっているが、主体を占める3種の貝は変わらない。さらに1・2を占めるマガキとヤマトシジミを合わせた比率は7号住居跡が88.8%、8号住居跡が89.0%、9号住居跡が96.2%である。これにハマグリを加えると、いずれも96%以上の比率になる。

第21表 上福岡貝塚第2地点貝種別出土集計表

貝種	7号住居跡 (g)	8号住居跡 (g)	9号住居跡 (g)	出土総量 (g)	出土比率 (%)
マガキ	55849.97	2276.25	6295.13	64421.35	61.020%
ヤマトシジミ	22376.83	6542.09	1009.61	29928.53	28.348%
ハマグリ	8330.89	842.83	33.94	9207.66	8.721%
アサリ	448.73	100.11	2.07	550.91	0.522%
ハイガイ	433.63	13.29	24.14	471.06	0.446%
オオノガイ	210.08	4.29	0	214.37	0.203%
チリメンカワナ	13.18	6.34	183.64	203.16	0.192%
シロフキ	109.31	42.97	9.61	161.89	0.153%
サルボウ	111.44	4.99	4.58	121.01	0.115%
オキシジミ	81.85	0	0	81.85	0.078%
オオタニシ	11.54	21.32	11.6	44.46	0.042%
カガミガイ	34	8.14	0	42.14	0.040%
アカニシ	20.35	0	0	20.35	0.019%
ミルカイ	0.55	16.32	0	16.87	0.016%
マツカサガイ	2.68	13.23	0	15.91	0.015%
ウミナ	6.9	3.18	3.64	13.72	0.013%
カワナ	9.9	0.06	1.02	10.98	0.010%
タニシ	7.78	0.69	1.81	10.28	0.010%
カタタニシ	0	0	9.92	9.92	0.009%
イボウミナ	6.89	0	0	6.89	0.007%
アラムシロ	4.57	1.01	0.36	5.94	0.006%
イタボガキ	5.16	0	0	5.16	0.005%
ツメタガイ	0	1.5	0.85	2.35	0.002%
イシガイ	0	2.28	0	2.28	0.002%
ヘナタリ	1.68	0	0	1.68	0.002%
キサゴ	1.04	0	0.62	1.66	0.002%
マテガイ	1.26	0	0	1.26	0.001%
カワアイ	0.51	0.16	0.53	1.2	0.001%
合計	88080.72	9901.05	7593.07	105574.84	100.000%

これらのことから、マガキ・ヤマトシジミを集中的に採集していた様子が見て取れる。

(3) 混貝率について

複数の層序が確認できる貝ブロックでは、混貝率が50%を超えるものが主体を占める。その点では、所謂混土貝層と呼べるものである。

7号住居跡では19ヶ所の貝ブロックが検出されているが、貝層形成が未発達なものや、攪乱を受けて層序が認められない貝ブロック9・17～19で50%を切るがその他の貝ブロックでは50%を遥かに超えるものが多い。貝ブロック7・15・16・20・21・22・24で、いずれの細分層でも50%を超えている。

細分層毎に見てみると、75%を超えるものが、貝ブロック1のヤマトシジミ②層、ヤマトシジミ②・ハイガイ②層、ハイガイ②層、貝ブロック5のマガキ④層、ハマグリ②層、貝ブロック7のマガキ①層、マガキ②層、マガキ①(オオタニシ含む)層、マガキ①(ハイガイ含む)層、マガキ③層、ヤマトシジミ①層、シジミ①(炭)層、ハマグリ②層、ハマグリ③層、ハマグリ③(オオタニシ含む)層、ハマグリ③(サルボウ含む)層、ハマグリ④層、貝ブロック8のマガキ③層、ヤマトシジミ②層、ハマグリ①層、貝ブロック10のハマ

グリ①層、貝ブロック13のオオノガイ層、マガキ①層、マガキ②層、マガキ③・④層、貝ブロック15のマガキ①層、貝ブロック16のヤマトシジミ②層、ハマグリ①層、貝ブロック20のヤマトシジミ①層を挙げることができる。特に貝ブロック7で攪乱をのぞく16細分された内、12の貝層で混貝率が75%を超えている。

8号住居跡では7か所の貝ブロックが検出された。その内、貝ブロックⅠ・Ⅲ・Ⅴ・Ⅵで混貝率が50%を超えている。細分層ごとに見ると、貝ブロックⅤのヤマトシジミ②層、ヤマトシジミ③層、ヤマトシジミ③(カワナ含む)層、ハマグリ①・マガキ①層で75%以上の混貝率が認められる。

9号住居跡では2か所の貝ブロックが検出されたが、いずれも混貝率が50%を超えている。細分層ごとに見ると、貝ブロックⅢのマガキ①層、マガキ②層、マガキ③層、ヤマトシジミ①層、ヤマトシジミ②層、貝ブロックⅣのマガキ①層、マガキ②層で混貝率が75%を超えている。

各住居跡ごとの混貝率は7号住居跡が69.5%、8号住居跡が70.2%、9号住居跡が81.4%である。7・8号住居跡が混貝率が70%前後であるのに対して、9号住居跡は前2者より10%程高くなっている。ま

た、いずれの住居跡でも、貝ブロックごとに見ると、細分層の過半数で50%以上の混貝率をもつ、安定した貝ブロックが認められる。例えば、7号住居跡の貝ブロック1・5・7・8・13・15・16、8号住居跡では貝ブロックⅢ・Ⅴ、9号住居跡では、貝ブロックⅢ・Ⅳがそれぞれ該当する。7号住居跡では、それ以外にも、過半数の細分層で50%を超える混貝率をもつが、細分層数が少ないので除外した。

これらの安定した貝層には、前述した出土総量の1・2であるマガキ・ヤマトシジミのほかにはハマグリ層が概ね認められることに特徴を見出すことができるであろう。ハマグリ層と冠したものの混貝率は、第7号住居跡の貝ブロック1のハマグリ①・ハイガイ②層、貝ブロック13のハマグリ①層を除き混貝率は50%を超える。中には7号住居跡の貝ブロック5ハマグリ②層のように90%を超えるものも存在する。このことから、ハマグリは一時期に消費され、一括して廃棄されたものと思われる。

(4) 出土貝の左右及びサイズについて

すでに繰り返してきたように今回の調査で検出された貝層の貝はいずれも細片が多く計量に耐えられるものはあまり多くなかった。その中で7号住居跡から出土した貝で左右を計測した(第25表)。左右が判明した貝種はヤマトシジミ、マガキ、ハイガイ、ハマグリ、サルボウ・アサリ・シオフキであるが、ヤマトシジミを除き、数は少ないが、左右の数に偏りは認められない。

次にヤマトシジミの殻長について述べる。7号住居跡では876個体を対象とした。ヒストグラムを見ると正規分布に近く22~24mmにピークが認められる。8・9号住居跡でも同様な正規分布が認められる。ただし8号住居跡では殻長の平均値は26.99mmで、7号住居跡にくらべやや大きい。

範囲について見てみると、7号住居跡が42、8号住居跡が31.5、9号住居跡が23で住居跡により違いが認められる。母数の違いも反映されていると思われるが、7号住居跡が外れ値があり、9号住居跡の方がより個体間に殻長の大きさに差がないと言える。ただし、このことが特定の大きさを意図的に採取していたわけではないであろう。当時の海浜に生息するヤマトシジミの平均的な個体の大きさを反映したものと考えられる。

第22表 7号住居跡混貝率集計表

(単位 g%)

貝No.		マガキ①	マガキ②	マガキ③	マガキ④	マガキ⑤	ヤマトシジミ①	ヤマトシジミ②	ヤマトシジミ② ハイガイ②
1	洗浄後重量	1122.82	2971.04	2591.53	1379.35	42.65	6497.49	328.65	455.27
	貝重量	314.52	2060.09	1937.15	970.19	28.62	3295.4	257.35	396.36
	混貝率	28.01%	69.34%	74.75%	70.34%	67.10%	50.72%	78.31%	87.06%
		ヤマトシジミ③ ハイガイ②	ヤマトシジミ④	ヤマトシジミ⑤	ヤマトシジミ⑥	ハマグリ①	ハマグリ① ハイガイ①	ハマグリ① ハイガイ②	ハマグリ③
5	洗浄後重量	147.29	771.03	1630.46	56.75	447.15	145.35	245.67	1809.75
	貝重量	128.68	561.21	927.02	18.31	292.47	84.52	14.33	1226.69
	混貝率	87.37%	72.79%	56.96%	32.26%	65.41%	58.15%	5.83%	67.78%
		マガキ①	マガキ②	マガキ③	マガキ④	マガキ⑤	ヤマトシジミ①	ヤマトシジミ②	ヤマトシジミ③
6	洗浄後重量	954.05	5941.55	7417.18	10316.38	6321.18	717	2487.42	193.69
	貝重量	514.42	4452.38	5195.36	7882.64	4705.02	475.3	1643.67	133.13
	混貝率	53.92%	74.94%	70.04%	76.41%	74.43%	66.29%	66.08%	68.73%
		ヤマトシジミ④	ヤマトシジミ⑤	ヤマトシジミ⑥	ハマグリ①	ハマグリ②	ハマグリ③	覆乱	
7	洗浄後重量	307.29	54.47	15.24	405.38	275.26	764.57	3736.88	
	貝重量	220.42	14.07	2.72	294.47	248.61	524.58	2340.1	
	混貝率	71.73%	25.83%	17.85%	72.64%	90.32%	68.61%	62.62%	
		不明							
8	洗浄後重量	62.68							
	貝重量	26.55							
	混貝率	42.36%							
		マガキ①	マガキ① (ハイガイ含)	マガキ②	マガキ① (オオタニシ含)	マガキ① (ハイガイ含)	マガキ③	ヤマトシジミ①	ヤマトシジミ① (覆)
9	洗浄後重量	526.43	98.29	2102.64	553.06	701.87	683.84	4796.92	1517.64
	貝重量	440.73	67.13	1588.89	484.1	548.39	522.83	3697.49	1292.25
	混貝率	83.72%	68.30%	75.57%	87.53%	78.13%	76.46%	77.08%	85.15%
		ヤマトシジミ② (カワニナ含)	ヤマトシジミ② (覆3)	シジミ③	ハマグリ②	ハマグリ③	ハマグリ③ (オオタニシ含)	ハマグリ③ (サルボウ含)	ハマグリ④
10	洗浄後重量	80.11	160.72	445.32	73.03	143.91	310.24	115.06	357.29
	貝重量	57.13	109.69	323.75	60.52	115.16	245.16	87.67	294.68
	混貝率	71.31%	68.25%	72.70%	82.87%	80.02%	79.02%	76.20%	82.48%
		覆乱							
11	洗浄後重量	177.26							
	貝重量	113.99							
	混貝率	64.31%							
		マガキ①	マガキ②	マガキ③	ヤマトシジミ①	ヤマトシジミ②	ヤマトシジミ③	ハマグリ①	ハマグリ②
12	洗浄後重量	2517.87	1298.7	3018.99	471.63	1083.73	111.29	600.19	1195.14
	貝重量	1836.64	968.43	2268.2	201.91	821.99	54.17	469.08	693.06
	混貝率	72.94%	74.57%	75.13%	42.81%	75.85%	48.67%	78.16%	57.99%
		ハマグリ④							
13	洗浄後重量	61.59							
	貝重量	35.03							
	混貝率	56.88%							
		覆乱							
14	洗浄後重量	155.45							
	貝重量	34.46							
	混貝率	22.17%							
		混貝土	マガキ①	マガキ②	マガキ③	ヤマトシジミ①	ヤマトシジミ② ハマグリ②	ヤマトシジミ③ ハマグリ③	ハマグリ④
15	洗浄後重量	47.44	1779.64	756.29	998.64	338.58	1032.17	330.16	508.35
	貝重量	23.97	1177	525.27	738.62	93.1	770.57	208.58	394.97
	混貝率	50.53%	66.14%	69.45%	73.96%	27.50%	74.66%	63.18%	77.70%
		オオノガイ	マガキ①	マガキ②	マガキ③・④	マガキ④	カワニナ①	ヤマトシジミ①	ヤマトシジミ① (覆乱)
16	洗浄後重量	2.98	6230.71	983.55	289.6	15.96	18.26	3521.95	943.77
	貝重量	2.96	5117.4	741.62	224.36	2.28	7.48	1618.24	492.19
	混貝率	99.33%	82.13%	72.94%	77.47%	14.29%	40.96%	45.95%	52.15%
		ヤマトシジミ③	ヤマトシジミ④	ハマグリ①					
17	洗浄後重量	141.41	18.47	42.31					
	貝重量	84.08	9.29	14.14					
	混貝率	59.46%	50.30%	33.42%					
		マガキ①	ヤマトシジミ①	ハマグリ①					
18	洗浄後重量	1438.28	426.14	29.39					
	貝重量	1088.5	285.61	19.34					
	混貝率	75.68%	67.02%	65.80%					

(単位 g.%)

16		マガキ①	ヤマトシジミ①	ヤマトシジミ②	ヤマトシジミ③	ハマグリ①			
	洗浄後重量	5179.1	269.03	64.79	49.61	92.8			
	貝重量	3817	183.06	48.75	27.67	77.49			
	混貝率	73.70%	68.04%	75.24%	55.78%	83.50%			
17		マガキ①							
	洗浄後重量	410.1							
	貝重量	174.26							
	混貝率	42.49%							
18		攪乱							
	洗浄後重量	37.2							
	貝重量	0.55							
	混貝率	1.48%							
19		マガキ①							
	洗浄後重量	199.51							
	貝重量	50.64							
	混貝率	25.38%							
20		マガキ①	ヤマトシジミ①	一括					
	洗浄後重量	257.86	409.86	429.82					
	貝重量	177.15	324.64	315.87					
	混貝率	68.70%	79.21%	73.49%					
21		マガキ①	ヤマトシジミ①						
	洗浄後重量	150.31	135.16						
	貝重量	110.48	82.66						
	混貝率	73.50%	61.16%						
22		マガキ①	ハマグリ①						
	洗浄後重量	981.81	86.91						
	貝重量	637.53	57.56						
	混貝率	64.93%	66.23%						
23		カキ①							
	洗浄後重量	462.11							
	貝重量	277.82							
	混貝率	60.12%							
24		ヤマトシジミ①	ハマグリ①						
	洗浄後重量	38.19	559.18						
	貝重量	21.06	393.45						
	混貝率	55.15%	70.36%						
25		マガキ①							
	洗浄後重量	331.17							
	貝重量	191.37							
	混貝率	57.79%							
その他		住居一括	攪乱						
	洗浄後重量	45.5	15.89						
	貝重量	36.72	0.01						
	混貝率	80.70%	0.06%						

第23表 8号住居跡混貝率集計表

(単位 g %)

貝目 No.		マガキ①	マガキ① ヤマトシジミ①	マガキ②	ヤマトシジミ①	ヤマトシジミ②	土層		
1	洗浄後重量	488.21	58.19	358.53	142.57	70.96	24.48		
	貝重量	325.51	9.02	212.62	61.91	28.56	1.7		
	混貝率	66.67%	15.50%	59.30%	43.42%	40.25%	6.94%		
2		マガキ①	シジミ①	土層					
	洗浄後重量	173.49	66.63	17.4					
	貝重量	88.53	27.15	0					
	混貝率	51.03%	40.75%	0.00%					
3		マガキ①	マガキ① ヤマトシジミ① マガキ②	マガキ②	ヤマトシジミ①	土層			
	洗浄後重量	1501.14	37.42	392.82	224.8	111.55			
	貝重量	1056.58	0.01	241.61	124.39	25.19			
	混貝率	70.39%	0.03%	61.51%	55.33%	22.58%			
4		マガキ①	マガキ②	ヤマトシジミ①	ヤマトシジミ②				
	洗浄後重量	808.63	13.65	231.41	202.96				
	貝重量	486.07	0.58	38.49	81.68				
	混貝率	60.11%	4.25%	16.63%	40.24%				
5		マガキ①	ヤマトシジミ①	ヤマトシジミ②	ヤマトシジミ③	ヤマトシジミ③ (カワニナ)	ヤマトシジミ④	ハマグリ① マガキ①	ハマグリ②
	洗浄後重量	8.04	416.99	4018.55	2316.77	0.59	968.6	93.53	334.94
	貝重量	6.01	95.55	3606.47	1890.37	0.59	536.85	73.59	228.74
	混貝率	74.75%	22.91%	89.75%	81.60%	100.00%	55.43%	78.68%	68.29%
		ハマグリ③	土層						
	洗浄後重量	34.9	5.93						
	貝重量	26.07	0						
6		マガキ①	土層						
	洗浄後重量	460.97	12.75						
	貝重量	292.27	0.81						
	混貝率	63.40%	6.35%						
8		ヤマトシジミ①							
	洗浄後重量	33.57							
	貝重量	1.93							
	混貝率	5.75%							
不明		不明							
	洗浄後重量	1.96							
	貝重量	0.35							
	混貝率	17.86%							

第24表 9号住居跡混貝率集計表

(単位 g %)

貝目 No.		2層	マガキ①	マガキ②	マガキ③	カワニナ①	ヤマトシジミ①	ヤマトシジミ②	ヤマトシジミ② マガキ②
3	洗浄後重量	12.4	58.9	3694.16	1048.6	279.18	557.97	524.59	26.5
	貝重量	8.62	46.47	3174.51	836.42	201.05	432.21	441.5	14.74
	混貝率	69.52%	78.90%	85.93%	79.77%	72.01%	77.46%	84.16%	55.62%
		ヤマトシジミ③	断面						
	洗浄後重量	91.22	204.87						
	貝重量	62.52	73.32						
4		マガキ①	マガキ②	ヤマトシジミ①	ヤマトシジミ②	断面			
	洗浄後重量	1359.71	1354.98	47.61	5.11	83.16			
	貝重量	1145.55	1086.73	34.62	0	55.66			
	混貝率	84.25%	80.20%	72.72%	0.00%	66.93%			

IV その他の遺構と遺物

本発掘調査では縄文時代前期中葉黒浜期の7軒の住居跡の調査以外に、溝1条と土坑3基の遺構を検出した。また、遺物については、中近世から近代にかけての遺物が出土した。

(1) 土坑 (第53図、第55図)

【位置】住居跡の調査区西際と試掘調査を合わせて3基検出されている。

土坑1は西際南寄り、土坑2は9号住居跡北側に位置する。土坑3は試掘調査のトレンチ13で確認、検出した。

【形状・規模】土坑1は平面形態は不整な円形、断面形状は深めの鍋底状を呈する。南北90cm×東西80cm、深さ40cmを測る。

土坑2は平面形態は不整な円形、断面形状は浅い鍋底状を呈する。南北1.1m×東西1.2m、深さは15cmを測る。

土坑3の検出部は半円形を呈する。南北1.35m×東西0.63m、深さは18.7cmを測る。

土坑1～3いずれも覆土層の観察から縄文時代と考えられるが、出土遺物は無い。

(2) 溝 (第54図)

【位置】縄文時代の住居跡を検出した調査区から南へ50mのところまに位置する。北西から南東にかけて延びている。

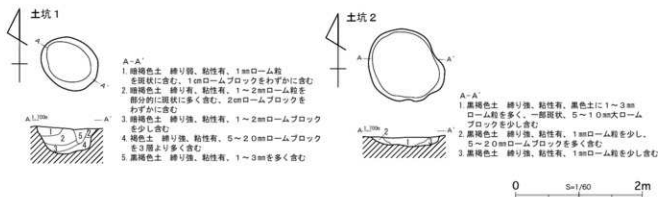
【形状・規模】ところどころに攪乱を受けていることと、今回の調査ではその一部しか対象となっておら

ず、全容を確認できてはいない。全長は不明だが、検出部分では85mに渡って延びる1条を確認した。上幅は1.8m～2m、下幅は約1m、深さは55cm～70cmを測る。断面形態は葉研状を呈する。覆土層の観察から古代以降と考えられる。

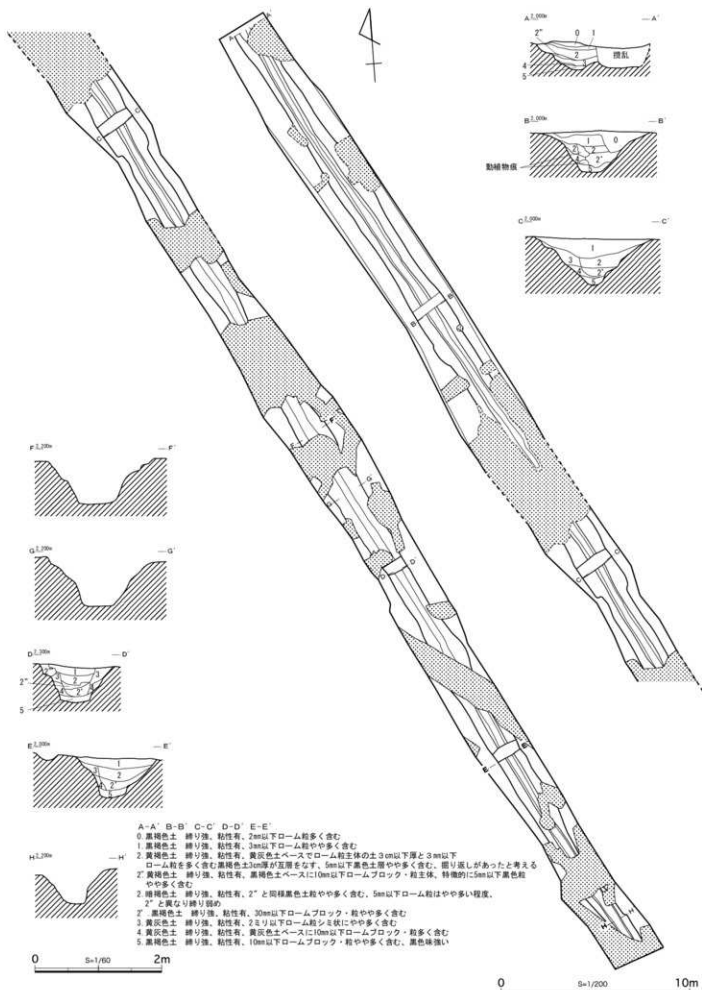
(3) 遺物

旧火工廠の遺構で46個のレンガを検出した。検出状況から排水施設の役割を担っていたと思われる。表面の刻印から数種類に分けられる。まず、「SHINAGAWA」は品川白煉瓦株式会社(現:品川リフラクトリーズ株式会社)製造の耐火レンガ。検出数は一番多く34個。内訳としては「SS」という刻印に大小があり、大は9個、小は24個、なしが1個。表裏とも布目が33個で、そうでないものは1個であった。「TOYO K G」は東洋株式会社か。「TOYO K G」は4個検出した。ラフな書体の刻印で、表裏とも布目ではない。「VZ GS 113」の刻印レンガは3個検出した。こちらも表裏とも布目ではない。刻印がないもしくは摩耗してなくなっているものも5個検出した。どのレンガも縦10.9cm×横22.6cm×幅6.4cmを測る。いずれも耐火レンガと思われる。

一方、旧火工廠で使用されていたと思われる埋設管も検出された。昭和13年の銘が刻まれている。柱状のものに文字があるものは旧火工廠「分配室」の木材として使用されていたものに記載されていた墨書き写したもの。(宅間)



第53図 土坑1・2 (1/60)



第54図 溝1 (1/200・1/60)

第29表 トレンチ出土土物観察表

図版番号	掲載番号	種別	残存 (%)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	色調	備考
90 図	1	耐火レンガ	100	11.10	23.00	6.25	2430.8	10YR8/3 浅黄緑	SHINAGAWA, 火工窯遺構1出土
	2	耐火レンガ	100	11.10	23.00	6.20	2485.1	10YR8/3 浅黄緑	SHINAGAWA, 火工窯遺構1出土
	3	耐火レンガ	96	11.10	22.80	6.30	2476.2	10YR8/2 灰白	SHINAGAWA, 火工窯遺構1出土
	4	耐火レンガ	96	11.10	23.00	6.30	2432.0	10YR8/3 浅黄緑	SHINAGAWA, 火工窯遺構1出土
	5	耐火レンガ	100	11.20	-	6.30	2489.9	10YR8/2 灰白	SHINAGAWA, 火工窯遺構1出土
	6	耐火レンガ	96	11.15	23.00	6.20	2467.0	10YR8/2 灰白	SHINAGAWA, 火工窯遺構1出土
	7	耐火レンガ	98	11.10	23.00	6.00	2349.4	10YR8/2 灰白	SHINAGAWA, 側面灰色, 火工窯遺構1出土
	8	耐火レンガ	96	11.00	22.50	6.00	2406.6	10YR8/2 灰白	SHINAGAWA, 火工窯遺構1出土
	9	耐火レンガ	96	11.30	23.50	6.20	2446.3	10YR8/3 浅黄緑	SHINAGAWA, 火工窯遺構1出土
	10	耐火レンガ	95	11.30	22.80	6.00	2443.1	10YR8/2 灰白	SHINAGAWA, 火工窯遺構1出土
	11	耐火レンガ	98	11.00	22.70	6.15	2280.9	10YR8/3 浅黄緑	SHINAGAWA, 側面灰色, 火工窯遺構1出土
	12	耐火レンガ	100	10.80	22.80	6.15	2448.9	10YR8/3 浅黄緑	SHINAGAWA, 火工窯遺構1出土
	13	耐火レンガ	97	11.25	23.00	6.25	2491.3	10YR8/2 灰白	SHINAGAWA, 火工窯遺構1出土
	14	耐火レンガ	97	11.05	22.50	6.10	2290.7	10YR8/3 浅黄緑	SHINAGAWA, 側面灰色, 火工窯遺構1出土
	15	耐火レンガ	90	11.00	22.50	6.15	2261.6	10YR8/2 灰白	SHINAGAWA, 側面灰色, 火工窯遺構1出土
	16	耐火レンガ	98	11.15	23.00	6.20	2447.6	10YR8/2 灰白	SHINAGAWA, 火工窯遺構1出土
	17	耐火レンガ	98	11.35	23.00	6.00	2483.0	7.5YR8/3 浅黄緑	SHINAGAWA, 側面灰色, 火工窯遺構1出土
	18	耐火レンガ	100	11.10	22.65	6.40	2727.3	10YR8/2 灰白	TOYO K 6, 側面黄褐色, 火工窯遺構1出土
	19	耐火レンガ	100	9.80	23.10	6.15	2136.8	10YR8/2 灰白	SHINAGAWA, 火工窯遺構1出土
	20	耐火レンガ	97	11.10	23.10	6.10	2464.3	10YR8/2 灰白	SHINAGAWA, 火工窯遺構1出土
	21	耐火レンガ	100	11.10	22.70	6.50	2719.1	10YR8/2 灰白	TOYO K 6, 側面灰色, 火工窯遺構1出土
	22	耐火レンガ	100	10.95	22.65	6.20	2418.7	10YR8/3 浅黄緑	SHINAGAWA, 火工窯遺構1出土
	23	耐火レンガ	95	11.05	22.90	6.05	2347.5	10YR8/2 灰白	SHINAGAWA, 火工窯遺構1出土
	24	耐火レンガ	100	11.00	22.80	6.20	2396.6	10YR8/3 浅黄緑	SHINAGAWA, 側面セメント付着, 火工窯遺構1出土
25	耐火レンガ	100	11.05	23.00	6.20	2562.2	7.5YR8/3 浅黄緑	SHINAGAWA, 火工窯遺構1出土	
26	耐火レンガ	100	11.00	22.80	6.05	2460.1	10YR8/3 浅黄緑	SHINAGAWA, 金属付着あり, 火工窯遺構1出土	
27	耐火レンガ	97	11.15	23.00	6.00	2438.6	7.5YR8/4 浅黄緑	SHINAGAWA, 側面黄面にセメント付着, 側面灰色, 火工窯遺構1出土	
28	耐火レンガ	100	10.95	22.80	6.05	2455.2	10YR8/3 浅黄緑	SHINAGAWA, 裏面セメント付着, 火工窯遺構1出土	
29	耐火レンガ	100	11.15	22.80	6.35	2701.9	10YR8/2 灰白	SHINAGAWA, 側面灰色, 火工窯遺構1出土	
30	耐火レンガ	97	11.10	22.90	6.05	2371.1	7.5YR8/3 浅黄緑	SHINAGAWA, 側面灰色, 金属付着あり, 火工窯遺構1出土	
31	耐火レンガ	100	11.20	23.15	6.00	2487.3	7.5YR8/3 浅黄緑	SHINAGAWA, 火工窯遺構1出土	
32	耐火レンガ	55	11.10	< 8.6 >	6.20	877.6	10YR8/2 灰白	SHINAGAWA, 金属付着 (重量 11.72) あり, 火工窯遺構1出土	
33	-	98	9.80	20.60	6.10	2085.4	10R4/4 赤褐色	表面赤切り, 火工窯遺構1出土	
34	耐火レンガ	100	11.10	20.70	6.25	2127.0	10YR8/2 灰白	SHINAGAWA, 側面に金属酸化痕あり, 火工窯遺構1出土	
35	耐火レンガ	50	11.10	< 12.3 >	6.00	1224.6	7.5YR8/3 浅黄緑	SHINAGAWA, 表面灰色あり, 火工窯遺構1出土	
36	耐火レンガ	50	11.00	< 12.2 >	6.05	1194.9	10YR8/2 灰白	SHINAGAWA, 火工窯遺構1出土	
37	耐火レンガ	100	11.20	22.80	6.10	2475.5	7.5YR8/2 灰白	SHINAGAWA, 側面セメント付着, 火工窯遺構1出土	
38	耐火レンガ	100	11.20	23.00	6.20	2799.9	10YR8/4 浅黄緑	SHINAGAWA, 台形, 側面灰色, 火工窯遺構1出土	
39	-	100	9.95	21.00	6.10	2333.9	10R4/4 赤褐色	表面赤切り, 火工窯遺構1出土	
40	-	100	10.00	21.40	6.05	2122.5	10R4/4 赤褐色	表面赤切り, 火工窯遺構1出土	
41	-	100	9.95	21.10	5.85	2097.6	10R4/6 赤褐色	表面赤切り, 火工窯遺構1出土	
42	-	98	9.90	21.00	6.05	2127.2	10R4/6 赤褐色	表面赤切り, 火工窯遺構1出土	
43	-	100	11.40	17.00	6.50	2326.7	10YR7/4 濃い黄緑	Y2 Φ 8S113, 火工窯遺構1出土	
44	-	100	11.45	17.00	6.50	2328.1	10YR7/4 濃い黄緑	Y2 Φ 8S113, 火工窯遺構1出土	
45	-	100	11.40	17.00	6.50	2343.5	10YR7/4 濃い黄緑	Y2 Φ 8S113, 火工窯遺構1出土	
46	耐火レンガ	50	11.00	< 14.1 >	6.30	1293.7	10YR8/2 灰白	SHINAGAWA, 火工窯遺構1出土	
91 図	47	磁器	100	口径 13.8	高さ 4.1	幅み径 6.0	241	灰白 T. 0YR/3	外部外面・酸化タロム(緑) 2重施層, 体部外面・内の中に「角」, 釜み内; 赤染顔料付着
	48	磁器	40	口径 115.0	高さ 66.0	-	1118	灰白 T. 5YR/1	口縁外面・酸化タロム(緑) 2重施層, 体部外面・内の中に「角」
	49	磁器	-	-	高さ 36.9	-	(41)	灰白 NS/7	外面; 人工コバルト(火工窯)
	50	金属	-	(13.3)	(12.4)	0.9	-	-	鍍「川」質, 鍍「磁」質, 火工窯遺構1出土
	51	金属	-	1.5	0.8	-	-	-	-
	52	金属	-	1.1	0.5	0.05	-	-	中空, 先端部直下に穿孔2箇所
	53	柱	-	214.0	8.0	-	-	-	「二八」長十尺 青?市産備材木目, 分配室 261・262号室
	54	柱	-	249.0	8.0	-	-	-	「杉正角 二等」〇二八 表〇尺 〇二, 分配室 261・262号室
55	柱	-	204.0	8.0	-	-	-	「二等兼 三三 長十尺」, 分配室 261・262号室	
56	柱	-	373.0	8.0	8.0	-	-	「杉正角 二等兼」木?正角 二等兼 三三 長二尺, 分配室 261・262号室	

第30表 表土出土遺物観察表

図版番号	掲載番号	分類	出土状況	口径・胴径・長さ×幅×厚さ	底径・高さ	遺存部位	器形	地文	文様要素	編法	時期	注記
60 図	37	4類2種	表土			口縁	深鉢	貝殻能線文		普通	黒式 前	

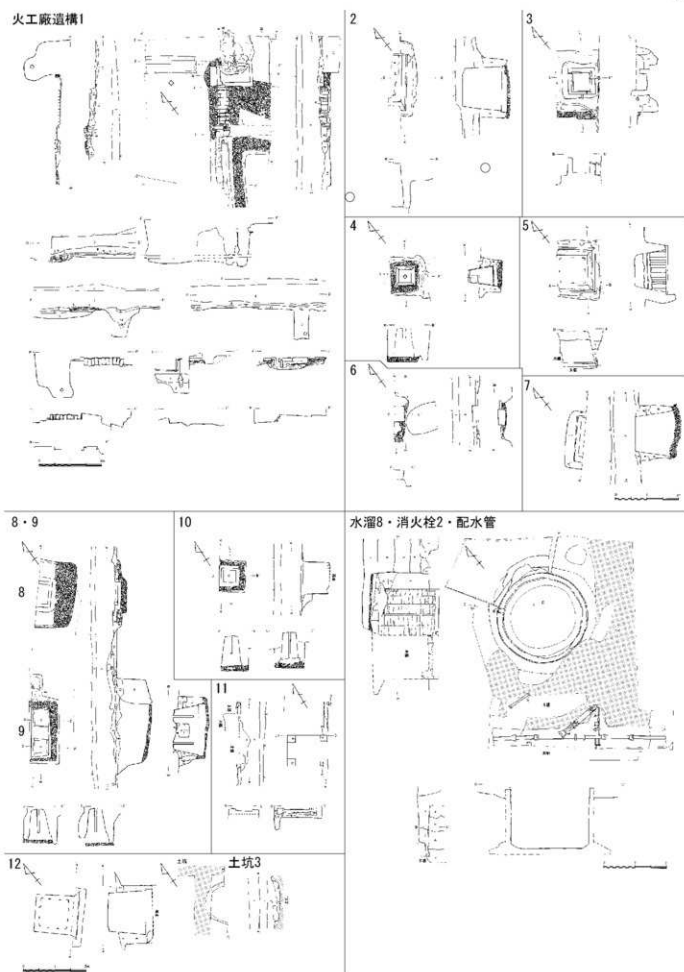
第31表 出土埋設管観察表

図号	掲載番号	長さ (cm)	幅 (cm)	内径 (cm)	備考
61 図	1	987.0 × 71.9	20.0	10.0	断面2箇所、接続部1箇所に「ホ100 × 100 ●昭和十三年●」識別
	2	(17.8)	19.8	10.0	接続部に「ホ100 × 100 ●昭和十三年●」識別
	3	(29.6)	30.6	24.0	接続部に「ホ100 × 100 ●昭和十二年●」識別
	4	(112.2)	(19.8)	10.0	側面に「ホ100 × 75 ●昭和十六年●管50」、接続部に「●100 ●●昭和十六年●」識別
	5				

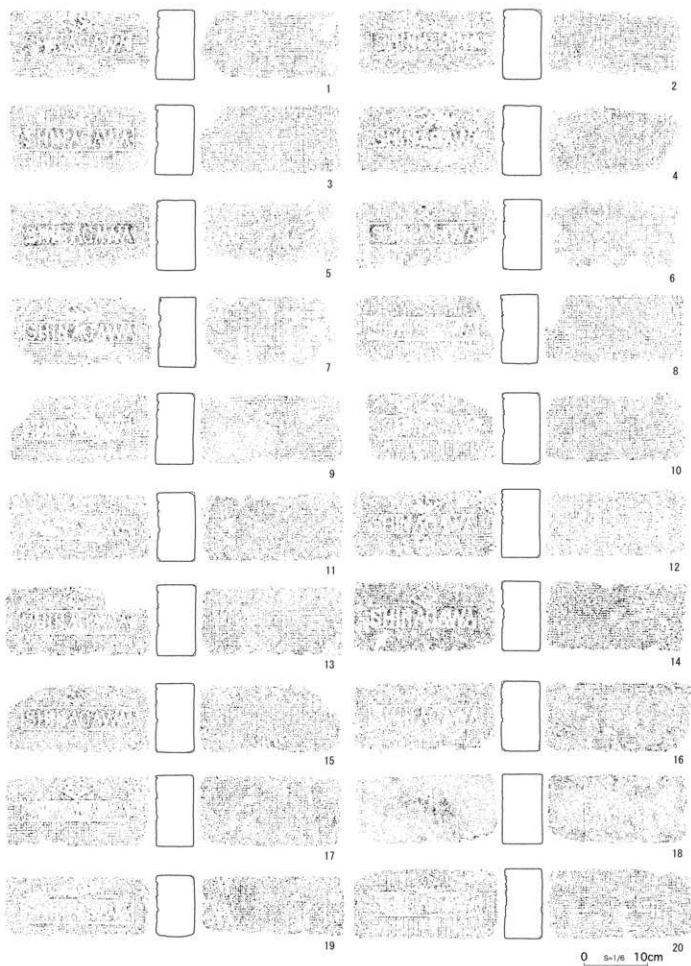
第32表 上福岡岡塚第2地点 火工廠跡遺構一覽表

図号	遺構名	トレンチNo.	規模 (cm)		形状・技法・主な出土遺物・その他	調査率	西沢報告書
			コンクリート部	掘り方			
55 図	火工廠遺構 1	14 トレンチ	上面:114 × 85 下面:121、深さ:110	南北:(215) 東西:(540)	水運の船口とコンクリート製流し台、煉瓦を再利用した排水溝である。船口部は欠損。流し台は長方形で舟北部を大きく欠損。型枠成形。煉瓦排水溝に繋がる流れ目有り。地下を水運溝が通り、舟北部から出る。周囲にコンクリート板を敷く。施設取付の底には土層を整く。耐火レンガ(第56～第60図～46)、金属製品(第59図)出土。	—	市内17・18
	火工廠遺構 2	1 トレンチ	上面:(120 × 33) 下面:(146 × 46) 高さ:114	上端:181 × 460 下端:184 × (59) 深さ:196	コンクリート製基礎、断面台形、一部確認。型枠成形。下部に型枠痕が残る。板状の鉄筋(幅:6.2～8cm、厚さ:10.8～1cm)が1辺に4本ずつ有り、90cmの方形となる。	30%	市内17・18
	火工廠遺構 3	4 トレンチ	上面:56 × 53 下面:186 × 82 高さ:172、深さ:150	上端:182 × 133 下端:169 × 125 深さ:165	コンクリート製方形形。下部残存。型枠成形。外側に煉瓦を敷き込むコンクリートで、内面は滑らかなコンクリートで造る二重構造。内外下部に型枠痕が残る。東部より配管(径:3cm)が接続し、南部に排水用の配管(径:13～5cm)が出る。	100%	市内17・18
	火工廠遺構 4	10 トレンチ	上面:141 × 40 下面:143 × 66 高さ:53	上端:(123 × 129) 下端:103 × (98) 深さ:171	コンクリート製基礎、断面台形、完形。型枠成形。上面中央部に配管(径:10cm、深さ:32cm)有り。	90%	市内17・18
	火工廠遺構 5	4 トレンチ	上面:197 × 96 下面:163 × (133) 高さ:105	上端:186 × (134) 下端:186 × (130) 深さ:110	コンクリート製基礎、断面台形、完形。型枠成形。下部に型枠痕が残る。板状の鉄筋(幅:16.5～10.5cm、厚さ:約1cm)が1辺に4本ずつ有り、90cmの方形となる。	90%	市内17・18
	火工廠遺構 6	18 トレンチ	ブロック部規模: 90 × (34) × 25 下面:(134 × 45)	南北:(136) 東西:(42)	コンクリート製基礎より、中央部に長方形のブロック状コンクリートで囲繞に板状コンクリートが貼る。一部確認。型枠成形。	—	市内17・18
	火工廠遺構 7	19 トレンチ	上面:112 × (13) 下面:139 × (23) 高さ:114	上端:180 × (57) 下端:133 × (27) 深さ:119	コンクリート製基礎、断面台形、一部確認。型枠成形。	25%	市内17・18
	火工廠遺構 8	14 トレンチ	上面:83 × (34) 下面:82 × (43) 高さ:120、深さ:110	上端:217 × (119) 下端:203 × (119) 深さ:127	コンクリート製方形形。一部確認。型枠成形。周囲にコンクリート板を敷く。	50%	市内17・18
	火工廠遺構 9	14 トレンチ	上面:140 × 39 39 × 42 下面:1105 × 64 高さ:100、105	上端:281 × (100) 下端:264 × (100) 深さ:107	コンクリート製基礎、断面台形の基礎が2つ並ぶ。完形。型枠成形。下部に型枠痕が残る。それぞれの上面中央部に配管(径:6～7cm、深さ:174、75cm)有り。	90%	市内17・18
	火工廠遺構 10	20 トレンチ	上面:101 × (93) 下面:164 × 67 高さ:120、深さ:110	上端:101 × (93) 下端:195 × (88) 深さ:181	コンクリート製基礎、断面台形、完形。型枠成形。下部に型枠痕が残る。上面中央部に配管(径:6cm、深さ:156cm)有り。	90%	市内17・18
	火工廠遺構 11	23 トレンチ	上面:96 × 139 高さ:118	南北:(96) 東西:(130)	コンクリート製基礎。長方形の板状で四隅に突起(凸)有り。完形。型枠成形。四隅の突起(1辺約22cm、高さ15～4cm)それぞれに鉄筋(径:1.2cm)が1辺に1つと数本。鉄筋にはネジ山が有り、方形のナット(1辺26cm、厚さ4.7cm)が付属する。	100%	市内17・18
	火工廠遺構 12	30 トレンチ	上面:137 × 129 下面:1182 × — 高さ:143	上端:188 × (32) 深さ:181	コンクリート製基礎、断面台形、一部確認。型枠成形。板状の鉄筋(幅:16～8cm、厚さ:1.5cm)が1辺に4本ずつ有り、90cmの方形となる。	10%	市内17・18
61 図	水運 8	外寸径×高さ:283 × 216 内寸径×深さ:249 × 187 厚さ:117	上端:345 × 338 深さ:182	円筒形。完形。上面部に凹状の窪み(12cm、深さ:17cm)有り。型枠流し込み成形。外側に型枠痕が残り、内面は滑らかな成形。鉄筋使用。内面底部の面北側に2箇所方形の窪み(1辺約5cm、北側深さ約2cmで南側は浅くなる)有り。継手痕あり。	100%	市内17・18	
	消火栓2・配水管	横断長(東西):550	上端(南北):55	鉄製の埋込式取付型不凍消火栓(第61図5)、鉄製の配水管(第61図1～4)。完形。南西～北東に走る。北東方向に消火栓が接続し、その直下を土層(幅:28cm、深さ:15cm)が通る。消火栓、配水管の詳細は第31表参照。	100%	市内17・18	

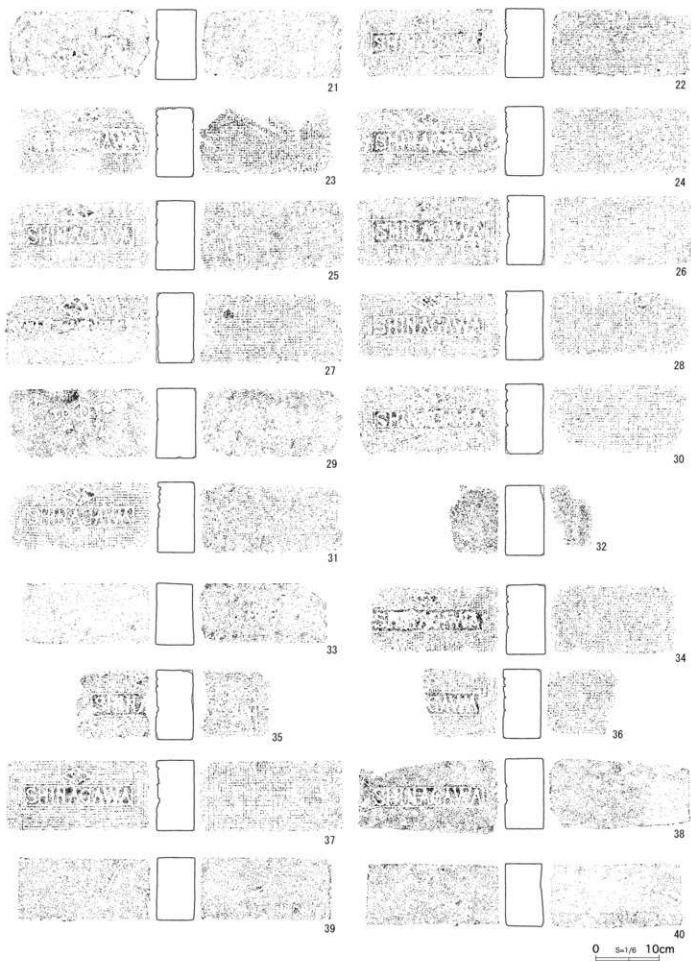
火工廠遺構1



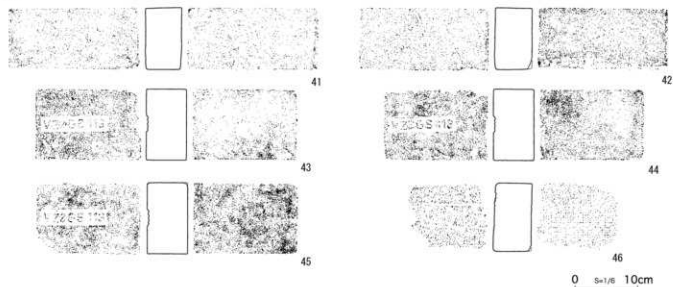
第55図 試掘調査図 (1/120)



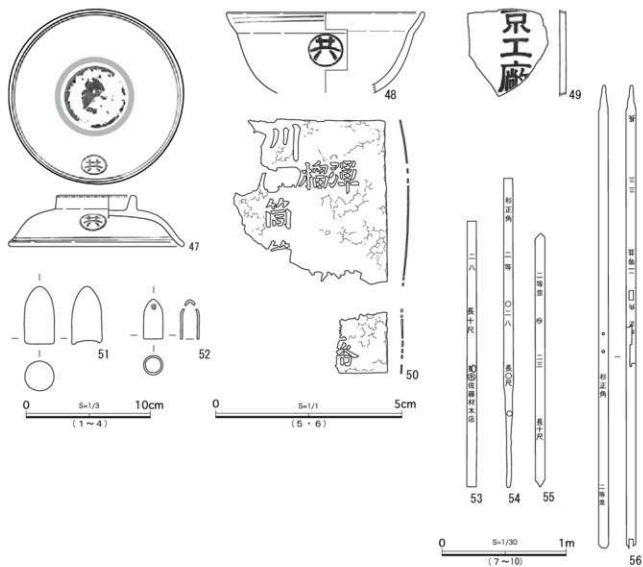
第56図 トレンチ出土遺物(1) (1/6)



第 57 図 トレンチ出土遺物 (2) (1/6)



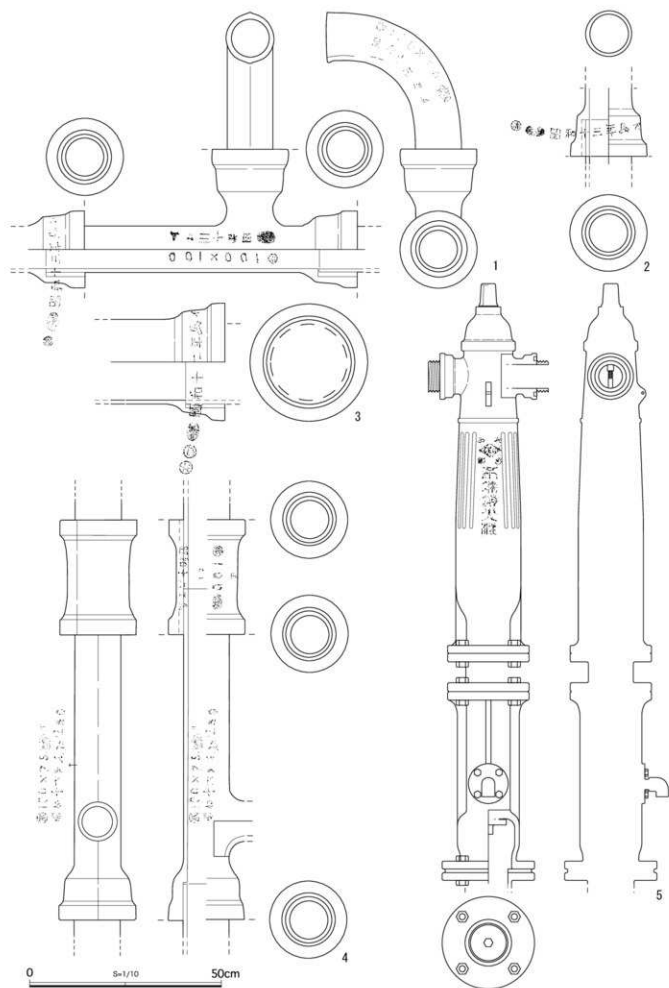
第58図 トレンチ出土遺物(3) (1/6)



第59図 トレンチ出土遺物(4)・分配室木材 (1/1・1/3・1/30)



第60図 表土出土遺物 (1/3)



第 61 図 出土埋設管・消火栓 2 (1/10)

第4章 まとめ

I 上福岡貝塚第2地点の調査成果について

はじめに

上福岡貝塚の発掘調査は、1937（昭和12）年に火工廠建設工事に伴い山内清男、関野克両博士が行い、その成果についてはお二人の各報告や論考が日本考古学界に大きな影響を与えたことは周知のとおりである。この時に出土した遺構と遺物は、文化庁と埼玉県埋蔵文化財調査事業団が中心となって整理作業を行い、奈良文化財研究所より刊行された、『上福岡貝塚資料 山内清男考古資料3』（1992.1）の報告書として、研究者ならずとも待望の刊行であった。また、上福岡市教育委員会による『郷土史料』の刊行や市史編纂事業に伴って刊行された報告書の意義も大きい。こうして山内、関野両博士が発掘調査した成果については、この二冊をもって一応の完結をみたといえる。

その後、1937年の調査から70年あまり、上福岡貝塚では新たな発見等がないまま時間が過ぎたが、2007（平成19）年、民間の変電所建設に伴い縄文時代前期黒浜期の住居跡2軒と貝塚の調査が行われ、遺跡が健在である事が判明した。それから、6年後の2013（平成25）年、今回の第2地点において、第1地点以上の規模の遺構と遺物が確認された。（鍋島）

(1) 住居跡と出土土器

今回の調査では7軒の黒浜式期の住居跡を調査した。前述のように遺物の出土数は住居跡ごとに偏りが見られるため、細かな時期を決し得ない住居跡がある。しかしその一方で、当該地域の黒浜式の住居跡は6本主柱穴から4本主柱穴に時間とともに移行することが指摘されている（笹森1981）。

また、近接する富士見市水子貝塚の報告で、早坂廣人氏が、研究史の検討を踏まえ、発掘調査で得られた層位的な知見と土器の断面形・口縁部形・文様要素や描かれるモチーフを検討することにより、段階を設定している（早坂1995）。

ここでは、これらの成果に導かれながら、今回出土した住居跡・遺物の位置づけを行ってみたい。今回検出された住居跡は攪乱され不確かなものもあるが、いずれも4本主柱穴、このうち柱の付け替えが4・8号住居跡で、拡張を伴う住居跡の建て替えが、5・6・7号住居跡で行われたものと思われる。ただし9号住

居跡は他の住居跡に比べ長軸と短軸の比率が大きく、より長方形を呈している。また北壁際にP10・11が存在することから、4本主柱穴の住居跡であるが、形態としては6本主柱穴に近いものと考えておきたい。

次に資料的に最も充実している9号住居跡の遺物を概観してみよう。9号住居跡では波頂部が丸みをもつ4単位の波状口縁とやや尖った波頂部を持つものが認められる。後者も第47図14をもとに考えると4単位の波状口縁と考えらる。また後者は波頂部から縦長の短い隆帯を付すものが一定量認められる。この隆帯にはヤザミを有するものも認められる。口縁部に文様帯を持つものは波状口縁・平口縁の両者に認められ、無文地に半截竹管状工具で菱形文をはじめとするモチーフを描くものや縄文地に同一工具でモチーフを描くものがある。また平口縁のものに限り、爪形文により菱形文や山形文を描く様である。これらの菱形文は小ぶりのもので横位に展開するようである。

器形は頸部が強く屈曲しているものが多く認められる。ただし、器形の屈曲と文様帯との境は明確には一致しないようである。また先にあげた第47図14では頸部の屈曲部に断面台形状の隆帯が巡る。隆帯上に押捺は認められない。これらの土器のほかには貝殻胛圧痕を有するものや甲信系の釈迦堂Ⅱ式土器が出土している。

この他の住居跡を見てみると、9号住居跡と同様に波頂部から短い隆帯が垂下される土器が7号住居跡で認められる。第35図の3・7・9がそれであるが、このうち7・9は同一個体と思われる。ともに口縁部に沿って二条の押引文が巡り直下に縄文が施される。3は9号住居跡と同様に地文縄文に竹管状工具でモチーフを描いている。また、9号住居跡では第47図16・21・22に見られるように波状口縁に沿って半截竹管状工具で二単位（4本）の沈線を巡らせているが、直下は無文になっている。7号住居跡と違いが見られる。そのほかの7号住居跡の口縁部文様帯を持つものはその文様帯の幅が9号住居跡に比べ狭くなっている。また、器形は、括れが緩やかなものが主体を占める。

この他の住居跡では大ぶりの波状口縁をなす土器は希であり、平口縁が主体となり、口縁部文様帯を持つものも幅狭になり、横位展開が主体となっている。

以上が今回の調査で出土した土器の特徴である。

今次の調査以前に上福岡貝塚では、戦前の山内清男による調査や上福岡貝塚第1地点の調査で黒浜式土器が出土している。9号住居跡の出土土器は前述の特徴から戦前の上福岡D地点及び第1地点の1号住居跡に近いものである。近隣の水子貝塚の第15号住居跡貝層下から貝層中の資料と並行するものと考えられる。

水子貝塚で提示された編年によれば、9号住居跡が古段階新から中段階、その他の住居跡は中段階に相当すると考えられる。

(2) 貝層

今回の調査では3軒の住居跡で貝層が認められた。ともにヤマトシジミ・マガキを主体としている点では一致している。上福岡貝塚第1地点の1・2号住居跡で貝層が見つかった。1号住居跡では、貝ブロックの多くが単層で形成されている。2号住居跡はヤマトシジミとマガキが互層になってブロックを形成している。今回の調査は2号住居跡の貝層形成の在り方に近い。また、第1地点の混貝率は50%を切る細分層が主体を占める。今回の調査では75%を超える細分層も多数認められたが、第1地点では2号住居跡の貝層1の4層の71.2%が最高である。

水子貝塚の第15号住居跡では、混貝率が90%を超える貝層も多数認められる。今回の調査の混貝率は第1地点より高く、水子貝塚より低い。これらの混貝率の差が何に由来するかは、廃棄行動も含め興味深い点である。即ち、貝の廃棄が一時期に大量に行われた場合と少量の貝を期間において廃棄した場合が通常考えられるであろう。ただし、廃棄された貝の種類、形状によってもその後の住居覆土形成過程で混貝率が変化する可能性がある。例えば、マガキが完形に近い状態で廃棄された場合、間に隙間が生じることにより、結果として混土率が上がるものと思われる。反対にヤマトシジミなどが破砕されたものに廃棄された場合は混土率は下がるものと考えられる。

第1地点の調査では1号住居跡のヤマトシジミで1,377個体が殻長数が測れているが、今回は最も貝が出土した7号住居跡で876個体である。出土総量では1号住居跡が69,140.9gで、7号住居跡が88,080.72gであり、7号住居跡がより破砕された状況にあるといえる。このことが全体的な混貝率の差に繋がった可能性も考慮する必要があると思われる。(宅間)

II 上福岡貝塚の問題点と課題

(1) 上福岡貝塚第2地点の集落配置について

第2地点で確認された住居跡の配置を第3図遺構配置図でみると、環状集落の南西部に位置する。第1・2地点の住居跡を、1937年の調査でグループ分けされた上福岡貝塚B群住居址(台地内陸部の集落)と重ねると、黒浜期の住居跡は29軒～32軒となる。今後、未確認の住居跡が確認されればさらに増えるであろう。国指定史跡の富士見市水子貝塚では、黒浜期の住居軒数は最小値40軒、最大値70軒とも推定されている。(1995 早坂)。上福岡貝塚も、水子貝塚の住居跡軒数に迫る規模の集落であったと考えられる。

1937年の調査で環状集落であるB群住居址(E・F・K・M住居址を除く配置)をみると、南西部での遺構分布が希薄であった。当時の限定的な調査によるものとも考えられたが、今回の調査でその部分にも多数の黒浜期の住居跡が分布している事が判明した。改めて集落の分布がより南側の台地内陸部にまで及んでいた事が明らかとなった。また、貝層を伴う住居跡と伴わない住居跡の比率も注目される。今回の調査においても、黒浜期の住居跡のみが確認されたが、僅かに関山期、諸磯C期の遺物も出土しており、B群住居址集落の時間幅が広がる可能性も出てきた。

(2) 調査の重複する住居跡について

上福岡貝塚の集落配置について、かつて上福岡貝塚第1地点の調査報告(2009 鍋島)で指摘した事があるが、今回確認した10軒のうち、5号住居跡がH地点堅穴住居址、10・11・12号住居跡がD・V地点堅穴住居址と地図上でみると近似する。これらの調査の重複の問題についてみてみる。

① 5号住居跡とH地点堅穴住居址

H地点堅穴住居址は、1937年の調査では未検出の住居跡で、写真、平面図等も存在しない。前述の奈良文化財研究所より刊行された報告書には、H地点堅穴住居址出土の遺物は掲載されているが、おそらく住居の覆土層などからの採取遺物と考えられる。出土土器は1類と2類の他に関山式とみられる底部が出土している。

5号住居跡は7号住居跡同様に、火工廠の道路下に位置する。詳細については本文に記したとおりである。5号住居跡出土土器も2類1・2種が多い点では共通する。

H地点堅穴住居址が道路下であったことや、貝層を伴っていない等、何らかの理由で発掘調査が見送られたと考えると、H地点堅穴住居址＝5号住居跡の可能性も否定できない。また近接の7号住居跡も貝層を伴う点で、当時既に確認可能な状況であったとすれば、H地点堅穴住居址と同一である可能性も考えられる。

② 10・11・12号住居跡とD・V地点堅穴住居址

1937年の調査で著名なのがD地点堅穴住居址である。関野克博士による『人類学雑誌』第53巻第8号「埼玉県福岡村縄紋前期住居址と堅穴住居の系統に就いて」の論考である。住居跡の拡張や居住人数の算出に係る論考として、学史に残る研究である。その住居跡である可能性がある11～12号住居跡について、調査期間の制約と、遺跡の保護保存が可能であった事から本調査を行っていない。今回の調査で最も課題が残った点は、11～12号住居跡の確認調査が十分に出来なかった事である。この3軒の住居跡は保存措置とすることが出来たが、疑問点や問題の解決は将来の調査に委ねたい。

おわりに

今回の調査について、出土遺物と貝層については前項I(1)(2)のとおりである。調査担当者として、1937年の調査と第1・2地点の調査について、遺構、遺物、貝層等の比較、検討が十分に出来なかった。また、第1地点同様に、第2地点の調査においても、山内清男博士の指摘した「～別形式二属スルラシイ」土器群の問題についての検討も、今後の課題となってしまった。反省の多い調査であったが、関係者皆様のご指導とご協力で本書を刊行できた事を唯一の救いとし、次回の調査の糧としたい。

最後に調査の全般にわたり、日本無線株式会社の担当者の皆様をはじめ、株式会社新日本無線、大成建設株式会社、埼玉県教育委員会生涯学習文化財課、ふじみ野市文化財保護審議会、ふじみ野市上福岡歴史民俗資料館、大井郷土資料館、関係各機関よりご支援とご協力を賜りました。記して感謝申し上げます。

(鍋島直久)

※主な上福岡貝塚関係の文献

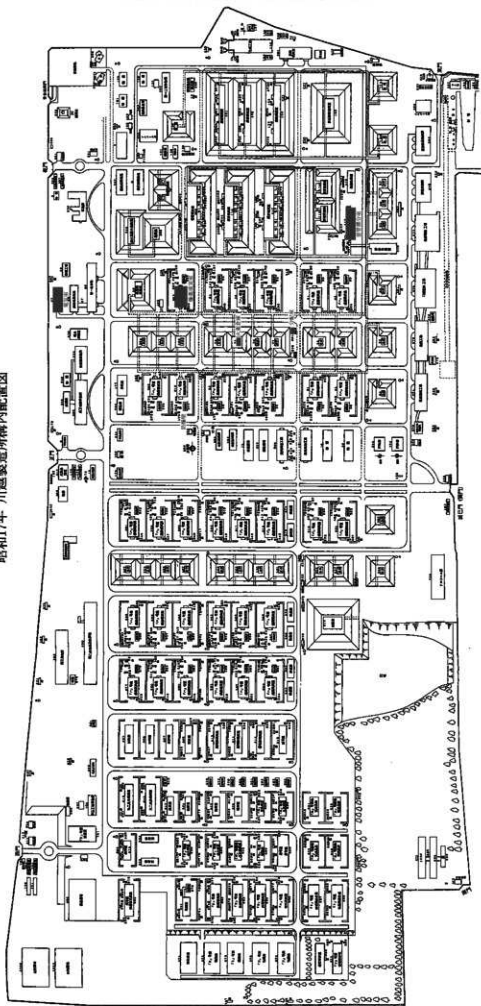
- ・山内清男 1937「福岡構内石器時代遺跡発掘調査報告」、関野克「住居址略報告」ガリ版刷り（昭和40年埼玉県福岡野郡土史料に収録）
 - 1967『山内清男・先史考古学論文集』第2冊 先史考古学会（但し、関野克「住居址略報告」の分は除く）
 - 1942「片口付縄紋土器に就て」『古美術』第12巻6号(137号)
 - 1967『山内清男・先史考古学論文集』第2冊先史考古学会
 - ・関野 克 1938「埼玉県福岡村縄紋前期住居址と堅穴住居の系統に就いて」『人類学雑誌』第53巻第8号
 - ・宮崎朝雄、黒坂禎二、細田勝、土肥 孝他 1992『上福岡貝塚資料—山内清男考古資料3—』奈良国立文化財研究所史料第33冊 奈良国立文化財研究所
 - ・川名広文、笹森健一 他 1994『考古文献資料(1)上福岡貝塚』市史調査報告書第5集 上福岡市教育委員会
 - ・川名広文 1997「この人と語る・上福岡貝塚の発掘」『きんもくせい』市史研究第三号 上福岡市教育委員会
 - ・『上福岡市史』資料編第1巻 自然史 考古 上福岡市史編纂委員会
 - ・早坂廣人 他 1995『水子貝塚』富士見市文化財報告第46集 富士見市教育委員会
 - ・鍋島直久、笹森健一、阿部常樹、一木絵理 他 2009『市内遺跡群4』ふじみ野市埋蔵文化財調査報告第5集 ふじみ野市教育委員会
- ※出土土器について、早坂廣人氏より助言・ご指導いただきました。記して感謝申し上げます。

ふじみ野市

旧川越製造所（旧火工廠）建物緊急調査報告書

1. 防爆壁
2. 火薬倉庫（75号家）
3. 分配室（261号家）
4. 爆薬填実室（323号家）
5. 電気室（37号家）
6. 雷管撰分室（117号家）
7. 旧火工廠建物の概要

昭和17年 川越製造所構内配置図



1. 防爆壁

概要

【構造】鉄筋コンクリート造

【仕上げ】モルタル刷毛引き仕上げ

【高さ】現状の地盤面から 6360mm

【壁厚】主体部分 370mm（仕上げモルタルを含む）、上部：145mm（同）

【内側控え柱の壁からの出】570mm（仕上げモルタルを含む）、幅 340mm（同）

【外側控え柱の壁からの出】400mm（仕上げモルタルを含む）、幅 320mm（同）
 防爆壁コーナー部分のコラム（面取り）：250mm/250mm

【頂部笠木の厚さ】150mm（推定）

【控え柱の間隔】図示による。おおよそ 4700mm～5000mm 間隔

【基礎】不明（未調査）

【通気孔】現状野地盤面から 115mm 上がった位置に 1 スパンに 2 箇所で一対となった通気口が作られている。全てのスパンというわけではない。大きさは幅 475mm×高さ 95mm。

所見

防爆壁がつくられた当時より地面が高くなっている関係で、当初の正確な高さはわからない。防爆壁の下部に通気孔が 1 スパンに 1 対ずつ作られているが全てのスパンには作られていない。確認されたのは通路から向かって右側の壁だけで、正面の 2 スパンはそれぞれ通気口が作られているが、直角に折れた壁には最初のスパンと一つおいた 3 スパン目に通気口がつくられていた。通路を背にして向かって左側の壁は地盤が盛り上がっていて通気口が隠れてしまったと考えられる。壁面に作られた開口はこの通気孔だけである。この防爆壁で囲まれた内部には爆薬実室とその付属舎などが建てられていた。

防爆壁にはおよそ 4.7m 間隔に柱が建てられている。壁体そのものの厚さは上下 2 段階で作られていて下段は地面からの高さ約 4.7m までで厚さ 370mm、その上 1.8m の部分が上段にあたり厚さ 145mm、さらにその上に厚さ 155mm の笠木が載り全体の高さは現状の地面の高さから約 6.7m ある。柱は図で示したように壁の内側だけある部分と壁の内側と外側の両面に作られている部分がある。内側の柱は幅 340mm で、基礎から笠木上端まで達するが上に行くほど出は小さくなる。壁の

外に立つ柱は幅 320mm で、地盤面から約 3.5m の位置までで止まっている。防爆壁の矩折れの部分と T 字の部分のそれぞれの入隅部分は斜め 45 度に補強されている。おそらく三角形の柱として配筋されているものと考えられる。防爆壁の端部および中央部で切り取られている。それによって壁の断面が現れている箇所が見られた。コンクリートの骨材には 20mm～25mm ほどの比較的小粒の玉砂利が使われている。また鉄筋も見ることができると断面部分に現れているのは径 9mm の普通丸鋼で、下段の壁では 9mm 筋のダブル配筋でそれぞれピッチは 250mm～300mm であった。縦筋については不明である。壁全体はモルタル刷毛引き仕上げで薄く塗られている。全体の高さが普通の建物の 2 階建てと同じくらいあるのでおそらく 1 回の打設では無理で 2 回に分けてコンクリートの打設を行ったと考えられる。単純な造りではあるが足場や型枠工にかなり手間がいる工作物であったと思われる。

2. 火薬倉庫 (75号家)

概要

【構造】鉄筋コンクリート造平屋建て 壁構造 (桁はなし) 平入り

【コンクリート壁厚】265mm

【屋根組】木造トラス (キングポストトラス) 切妻屋根

【床組】木造根太・大引構造

【外壁】モルタル刷毛引き仕上げ

【内壁】縦羽目板張り 板幅 158mm

【床仕上げ】板張り 板幅 142mm、板厚 18mm

【天井】板張り (裏側に目板使用) 板幅 275mm、板厚 7.5mm

【屋根葺き材】波型スレート葺き

【入口庇】鉄骨造りベット止め波型スレート葺き

【入口観音扉】木製 外面鉄板張り 見込み寸法 40mm

【窓および窓枠】木製

【規模】梁行 5,200mm × 桁行 8,250mm (いずれも外壁仕上げ外々寸法)

【床面積】39.40 m² (コンクリート壁芯々寸法による)

【桁高】3,261m (入口階段1段目～外壁最上部波型スレートとの取り合い部まで)

【屋根勾配】5 寸勾配

【棟高】4,561mm (入口階段1段目～棟木上端までの推定値)

【軒の出】150mm (外壁面～波型スレート上端外角までの水平距離)

【雨樋】付いていたがすべて消失

所見

火薬倉庫は壁体を鉄筋コンクリート造、小屋組を木造のトラス構築した混構造の建物で、建坪 39.4 m² と比較的小規模の建物である。外壁はモルタルが約 10mm～12mm の厚さで塗られている。内壁は縦板張りで、床、天井も板張りにしたのは室内で取り扱う火薬を夏の暑さや冬の寒さ、梅雨時の湿気から遮断するという配慮と考えられる。ただし断熱材などは特に使われていない。戦時中 (昭和 13 年頃～) に建設された建物ということでいくつかの特色が見られる。一つは小屋組をこの程度の規模の住宅では当時一般的であった和小屋構造とはせず洋小屋であるトラスを採用した点。梁同方向の壁芯々の間隔は 4,935mm は二間半以上にあたり、和小屋構造で梁を渡そうとすれば梁の成

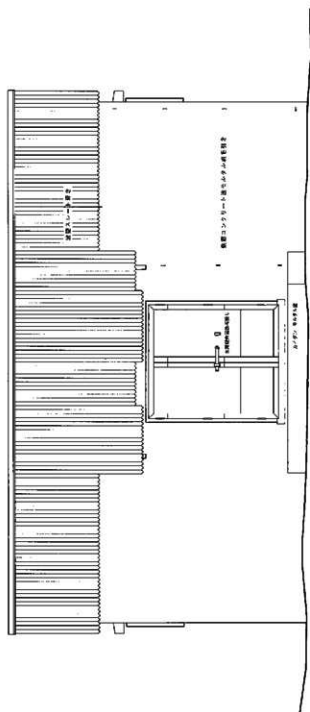
は 30cm 以上必要となる。トラス構造では 4 寸角 (122mm 角) で事足りている。またトラス構造にすることによって小屋組を構成する個々の部材の大きさが 2 種類ないし 3 種類位に減らすことが可能となり材の使用率の向上に役立っている。

この火薬倉庫の小屋組では、梁にあたる弦材、桁、斜め材である合掌材に 4 寸角が使われ、その他の束材、モヤ、方杖などはそれより小さめな 110mm 角が、振れ止めはその 2 つ割りが使われていた。

もう一つの特色はタルキヤ野地板を省略してモヤが直接屋根葺き材である波型スレートを支える構造となっている点で施工の簡略化という点で特徴的である。この工法は分配室や爆薬実室の屋根にも採用されている。桁はコンクリートの壁の最上部にじかに据えられて弦材を受けているがその部分よりまだ上までコンクリートの外壁の一部が立ち上がり施工の簡略化が図られている。

入口は 1 ケ所平側の中央に 1.8m の幅で取られている。入口の扉やそのほかの窓の扉もすべて木製で外面には鉄板が張られているのは防火戸の役目というよりは外気を遮断する効果を意図したものと考えられる。入口には骨組みが鉄骨で作られ屋根の波型スレートがそのまま葺き下ろされた庇が伸びている。そのほかの窓庇はコンクリートの躯体と一体となった庇がついている。また入口手前には段数が 2 段あるポーチ上の階段が付いているが下の段は上面だけ姿をのぞかせているだけでなかば地面に埋もれた状態であった。

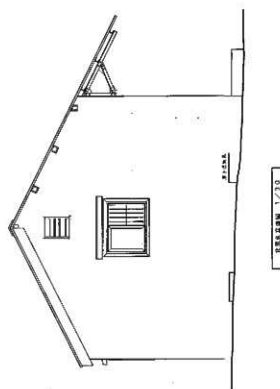
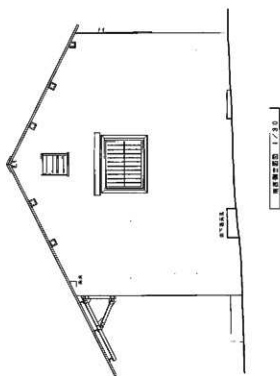
屋根勾配は 5 寸勾配で両妻には木製で幅 210mm の破風板がつけられていたが 1 箇所を残して消失していた。軒の出も壁から 150mm と少ない。屋根面積を少なくすることは屋根材料と施工手間を少なくする効果がありそれらを期待してのことであったと思われる。



北西側区画 1/30

調査実施機関 財団法人土木学会 建築研究所調査課	調査日時 日本製鋼所(株) 東工工場内	調査対象 火災調査	調査場所 北西側区画	調査日 1/30	調査者 宇野正太郎 他 13名	調査場所 東京都葛飾区
-----------------------------	------------------------	--------------	---------------	-------------	--------------------	----------------

(図L-30(部分))



図面名 基本図面 原寸縮尺表示(旧火工廠)建物緊急調査報告書	図面番号 00000	図面内容 日本橋(株)河工事務所内	図面種類 火災エンジン室	縮尺 1/30	図面番号 00000	図面内容 主要構造部	図面種類 原寸縮尺表示
--------------------------------------	---------------	----------------------	-----------------	------------	---------------	---------------	----------------

(図1-4) (1/30縮尺)

3. 分配室(261号家)

概要

【構造】鉄筋コンクリート造平屋建て壁構造(桁有り)
両妻入り

【コンクリート壁厚】195mm

【屋根組】木造トラス(キングポストトラス)切妻屋根

【床組】土間コンクリート

【外壁】モルタル刷毛引き仕上げ

【内壁】モルタル刷毛引き仕上げ

【床仕上げ】土間コンクリート直押さえ

【天井】板張り 板厚9mmの上に厚さ約1mmのビニールクロス貼り

【屋根葺き材】波トタン板葺き

【入口庇】一方は木製骨組み波トタン板葺き、もう一方はコンクリート製

【入口扉】木製ハンガードア 見込み寸法40mm×戸幅818mm引き別れ

【窓および窓枠】木製

【規模】梁行4,234mm×桁行6,200mm(いずれも外壁仕上げ外々寸法)

【床面積】24.25㎡(コンクリート壁芯々寸法による)

【棟高】4.263mm(土間面～棟木上端までの推定値)

【屋根勾配】4寸5分勾配

【軒の出】210mm(桁外面～波トタン板上端外角までの水平距離)

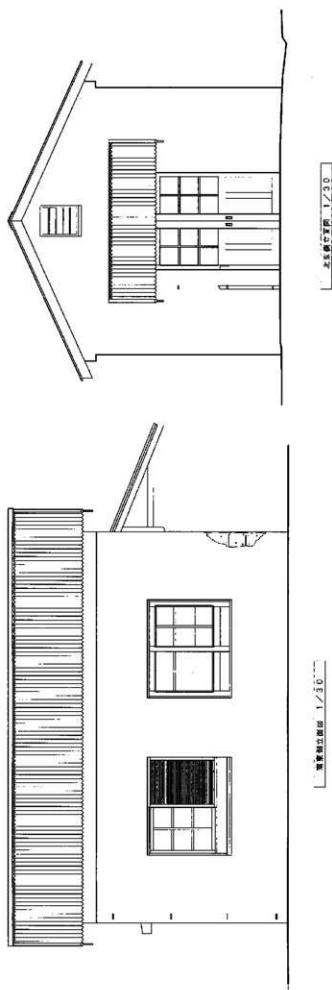
【雨樋】3,310mm(土間面～外壁コンクリート桁上端まで)付いていたがすべて消失

所見

分配室は建坪が24.25㎡という小規模な建物であるが、構造は前記火薬倉庫とよく似ている。火薬倉庫と異なる点は床がコンクリートのタタキになっていること、床高が周囲の地盤の高さとほぼ同じである点。出入り口が両妻にそれぞれ1ヶ所づつ計2ヶ所作られ、いづれも引き別れのハンガードアで仕切られている点。内壁が外壁と同様コンクリートにモルタルが塗られ刷毛引き仕上げとなっている点。そして窓は平側に2ヶ所づつあるが、建具は消失して代わりに建具が転用されて入れられたりしている。旧状は引き違いのガラス窓だった点。また屋根の葺き材が火薬倉庫では波型スレートだったのに対し分配室は波トタン板葺きである点などがあげられる。壁体の鉄筋コンクリート構

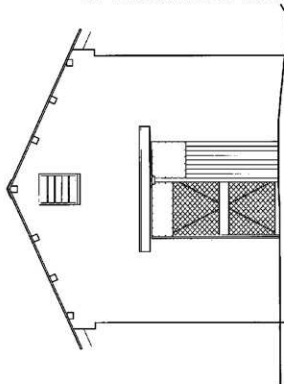
造や小屋組の木製トラス構造、モヤがタルキや野地板を省略してじかに屋根葺き材を支える構造などは共通している。ハンガードアの底面の位置には幅4cmの平鋼が伏せこまれているのでドアの底には戸車が付けられているとみられる。ハンガードアの上半分はやはりガラスが入れられている。屋根勾配は実測の数値としては4寸5分勾配となったが屋根の傷みがひどくそれが原因で棟が若干落ちていることも考えられることから、火薬倉庫あるいは爆薬実室と同じ5寸勾配であったとも考えられる。ここではひとまず実測値を尊重し4寸5分勾配とした。

屋根と天井の傷みが特にひどく、天井はほとんど原型をとどめていない。室内は周囲4面から採光があるのできわめて明るい。おそらくある程度の明るさを必要とした作業がおこなわれたものであろう。壁体がトラスを受ける仕組みも火薬倉庫と共通していて、外壁のその部分はしっかりとコンクリートが立ち上がり、波トタンに接している。



調査対象 旧川越製造所(旧火工廠) 建築緊急調査報告書	調査対象 日本製紙(株) 第五工場内	調査対象 分配室	調査対象 本館棟	調査対象 1/30	調査対象 平成25年2月4日	調査対象 建築緊急調査報告書
--------------------------------	-----------------------	-------------	-------------	--------------	-------------------	-------------------

(図7. 10) 縮小値



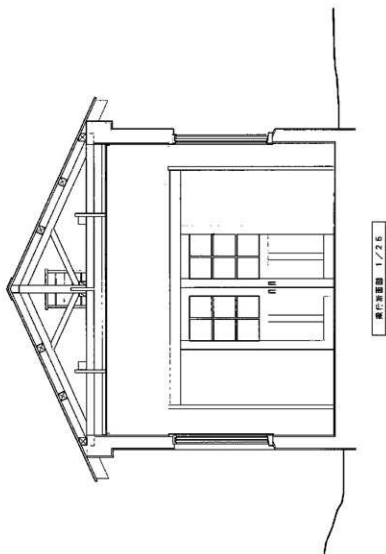
■ 事務所内景図 1/30



■ 事務所外景図 1/30

調査 場所	調査 時期	調査 人員	調査 内容	調査 結果	調査 備考
本工場の調査所(旧火工廠)建物緊急調査報告書	昭和30年11月	佐藤 一夫、佐藤 正	事務所内景図	事務所内景図	事務所内景図
本工場の調査所(旧火工廠)建物緊急調査報告書	昭和30年11月	佐藤 一夫、佐藤 正	事務所外景図	事務所外景図	事務所外景図

(但し、写真除く)



調査対象 旧川越製造所(旧火工廠)建物緊急調査報告	調査日 日本製鋼所(株)埼玉工場棟内	調査場所 分配型	調査者 東口内観図	縮尺 1/26	調査日 平成25年2月13日	調査者 風巻謙吾氏
------------------------------	-----------------------	-------------	--------------	------------	-------------------	--------------

(図1. 004/004)

4. 爆薬埋実室 (323 号家)

概要

【構造】鉄筋コンクリート造平屋建て ラーメン構造(剛構造、柱梁構造) 両妻入り

コンクリート壁厚) 外壁、内壁共 314mm (モルタル仕上げとも)

【屋根組】鉄筋コンクリート製間仕切り壁が直に木製モヤを支える混構造 切妻屋根

【床】土間コンクリート

【外壁】モルタル刷毛引き塗装仕上げ

【内壁】モルタル刷毛引き塗装仕上げ

【床仕上げ】土間コンクリート直押しさえ

【天井】板張り 板厚 18mm ~ 21mm の下にクロス貼り塗装仕上げ

【屋根葺き材】波型スレート葺き、中央廊下上部に一部採光用半透明波板葺き

【入口風除室】両妻側にあったと見られるがコンクリート基礎を残し消失した

【入口扉】アルミ製引き違い戸と鋼製シャッターに改造された

【窓および窓枠】窓枠および腰壁は木製、窓建具は木製、ただしすべり出し欄間を除いて消失

【規模】梁行 13,465mm × 桁行 22,016mm (いずれも外壁仕上げ外々寸法)

【床面積】282.18 m² (コンクリート壁芯々寸法による)

【桁高】3,853mm (大走りコンクリート面~外壁コンクリート桁上端まで)

【屋根勾配】5 寸勾配

【株高】7,219mm (大走コンクリート面~棟木上端までの推定値)

【軒の出】320mm (桁外面~波トタン板上端外角までの水平距離)

【雨樋】付いていたがすべて消失

所見

建物の規模は梁間 13.151m、桁行 21.702m、(いずれも外壁芯々間) でこの部分の建坪は 282.18 m² と大型の建物である。その両妻には奥行が 1,832mm、間口が 5m の風除室とみられる部屋があったことが、建物に残る痕跡などから判明した。間取りは中廊下を中心に両側に 6 部屋づつ合計 12 部屋で一つの建物を形成している。それぞれの個室を仕切る隔壁の厚さはモルタル仕上げを含めると 314mm と厚く、廊下との境の壁も同じく 314mm ある。

一つひとつの部屋が爆薬を詰める作業室であったと考えられ、いざ爆発事故が起きても外壁 7 方向と屋根方向に爆風が抜け隣室には被害が及ばないようにになっている。中廊下からの出入り口も対面する個室の出入り口と異なる位置になるように取られている。また隣室との境には人が行き来できるドアのない開口が設けてあり、廊下に出なくともよいような作りとなっている。

爆薬埋実室は波型スレート葺き切妻屋根を持つ建物であるが屋根構造も含めて主体部はすべて鉄筋コンクリート造である。木製トラスは組まずに各部屋の隔壁を屋根面まで立ち上げて直接モヤを支える構造をとっている。隔壁の上部は屋根勾配にあわせて山型をしている。その勾配の部分にモヤを受ける凹みを造りモヤを受ける。凹みは屋根片面に 6ヶ所ずつ等間隔に有り、大部分はモヤの形状に合わせているが片面に 2ヶ所ずつモヤとの隙間をとって凹みを設けている。この隙間は天井裏の通気を確保するためと考えられ建物の両妻壁にも見られる。モヤの間隔は 880mm ~ 900mm で断面の大きさは 125mm × 180mm (推定値) ある。部屋の大きさは狭い部屋で間口 3,178mm (壁芯々間) 広い部屋では約 4m 有り、奥行は共に 5m ある。モヤは隔壁間を支えなしで架けられるため、この工法では隔壁間の距離 4m は限界であったと思われる。中廊下の両側の壁も厚さ 314mm で屋根面まで達している。開口部のある各部屋の外側の壁は木造で作られている。どの部屋も直接外部に出られる扉を個別に持ち、腰壁付きの引き違いガラス窓と滑り出しのガラス欄間が壁全体に広がり、十分な採光と換気を確保している。ただし現況で当初の建具が残っていたのはガラス欄間障子戸のみで、引き違いガラス戸や出入り口の開き戸は 1ヶ所も残っていなかった。

各個室には天井が張られていた。木で天井下地に組み板を張り、仕上げにクロスを貼って塗装を施していた。天井吊木はモヤから取るのではなく吊り木受けのための角材をモヤと同方向に約 780mm 間隔で 5 本渡している。吊木受けの端部は壁から突き出した鉄棒に引っ掛けて止めていた。中廊下には天井はなく個室を仕切るコンクリートの隔壁の上部を梁状に伸ばし合掌を組むようにしてモヤを支えている。そして中廊下の屋根だけは野地板が張られ白く塗装されている。その屋根材は波型スレートだけではなく部分的に採光のための半透明のボードが張られ天窓となっている。そのため日中の中廊下は思った以上に明るい。天窓は各スパンで交互に取られている。中廊下のコンクリート梁の高さ 120cm に達する。

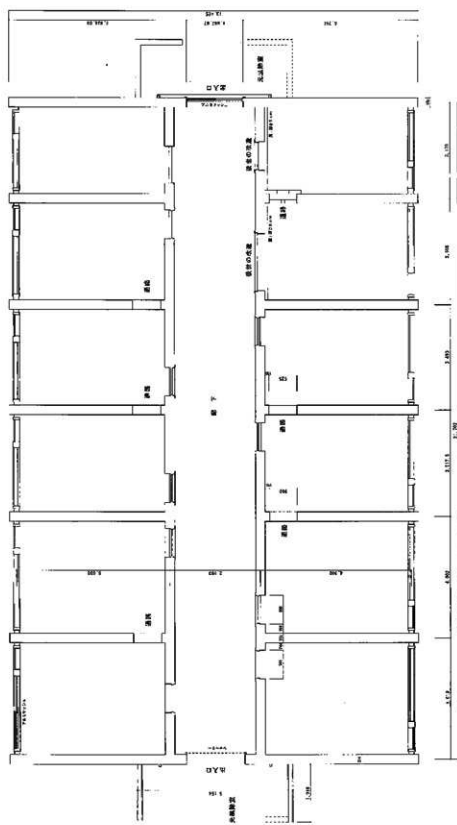
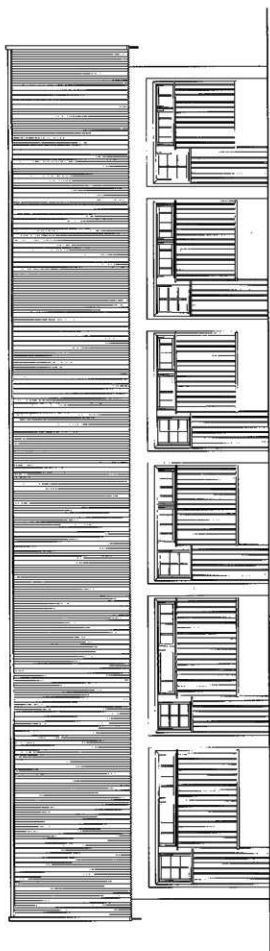


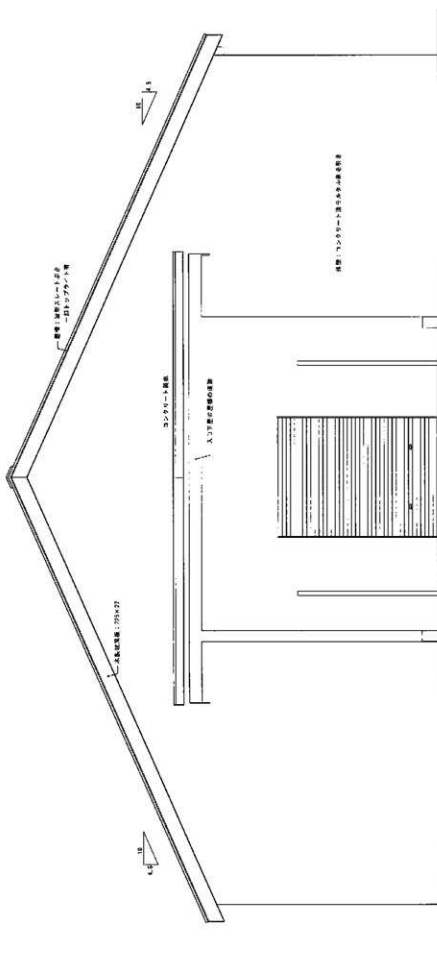
図1. 断面(平面)	図名	1/50	作成日	平成25年2月10日	作成者	緊急調査報告書
調査対象 (旧火工廠) 調査報告書	調査対象	旧火工廠	調査日	平成25年2月10日	調査者	緊急調査報告書
調査機関 (旧火工廠) 調査報告書	調査機関	旧火工廠	調査場所	旧火工廠	調査場所	緊急調査報告書
調査者 (旧火工廠) 調査報告書	調査者	旧火工廠	調査場所	旧火工廠	調査場所	緊急調査報告書



旧川越製造所 1/50

図名 旧川越製造所（旧火工廠）建物緊急調査報告書	図番 00000	図種 日本建築（機）竣工図様図	図尺 1/50	図日 00000	図時 平成25年2月15日	図所 東京都建設局
-----------------------------	-------------	--------------------	------------	-------------	------------------	--------------

（図1. 立面図）



■ 本館正室

調査機関 国土院建設研究所（旧火工廠）建物緊急調査委員会	調査員 日本建築 田中 隆雄 建築士 藤田 浩二	調査員 建築士 佐藤 隆雄	調査員 建築士 佐藤 隆雄	調査員 建築士 佐藤 隆雄	調査員 建築士 佐藤 隆雄	調査員 建築士 佐藤 隆雄	調査員 建築士 佐藤 隆雄	調査員 建築士 佐藤 隆雄	調査員 建築士 佐藤 隆雄
調査日 2011年11月14日	調査時間 11時～12時	調査場所 東京都中央区本町1-14-1	調査対象 旧川越製造所（旧火工廠）建物緊急調査報告書	調査内容 建物緊急調査	調査結果 建物緊急調査報告書	調査費用 100,000円	調査費負担 国土院建設研究所（旧火工廠）建物緊急調査委員会	調査報告書 作成日 2011年11月14日	調査報告書 作成者 佐藤 隆雄

5. 電気室 (37号家)

概要

【構造】鉄筋コンクリート造平屋建て ラーメン構造 (剛構造、柱梁構造)

【コンクリート壁厚】外壁 188mm

【屋根組】鉄筋コンクリート造陸屋根 バラベット付き

【床組】土間コンクリート(下地)

【外壁】鉄筋コンクリート下地モルタル刷毛引き仕上げ

【内壁】鉄筋コンクリート下地モルタル刷毛引き仕上げ

【床仕上げ】土間コンクリート下地寄木張り一部リノリウム貼り

【天井】創建当初は天井はなかった

【屋根葺き材】防水アスファルト(推定)

【入口扉】アルミ製両開き戸に改造された

【窓および窓枠】鋼製窓と木製窓の併用

【規模】梁行 11,414mm×桁行 27,186 mm (いずれも柱芯々寸法)

【床面積】310.30㎡

【建物最高高さ】5,540mm(犬走りコンクリート面～外壁バラベット笠木上端まで)

【雨樋】鉄製

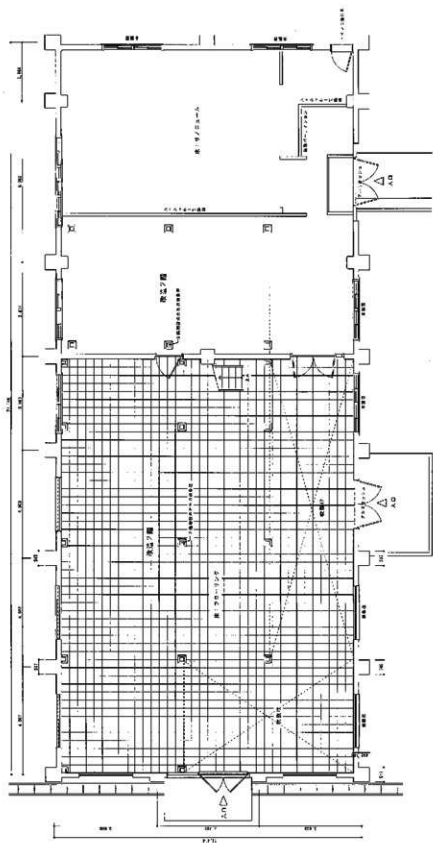
所見

電気室は鉄筋コンクリート造平屋建てで典型的なラーメン構造、屋根は陸屋根という建物である。ラーメン構造とは剛構造とも言い柱と梁の接点を剛に接合した構造をいう。ちなみにラーメン構造のラーメンとはドイツ語。陸屋根とは普通の屋根のような勾配を持たない平らな屋根をいう。実際には雨水が流れる程度の勾配が付いているが見た目に平らなのでこういう。建物の現況は室内に鉄骨で2階の床を増設しているが、建てられた当初は内部2室からなる平屋建ての建物で、あった。梁間 11,414m、桁行 27,186m(いずれも実測値)で桁行は7スパンからなる。スパンとは柱間をいう。そのうち手前から4スパン目の位置にコンクリートで間仕切りが入札前後2室に仕切られ、それぞれの工法が若干異なる。手前の部屋は柱型が室内にでていない。これに対して奥の部屋は柱型が室内に出た作りとなっている。室内側に出ている分だけ柱の体積が増え、耐力的にも強度が増すがその目的は不明であ

る。電気室の入口は3ヶ所あるがいずれもアルミサッシュなどに改造されていて、当初の姿はよくわからない。旧上福岡市史調査報告書第15集の31頁に完成したての「第2電気室」の写真が載っているが、この第2電気室は桁行が3スパンと短い以外は電気室と同じ造りで建てられた。写真からでは細部は分からないが正面入口は柱間全体、上下は庇の下付近まで開口部となっている。ただし入口の建具は写っていない。この写真は電気室の入口周りの痕跡とも一致している。建具が写っていないのはまだ取り付ける前であったかあるいは内開きの観音扉を開いた状態で撮影したかのどちらかであろう。窓の状況も写真の第2電気室では鋼製窓がはめられているがこちらの電気室も同じ位置の窓は鋼製窓が使われている。ただし電気室の後方の窓には木製窓が使われている。

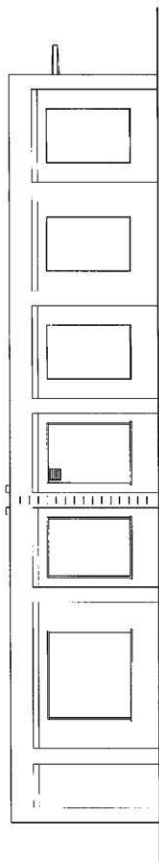
奥の部屋は後世の改造でいろいろなパーティションが入れられていた。さらに奥には別棟でトイレ棟も増築されている。

電気室内部の床は手前の部屋がコンクリートの上に寄木張りとなり。奥の部屋はリノリウムが貼られている。しかし床と壁との取り付け部分などを調べると、現況の床はいずれも後世の改造によるものと考えられる。創建時の床はコンクリートのままで、あったと思われる。

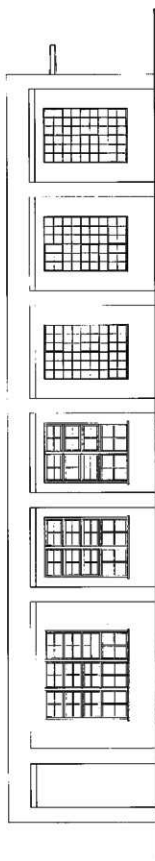


図名 旧川越製造所(旧火工廠)建物緊急調査報告	図号 第1号	縮尺 1/50	作成日 平成25年12月22日	作成者 長瀬 誠 藤田 隆
作成者 日本建設(株) 施工課 内	図名 第1号	縮尺 1/50	作成日 平成25年12月22日	作成者 長瀬 誠 藤田 隆
作成者 日本建設(株) 建築設計部 内	図名 第1号	縮尺 1/50	作成日 平成25年12月22日	作成者 長瀬 誠 藤田 隆
作成者 日本建設(株) 建築設計部 内	図名 第1号	縮尺 1/50	作成日 平成25年12月22日	作成者 長瀬 誠 藤田 隆

(注) 1. 縮尺は任意



窓



窓

調査対象 旧川越製造所(旧火工廠)建物緊急調査対象	調査種別 日本製紙(株) 第三工場棟内	調査年度 昭和56年	調査月 1/5日	調査時間 17:50	調査場所 第三工場棟	調査内容 窓	調査結果 窓枠が腐蝕している箇所あり	調査者 高橋 誠一
------------------------------	------------------------	---------------	-------------	---------------	---------------	-----------	-----------------------	--------------

(図L、47面参照)



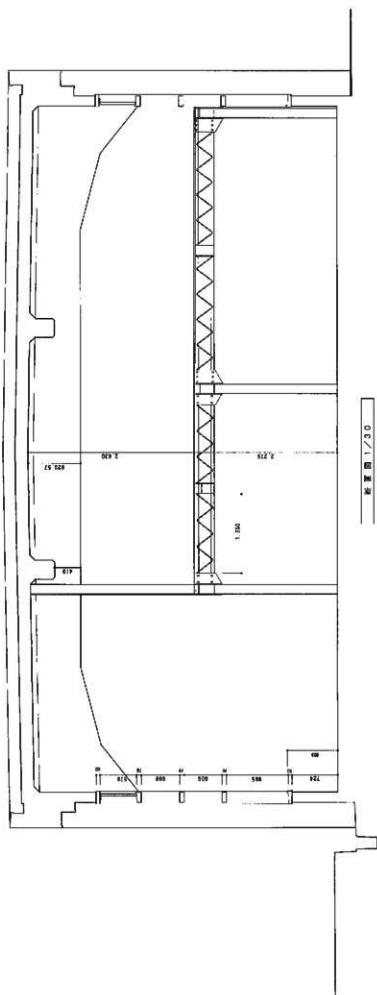
調査対象 本火工廠 旧川越製造所（旧火工廠）建物緊急調査対象	設計者 日本建築（株） 池上工務所内	竣工年月 電気室 居住棟竣工年度	調査年月 1/15/0 (概比、50%縮小)	調査場所 平成25年2月22日	調査者 長谷川建築設計事務所
--------------------------------------	-----------------------	------------------------	------------------------------	--------------------	-------------------



北側立面図 1/30

調査対象 旧川越製造所（旧火工廠）建物緊急調査	調査日 日本橋区（旧）東工事務所	調査場所 電気室	北側立面図	縮尺 1/30	図番 00000	作成日 平成25年2月22日	製図者 眞谷 雅樹 氏
----------------------------	---------------------	-------------	-------	------------	-------------	-------------------	----------------

（図1-10の付図）



調査 法人名称 旧川越製造所（旧火工廠）建物緊急調査団	調査 日本建築（株）建築工務部内	調査 電気室	調査 新築部	調査 1/30	調査 平成25年11月22日	調査 表紙裏面裏面
-----------------------------------	---------------------	-----------	-----------	------------	-------------------	--------------

(単位：50mm縮尺)

6. 雷管撰分室(117号家)

概要

【構造】鉄筋コンクリート造平屋建て ラーメン構造(剛構造、柱梁構造)

【コンクリート壁厚】外壁 180mm

【屋根組】木造トラス構造(キングポストトラス)、切妻屋根

【床】木製床組(ただし詳細については未調査問)

【外壁】鉄筋コンクリート下地モルタル刷毛引き仕上げの上リシン

【内壁】鉄筋コンクリート下地モルタル刷毛引き仕上げの上塗装

【床仕上げ】フローリング貼り 板巾 76mm

【天井】木製下地板張り

【屋根葺き材】波型スレート葺き

【屋根勾配】4寸5分(4.5/10)

【軒の出】(スレート先端から柱外面まで):288mm

【入口扉】現在アルミ製両開き戸に改造されている

【窓および窓枠】アルミ製窓に改造されているが一部に木製窓が残る

【規模】梁行 9,514mm × 桁行 36,000mm(いずれも柱芯々寸法)

【桁方向柱間】4m

【床面積】342.5㎡+下屋

【床高】(雨落ち縁石上端〜床上端まで):218mm

【桁高】(雨落ち縁石上端〜屋根スレート取り合い部まで):4,038mm

【建物最高高さ】(推定値):5,540mm(まで)

【雨樋】旧状は鉄製縦樋

所見

この建物は旧火工廠構内でも北側に建てられた建物であった。雷管撰分室の建物は周囲を土塀や塀で囲まれていない建物である。鉄筋コンクリート造平屋建て桁行き 36m × 梁行 9.5m は構内の中でも比較的大規模な建物であった。

雷管撰分室では具体的に室内でどのような作業が行われていたのかは不明である。戦後一時学校の教室として使われたことがあるという。建物の南側の部分の室内が改造されていて、教室らしい設えとなっている。現状では便所も増築されたか改造された。窓の大半が木製窓からアルミサッシュに代えられているが、

それらの改造と教室に使われたことと関係があるのかなど不明な点も多い。

出入り口 建物は南西面妻側と北東面妻側にそれぞれ出入り口を持つ以外に、北西面の中央間にも出入り口がある。ただし3か所とも現在はアルミサッシュの両開きドアに改修されている。妻側2か所の出入り口にはともに妻の北寄り寄せて作られ、それぞれ底状(南西妻側)の工作物と、前室のような(北東妻側)工作物が作られていたことが、外壁に微かに遺る痕跡から推定できる。ただしどのような形状であったかまでは判らない。北西平側の中央の柱間にある出入り口は建てられた時からあったと見られるが、ここに出入り口が作られた理由や目的等はわからない。また南東平側の壁面には出入り口はない。

間取り 間取りはいわゆる片廊下型の作りで、南西妻面から北東妻面まで幅 2.5m(壁芯々距離)の廊下が直線で結ぶように作られている。反対側の南側が作業スペースとなっており、部屋の幅は 7.0m(同)ほどある。作業室は南側が柱位置に合わせて二間、個室が仕切れ、北の妻側にも同じく一間造られている。間仕切り壁の構造は鉄筋コンクリート造で厚みは柱の見付け寸法(平側に立って柱を見た時の柱の正面の寸法)と同じ 330mm である。間仕切り壁には中央部分に各部屋を繋ぐための開口部が作られていた。建てられた当初の個室は以上の3室であり、作業室の大部分は広い一室になっていた。便所もない造りであったが、その後、学校の教室などに使われたこともあって、現在は便所を増築して使用されていた。廊下と作業室の間仕切りには出入り口の他に窓があったことが、古い窓枠や出入り枠が残っており、それにより推定することができる。現況は廊下・作業室境の古い建具はすべてアルミサッシュに改修されている。

柱、梁、床、天井 柱は鉄筋コンクリート造(ただし鉄筋は確認できていない)ですべて壁付き柱(独立柱ではない)となる。柱を全部同じ大きさで作られ、モルタル塗で仕上げられ、仕上がり寸法で 330mm × 330mm である。仕上げられていない部分での躯体(コンクリート本体)の寸法は 300mm × 300mm であった。その柱が両平側と廊下・作業室境に 4m 間隔で規則正しく立つ構造となっている。窓の下と窓の上はコンクリート造で造られ厚さは仕上げを含めた寸法で約 18cm である。窓の上部はコンクリート製の梁が近接するが 5cm ほどの空きがあり、その部分がコンクリー

トの下り壁状になって窓の上枠を支えている。コンクリート梁の大きさは幅 330mm × 成 470mm ~ 500 mm (実測値による) であった。コンクリート梁は作業室では桁行き方向しか入っていない。廊下では 2 スパン (柱間) 毎に入れられている。各柱間を基盤状に架け渡されという架構方法ではなく簡略化されている。大部分が陸梁 (ろくばり 水平な梁) 形式の梁だが、一部北東側から 2 本目の柱の廊下に架かる梁が下端アーチ梁となっていた。理由は不明である。

床は木造床組で組まれていると推定されるが大引、床束、根太については未調査である。床板は木製で厚さ 15mm のボードを下張りとし仕上げは硬質塩化ビニルタイル (P タイル) 貼りであったが後世に教室として改修された部屋は幅 76mm のフローリング張り (板を何枚か寄せてキットにしたもの) であった。これは作業室、廊下では確認できていない。作業室の床には壁とのコーナーに見切縁が回されていた。床の高さは作業室、廊下共同じか 15mm 程度廊下が低い造りとなっていた。

天井は作業室、廊下ともに板張りで厚みは不明だが板巾は 30cm あり、相欠き (板の重ね方的一种) で野縁に釘で止められていた。板の表面はカンナ掛けされ塗装が施されていた。天井高は作業室が 3,341mm (実測値)、廊下が 3,357 mm であった。廊下の天井高が作業室より 16 cm 高いのは、その分廊下の床が低いことを表している。

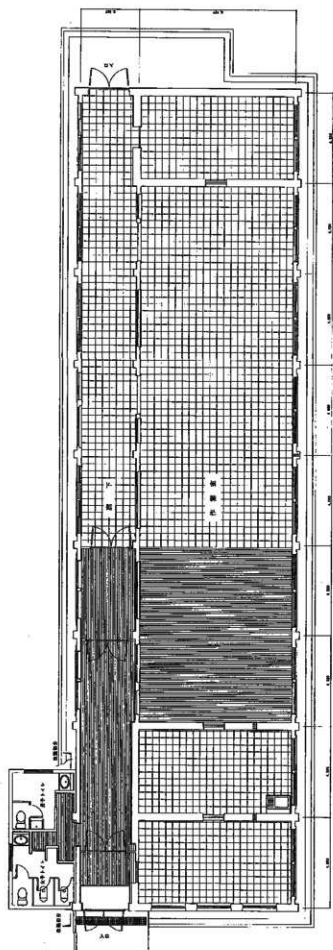
小屋組み 屋根 小屋組みは木製洋小屋のキングポストトラスを架けて屋根を支えている。トラスの間隔はちょうど 4m で各柱毎にトラスを組む形となっている。作業室の上部はコンクリートの分厚い間仕切り壁以外の部分は梁間方向の梁はない。その間トラスが空間を支える構造となっている。下弦の梁材は松などの針葉樹で幅 120 mm × 成 180mm。モヤを受けている斜め材 (合掌材) も同じく 120mm × 180mm であった。真東 (キングポスト) は 120mm × 120mm で下弦材の上に載せられ、振れ止め材として 2 丁の半割材 幅 60mm × 180mm が真東の足許を固めている。真東と振れ止め材はボルトで固定され、真東と合掌材は鉄製短冊金物を使って釘止めで固定されている。スパン全体の 1/4 の位置に挟み東を入れ、方杖材で斜め材を補強する。挟み東は幅 120mm × 厚さ 60mm の半割材で下弦材と合掌材を挟むようにボルトで固定されている。方杖材は合掌材の下向きの挽みを補強する材として入れられ

115mm × 115mm の角材が使われカスガイで止められている。それ以外的小屋組み材としてトラスの桁方向の倒れを防ぐ目的で真東相互をバツテンで結ぶ振れ止めが入れている。大きさは挟み東と同寸法の 60mm × 120mm で、真東とはボルトで固定されている。

屋根を支える材としては桁 (鼻モヤ) と棟束の他に 5 丁のモヤが入られる。トラスの相互の間隔が 4m 広い (一般には 2m 以下) これらの材の断面寸法は幅 120mm × 成 180mm という大きな材が使われている。タルキは省略している。屋根葺き材が波型スレートなので、それを支える支点は桁方向にあればよいので、タルキを使わずにモヤの背で直接波型スレートを支える構造となっている。合掌材の勾配は 4 寸 5 分 (実測値) であった。各モヤには転び止めが取り付けられていた。モヤ間隔は約 1.0m だが間隔にバラつきが見られた。

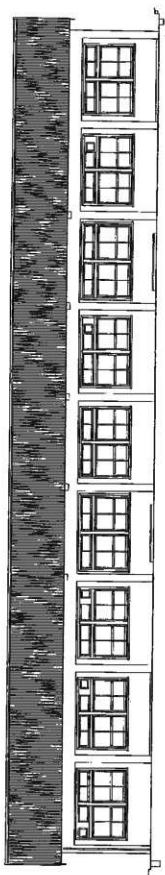
妻壁と下弦材 (梁に相当する) 北東側妻壁および南西側妻壁ともに厚さ 330mm のコンクリートの壁体が屋根の下まで達している。耐火状の理由によるものか施工の簡素化によるものか不明だが、屋根スレートの下端まで達する。モヤはあらかじめその部分をモヤの形に空けておき、コンクリートの硬化後にモヤを差し入れて止めたと思われる。

下弦材の端部はコンクリート製の桁の上に乗る形となっている。しかし外観上はコンクリートの桁と波型スレートには隙間がなく、下弦材の端部は桁の中央で止まっている。その上に木製の桁 (鼻モヤ) が載る。



■ 主体平面図

図名 主体平面図 目録番号 1-1-1	図番 1/50 (原尺、20mm縮尺)	作成 昭和25年4月11日	作成 長瀬 誠 建築士事務所
調査 川越製造所（旧火工廠）建物緊急調査報告	調査 日本建築（株）東上工務所内	調査 調査対象 新製分室（1.17号室） 取付手摺部	調査 調査対象 新製分室（1.17号室） 取付手摺部



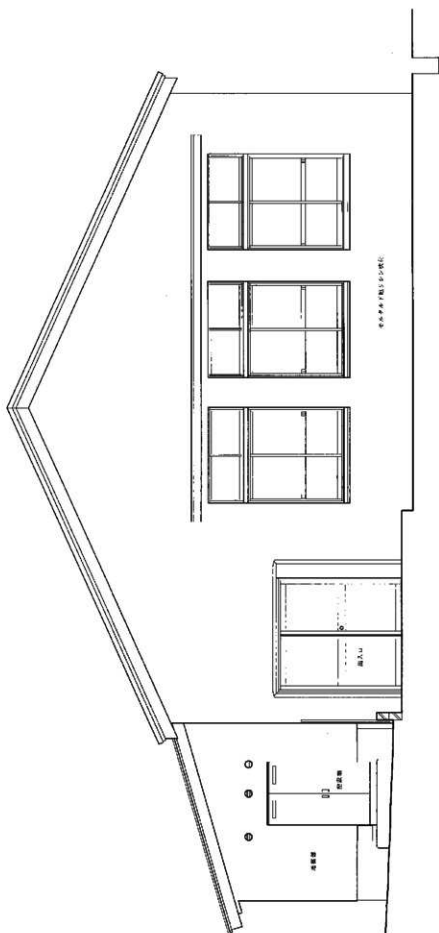
調査対象 旧川越製造所（旧火工廠）建物緊急調査対象棟	所在地 日本郵船（株）埼玉工場内	調査対象 常備保管室（1.1.7号室） 旧川越製造所2階東棟	調査時期 平成25年4月11日	調査者 氏名 1/60 図1.1.709a(部分)	調査者 氏名 氏名
-------------------------------	---------------------	--------------------------------------	--------------------	------------------------------------	-----------------



窓枠の構造断面図

調査対象 旧川越製造所（旧火工廠）建物緊急調査対象	調査対象 日本製鋼所（株）第五工場内	調査対象 番付分室（117号室） 第五工場第五階	調査対象 1/50	調査対象 平成25年4月11日	調査対象 緊急調査報告書
------------------------------	-----------------------	--------------------------------	--------------	--------------------	-----------------

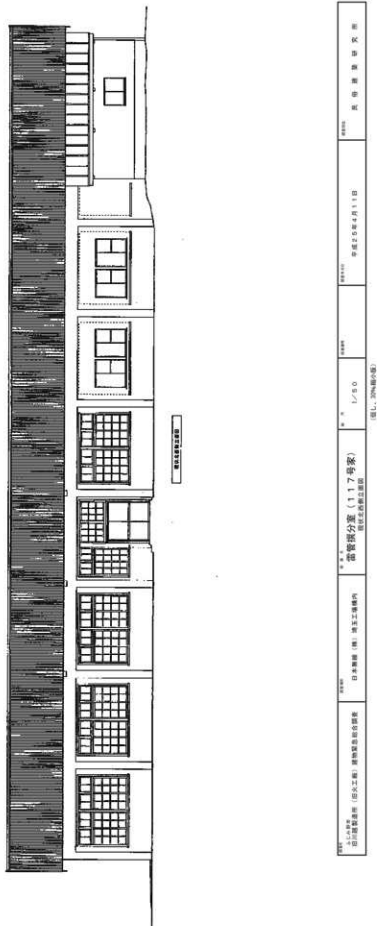
(図 11、294号参照)

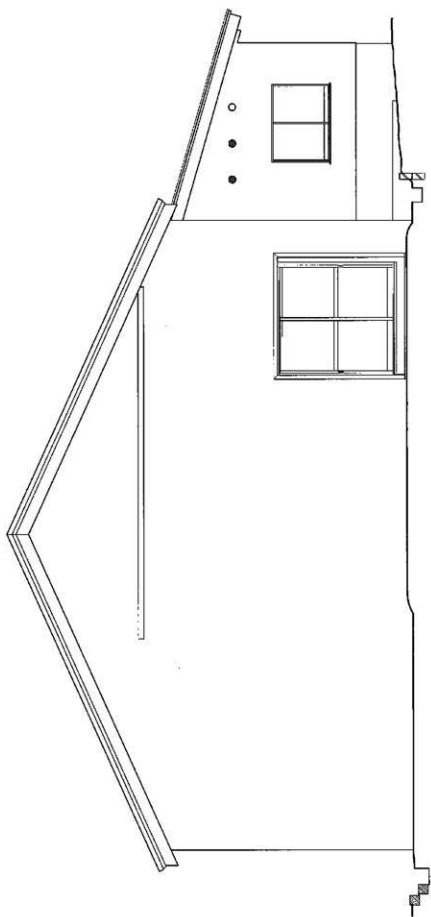


東武東上線川越駅

図名 設計図書名 設計図書番号	図号 日本製鋼所(株)埼玉工場内 東武東上線川越駅	縮尺 1/200	作成 平成25年6月15日	作成 東武東上線川越駅
図名 設計図書名 設計図書番号	図号 日本製鋼所(株)埼玉工場内 東武東上線川越駅	縮尺 1/200	作成 平成25年6月15日	作成 東武東上線川越駅

(単位: 20mm寸法)





設計者 国土建設事務所（旧火工廠）建築課長岡田謙義	設計者 日本建築（株）建築工場部内	設計者 菅野慎分室（1/17号室） 現況建築調査課	設計者 1/30	設計者 平成25年12月28日	設計者 現況建築調査課
------------------------------	----------------------	---------------------------------	-------------	--------------------	----------------

（図1）（内線付図）

7. 旧火工廠建物の概要

ふじみ野市教育委員会で旧上福岡市時代も含めて市内に現存した旧陸軍造兵廠(火工廠)の以下の建物の現況調査を行ってきた。

1. 雷管充填室(112号家)平成9年4月～5月調査
2. 雷管乾燥室(115号家)平成9年5月調査
3. 防爆壁平成25年2月調査
4. 火薬倉庫(75号家)平成25年2月調査
5. 分配室(261号家)平成25年2月調査
6. 爆薬充填室(323号家)平成25年2月調査
7. 電気室(37号家)平成25年2月調査
8. 雷管撰分室(117号家)平成25年4月調査

以上の工作物および建築物について現況の建物実測調査を行い、その中で3. 防爆壁については鉄筋コンクリート造の壁体だけの工作物でありここでは例外とする。それ以外の建物では、5. 分配室と7. 電気室が名称から爆発物である火薬(爆薬、信管など)を扱った施設ではなさそうであるが、前者はその可能性が無いとは言えない。それ以外の建物は明らかに爆薬・火薬と関係する施設であったと考えられる。軍事施設の中でも単なる兵舎建築とは異なり、火工廠と呼ばれる火薬を扱う施設に特有と思われる意匠および構造があるので考察を試みる。また7. 電気室についても直接に爆薬・火薬とは関係ない建物であっても、その特徴は他の6棟の建物と意匠および構造において共通している点が多々見られる。旧陸軍造兵廠(火工廠)の一連の建物ということに加え、建てられた時代が昭和10年代前半であったという時代的な背景もあったのではないかと考えられる。

I. 工期短縮と施工の簡素化

1. 壁体は鉄筋コンクリート造で屋根は波型スレート葺き

電気室以外の建物は切妻屋根を持ち(電気室の屋根は陸屋根と呼ばれる水平屋根)、躯体(建物の構造体)を鉄筋コンクリート造で造り上げている。コンクリートに必要なセメントは軍需物資として優先的に入手しやすかったという事情もあったと思われる。また鉄筋や緊結金物(ボルト類)なども同様の事情があったと考えられる。鉄筋コンクリート造で平屋建ての場合、木造軸組み工法(日本の在来工法、柱梁構造)に比較して複雑な技術が不要である。それと木材の加工など

の手間も大きく軽減できる。さらに型枠俗に『打って返し』といわれたように複数回の使用が可能で、そうした経済的な要素も大きかったと思われる。さらに万一爆発事故が起きた場合、爆風が横方向に広がることを防ぐ意味も大きかったと思われる。爆発した場合、爆風を上方向に逃すため、屋根を極簡素な構造にすることも必要であったと思われる。構内に建てられた他の多くの建物の屋根が波型スレート葺きであったのはそのためであろう。波型スレートは葺き材として現在も使われている材料である。厚みは5mm～6mm程度、(長さについては未調査だが(2.1m～3.0m程)だが耐久性に富み、また瓦葺きなどに比べて軽量でかつ雨仕舞いに優れている点が揚げられる。不燃材であることは建物を類焼から防ぐ効果があり、雨仕舞いが良いということはアスファルトルーフィングなどによる下葺きが不要であった。これらの点が火工廠のこうした類の建物の屋根材として最適であった。

2. タルキと野地板を省いて屋根を葺く

調査したすべての建物(電気室は陸屋根なので除外)で屋根にタルキを使わない構造が見られた。タルキとはモヤの上にモヤと直角に、屋根面の流れの方向におかれる材でモヤに釘止めされる。屋根葺き材が長尺の波型スレート葺きということもあり、本来タルキは不要だが、タルキと野地板は屋根面の足場としての役目もあるので現在の工法では省くことはあまりしないと言ってよく、まして人身事故を起こしてはならない公共工事では、野地板とタルキを省くということは、施工時の安全面を多少は犠牲にして工事が行われたと考えるのが自然である。その大きな理由は工期の短縮と材料と手間の節約すなわち施工の簡素化ではなかったかと考えられる。波型スレートはモヤに直接釘か木ネジで止められた。

3. 屋根は洋小屋組み(キングポストトラス)か、壁体による直接支持工法

旧火工廠の調査した建物のなかで特徴的な工法の一つに小屋組みの架構法があげられる。調査した建物の多くが単純な長方形の平面をしており、それに切妻屋根がかけられていた。寄棟造りや入母屋造り、片流れといった屋根の作りは、こうした用途の建物には不適と考えられたのであろう、実例は見られなかった。洋風小屋組みの一種である真東トラス(一般的にはキングポストトラス)が使われた理由は二つ考えられる。一つ目の理由は和小屋組みに比べ大断面の木材を必要と

しないという利点があげられる。例をあげると「雷管撰分室」の作業室の梁間7.0mに使われた梁材(トラスでは下弦材)の断面は幅120mm×成180mmでこと足りている。これを和小屋組で行うと仮定すると3間半梁であれば軽い造りの屋根であっても成400mm前後は必要となる。

二つ目の理由はトラスの上弦材(合掌材)が直接モヤを受ける材として使えることである。一般の和小屋構造であればモヤを受けるために二段目の小屋梁、三段目の小屋梁を小屋束を立てながら組んでいかなければならないところ、洋小屋では一切不要となる。またモヤを屋根勾配と同じ角度で入れる(一般にはモヤは水平の向きに置く)ことによってその取り合い部分の加工が不要となる。(モヤが転ばぬように転び止めが置かれている)これらの事も工期短縮と施工の簡素化に繋がる重要な要素であったと考えられる。

II. 特徴的な工法

火工廠の建物は共通して施工の簡素化=工期の短縮という意識が強く感じられる。施工の簡素化はまた熟練技能者を必要としないという側面もある。多くの技能者が軍隊へ入隊し戦地へ赴いたため、『銃後』と呼ばれた内地の生活全般は専門技術者を必要としない方法で営む以外なかったと言える。火工廠の建物も軍事施設ではあってもその例外ではなかった。そこで以下のようなさまざまな工夫が考案され実施された。

1. 妻壁を屋根面下まで立ち上げる

電気室のような陸屋根の建物は例外として、切妻屋根=波型スレート葺きの建物は鉄筋コンクリート造の妻壁を屋根面下まで達するように作り、直接モヤを支える構造とした。こうすることにより妻壁の屋切り(屋根下の三角形の部分)処理が不要になった。小屋裏通気口は分配室や火薬倉庫では取り付けられているが、爆薬填実室や雷汞爆粉乾燥室では造られていない。爆薬填実室ではモヤを受ける妻壁の穴を大きめに作り、その余剰の隙間を小屋裏通気口としている。また爆薬填実室は間仕切り壁が4m間隔に入るため、間仕切り壁も屋根面下まで立ち上げ直接モヤを支えている。

2. モヤの支点は最大5.5m

分配室、火薬倉庫も小屋組みにトラスが使われているがこれらの建物は規模の小さな建物であるため、小屋組みの間隔はほぼ2mと標準的な間隔で入れられている。他方、爆薬填実室および雷管撰分室のような

規模が大きな建物では小屋組みの間隔を4mとしている。(爆薬填実室では小屋組みは使わず間仕切り壁を屋根面まで立ち上げて直接モヤを支える。その間隔が4m)。雷管乾燥室および雷填実管室では3.5mから5.5mという間隔で間仕切り壁(コンクリート造で厚さが300mm以上)が入れられている。モヤの支点が5.5mという間隔は異常に長い。その分大きなモヤが必要となる。爆薬填実室や雷汞爆粉乾燥室という二つの建物ではともに幅120mm×成180mmという大断面のモヤ材が使われていた。この大きさが4mもの距離を持たせることを可能にした。

3. 天井を張った目的は

調査した各建物にはいずれも天井が張られていた。それに対し床は床組を作り床板を張った建物がある一方、コンクリートのタタキ土間も存在した。現代では工場のような用途の建物では天井は無いものも珍しくない。それはやはり火薬というものを扱う特殊性のためであったと考えられる。室内環境を厳しく調整し維持する必要があったためではなかったかと考えられる。

4. 広い窓を持つ

4. 火薬倉庫と5. 分配室以外の建物は広い窓を持つ。南面北面各柱間一杯に透明ガラスを入れた木製ガラス窓を入れ、外気を遮断している。電気室では窓の一部は鉄製の窓が使われたが、これは例外的なものであった。これらの広い窓には雨戸が無い。火薬倉庫と分配室は広い窓ではないが雨戸がついている。窓は各柱間一杯に造られ、下部は腰壁を設けて、上部は梁下いっぱいまで取られている。広い窓は上下2段になっており、下段は引違い窓となり、上段は回転窓になっている。回転窓も木製に透明ガラスの組み合わせである。(現状では上段下段の多くがアルミサッシュに改造されていた。)広い窓は作業するのに十分な採光を得るためと、室内で事故(爆発事故)が起きた場合に、爆風が隣の部屋に被害を及ぼすのを防ぐ目的があったと考えられる。

防爆壁



1 防爆壁全景 北方向から見る
鉄筋コンクリート製モルタル仕上げ



2 同左 東方向から見る
高さおよそ6m40cm



3 防爆壁の断面 柱底部の厚さは約1m程ある



4 防爆壁内側 下半の壁の厚さは約37cm



5 防爆壁の切断面



6 同左 鉄筋は13mm筋



7 防爆壁の下部にあげられた
通気口と見られる穴

火薬倉庫 (75号屋家)



1 2棟が残る火薬倉庫遠景



2 火薬倉庫はかつては土壁で囲われていた



3 西側から見た火薬倉庫全景



4 北東妻側の庇を伴う窓



5 同4 土蔵の窓と同じ造り



6 南側全景 屋根は波トタン板葺きとなる



7 同6 南東面の窓近景



8 東隅部分 壁は鉄筋コンクリート造で屋根は木造となる

火薬倉庫（75号家）



9 破風板、雨樋の消失



10 火薬倉庫入口付近

11 入口上部の屋根吹き下ろしの庇
葺き材は波形ストレート

12 庇は鉄骨造 入口扉は木製に鉄板張り



13 入口観音扉



14 各面2カ所ずつ作られた床下通気口



15 入口手前の階段 本来は2段だが下段は土に埋もれている

火薬倉庫（75号屋）・分配室（261号家）



16 火薬倉庫内部 床、天井とも板張りとなる



17 北東妻側を見る 小屋組は分配室と同じく木造トラス構造



1 西側から見た2棟の分配室 調査したのは奥の棟



2 分配室北西、南西面外観



3 調査を行ったのは分配室の西側外観 手前のケヤキは実生の樹



4 南西妻面の屋根の傷みと小屋裏通気口 屋根材は波トタン板



5 入口上部の庇状の突起



6 北西面 窓の戸は作り替えた痕が見られる

火薬倉庫（75号家）



7 北方向から見た全景



8 北西面近景



9 東方向から見た全景



10 構造は鉄筋コンクリート



11 南東面 かなり枯葉に埋もれている



13 東隅部分



12 北東側妻面 波トタンの庇が付けられている



14 庇の破損状況写真

分配室（261号家）



15 室内 南西妻側を見る
床はコンクリートの叩き土間



16 屋根の鉄板はモヤに直接葺かれている



17 小屋組は木製トラスが約2m間隔に
架けられている



18 南西妻側を見る 入口にハンガードアが残る



19 南東側にある窓 下棧のあり方がやや不自然



20 室内にある棚の様子



21 出入口の石製の敷居



22 庇の持ち送り

爆薬填実室 (323号家)



1 南西側正面全景 建物周囲には土塁の痕が確認できる



2 南から見た爆薬填実室全景



3 南東側側面全景



4 東側から見た全景 風除室は失われ、破風板も損傷している 木製窓は金属製パネルで覆われている



5 北方向から北西面、北東面を見る
両側面は同じ意匠をなす



6 北西側面を西方向から見る



7 同6 一番手前のアルミ窓



8 北西側には土塁の跡が地盤の高さの違いとなって残る

爆薬填実室（323号家）



9 内部中廊下 コンクリート製の登り梁がむき出しの状態



10 同9 タルキは無くモヤが直接に屋根を支える構造



11 中廊下の両側に作業用の個室が並び、間仕切りは分厚いコンクリート製



12 廊下の所々に採られた天窗



13 中廊下は明快な構造を見せる



14 同13

爆薬填充室（323号家）



15 爆薬填充室の作業室窓側
各部屋に出入口がつく



16 窓は引き違い 建具は消失



17 出入口周り 欄間ははり出し



18 作業室をつなぐ通路部分

爆薬填充室（323号家）



19 同 18 建具は無かった模様



20 改造された作業室への出入口



21 作業室窓側から廊下側を見る
天井の高さは約3.5mと高い



22 作業室天井は埃除けのためか
クロスが張られていた



23 天井点検孔 天井板は杉の5分板張り

爆薬実室 (323号家)



24 屋根と外壁を取り去った爆薬実室
(平成 25 年 8 月 23 日撮影)



25 同左近景 モヤは切断されているが部分的に残っている



26 南西側正面 もとは風除室が付いていたと思われる



27 同左 モヤの脇に2箇所づつある隙間は小屋裏通気孔



28 モヤの位置にあわせてコンクリートの壁が欠き込まれている



29 内部間仕切り壁も鉄筋コンクリート造



30 外壁上部の梁上の壁 厚みは約 30 cm



31 切断されたモヤ タルキを使わずじかに野地板が貼られていた

爆薬填実室(323号家)・電気室(37号家)



32 内外壁共仕上げはモルタル塗り



33 モルタルの厚みは12mm
おそらく2回塗り程度



1 電気室南西正面外観



3 同1 屋根は陸屋根



2 正面を南から見る



4 南西側正面 窓は金属製



5 入口の扉

電気室 (37号家)



6 電気室を北隅より見る

7 東面を南から見る
庇の出ている部分は出入口

8 当初の物と見られる木製窓



9 南東西側の手前出入口付近



10 南東西側外壁の近景



11 同左

電気室（37号家）



12 電気室を東隅からみる
手前は増築されたトイレ



13 南東西側の屋の出入口付近



14 トイレ外観
もとは小さいトイレが作られていた



15 電気室北西妻側の外観



16 同 15 左近景
木製の窓が残る



17 北西妻側を西側から見る

電気室（37号家）



18 トイレ北面



19 トイレ西面（北西面）

20 電気室内部
正面入口を入った見返し部分

21 軽量鉄骨で2階の床を増築した



22 2階へ登る階段

23 正面を入った辺りから奥を見る
床は後世の改造による

電気室（37号家）



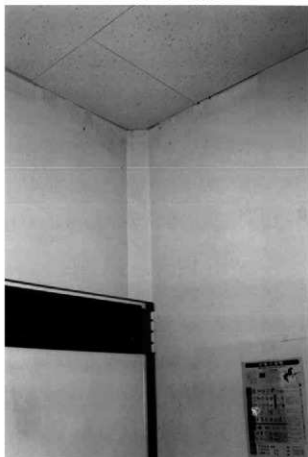
24 同 23 間仕切り部分の近景



25 3室に仕切られた中央の部屋の北面（奥の方）を見る



26 同 25 南西隅方向を見る



28 奥の部屋の駆体の隅の面取り状況
面の幅は120mm



27 もっとも奥の部屋の東方向を見る
奥のドアはトイレに通じる



29 同 27 北西面を見る



30 奥の部屋の北隅方向を見る

電気室（37号家）



31 北妻壁に残る木製窓

32 改造された2階
奥から入口方向を見る33 同32 大梁の中央のスラブ下で
約75cmに達する

34 2階中央より奥の方を見る



35 2階最奥の部屋



36 同34 物置として使われていた様子

37 屋上アスファルト防水状況
北方向を見る

電気室（37号家）・雷管横分室（117号家）



36 同 38 屋上周囲の立ち上がり



39 同 37 南方向を見る



1 南側から見た建物全景
庇のある部分が入り口



2 南東面 窓はアルミサッシュに
改造されている



3 南東面を北側から見る 創建時は爆風除けの
土壁が造られていた



4 南東面の窓 窓枠は鉄板で覆い
再利用している



5 北側から見た建物全景 妻側には風除室
のような下屋が出ていた



6 同左 風除室の壁面の痕が
かすかに残っている

雷管撰分室（117号家）



7 東北面妻側の雨水用の排水路は風除室があったことを示している



8 同左 反対側から見る かつての下屋の屋根の水切りが見える



9 壁樋を伝って流れる雨水を受けた石製の受け皿



10 建物北西側の壁面に残る創建時のものとみられる窓の様子



11 同10 壁面の丁度中央の柱間に作られた出入口



12 北西側の壁を西から見る 当初の樋は鉄板製であった

雷管撰分室（117号家）



13 北西側の壁の南半分は近代的に
改装されている



14 室内は片廊下になっている
廊下に立って入口方向をみたところ



15 さらに進んで入口方向を見る
左手が作業の為の部屋



16 同左 廊下と作業室を仕切る壁
大きく改造されている



17 廊下の板張りの天井
当初から塗装はされていたが色は不明

雷管撰分室（117号家）



18 廊下の北東出入口方向を見る
奥の梁はアーチ状に架かる



19 北西面の壁の木製の窓を廊下側から見る



20 作業室内部 もっとも南側の部屋
右手は窓、左はコンクリート造の壁



21 南西妻側の窓の一つ
もとは木製の窓であった



22 同 20 の部屋の廊下方向を見る



23 南西妻から二つ目の部屋の南窓方向を見る

雷管撰分室（117号家）



24 同左廊下方向を見る
右手の壁も分厚いコンクリート造



25 作業室内部 廊下境の壁もコンクリート造で
分厚い 当初の窓枠が残る



26 同25の部屋の南窓側を見る 一時学校の教室
に改造され使われていた



27 同25 南西の折行方向を見る
正面の壁はコンクリート造



28 廊下境の壁に残る出入口枠と窓枠
ただし建具は不明



29 25とはまた別の作業室
右手の下り壁は後世の改造による



30 29に続く部屋の廊下側間仕切り壁

雷管撰分室（117号家）



31 同29 南東の窓側を見る
床、天井とも創建時の板張りが残る



32 同31 作業室の南西桁行方向を見る
間仕切りは後世の改造



33 29と同じ作業室の北東桁行方向を見る
壁はコンクリート造



34 同33 正面の壁の中央付近には
出入口が見られた



35 小屋組はキングポストトラス構造 モヤには転び止めがつく

雷管撰分室（117号家）



36 同 35 近景 トラス相互の間隔は約4mで許容の限界に近い



37 間仕切り壁および妻壁は屋根面まで達してトラスを省いている



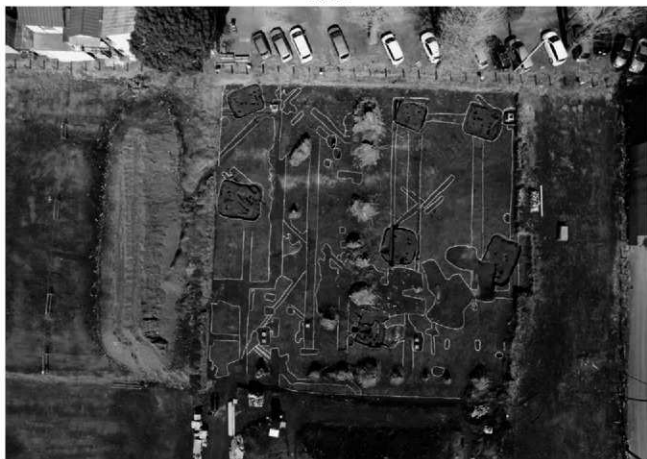
38 屋根は波形スレート葺きでタルキは使わずモヤで直接受けている



39 トラス相互の桁方向の振れ止め



40 同左 小屋材は大部分がボルト止めで止められている



調査区全景



調査区近景



調査区近景



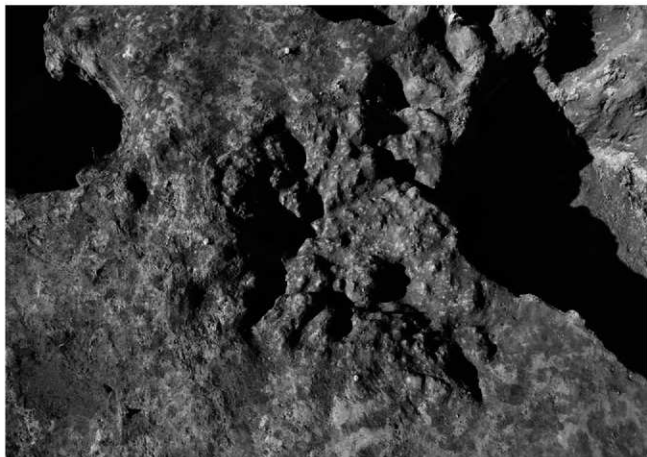
調査区近景



調査区近景



3号住居跡



3号住居跡 炉



3号住居跡



3号住居跡 プラン確認状況



3号住居跡 土層



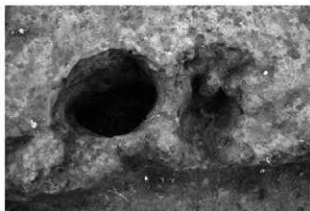
3号住居跡 土層



3号住居跡 炉



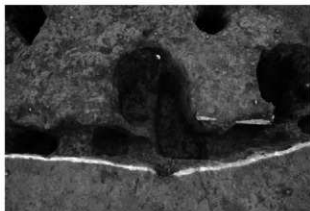
3号住居跡 炉 土層



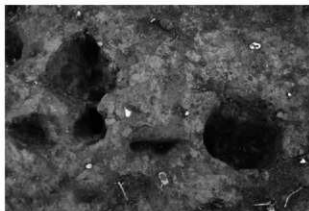
3号住居跡 ビット8



3号住居跡 ビット1



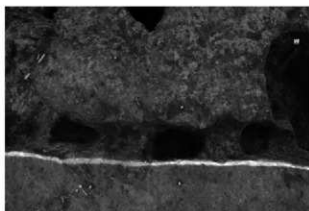
3号住居跡 ビット4



3号住居跡 ビット10・11



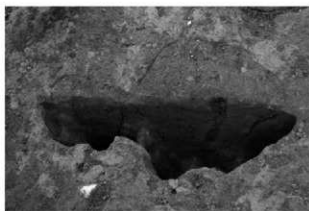
3号住居跡 ビット5・7



3号住居跡 ビット6



3号住居跡周溝 土層



3号住居跡 ビット4 土層



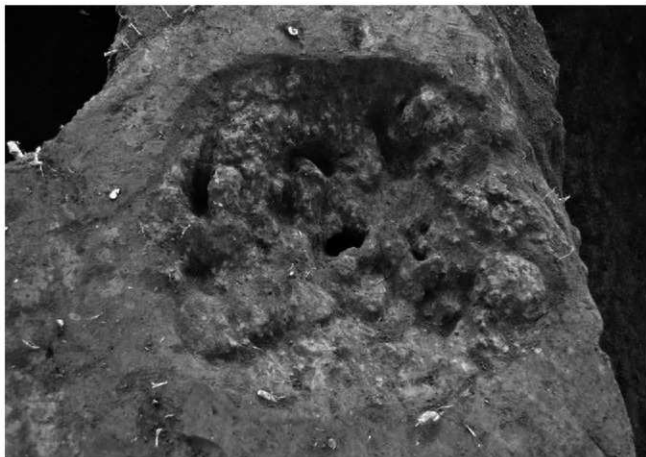
3号住居跡 調査風景



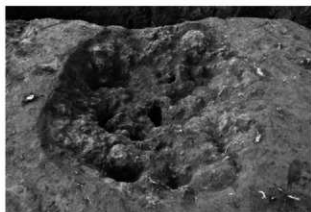
3号住居跡 調査風景



4号住居跡



4号住居跡 炉



4号住居跡 炉



4号住居跡 炉 土層



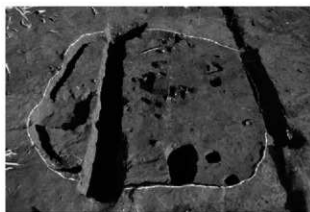
4号住居跡 炉 土層



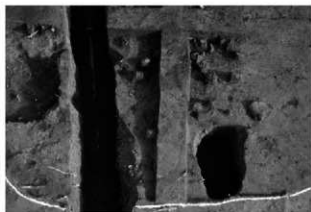
4号住居跡 プラン確認状況



4号住居跡 遺物出土状況



4号住居跡 遺物出土状況



4号住居跡 遺物出土状況



4号住居跡 遺物出土状況



4号住居跡 遺物出土状況



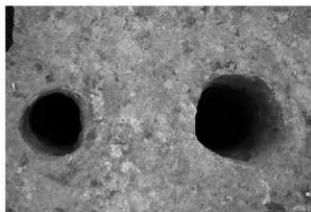
4号住居跡 遺物出土状況



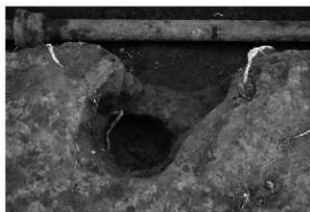
4号住居跡 土層



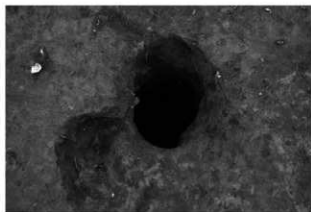
4号住居跡 土層



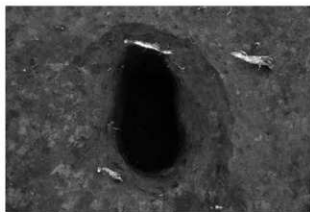
4号住居跡 ピット1・2



4号住居跡 ピット7



4号住居跡 ピット3



4号住居跡 ピット4



5号住居跡



5号住居跡 炉



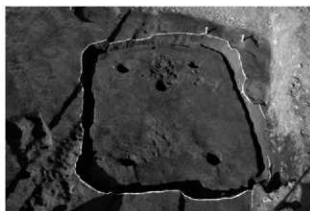
5号住居跡 炉 土層



5号住居跡 炉 土層



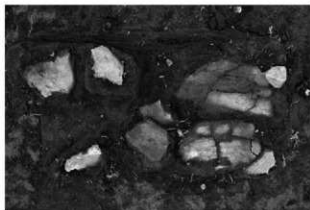
5号住居跡 プラン確認状況



5号住居跡 (外側周溝)



5号住居跡 遺物出土状況



5号住居跡 遺物出土状況



5号住居跡 遺物出土状況



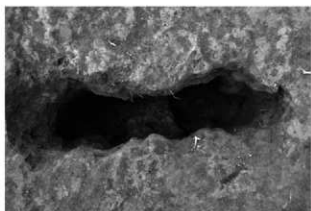
5号住居跡 遺物出土状況



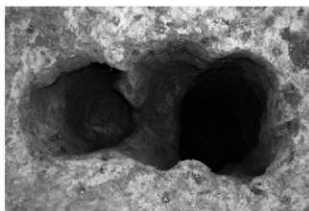
5号住居跡 遺物出土状況



5号住居跡 土層



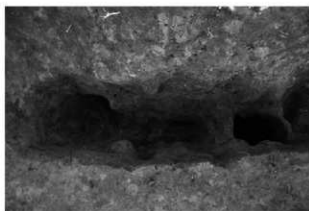
5号住居跡 ビット8



5号住居跡 ビット13・14



5号住居跡 ビット15・16



5号住居跡 ビット18～20



5号住居跡 ビット19 土層



5号住居跡 周溝



6号住居跡



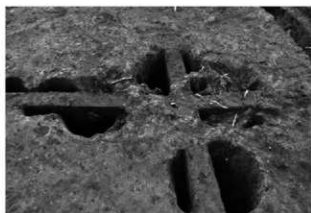
6号住居跡 炉



6号住居跡 炉 土層



6号住居跡 炉 土層



6号住居跡 炉 土層



6号住居跡 プラン確認状況



6号住居跡 遺物出土状況



6号住居跡 遺物出土状況



6号住居跡 遺物出土状況



6号住居跡 遺物出土状況



6号住居跡 遺物出土状況



6号住居跡 遺物出土状況



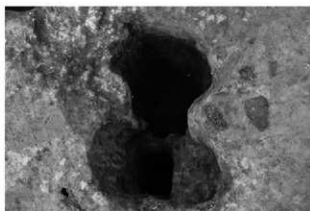
6号住居跡 遺物出土状況



6号住居跡 遺物出土状況



6号住居跡 土層



6号住居跡 ビット5・6



6号住居跡 ビット2・11



6号住居跡 周溝 土層



7号住居跡



7号住居跡 炉1



7号住居跡 炉2



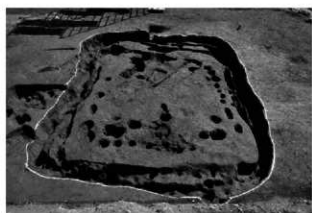
7号住居跡 炉1 土層



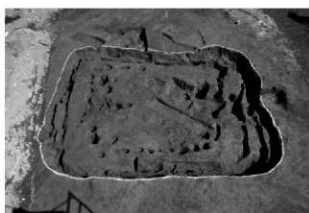
7号住居跡 炉1 土層



7号住居跡 プラン確認状況



7号住居跡



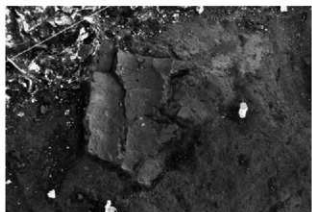
7号住居跡



7号住居跡



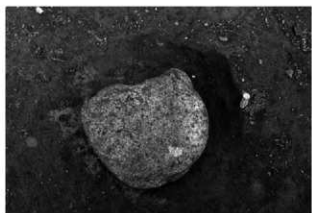
7号住居跡



7号住居跡 No. 72 遺物出土状況



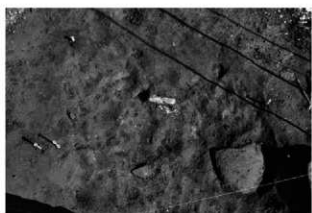
7号住居跡 No. 68 遺物出土状況



7号住居跡 No. 86 遺物出土状況



7号住居跡 No. 118 遺物出土状況



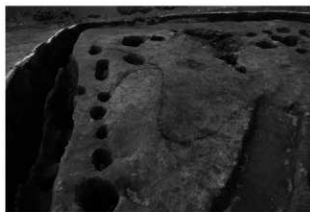
7号住居跡 遺物出土状況



7号住居跡 ビット・周溝



7号住居跡 ビット・周溝



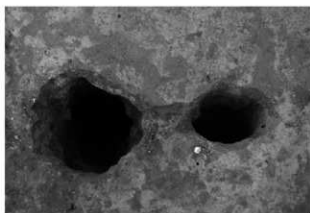
7号住居跡 ビット・周溝



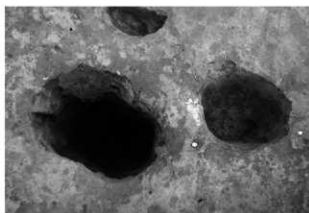
7号住居跡 ピット・周溝



7号住居跡 ピット1・2



7号住居跡 ピット3・4



7号住居跡 ピット5・6



7号住居跡 周溝 土層



7号住居跡 周溝 土層



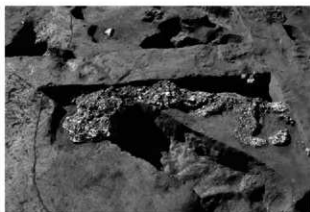
7号住居跡 周溝 土層



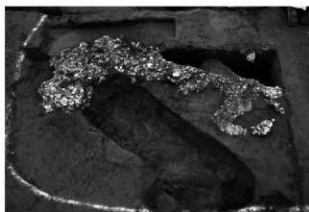
7号住居跡 周溝 土層



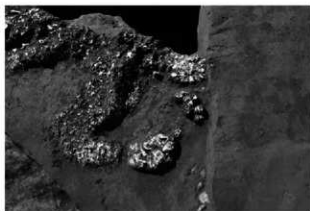
7号住居跡 貝ブロック出土状況（上面）



7号住居跡 貝ブロック1・17他



7号住居跡 貝ブロック1・17他



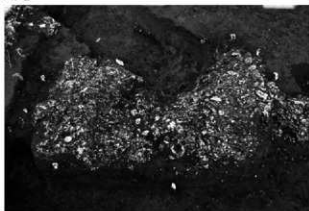
7号住居跡 貝ブロック1・17他



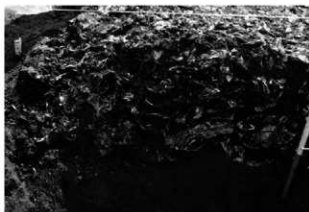
7号住居跡 貝ブロック5



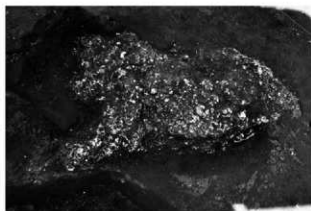
7号住居跡 貝ブロック4～12・22他



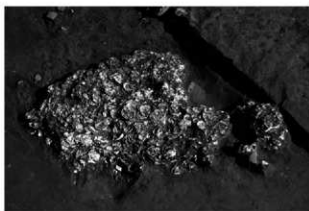
7号住居跡 貝ブロック5 (シジミ①層)



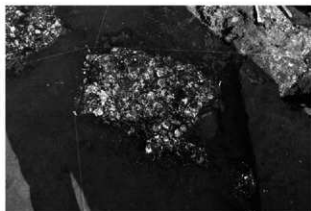
7号住居跡 貝ブロック5 土層



7号住居跡 貝ブロック7



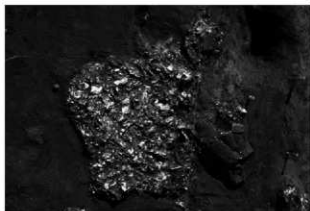
7号住居跡 貝ブロック8



7号住居跡 貝ブロック8 (ハマグリ②層)



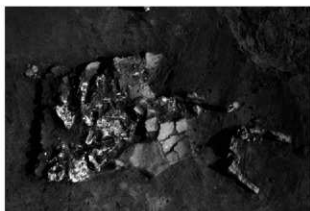
7号住居跡 貝ブロック9



7号住居跡 貝ブロック 10



7号住居跡 貝ブロック 10



7号住居跡 貝ブロック 10 (マガキ④層)



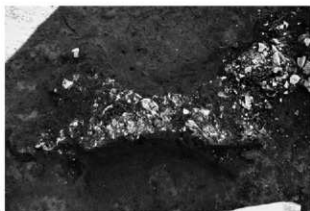
7号住居跡 貝ブロック 10・13



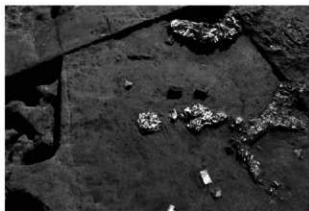
7号住居跡 貝ブロック 10・13・19・28



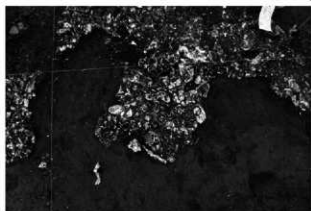
7号住居跡 貝ブロック 6・13・18・19・23 他



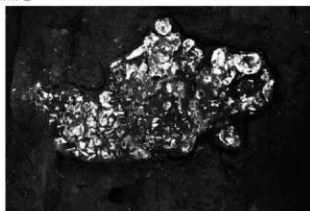
7号住居跡 貝ブロック 13 (シジミ①層)



7号住居跡 貝ブロック 16・18・19・23 他



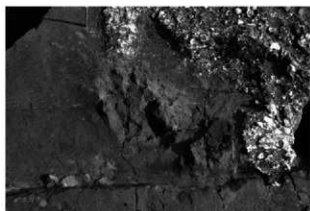
7号住居跡 貝ブロック 13 (ヤマトシジミ②層)



7号住居跡 貝ブロック 15



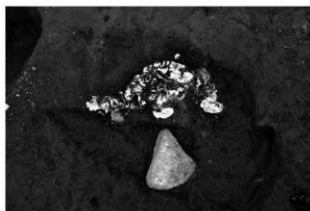
7号住居跡 貝ブロック 16 (ヤマトシジミ①層)



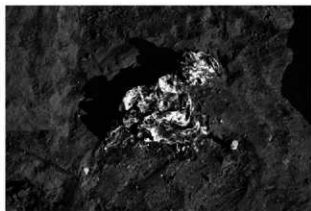
7号住居跡 貝ブロック 17



7号住居跡 貝ブロック 20



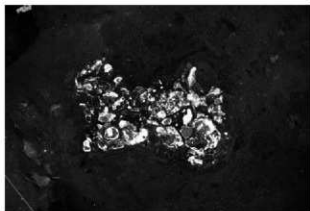
7号住居跡 貝ブロック 21 (ヤマトシジミ①層)



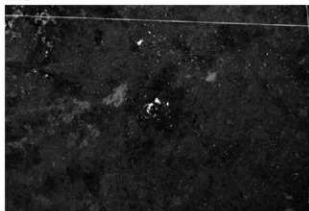
7号住居跡 貝ブロック 22 (マガキ①層)



7号住居跡 貝ブロック 23 土層



7号住居跡 貝ブロック 24



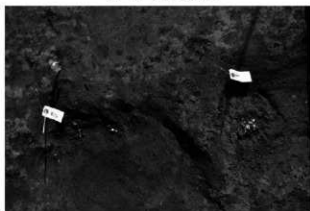
7号住居跡 貝ブロック 8 (旧貝ブロック 26)



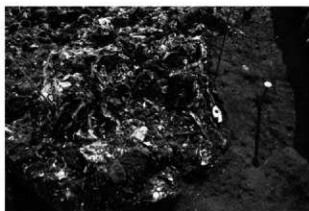
7号住居跡 貝ブロック 7 (旧貝ブロック 27)
(ヤマトジジミ①層)



7号住居跡 貝ブロック 13 (旧貝ブロック 28)



7号住居跡 貝ブロック 13 (旧貝ブロック 29・30)



7号住居跡 貝ブロック



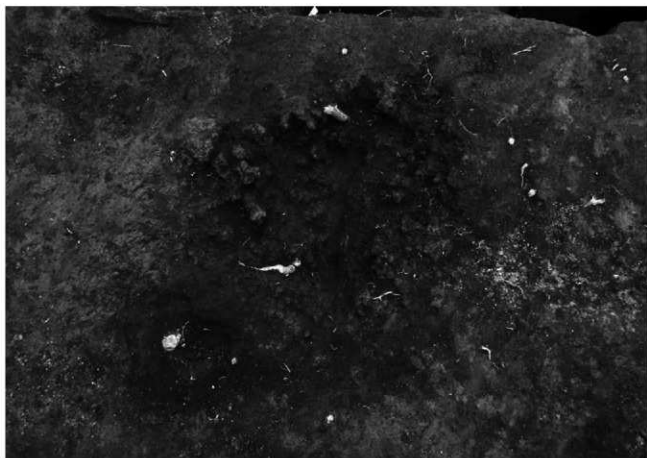
7号住居跡 貝ブロック 調査風景



7号住居跡 調査風景



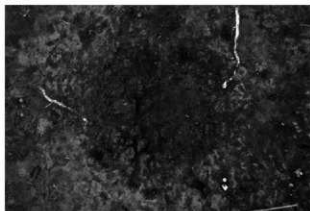
8号住居跡



8号住居跡 炉 1



8号住居跡 炉1



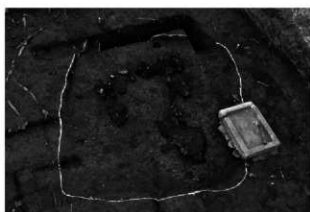
8号住居跡 炉2



8号住居跡 プラン確認状況



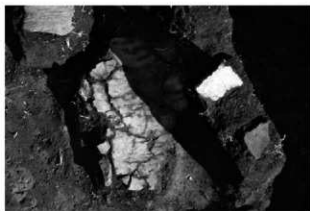
8号住居跡 遺物出土状況



8号住居跡 遺物出土状況



8号住居跡 遺物出土状況



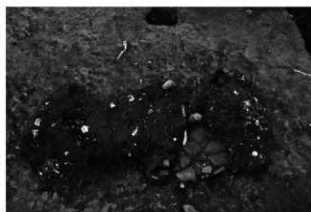
8号住居跡 遺物出土状況



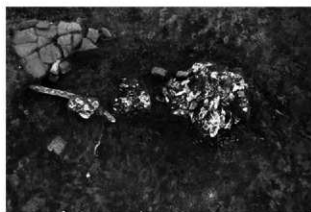
8号住居跡 土層



8号住居跡 貝ブロック出土状況 (上面)



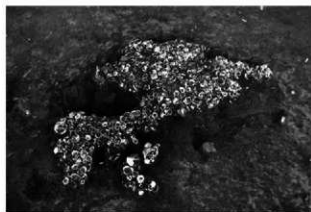
8号住居跡 貝ブロックⅠ～Ⅳ出土状況



8号住居跡 貝ブロックⅠ・Ⅱ出土状況 (上面)



8号住居跡 貝ブロックⅢ出土状況 (上面)



8号住居跡 貝ブロックⅤ出土状況 (上面)



8号住居跡 貝ブロック I
(マガキ①層、ヤマトシジミ①層)



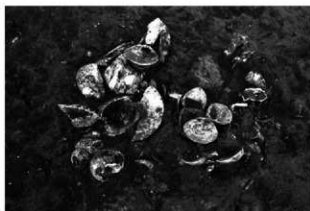
8号住居跡 貝ブロック III



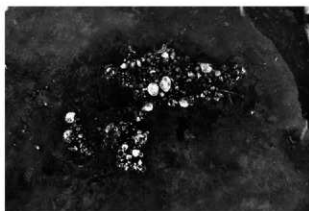
8号住居跡 貝ブロック IV



8号住居跡 貝ブロック V (ヤマトシジミ②層)



8号住居跡 貝ブロック V (ハマグリ②層)



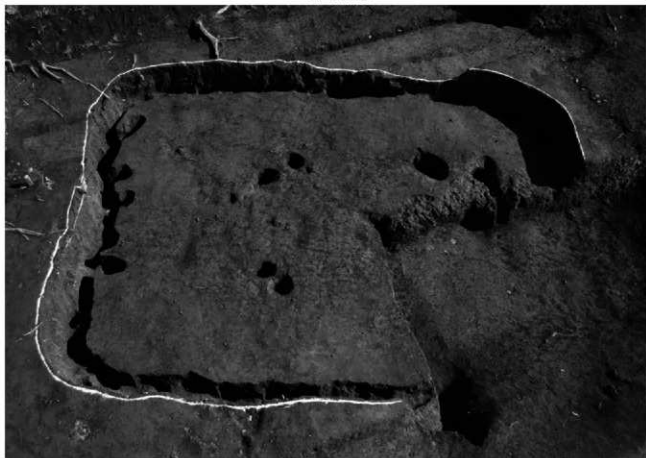
8号住居跡 貝ブロック V
(ヤマトシジミ②層、マガキ①層、ハマグリ①層)



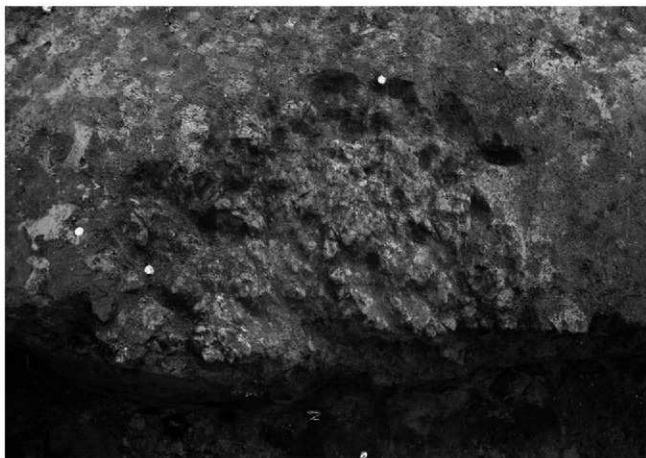
8号住居跡 貝ブロック VI



8号住居跡 貝ブロック VI



9号住居跡



9号住居跡 炉



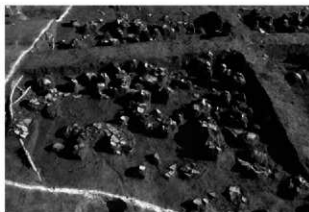
9号住居跡 炉1・2



8号住居跡 プラン確認状況



9号住居跡 遺物出土状況



9号住居跡 遺物出土状況



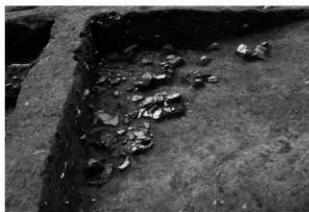
9号住居跡 遺物出土状況



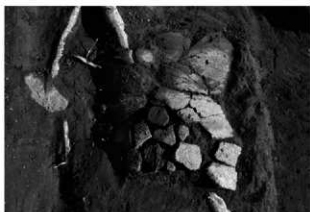
9号住居跡 遺物出土状況



9号住居跡 遺物出土状況



9号住居跡 遺物出土状況



9号住居跡 遺物出土状況



9号住居跡 遺物出土状況



9号住居跡 遺物出土状況



9号住居跡 遺物出土状況



9号住居跡 遺物出土状況



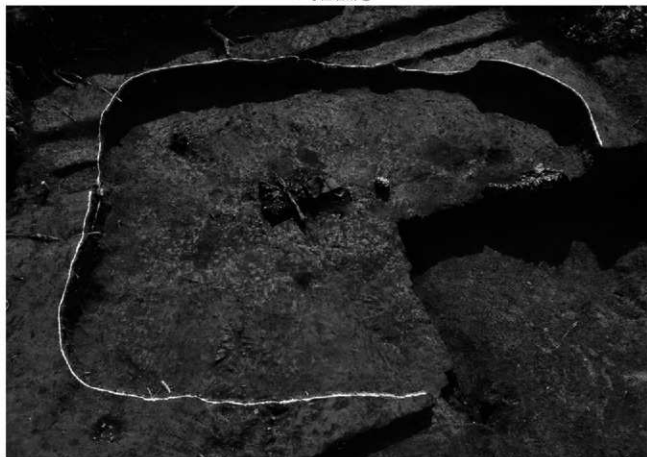
9号住居跡 遺物出土状況



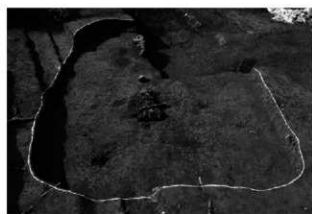
9号住居跡 遺物出土状況



9号住居跡 遺物出土状況 (床面)



9号住居跡 貝ブロック全景



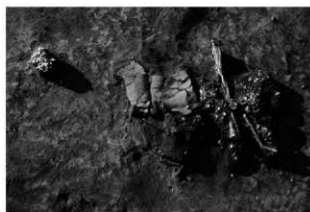
9号住居跡 貝ブロック全景



9号住居跡 貝ブロックⅠ（1層）



9号住居跡 貝ブロックⅡ（1層）



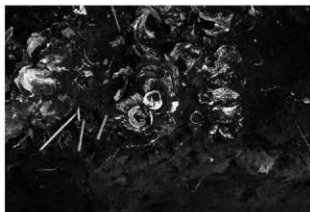
9号住居跡 貝ブロックⅢ（1層）



9号住居跡 貝ブロックⅢ (ヤマトシジミ②層)



9号住居跡 貝ブロックⅣ (マガキ①層)

9号住居跡 貝ブロックⅣ
(ヤマトシジミ①層・P389)

9号住居跡 貝ブロックⅣ (ヤマトシジミ③層)



9号住居跡 貝ブロック 調査風景



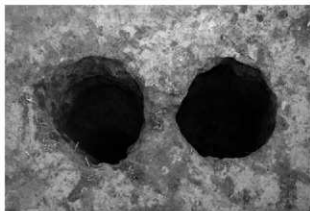
9号住居跡 調査風景



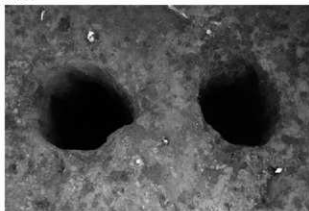
9号住居跡 土層



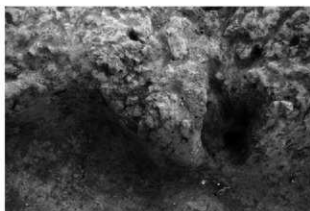
9号住居跡 土層



9号住居跡 ビット1・2



9号住居跡 ビット3・4



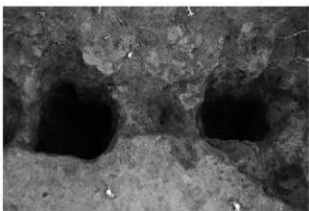
9号住居跡 ビット7・8



9号住居跡 ビット10・17



9号住居跡 ビット12・16



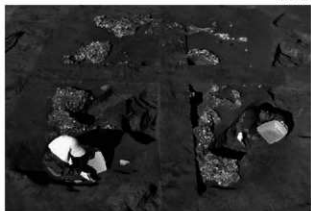
9号住居跡 ビット13・14



9号住居跡 調査風景



9号住居跡 調査風景



7号住居跡 調査風景



7号住居跡 調査風景



8号住居跡 調査風景



9号住居跡 調査風景



溝 調査風景



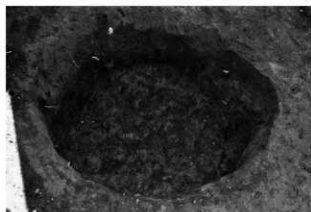
全景 積雪時風景



遺跡見学会



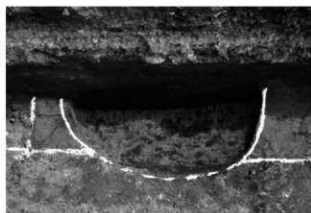
遺跡見学会



土坑 1



土坑 2



土坑 3



溝 1



溝 1



溝 1



溝 1 土層



溝 1 土層



火工廠 水溜 8



火工廠 水溜 8



火工廠 水溜 8・消火栓 2



火工廠 消火栓 2



火工廠 配水管



火工廠 遺構 1



火工廠 遺構 1



火工廠 遺構 1



火工廠 遺構 1



火工廠 遺構 1



火工廠 遺構 1



火工廠 遺構 1



火工廠 遺構 1



火工廠 遺構 2 (トレンチ 1)



火工廠 遺構 4 (トレンチ 20)



火工廠 遺構 7 (トレンチ 19)



火工廠 遺構 1 遺物出土状況 (トレンチ 14)



火工廠 遺構 8 (トレンチ 14)



火工廠 遺構 9 (トレンチ 14)



火工廠 遺構 (トレンチ 18)



火工廠 トレンチ 22 遺物出土状況



火工廠 遺構 11 (トレンチ 23)

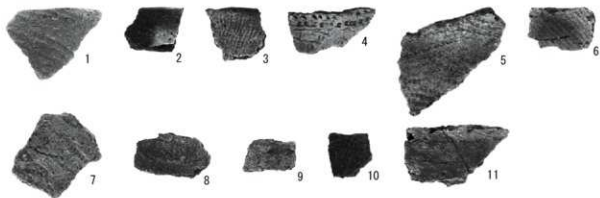


火工廠 遺構 12 (トレンチ 39)

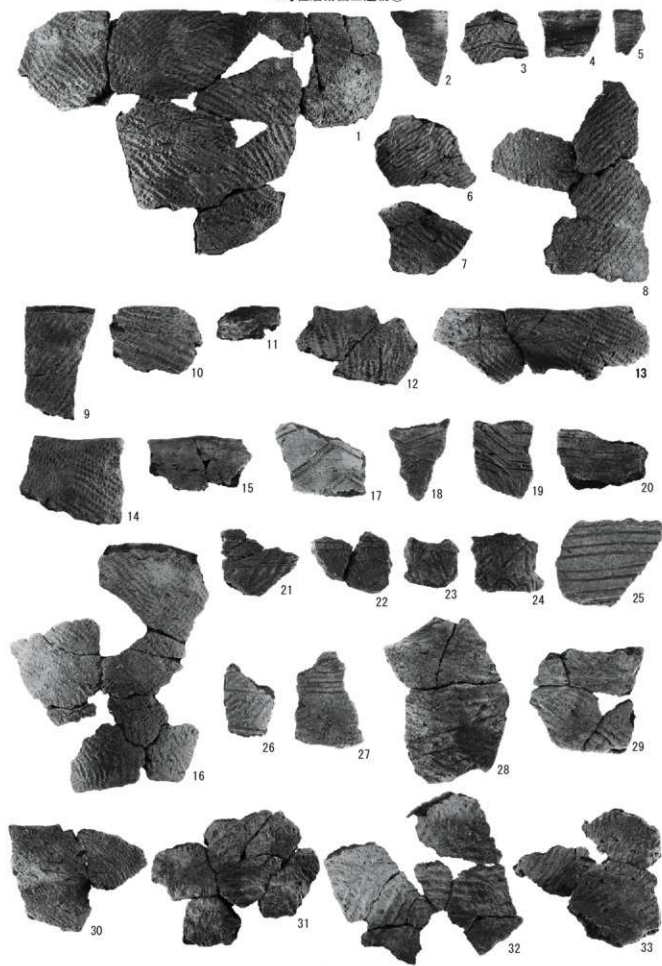


火工廠 トレンチ 53 遺物出土状況

3号住居跡出土遺物

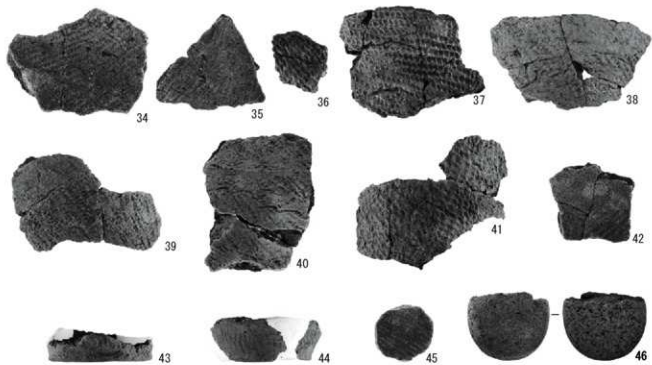


3号住居跡出土遺物

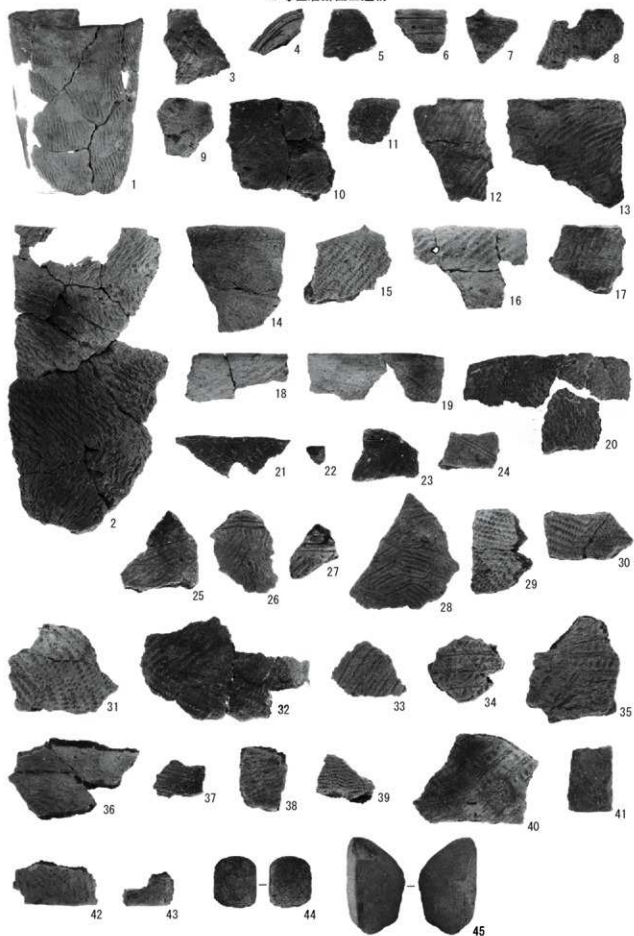


4号住居跡出土遺物(1)

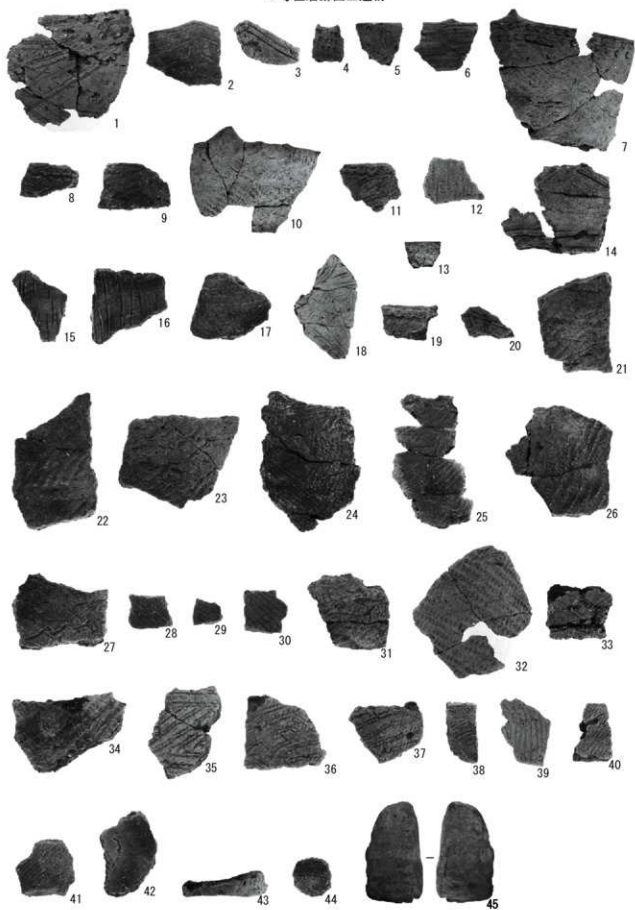
4号住居跡出土遺物②



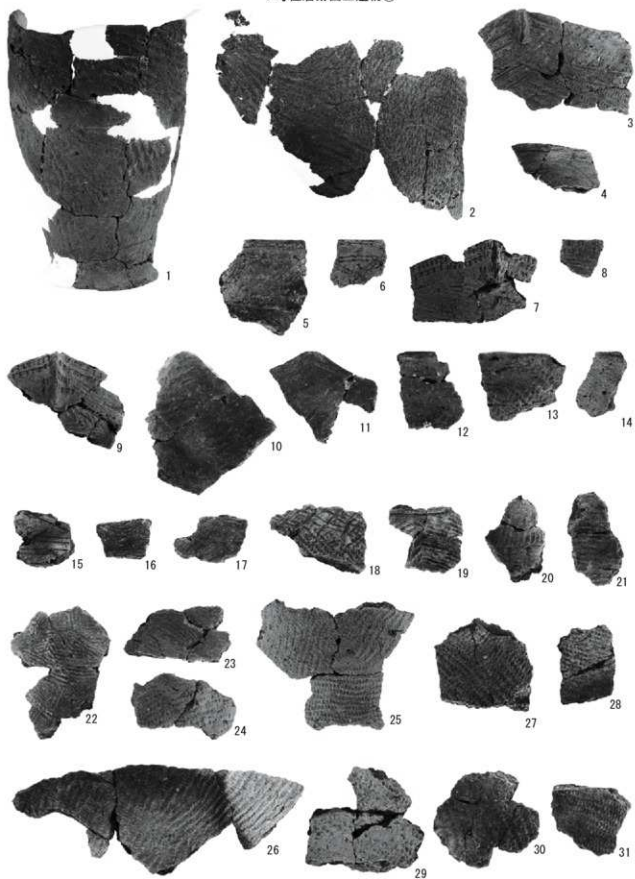
4号住居跡出土遺物(2)



6号住居跡出土遺物

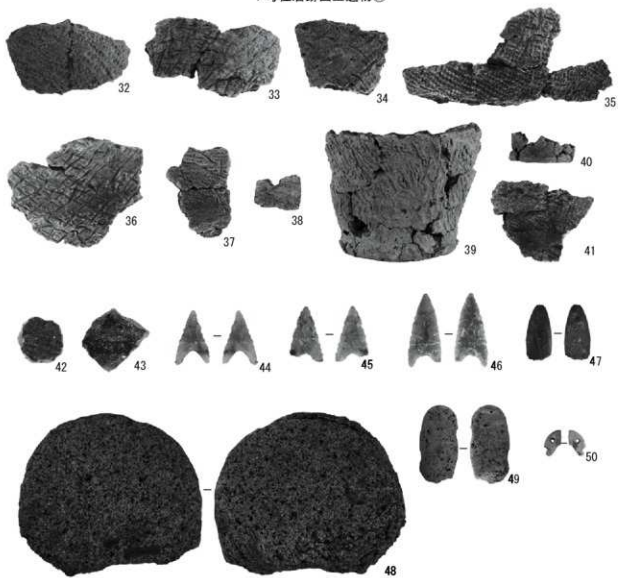


6号住居跡出土遺物

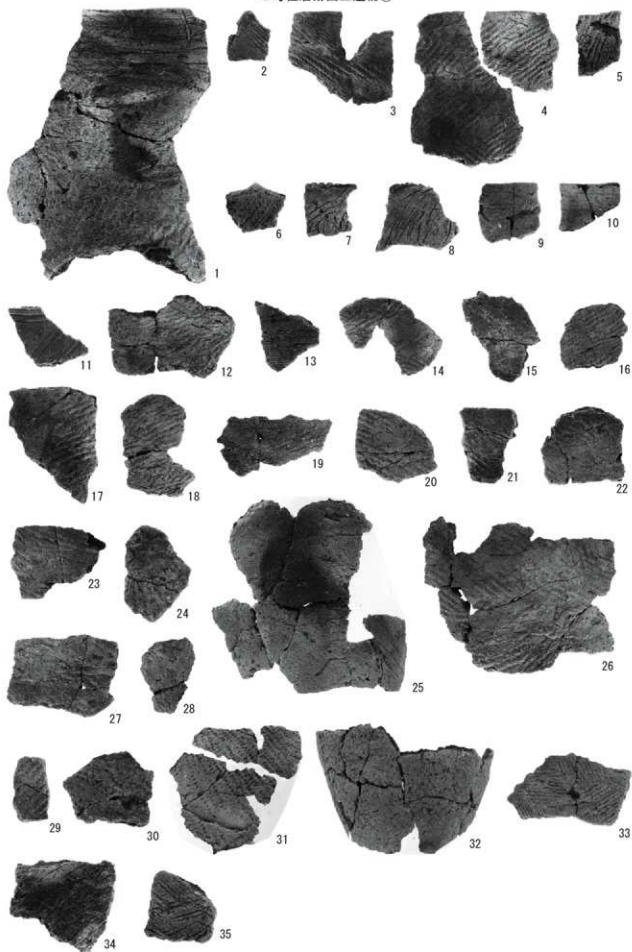


7号住居跡出土遺物 (1)

7号住居跡出土遺物②

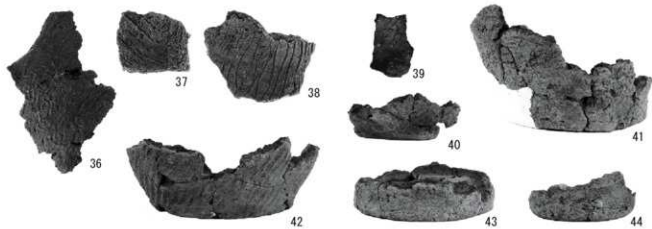


7号住居跡出土遺物(2)



8号住居跡出土遺物(1)

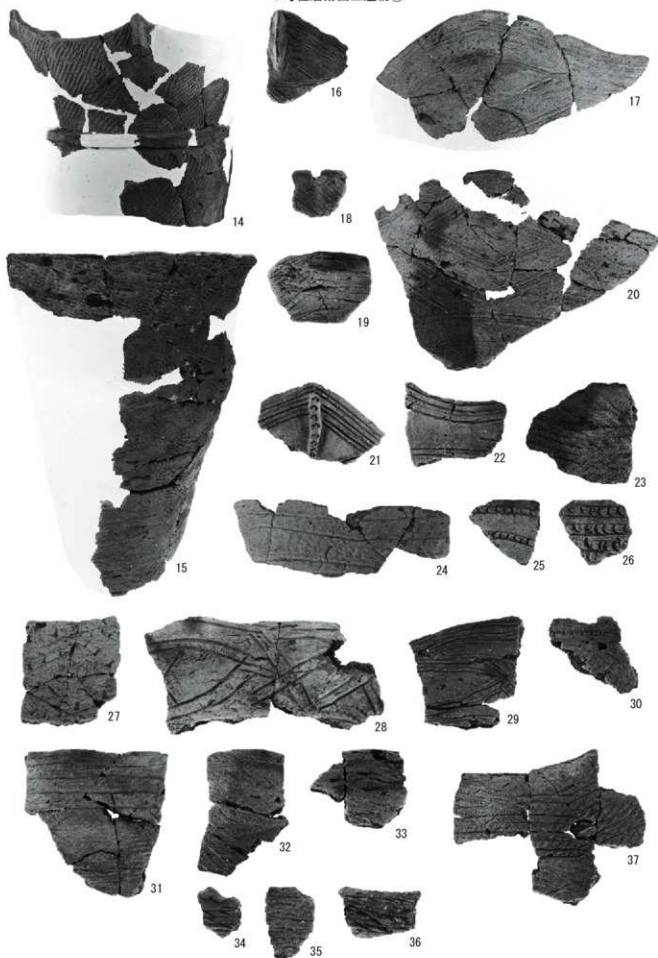
8号住居跡出土遺物②



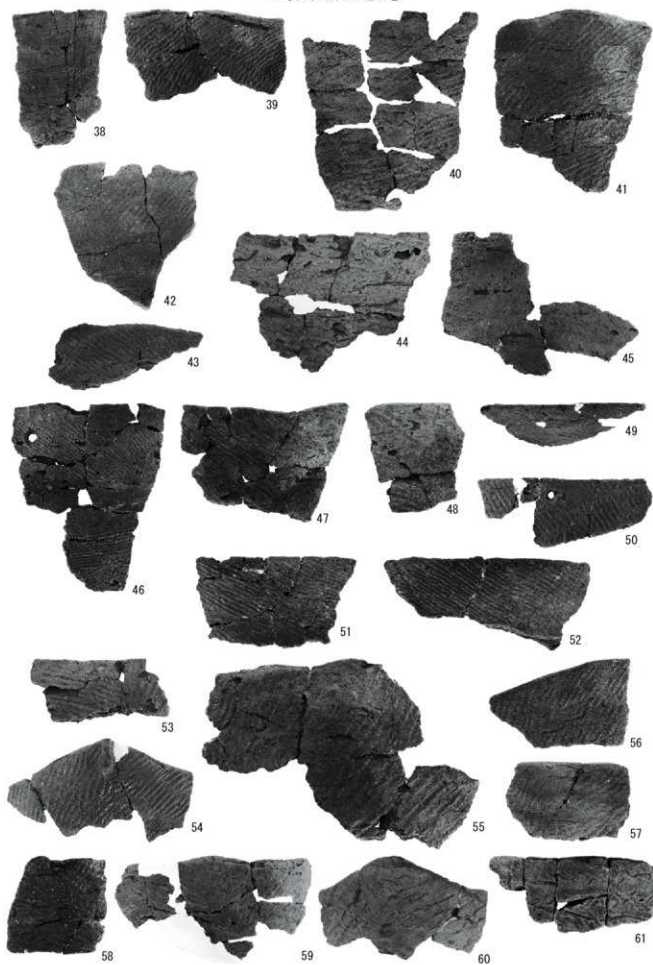
8号住居跡出土遺物(2)





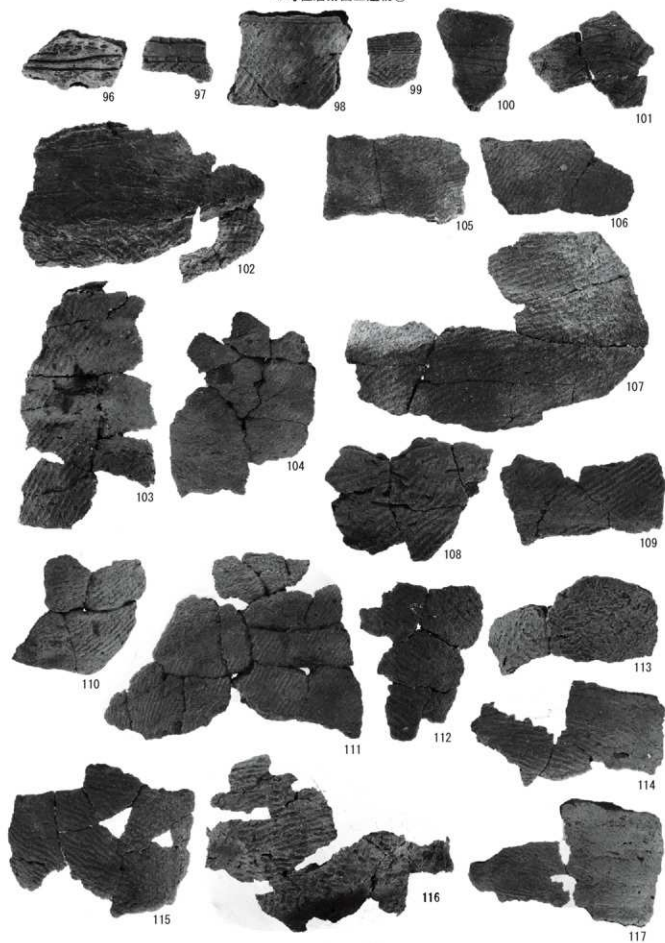


9号住居跡出土遺物(3)

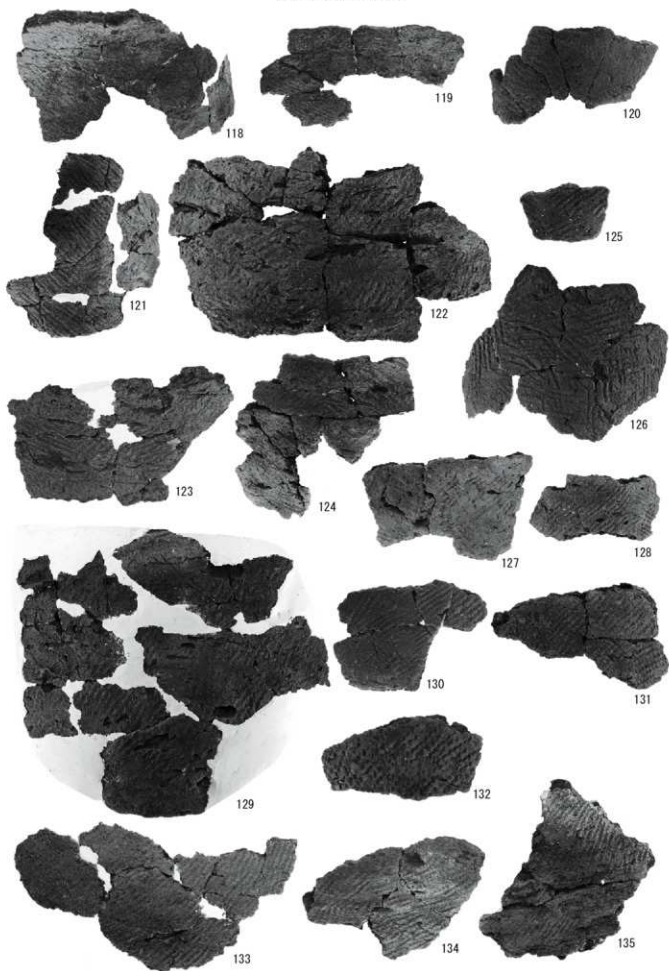




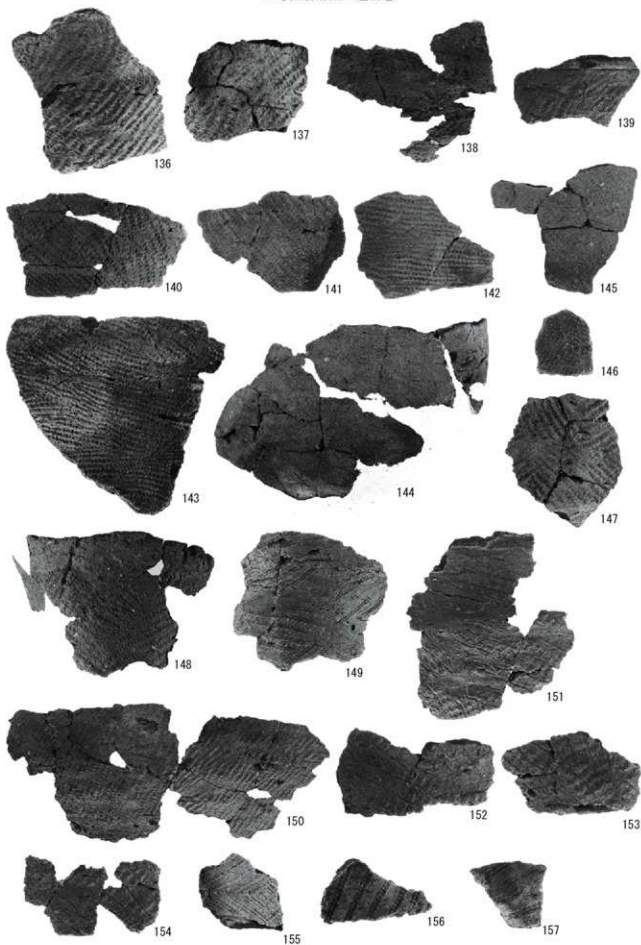
9号住居跡出土遺物⑥



9号住居跡出土遺物(6)

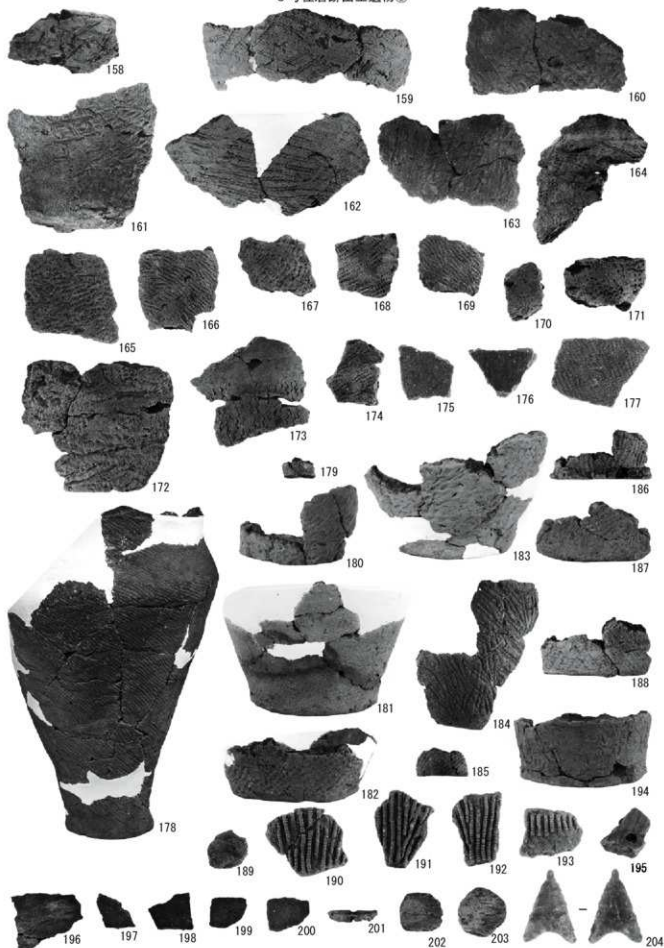


9号住居跡出土遺物⑧



9号住居跡出土遺物(8)

9号住居跡出土遺物⑨



9号住居跡出土遺物(9)

トレンチ出土遺物①



1. SHINAGAWA (第56図5)



2. VZ φ SS113 (第58図43)



3. TOYO K G (第57図29)



4 (第58図42)

トレンチ出土遺物 (1)



47



48



51



52



49



50



53 (墨書)



54



55 (焼印)



56 (墨書)

トレンチ出土遺物 (2)



57

表土出土遺物

トレンチ出土遺物②



出土埋設管・消火栓 2

報告書抄録

ふりがな	しないいせきぐんじゅうなな かみふくおかかみづかだいにちてん
書名	市内遺跡群 17 上福岡貝塚第2地点
シリーズ名	ふじみ野市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第18集
編著者名	鍋島直久・清水理史・宅間清公
編集機関	ふじみ野市教育委員会
所在地	〒356-8501 埼玉県ふじみ野市福岡一丁目1番1号 TEL. 049 (261) 2611
発行年月日	平成28(2016)年3月25日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間 (発掘調査)	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
埼玉県ふじみ野市 上福岡貝塚 第2地点	埼玉県ふじみ野市福岡 2-1500-73、74、8の 一部	112453	25-006	35° 52' 47"	139° 31' 26"	20141105 ～ 20150310	1,830 m ²	建物解体・ 抜根・造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
埼玉県ふじみ野市 上福岡貝塚 第2地点	集落跡 貝塚	縄文時代前期 中・近世 近代	住居跡7軒 土坑3基 溝1条 火工窯跡遺構	縄文土器・石器、陶磁器、土管・ レンガ	学史的に著名な貝塚で、今回7軒の住居跡が検出された。そのうち縄文時代前期中葉の貝層を伴う住居跡3軒を確認することができた。

ふじみ野市埋蔵文化財調査報告 第18集

埼玉県ふじみ野市 市内遺跡群 17

2016年3月20日印刷

2016年3月25日発行

発行 ふじみ野市教育委員会

〒356-8501 埼玉県ふじみ野市福岡一丁目1番1号

TEL 049-261-2611

FAX 049-266-6271

印刷 関東図書株式会社
